

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第102集

川合遺跡志保田地区

県立静岡東高等学校体育館改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第102集

川合遺跡志保田地区

県立静岡東高等学校体育館改築に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

川合遺跡志保田地区は、静岡県立静岡東高等学校の体育館建設に伴い、平成7年度から8年度にかけて調査が実施された。今回の調査地点の位置する川合地域は静岡平野の北東部に位置し、静岡バイパス建設に伴い調査が行なわれた内荒、川合、宮下の三遺跡や、県営住宅南沼上団地の立て替えに伴って調査が行なわれた八反田地区等での調査成果により、弥生時代から近世に至る複数の遺跡面が広く展開していることが明らかになっており、なかでも内荒遺跡、宮下遺跡は古代官衙跡と推定されているなど、静岡平野の北側において注目される遺跡の所在地域である。

今回の調査では、弥生時代から近世にかけての合計7面が調査され、これまでの調査の成果とあわせ、この地域での各時代の様相をより明確にする資料を追加したといえよう。なかでも注目されることは奈良時代の遺構面においては祭祀に関連するとみられる土器の集中箇所が確認され、これに含まれる多数の土器と共存する土製祭祀具はまとまりをもった良好な一括資料として大きな意味をもつと思われる。また墨書土器や4面に墨書がみられる木簡等の文字資料、帯金具や絵馬などの官衙の存在をうかがわせる注目すべき遺物も多く、この地域の奈良～平安時代の様相についてはその性格や変遷をあわせ、周辺の状況と共に今後慎重な検討が必要であろう。

今回の調査では、川合地域の各時代の全体像を考える上での大切な成果を上ることができたが、調査に当たっては静岡県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々には多くのご協力をいただいた。とりわけ、学校内で調査を行なうこととなった静岡東高校の皆様には発掘調査に深いご理解をいただくとともに、数多くのご配慮をいただいた。この場にて謝意を表すとともに、調査に関係した多くの方々の労をねぎらいたい。

最後に学校という教育の場で行なわれた今回の発掘調査が、歴史教育及び埋蔵文化財保護思想の普及育成の一助となることを願い序とさせていただきます。

1998年3月30日

財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例 言

- 1 本書は、静岡県市川合757に所在する川合遺跡志保田地区の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成6年度に行なわれた確認調査（静岡県教育委員会文化課で実施）の結果を受け、静岡県立静岡東高等学校の体育館改築工事に伴う事前調査として実施された。
- 3 調査事業は、県立静岡東高等学校体育館改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県（教育委員会財務課）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 4 現地調査は平成7年12月に開始し、調査区の埋戻し作業を含め平成8年10月まで実施した。資料整理は、主として中原整理事務所で行い、平成8年8月から平成9年度にかけて実施した。
- 5 各年度の調査体制は以下のとおりである。

平成7年度（現地調査）

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 小崎章男
調査研究部次長 栗野克巳 調査研究二課長 佐野五十三 調査研究員 鈴木良孝・杉山晋士

平成8年度（現地調査・資料整理）

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長 栗野克巳 調査研究二課長 佐野五十三
調査研究員 鈴木良孝・篠宮晋士（現地調査）

平成9年度（資料整理）

所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長 栗野克巳 調査研究二課長 佐野五十三 調査研究員 鈴木良孝

- 6 本書の執筆は以下のとおりである。
第Ⅰ～第Ⅲ章、第Ⅳ章2節1（3）・2（4）・3（2、4、7）、第Ⅳ章5節 鈴木良孝
第Ⅳ章3節4（1） 笠井信孝（技術作業員）
他は佐野五十三が執筆した。
- 7 石製品の種類については伊藤通玄氏に同定をお願いした。
- 8 遺物写真は楠華堂（楠本真紀子氏）に撮影を委託した。
- 9 調査では、以下の方々に多くの御指導・御助言をいただいた。（敬称略・五十音順）
市原壽文・長田實・近藤友一郎・佐藤洋一郎・田辺昭三・平川南・向坂鋼二・湯之上隆
- 10 発掘調査に関する資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で保管している。
- 11 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。

凡 例

- 1 今回の調査での座標軸は、平面直角座標第Ⅷ系によった。
- 2 調査グリット (10m×10m) は、南北方向にアルファベット、東西方向には算用数字によって表記した。
- 3 本報告の遺構・遺物の表記は以下のとおりである。
遺構 SA—杭列 SC—祭祀遺構 SD—溝状遺構 SE—井戸 SF—土坑
SH—掘立柱建物 SK—畦畔 SP—小穴 SR—流路 SX—不明遺構
遺物 M—金属製品 P—土器・土製品 S—石製品 W—木製品
- 4 木製品の実測図は原則として原寸の $1/3$ もしくは $1/2$ で表示したが、一部遺物については $1/6$ 、 $1/8$ で表示したものもある。土器類の実測図は原則として原寸の $1/3$ もしくは $1/6$ で表示した。なお土器の実測図中で中心線と内面の口縁部線との間をあけてあるものは、反転復元のものである。
- 5 遺物写真図版の右下の数字は、遺物の挿図番号を表記している。

序

例 言

凡 例

目 次

| | |
|--------------------|-----|
| 第I章 調査に至る経過 | 1 |
| 第II章 遺跡の環境 | 3 |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第III章 調査の方法と経過 | 9 |
| 第1節 調査の方法 | 9 |
| 1 基本土層について | 9 |
| 2 各調査面の概要 | 11 |
| 3 調査の方法 | 12 |
| 第2節 調査の経過 | 16 |
| 第IV章 調査の概要 | 18 |
| 第1節 調査第1・2面(近世以降) | 18 |
| 1 第1面の遺構 | 18 |
| 2 第2面の遺構 | 27 |
| 3 出土遺物 | 29 |
| 第2節 調査第3・4面(律令期) | 32 |
| 1 第3面の遺構 | 32 |
| 2 第4面の遺構 | 58 |
| 3 出土遺物 | 77 |
| 第3節 調査第5・6面(古墳時代) | 115 |
| 1 第5面の遺構 | 115 |
| 2 第5面下の遺構 | 117 |
| 3 第6面の遺構 | 119 |
| 4 出土遺物(包含層(9層)を含む) | 119 |
| 第4節 調査第7面 | 125 |
| 第5節 第8面以降 | 127 |
| 第V章 まとめ | 139 |

付編

- I 川合遺跡志保田地区のテフラ分析 (株)古環境研究所
- II 川合遺跡志保田地区プラント・オーバー分析 (株)古環境研究所

挿 図 目 次

| | | |
|------|-----------------------|----|
| 第1図 | 調査区位置図 | 2 |
| 第2図 | 周辺遺跡分布図 | 4 |
| 第3図 | 周辺の奈良～平安期の主要遺構 | 7 |
| 第4図 | 標準土層柱状図 | 9 |
| 第5図 | 川合遺跡グリット位置図 | 13 |
| 第6図 | 調査区グリット配置図・掘削模式図 | 14 |
| 第7図 | 第1面全体図 | 19 |
| 第8図 | 土坑実測図 | 22 |
| 第9図 | 土坑実測図2 | 24 |
| 第10図 | 木組み遺構実測図 | 26 |
| 第11図 | 第2面水田図 | 27 |
| 第12図 | 第2面杭列 | 29 |
| 第13図 | 遺物実測図1(中近世以降) | 31 |
| 第14図 | 第3面遺構全体図 | 33 |
| 第15図 | 祭祀遺構と第1面土坑の位置関係 | 35 |
| 第16図 | SC01実測図 | 36 |
| 第17図 | 遺物実測図2(SC01・土器1) | 37 |
| 第18図 | 遺物実測図3(SC01・土器2) | 38 |
| 第19図 | SC02実測図 | 39 |
| 第20図 | 遺物実測図4(SC02・土器1) | 40 |
| 第21図 | 遺物実測図5(SC02・土器2) | 41 |
| 第22図 | 遺物実測図6(SC02・土器3) | 42 |
| 第23図 | 遺物実測図7(SC02・土製品) | 43 |
| 第24図 | SC03実測図 | 44 |
| 第25図 | 遺物実測図8(SC03・土器1) | 45 |
| 第26図 | 遺物実測図9(SC03・土器2) | 46 |
| 第27図 | SC04実測図 | 47 |
| 第28図 | 遺物実測図10(SC04・土器1) | 49 |
| 第29図 | 遺物実測図11(SC04・土器2) | 50 |
| 第30図 | 遺物実測図12(SC04・土器3) | 51 |
| 第31図 | SX01実測図 | 51 |
| 第32図 | 遺物実測図13(SC05・土器1) | 52 |
| 第33図 | 遺物実測図14(SC05・土器2) | 53 |
| 第34図 | SE02実測図 | 53 |
| 第35図 | 遺物実測図15(SE02・木製品) | 55 |
| 第36図 | 石組み遺構実測図 | 55 |
| 第37図 | 遺物実測図16(石組み遺構・土器・土製品) | 56 |
| 第38図 | 木組み遺構実測図 | 57 |
| 第39図 | 遺物実測図17(SR01・土器) | 58 |

| | | |
|------|------------------------|-----|
| 第40図 | 第4面遺構全体図 | 59 |
| 第41図 | SC06実測図 | 61 |
| 第42図 | 遺物実測図18 (SC06・土器) | 62 |
| 第43図 | SR02実測図 | 63 |
| 第44図 | 遺物実測図19 (SR02・土器) | 65 |
| 第45図 | SH01実測図 | 67 |
| 第46図 | 遺物実測図20 (SH01ほか・木製品) | 68 |
| 第47図 | 柱根・礎板分布図 | 69 |
| 第48図 | 礎板出土状況 (SP69) | 70 |
| 第49図 | 遺物実測図21 (SP69・木製品、礎板) | 71 |
| 第50図 | 柱根列実測図 | 72 |
| 第51図 | 絵馬出土状況 (SP130) | 72 |
| 第52図 | SE01実測図 | 73 |
| 第53図 | SE01杭接合関係 | 73 |
| 第54図 | 遺物実測図22 (SE01・木製品、杭) | 74 |
| 第55図 | 遺物実測図23 (SE01・横板) | 75 |
| 第56図 | 遺物実測図24 (SF・SP土器) | 76 |
| 第57図 | 土師器坏の分類 | 78 |
| 第58図 | 遺物実測図25 (律令期包含層・土器1) | 87 |
| 第59図 | 遺物実測図26 (律令期包含層・土器2) | 88 |
| 第60図 | 遺物実測図27 (律令期包含層・土器3) | 89 |
| 第61図 | 遺物実測図28 (律令期包含層・土器4) | 90 |
| 第62図 | 遺物実測図29 (律令期包含層・土器5) | 91 |
| 第63図 | 遺物実測図30 (律令期・緑釉陶器) | 92 |
| 第64図 | 遺物実測図31 (律令期・墨書土器) | 94 |
| 第65図 | 遺物実測図32 (律令期・土製品、人形他) | 97 |
| 第66図 | 遺物実測図33 (律令期・土製品馬形1) | 99 |
| 第67図 | 遺物実測図34 (律令期・土製品馬形2) | 100 |
| 第68図 | 遺物実測図35 (律令期・木製品容器1) | 102 |
| 第69図 | 遺物実測図36 (律令期・木製品容器2) | 103 |
| 第70図 | 遺物実測図37 (律令期・木製品容器3) | 104 |
| 第71図 | 遺物実測図38 (律令期・木製品容器4) | 105 |
| 第72図 | 遺物実測図39 (律令期・木製品農具他) | 107 |
| 第73図 | 遺物実測図40 (律令期・木製品、装身具他) | 108 |
| 第74図 | 遺物実測図41 (律令期・木製品用途不明) | 109 |
| 第75図 | 遺物実測図42 (律令期・金属製品) | 111 |
| 第76図 | 遺物実測図43 (律令期・石製品他) | 114 |
| 第77図 | 第5面遺構全体図 | 116 |
| 第78図 | 第5面杭列・足跡 | 117 |
| 第79図 | 第5面下遺構全体図 | 118 |
| 第80図 | 第5面下木製品出土状況 | 118 |

| | | |
|------|-------------------|-----|
| 第81図 | 第6面遺構全体図 | 119 |
| 第82図 | 遺物実測図44(古墳時代・土器1) | 120 |
| 第83図 | 遺物実測図45(古墳時代・土器2) | 121 |
| 第84図 | 遺物実測図46(古墳時代・石製品) | 122 |
| 第85図 | 遺物実測図47(古墳時代・木製品) | 124 |
| 第86図 | 第7面全体図 | 125 |
| 第87図 | 方形周溝墓実測図 | 126 |
| 第88図 | 方形周溝墓実測図(盛土除去) | 127 |
| 第89図 | 方形周溝墓土層断面図 | 128 |
| 第90図 | 土器拓影図 | 129 |
| 第91図 | 第8面・8面下地形図 | 129 |

付 編

| | |
|-----|---------------------|
| 第1図 | U-37グリットのテフラ分析資料の位置 |
|-----|---------------------|

挿 表 目 次

| | | |
|-----|--------------------------|-----|
| 第1表 | 周辺遺跡リスト | 6 |
| 第2表 | 土器観察表 | 131 |
| 付編1 | | |
| 表1 | テフラ分析検出結果 | 144 |
| 表2 | 屈折率測定結果 | 144 |
| 付編2 | | |
| 表1 | 川合遺跡志保田地区のプラント・オパールの分析結果 | 146 |

図 版 目 次

| | | |
|-----|--------------|--|
| 図版1 | 調査第1面 | 1・調査区第1面検出状況 2・調査区第1面全景 |
| 図版2 | 調査第1面 | 1・第1面遺構検出状況(調査区北側) 2・第1面遺構検出状況(調査区北側) 3・第1面遺構検出状況(調査区南側) |
| 図版3 | 調査第1面(礫詰め土坑) | 1・礫詰め土坑(SF05) 2・礫詰め土坑(SF11・12) 3・礫詰め土坑(SF28・29・53) |
| 図版4 | 調査第1面(礫詰め土坑) | 1・礫詰め土坑(SF34) 2・礫詰め土坑(SF40) 3・礫詰め土坑(SF55) |
| 図版5 | 調査第1面(水田他) | 1・第1面水田(調査区北側) 2・礫詰め土坑群(調査区南側) 3・木組み遺構(拡張区) |

- 図版6 調査第1面(拡張区)第2面
- 1・拡張区第1面全景
 - 2・第2面水田
- 図版7 調査第3面
- 1・調査区第3面全景(空中写真)
 - 2・調査区第3面北側
- 図版8 調査第3面(祭祀遺構)
- 1・祭祀遺構(SC01)
 - 2・祭祀遺構(SC02)
 - 3・祭祀遺構(SC02下部状況)
- 図版9 調査第3面(祭祀遺構他)
- 1・祭祀遺構(SC03)
 - 2・祭祀遺構(SC03部分)
 - 3・石組み遺構
- 図版10 調査第3面(祭祀遺構他)
- 1・祭祀遺構(SC04西側)
 - 2・祭祀遺構(SC04東側)
 - 3・流路(SR01)及び不明遺構(SX01)
- 図版11 調査第3面(拡張区・井戸)
- 1・拡張区2面(調査第3面)全景
 - 2・井戸(SE02)
- 図版12 調査第4面
- 1・調査区第4面全景
 - 2・拡張区3面(調査第4面)全景
- 図版13 調査第4面(流路)
- 1・流路(SR02)
- 図版14 調査第4面(祭祀遺構・柱穴群)
- 1・祭祀遺構(SC06西側)
 - 2・祭祀遺構(SC06北側)
 - 3・柱穴群(調査区南側)
- 図版15 調査第4面(井戸)
- 1・井戸(SE01)検出状況
 - 2・井戸(SE01)
 - 3・井戸(SE01)柱杭傾斜状況
- 図版16 調査第4面(掘立柱建物跡他)
- 1・掘立柱建物跡(SH01)
 - 2・木組み遺構(南側)
 - 3・木組み遺構(北側)
- 図版17 調査第4面(絵馬出土状況他)
- 1・絵馬(W463)出土状況(SP130)
 - 2・柱根列(SP30・31)
 - 3・作業風景(4面清掃)
- 図版18 調査第5面
- 1・調査区第5面全景
 - 2・拡張部(西側法面)第5面
 - 3・第5面洪水痕跡(調査区南側)
 - 4・足跡検出状況(5c層上面)
 - 5・第5面水田足跡列
- 図版19 調査第5面・5面下
- 1・第5面水田
 - 2・第5面水田杭列
 - 3・第5面下水田木製品集積
- 図版20 調査第6面他
- 1・調査区第6面全景
 - 2・第6面水田
 - 3・ヒョウタン出土状況(6面下)

- 4・木製品(W452)出土状況(6面下)
 5・包含層(9層)遺物出土状況
- 図版21 調査第7面
 1・調査区第7面全景
 2・方形周溝墓(検出状況)
 3・方形周溝墓(盛土除去)
 4・東側周溝延長(西側法面拡張部)
 5・周溝覆土(北側周溝)
- 図版22 第8面以下
 1・下中間層(調査区北壁)
 2・調査区第8面全景
 3・調査区最終レベル面全景
- 図版23 遺物出土状況他
 1・帯金具(M12)出土状況(第3面)
 2・帯金具(M14)出土状況(第3面)
 3・鉄斧(M22)出土状況(SR02 第4面)
 4・曲物(W48)出土状況(第3面)
 5・曲物(W92)出土状況(第3面)
 6・櫛(W59)出土状況(SR01 第3面)
 7・泥除(W559)出土状況(第3面)
 8・木製品(W429)出土状況(第5面下)
 9・火山灰?堆積状況(SX01 第3面)
 10・火山灰?堆積状況(最終レベル面)
- 図版24 遺物写真(土器 SC01)
 17図-1・2・3・5・6・7・8・9・10
 18図-13
- 図版25 遺物写真(土器 SC01・02)
 18図-15・16・19・20・22、20図-1・3・4・5・7
- 図版26 遺物写真(土器 SC02)
 20図-8・9・10・11・12・18・19・20・21・22・26・27・
 28・29
- 図版27 遺物写真(土器 SC02)
 20図-30
 21図-32・33・34・35・37・38・41・44・49・52・54・55・
 56
- 図版28 遺物写真(土器 SC02・03)
 21図-58・59・60・62・63
 22図-69・74・76・85
 25図-1・2
- 図版29 遺物写真(土器 SC03)
 25図-3・4・6・7・9・10・11・12
- 図版30 遺物写真(土器 SC03・04)
 26図-14・15・17
 28図-1・4・7・10・12・13・17・21・22
- 図版31 遺物写真(土器 SC04)
 28図-23、29図-24・25・27・28・29・30・31・32・
 33・34・35・36・41
- 図版32 遺物写真(土器 SC04・06)
 29図-43・44・49、30図-50・52・53・54
 28図-2・3・5・6・7
- 図版33 遺物写真(土器 SC06・05)
 42図-8・9・10・11・13・16・17・18・19・21
 32図-16・17
- 図版34 遺物写真(土器 SC05・石組遺構)

- 32図-18・19・20・21・22・24・25、33図-29・30・31
37図-1・7
- 図版35 遺物写真 (土器 SR02・SF) 44図-1・2・3・4・6・8・9・10、56図-5・7
- 図版36 遺物写真 (土器 SF・SP・包含層)
56図-9・10・12・13・19、58図-4・10・18・24・25・29
59図-35・36
- 図版37 遺物写真 (土器 包含層)
59図-37・42・43・54・58・59・61・62
60図-66・69・70・75、62図-111
- 図版38 遺物写真 (土器 包含層・墨書土器)
61図-79・86・88・95・104・105、62図-113、墨書土器
- 図版39 遺物写真 (緑釉陶器) 緑釉陶器 (内面) ・ (外面)
- 図版40 遺物写真 (古墳時代の土器、磁器) 83図-17・18・19・20・21、82図-1・2
青・白磁片 (上層)
- 図版41 遺物写真 (土製品) 馬形土製品・人形土製品
- 図版42 遺物写真 (土製品) ミニチュア土器・土甕
- 図版43 遺物写真 (木製品 容器) 68図-1・2・3・4・5
- 図版44 遺物写真 (木製品 容器) 68図-6・7・8・9、69図-10・11
- 図版45 遺物写真 (木製品 容器) 69図-12・13・14・15・16・17・18・19・20
- 図版46 遺物写真 (木製品 容器) 69図-21・22・23・24、71図-31・32
- 図版47 遺物写真 (木製品 容器) 70図-25・26・27・29・30
- 図版48 遺物写真 (木製品 農具他)
72図-1・2・3・4・5・6・13
74図-1・2・3・4・5、85図-8
- 図版49 遺物写真 (木製品 絵馬・木簡他) 72図-7・8・9・10・11・12・14
- 図版50 遺物写真 (木製品 装身具他) 73図-1・2・3・4・5・6・7・8
- 図版51 遺物写真 (木製品 建築材他) SH01他柱根、SE01井戸枿材、SP69礎板、SE02井戸枿材
- 図版52 遺物写真 (中近世 金属製品・玉類他)
13図-2・3・4・5・7・8・9・10
75図-7・8・9・10・11・12、76図-1・2・3・4
- 図版53 遺物写真 (金属製品 帯金具)
帯金具 (表) 75図-1・2・3・4・5・6
帯金具 (裏)
- 図版54 遺物写真 (木製品 古墳時代) 85図-1・2・3・4・5
- 図版55 遺物写真 (石製品他) 砥石・叩き石類 (上層) (下層)、石器・黒曜石片、弥生土器片

第I章 調査に至る経緯

静岡県立静岡東高等学校は静岡市川合757に所在する。静岡東高校は高校生徒急増対策の一貫として昭和38年に開校した。開校当時は一面の水田地帯であったこの周辺も現在では住宅地が広がり市街化が進んでいる。

学校の所在するこの川合地区は、学校の南側に接するように通過する静清バイパスの建設工事に伴って行われた川合地区3遺跡（内荒、川合、宮下）の発掘調査および学校の西側200メートル付近に位置する県営住宅南沼上団地の立て替え工事に伴い行われた八反田地区の発掘調査によって明らかになってきたように、静岡平野北部における極めて重要な遺跡が所在する地域と考えられている。校内については遺跡の周知化はなされていなかったものの、この地における遺跡所在の確認の端著となったのが静岡東高校の建設に際しての遺物出土の伝聞であったため、校内への遺跡の広がりも当然予想されていた。

学校の南側に面している市道線（通称竜南通り）は交通量が多く、またその幅員は交通量に比して狭く、朝夕のラッシュ時には恒常的な渋滞を生じている。そのため、順次道路の拡幅事業が進められてきた。学校の面する部分では校地も一部後退する形での拡幅が計画され、これに伴い校地の南端に位置する体育館の一部が事業計画地に含まれることとなり、体育館の移転が必要となった。

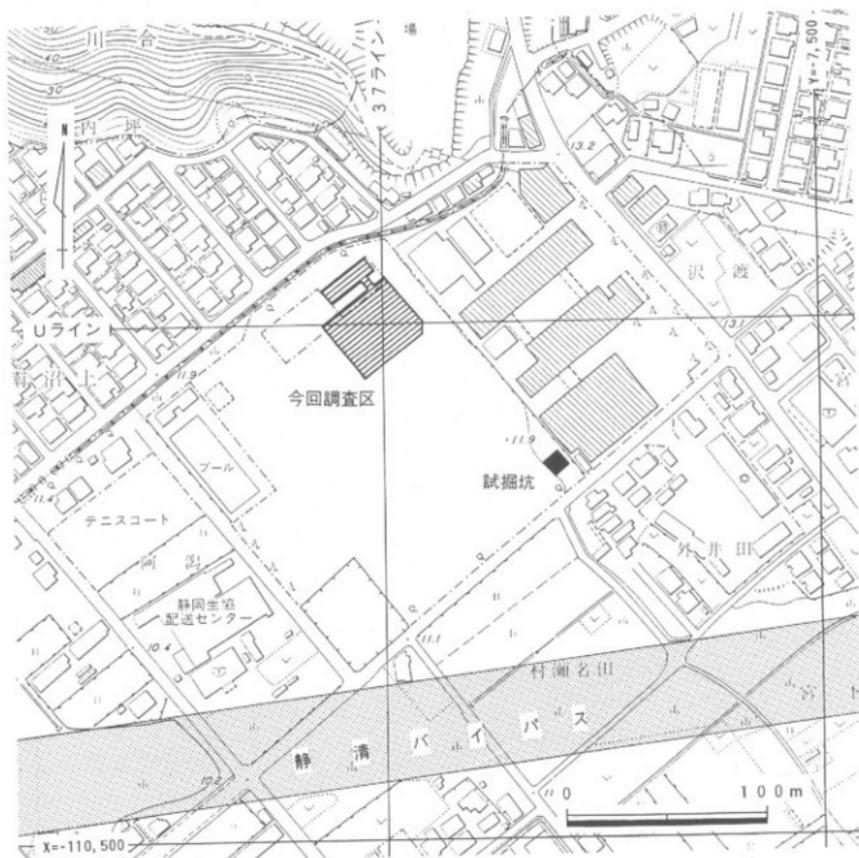
平成5年度に県教育委員会財務課より文化課に対し校内の埋蔵文化財の有無の照会がなされ、埋蔵文化財の取扱が問題となった。これに対し、『周知化はなされていないものの前述のような状況から埋蔵文化財の所在する可能性が極めて高い』との判断から事前の確認調査が必要との回答がなされた。その後の協議の結果平成6年度に確認調査を実施し、その結果を待って再度取り扱ひの協議をすることとなった。

平成6年度に入り、学校を含めた三者で確認調査の実施に関する協議を行い、学校行事等を考慮して夏休み後半に実施することとなり、8月18日～25日にかけて確認調査が県教育委員会文化課により実施された。調査地点は排土置場を含めると400m以上の広さが必要となるため現体育館に西接するグラウンド部分に調査区を設定し、地表下8mまで掘削し土層の堆積状況を確認した。この現地調査と、併せて行ったプラントオパール分析（株式会社古環境研究所に委託）の結果、江戸時代、奈良・平安時代、古墳時代後期、古墳時代中・後期、弥生時代中期～古墳時代前・中期の5～6面程度の遺構面が想定され、工事に当たっては事前にその調査が必要と判断された。この結果を受けて、埋蔵文化財の取り扱ひの協議を行い、平成8年度に開始される体育館の建設工事に先立ち平成7年度に建設予定地の本調査を実施することとなり、発掘調査は県教育委員会文化課を指導機関とし財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託されることとなった。

平成7年度に入り、調査を担当する財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を含めて現地調査の実施に関する協議が開始されることとなったが、新体育館の建設予定地に関する検討が続いていたため、現地の準備や開始等に関する実質的な協議はこれ待つこととなった。その後、決定された調査地点はグラウンドの北東端に位置し外部からの進入路がないこと、また調査の掘削土により調査区を埋め戻す工程となったため、現地での排土の仮置場が必要となったこと、学校との協議においてもこの2点が大きな問題点となった。結果、調査地点を含むグラウンドの北半を囲いこの中に排土の仮置場も設け、校地西の道路に面した側に新たに設置する入り口を進入路とすることとなり、この進入路の施工を待って仮囲いの設置・配管配線の切り直し・事務所設営等の本格的な準備工を行い調査を開始することとなった。このため、仮囲い設置等の準備工の開始は11月の後半からとなり、発掘資機材の搬入等の準備を含め調査は12月から実施された。発掘調査は建設予定地全面が対象となり、地表面積で1,400㎡となった。

また、調査開始後の平成8年度に入って、隣接する部室の移転も体育館建設に併せて行われることとなり、この予定地の300㎡（地表面積）も併せて発掘調査を実施することとなった。

なお、今回の調査においては、学校という多くの人が活動している場での調査ということで特に安全に關し十分な注意が必要となり、また排土の場内処理もあり通常の調査以上に多くの面積を調査に関連して使用させていただいた。そのために小倉勇三校長（当時）を初めとする静岡東高校の教職員の皆様、グラウンドが半分となり多くの制約を受けた生徒の皆様には多大のご迷惑をおかけした。中でも学校側の窓口となった事務室の職員の皆様には数多くのご配慮ご尽力をいただいた。またそれと共に学校には埋蔵文化財の発掘調査に対し深いご理解をいただき、生徒やPTAによる遺跡見学会や学校祭における遺物の展示等、校内での発掘調査に積極的な取り組みをしていただいた。この場を借りて感謝いたします。



第1図 調査区位置図

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

川合遺跡志保田地区は静岡平野の北東部、長尾川と巴川に挟まれた低湿な沖積低地の長尾川寄りの北東辺部に所在している。また飛石川の南に位置しているため、川合遺跡八反田地区の様に丘陵を直接背後に背負う状況とは地形的に異なっている。

この地点は静岡バイパスの建設工事に伴って調査が行われた川合地区3遺跡（西から内荒・川合・宮下）の北～北東方向に位置し、近い部分では100m程度の距離にある。また、県営住宅の改築工事に伴って調査が行われた川合遺跡八反田地区からは東方約400mの位置となる。現状は学校地となっており標高は12m程度だが、学校造成に際し当時の水田面を1m程度嵩上げしている。また現在は学校グラウンドのため平坦に造成されているが、周辺の地形からでは長尾川方向に登り傾斜となっている。

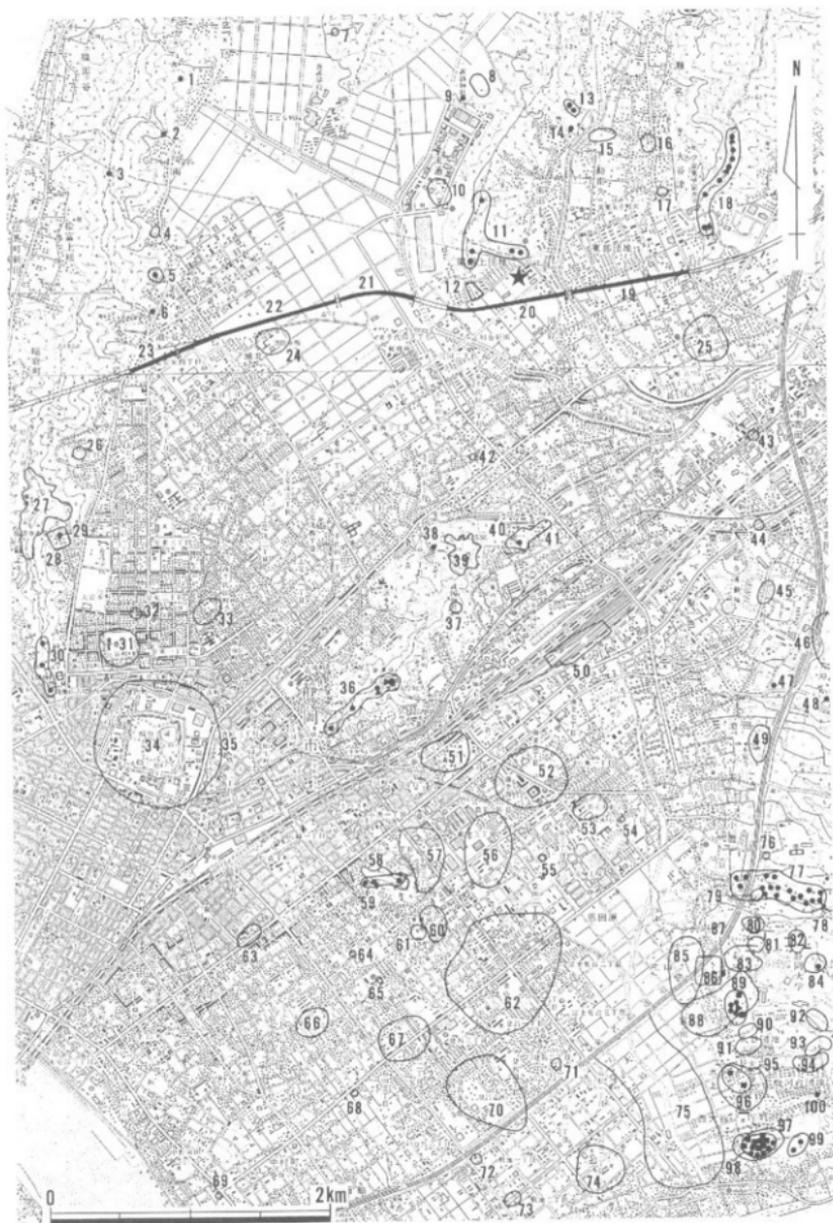
静岡平野は安倍川の下流域に広がる沖積平野で、安倍川の形成する扇状地を中心とし、その周辺に低湿地帯が後背湿地として所在している。安倍川扇状地の北に広がる麻機低湿地は、標高では静岡平野で最も低い地帯であるが、これまで拡大縮小を繰り返してきていることが周辺での発掘調査あるいは土壌的に確認されている。この湿地から流れる河川が川合地区の西南流れ折戸湾に注ぐ巴川である。この川は勾配が緩やかで流下能力が極めて低いため、大雨等に際しては低湿地に集中する雨水の排水が滞り、一方川合地区の東側を南下する長尾川は巴川とは対象的な河川で河床の勾配が1/300程度の急勾配をもち、龍爪山塊を供給源とする多量の土砂を供給する陽性の河川である。このためこの流域は盛んな沖積作用による安定した地盤の自然堤防が形成される一方、多量の土石を伴う洪水被害にもまわられてきた。弧のような状況は周辺での発掘調査や今回の調査に置ける厚い砂礫の中間層や金製罐での多数の礫詰土坑の所在によっても確認することができる。現在の長尾河は強固な堤防による流路の固定により、河道内に砂礫が堆積しいわゆる天井川となって、周辺よりも河床が2mも高くなっている。また、今回の地点の北側を流れる飛石川はかつての長尾川の支流であったと考えられるが現在は南沼上山塊の縁辺を迂回して流れている。今回の調査地点は弧の飛石川沿いで長尾川からの土石の押し出して形成された自然堤防上に位置している。

第2節 歴史的環境

川合地区の遺跡周辺の歴史的環境については、これまでも周辺諸遺跡の発掘調査報告書の中で詳しく触れられてきたところであるので、ここでは静岡平野周辺の遺跡分布状況を中心に時代別に概観するととどめたい。

旧石器時代についてはこれまで静岡平野南部の有度山周辺で、日本平遺跡・大段・遺跡・宮川（小段）遺跡等で尖頭器、石刃、ナイフ形石器等が採集されているが発掘調査の経緯は無く現状では不明な点が多く、また川合地区に近い静岡平野北部ではこれまでのところ確認されていない。

続く縄文時代も内容が明確に判明している遺跡はあまり無いが、平野周辺の丘陵縁辺部に遺跡が散在するようになり、平野北側でも南沼上丘陵部の佐敷堂遺跡や長崎鼻遺跡、賤機山丘陵東部の時ヶ谷遺跡といった遺跡が知られるようになり、有度山北西麓では宮ノ後遺跡、五輪平遺跡、本覚寺裏遺跡、堀内遺跡、大段・・・遺跡、清泉寺窪遺跡、井庄段遺跡などが知られている様に、前代に比べ遺跡数は大きく増加し、その生活域が広がっていった様子が伺える。



第2圖 周辺遺跡分布圖

弥生時代に入ると丘陵縁部から平野部にその生活域は拡大され近年の低湿地での発掘調査により多くの遺跡が調査され、確認された遺跡数も増加している。静岡平野での最も早い弥生時代遺跡は、中期初頭に位置付けられるが、この段階では丸子セイゾウ山遺跡や佐渡遺跡等の安倍川の西岸の丘陵地帯で遺跡が知られ、またその内容にも縄文時代晩期の様相が残されている。中期後半からは、稲作の本格的な導入と共に、生活域の平野部への進出が始まり、静岡平野南部には静岡平野最大の拠点集落と考えられる有東遺跡、平野中央部の駿府城内遺跡、平野北部の川合遺跡（今回の調査でも墓域の一部が確認された）・瀬名遺跡等の大遺跡が沖積地の微高地上に展開し、集落、墓域、水田域等を包括した生活の中心が丘陵地から沖積地に移動し、低湿地部分の開発が進んでいった様子が明確になる。後期にはいる水田農耕が普遍化し、これら微高地上の集落遺跡はその数を大きく増やし、特別史跡登呂遺跡に代表されるように水田を含む集落構造が調査で明らかとなる例が増加している。これらの遺跡の多くはその後の古墳時代にも継承されていく様である。またこの時期、上ノ山遺跡等では、居住域や墓域は沖積地のみならず丘陵上にも見られる。

古墳時代には静岡平野を取り巻く丘陵部や谷津山や八幡山等の孤立丘陵上に多くの古墳が築造される。中でも4世紀後半と考えられる柚木山神古墳（谷津山1号墳）はこの地域では最古で最大の古墳として位置付けられるが、この様な首長墓の造営の中心は4世紀後半から5世紀にかけては三池平古墳を代表とする清水・庵原地方に移るようである。中期には谷津山2号墳、瀬名5号墳等の前方後円墳や7mを測る割竹形木棺を納めたマルセッコウ古墳（瀬名2号墳）などを代表に平野部を望む丘陵上に全長30～50mの古墳が築かれる。後期には有度山北麓～西麓、瀬名丘陵、南沼上丘陵、さらに安倍川西岸の丘陵地にも古墳の造形が行われ、群集墳を形成していく。主なものには、平野北部の南沼上古墳群、瀬名古墳群、賤機山古墳群、有度山北西麓の谷田古墳群、池田山古墳群、小鹿古墳群、静岡大学構内古墳群、宮川古墳群、伊豆段古墳群、上の山古墳群、安倍川西岸では平城古墳群、佐渡古墳群等が挙げられる。これらの中で賤機山丘陵の南端に位置する賤機山古墳（国史跡）6世紀後半と位置付けられるが10mを超える大型の横穴式石室を有し、朝杖式家形石棺やその装身具や馬具等の副葬品の内容からもこの地域において卓越した古墳である。一方この時期の6世紀中葉には有度山西麓に伊庄古墳穴群の造形が始まる。県内では東遠江及び伊豆半島北部にその分布の大半を示す横穴が、この高塚式古墳の卓越する地域にあたかも孤立して100基を超える群集を見せることはその系譜や造営母体を考える上で注目される状況であろう。

一方、これらの古墳の造営を支えたこの時代の集落についてはあまり明確には成っていない。多くの集落は弥生時代後期から連続して沖積地の微高地上に展開していたものと考えられる。その中で平野北部の川合遺跡ではこの時代の住居・墓・水田がセットで検出され、今回の調査でも水田跡が確認されている。またこの時代の水田跡については静岡バイパスに伴う調査や駿府城内遺跡、曲山北遺跡等で大規模に確認されていることもあるが、これらの水田を支える集落遺跡との関係については不明の点が多く今後の調査が期待される。

律令期（奈良・平安時代）の本地域は駿河国に属し、安倍・有度・庵原の3郡が置かれていた。この時代の遺跡はあまり多く確認されていないが、駿河国府については現在駿府城付近に想定され、周辺での調査で掘立柱建物跡・井戸・区画溝や瓦等の出土も見られる。郡衙の所在については同じ駿河国内の志太郡衙（藤枝市御子ヶ谷遺跡）や益津郡衙（藤枝市郡遺跡）のように明確にはなっていないが、同じ川合地区の内荒遺跡では整然と櫛列や溝で囲まれた9世紀代の掘立柱建物群が確認され、帯金具や石帯、「造大神印」の銅印等の出土から安倍郡衙の一部との推定が成されており、時代は異なるが官衙的な性格を持った祭祀関連の地点という今回の調査結果はこの地域の全体を考える上で注目されるべきであろう。また宗教施設としては有度山西麓の片山廃寺（国史跡）は奈良時代後半の寺院だが駿河国

分寺の有力な候補地であり、この時期の寺院としては顕著な存在である。またこの西側の低地には古墳時代から続く神明原・元宮川遺跡が所在し、律令期においても多量の木製形代等の祭祀具や「相星五十戸」「他田里戸主宇刀部真酒」等の地名や人名を含んだ木簡も出土しているなど公の一大祭祀センターとして注目される遺跡である。これらの公の性格をもった遺跡とは別に静清バイパス建設に伴う諸遺跡の調査に置いて静岡平野北部ではこの時期に施工された条里に基づく水田跡が広範囲に検出されている。この成果では約107mを1辺とする区画（一坪）が約39度西に振れた方向性を持って広く設定されていることが明らかにされ、その後の小鹿杉本掘台坪遺跡ではこの状況が南部でも確認されている。また、曲金北遺跡では古代東海道が確認され話題となったがこの東海道がこれらの条里区画の東西方向の基準線であったことも同時に確認されることとなった。

中世以降はその調査例も少なく、城館跡等その性格も限られた遺跡の調査となっているのが現状である。一方歴史地理学の方針から地名や交通路等の検討は進められているが、遺跡・遺構としては確認されず今後多くの課題が残されている。

第1表 周辺遺跡リスト

| | | | | | |
|----|----------------|----|------------|-----|-------------|
| 1 | 八津口古墳 | 36 | 谷津山古墳群 | 71 | 天神森遺跡 |
| 2 | 谷久保古墳 | 37 | 柚木瓦窯跡 | 72 | 水洗遺跡 |
| 3 | マルセッコウ古墳 | 38 | 井上郷古墳 | 73 | 下鳥遺跡 |
| 4 | 鷲ヶ谷遺跡 | 39 | 愛宕山城跡 | 74 | 汐入遺跡 |
| 5 | 鹿瀬古墳群 | 40 | 茶臼山古墳 | 75 | 元宮川神明原遺跡 |
| 6 | 池ヶ谷古墳 | 41 | 長沼古池(長沼跡)跡 | 76 | 堀ノ内A遺跡 |
| 7 | 「安部郡」印出土地 | 42 | 千代田遺跡 | 77 | 小鹿古墳群 |
| 8 | 佐敷堂遺跡 | 43 | 吉ノ口坪遺跡 | 78 | 堀ノ内山遺跡 |
| 9 | 南沼上諏訪神社古墳 | 44 | 道下遺跡 | 79 | 堀ノ内B遺跡 |
| 10 | 長崎鼻遺跡 | 45 | 栗原遺跡 | 80 | 大段I遺跡 |
| 11 | 南沼上古墳群 | 46 | 寺ノ久保遺跡 | 81 | 大段II遺跡 |
| 12 | 川合遺跡(八反田地区) | 47 | 田田丸山古墳 | 82 | 大段III段遺跡 |
| 13 | 水梨古墳群 | 48 | 門前理古墳 | 83 | 静岡大学横内古墳群 |
| 14 | 利倉神社上古墳 | 49 | 本覚寺裏遺跡 | 84 | さそく段遺跡(古墳?) |
| 15 | 切石遺跡 | 50 | 曲金北遺跡 | 85 | 片山遺跡 |
| 16 | 下夕村遺跡 | 51 | 曲金B遺跡 | 86 | 片山廃寺跡 |
| 17 | 東下遺跡 | 52 | 曲金A遺跡 | 87 | 白山神社(山神)古墳 |
| 18 | 越名古墳群 | 53 | 小鹿杉本掘台坪遺跡 | 88 | 富川(小段)遺跡 |
| 19 | 越名遺跡 | 54 | 小鹿蟹平掘台坪遺跡 | 89 | 富川古墳群 |
| 20 | 川合遺跡(内荒・川合・宮下) | 55 | 三郷工場内遺跡 | 90 | 清泉寺窪瓦窯跡 |
| 21 | 上土遺跡 | 56 | 豊田遺跡 | 91 | 清泉寺窪遺跡 |
| 22 | 岳美遺跡 | 57 | 小黒遺跡 | 92 | 片山横穴群 |
| 23 | 池ヶ谷遺跡 | 58 | 八幡山城跡 | 93 | 伊庄谷北谷横穴群 |
| 24 | (城北)永ヶ島遺跡 | 59 | 八幡山古墳群 | 94 | 伊庄谷南谷横穴群 |
| 25 | 越名川遺跡 | 60 | 有明遺跡 | 95 | 井庄段古墳群 |
| 26 | 大在家遺跡 | 61 | 有東新跡 | 96 | 井庄段遺跡 |
| 27 | 駿機山城跡 | 62 | 有東遺跡 | 97 | 上ノ山遺跡 |
| 28 | 北川殿屋敷跡 | 63 | 稲川遺跡 | 98 | 上ノ山古墳群 |
| 29 | 臨濟寺古墳 | 64 | 八幡5丁目遺跡 | 99 | 栗大谷古墳群 |
| 30 | 駿機山古墳群 | 65 | 女子高校遺跡 | 100 | 日向山古墳 |
| 31 | 静岡高校々地内遺跡 | 66 | ケイセイ遺跡 | 101 | 惣ヶ谷古墳群 |
| 32 | 大岩遺跡 | 67 | 鷹ノ道遺跡 | 102 | 梅現谷古墳群 |
| 33 | 西千代田遺跡 | 68 | 南消防署内遺跡 | 103 | 池田山古墳群 |
| 34 | 駿府城跡 | 69 | 中野橋下遺跡 | | |
| 35 | 駿府城内遺跡 | 70 | 豊島遺跡 | | |

第三章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 基本土層について

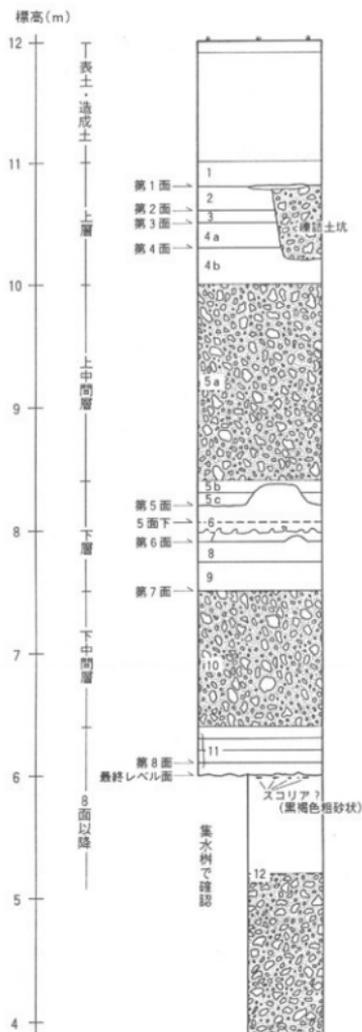
先述の様に今回の調査では、現地表面（学校グラウンド面、標高約12m）から地表下約6.5m（標高約6m）までの調査を行い、それ以降は集水樹の壁面で地表下約8m（標高約4m）までの土層堆積状況を確認した。基本的な堆積は、低湿地的な状況を示す細砂～シルト及び粘質土が、長尾川（あるいは飛石川）に起因すると見られる何枚かの洪水性堆積物である砂礫層を挟んでいる状況で、堆積はおおむね北から南に向かい緩やかに傾斜しており、調査区の南端から南東端にかけては旧河川の流路の礫の堆積が厚く見られ、上・下層を通じて基本土層（2～9層）の堆積は見られなかった。この合計8mの土層堆積は、調査においては中間層の除去に建設重機を使用し、中間層部分には危険防止の勾配をとったため現地においては上下通じた土層を観察できる地点はなく、地点ごとの観察検討であったが、それらを通算して整理したものが以下の基本土層である。

今回の調査地点では基本土層は大きく12に分け、必要な場合にはその中をさらに細分をした。名称については周辺での過去の調査での基本土層との混乱を避けるためアラビア数字を使用し、細分にはa, b, cとアルファベットを附した。なお調査区のほぼ全域で、表土（グラウンド面の砂及び粘土）直下に、学校建設に関わる造成埋土（角礫を中心とする褐色の山土）が1m程確認されているが、これは基本土層には含めていない。

1層 暗灰色シルト層、旧水田（学校造成の昭和37年までの）の耕作土で、この上面が造成までの水田面で旧地表面となる。現地調査では、この層までを表土・盛土として建設重機で除去した。

2層 暗灰褐色シルト層、近世後半の水田耕作土、上面が調査第1面（近世後半～）で礫詰め土坑、杭列、畦畔痕跡が確認されている。上面に礫（5～10cm程度）を交える青灰色粗砂が部分的に見られる。

3層 暗褐色シルト層、調査区の西側では比較的確に確認されるが、礫詰め土坑による攪乱等もあり



第4図 標準土層柱状図

他の部分ではあまり明瞭ではない。保存が良好な西側部分では近世前半と考えられる水田畦畔が上面で確認され、調査第2面（近世前半）とした。後世の耕作の影響が及ばなかった下部を中心に、律令期の遺物をかなり包含している。

4層 基本的には暗緑色がかった青灰色シルト層で上面が祭祀遺構（SC01~04）や流路（SR01）等が確認された調査第3面（律令期）である。上半部は暗褐色土の小ブロックを交え色調がやや暗く汚れた感じを与え、この層界で遺構面（調査第4面）が確認され、上半を4a層、下半を4b層と細分した。

なおこの上面及び上層の下部より白色の火山灰が散発的に確認されたため、後述のテフラ分析を行った。結果は838年（承和5）の神津島天上山テフラあるいは886年（仁和2）の伊豆新島向山テフラに同定された。調査第3面の遺物等の状況（8世紀後半～9世紀初頭）からは神津島天上山テフラのとするのがより妥当と考えられる。

4a層 先述のように暗褐色土小ブロックを交えた暗緑色がかった青灰色シルト層で、未分解の植物質や木片を一部交える。上面が調査第3面となるほか、調査区の南半部では上面の凹みに炭化物粒及び灰を交え、遺物を濃密に包含する暗灰色粘質土の堆積が認められた。律令期の遺物を包含する。

4b層 暗緑色がかった青灰色シルト層で、4a層に似るが暗褐色土のブロックが見られず色調は明るい。上面で調査第4面（律令期）の祭祀遺構（SC06）や流路（SR02）及びピット群（SP）が確認され、また井戸（SE01）もこの面で検出されている。

5層 砂礫層を主体とする洪水性堆積物層で層厚は約2mを測る。基本的に無遺物層だが、流木を交える。層の主体は礫で、10cmを超える大型の礫も見られ流下力の大きさを物語る。最上部は礫を交えた青灰色砂層で上層の遺構の一部はこの層まで掘込んでいる。最下部では灰色粘質シルト（5b層）、青灰色細砂層（5c層）が調査第5面の水田を覆っており、5b層中で畦畔の頂部が検出される。5c層の上面で一部歩行を示す足跡列が検出されたほかには遺構・遺物は見られず形成時期ははっきりしないが、古墳時代後期（第5面水田の時期）以降奈良時代（8世紀前半）までの範囲で、それ程長期間にわたって形成されたものとは考えられない。現地調査では上中間層として5b層の上面までを建設重機で除去した。

6層 暗褐色土層で、上面で第5面水田が確認されている水田耕作土。腐植質を多く含み、部分的に青灰色細砂を薄く挟む、これらが層中で一部水平ラミナ状に観察されることから水田は複数の時期があると考えられるが、断面観察では耕作土の差異は不明瞭だったため細分は行わなかった。平面調査では層中で木製品の面的な集束と抗列が確認され、古い段階の水田（第5下面水田）の畦畔に伴うものと考えられた。下の7層との層界は耕作による巻上げ痕が顕著に観察される。

調査区の南側では、水流によりこの層の上部から8層にかけてが南に向かい傾斜して削られ、礫に覆われていた。

7層 6層と8層の水田耕作土に挟まれる青灰色細砂層、6層のところで触れたように、上面は水田耕作による巻上げで凹凸が激しく、特に巻上げが顕著に見られる南側では層下面まで耕作が達し、層全体が巻上げのブロック状態になっている。

8層 やや粘性を持った灰色シルト層で、乾燥すると固く、白く粉をふいた状況となる、上面で第6面水田が確認されている水田耕作土層である。上面の層界付近では5面（下）水田の耕作の影響で一部巻上げ状態を呈している。また下層の9層が微高地状に高まっている部分ではこの8層は認められなかった。

9層 礫混じり黒褐色土層、礫径は2cm程度が中心だが、北側では礫径が大きく、数も多い。南側では色調もやや薄く暗褐色に近い。粘性はないが緻密でかなり固い。上面では特に遺構は確認されなかった。

が下面での状況を反映する微高地状の高まりが見られ、遺物を包含する。まとまりを持って出土する遺物は5世紀代の土師器を中心とするため包含層の年代もこの時期と考えられるが、土器片・黒耀石片・石核等の弥生時代あるいは縄文時代に属する可能性のある遺物も断片的に交え、混ざり込みと考えられ、周辺にこれらの時期の遺跡の所在が推定される。

10層 砂礫層（主体は砂層）を中心とする洪水性堆積物層で層厚は約1mほどである。無遺物の自然堆積層で層中に炭化植物質や木片等を交える。層の主体は砂で、礫を交えるが礫径は2～5cmと上中間層に比べると小さい。最上部は小礫を交えた青灰色砂層で、この上面で調査第7面の遺構が確認された。現地調査では下中間層として建設重機で除去した。

11層 シルトおよび（細）砂層で層厚は1.2m程度を計る。現地調査においては上部の暗褐色シルト（11a）～黒（灰）褐色シルト質土（11d）までを平面調査の対象とし以下は集水樹の壁面での断面観察を行った。最上部の11a層は暗褐色シルトで調査区の北では確認されたがほかでは顕著ではなく平面の精査は行わなかった。以下の暗黒色土（11b）、暗灰色土（11c）は上面を調査したが遺構・遺物は確認されなかった。下面に攪拌の可能性が観察された黒（灰）褐色シルト質土（11d）上面を第8面として精査したが遺構・遺物は確認されなかった。この11d層の下面が最終レベル面となる。以下の11層は断面観察では砂とシルト（黒～灰色）の互層となる。この11d層の下面付近でスコリア様の黒褐色粗砂状のブロックが確認された。このサンプルを採取して現地終了後テフラ分析を行った。結果長崎スコリアとその下位から天城火山カワゴ平テフラ（2,800～2,900年前）に由来する軽石が検出された。このスコリアは標高6.2～5.8mで北側で高く、11層の堆積も北側から南に向かい緩やかに傾斜している。

12層 砂礫層 所々砂層を挟むが礫が中心、集水樹での断面観察のみを行った。標高5.2m～4mまでの1.2mの層厚は確認できたが以下にも続くと思われる。試掘に際して大沢スコリア、カワゴ平パミスの検出された標高はこの付近であるので、現地ではこの標高の土層を確認して調査を終了した。

2 各調査面の概要

ここでは各調査面の概要について簡単に触れる。

調査第1面 旧水田耕作土（1層）下面で確認された。礫詰め土坑50基と水田畦畔の痕跡が確認された。年代は近世後半以降と考えられる。

調査第2面 2層下面で確認されるが、1面の遺構による攪乱が大きく、明瞭であったのは調査区北西部の1面の遺構（礫詰め土坑）の展開が少なかった部分であった。

水田畦畔が一部確認されたほか、礫詰め土坑が6基及び杭列が2本確認されている。

調査第3面 今回の調査で中心の遺構面である。4a層上面で確認された。遺物からは律令期特に奈良時代の遺構面と判断される。特筆すべきものには、多量の土器の集中箇所が確認され、その一部では土製祭祀具が含まれていたことによりこれらの遺構は祭祀関連遺構と判断した。この遺構は4箇所（SC01～04、SC05については集中の程度がやや疎で性格的に異なると考えている）で確認された。また調査区をほぼ横断する形で流路跡（SR01）が確認されたが流路内での祭祀の明確な痕跡は認められなかった。このほか井戸（SE02）、石組遺構、大型の不明遺構（SX01、02）等の遺構が確認されている。またこの面は上層遺構の影響を大きく受けており、礫詰め土坑はこの面を大きく掘込んでおり、上層での耕作痕跡と考えられる浅い不明瞭な溝が多数検出されている。またこの面では多数の律令期の遺物が確認されており、中でも緑釉陶器、帯金具や文字資料（木簡、墨書土器）等官衙的な性格をうかがわせる遺物や人形・馬形等の祭祀に関連する遺物が注目される。

調査第4面 4b層状面で確認され、時期的には調査第3面に近く奈良時代の遺構面で、その状況も良く似ている。確認された遺構には第3面と同様な祭祀関連遺構（SC06）も確認されたほか、第3面で

の流路（SR01）とはほぼ同じ位置で流路（SR02）が確認されている。また、調査第3面ではあまり顕著でなかったが、調査区の南側と北側の拡張区を中心にピット群が確認され、一部は掘立柱建物跡（SH01）と確認された。建物の所在といった面で第3面とは若干の性格の差異が考えられるが、両面を通じた性格は官衛的な性格をもった祭祀に関連する地点との位置付けが妥当であろう。

調査第5面 砂礫層を中心とする厚い洪水性堆積物である5層に隔てられ、6層上面で確認された水田面である。南側は洪水痕で削られている。検出された遺構は弧状を描く大畦畔（SK501）と7本の小畦畔であった。なお水田面には多数の足跡が残されており、水田の埋没はかなり急であったと見られる。時代を示す遺物が無く明確では無いが古墳時代後期と考えられる。なお土層断面観察では耕作土の状況から複数の水田の存在が予想され、水田耕作土の除去に際して大畦畔の下の一部から杭列と木製品類が平面的に確認され、1時期前の水田畦畔の痕跡と考えられ、5層下面水田とした。

調査第6面 8層の上面で確認された。第5面水田耕作土とは7層の青灰色細砂層を挟むが耕作による攪拌で一部7層が残存しない部分もある。水田面だが5層の水田とは方向性が異なり、また水田1枚の面積がかなり小型である。時期については遺物が少なく明確にはできないが下の9層が5世紀代の遺物包含層と判断されている。

調査第7面 10層上面で確認された。方形周溝墓及び不整形の不明遺構と自然流路（SR03）が確認された。遺物は少ないが方形周溝墓の形状から弥生時代中期でないかと考えられる。

調査第8面以降 現地の断面観察において一部人為的な攪拌を伺わせる状況が2箇所有ったため調査区の一部につき掘削を行い第8面として精査したが精査の結果以降遺物は確認されなかった。

以上のように今回の調査では近世2面（水田面）、律令期2面（官衛に関わる祭祀地点）、古墳時代2面（水田面 痕跡を加えると3面）、弥生時代1面（方形周溝墓面）の計7面の遺構面が把握された。

3 調査の方法

調査区の設定

今回の体育館および付帯施設の建設予定地は、おおむね40m×35mの1,400㎡で、発掘調査はこの全面を対象に行われた。また、体育館の北に隣接して部室も建設移転する計画となり、調査期間中に併せて発掘調査を行うこととなった。この部室予定地については正確な建設位置が未定で、ある程度位置の移動が予想されたため調査区の北に平行する30m×10mの300・の範囲を拡張区として調査を実施することとなった。

調査区には国土方眼座標に則り10m×10mのグリッドを設定した。このグリッドの設定は、近接して調査が実施された川合遺跡八反田地区の調査グリッドと合わせることで、 $X = -110,450$ 、 $Y = -8,100$ （平面直角座標第・系）を基準点とし南から北にA、B、C…とアルファベットを、西から東へ1、2、3…と数字を附し、この組み合わせによりX-36グリッド、U-38グリッドのように表記し調査の便宜を計った。現地では調査区の状況により便宜的に各グリッドの東北隅の杭にその名称を付して呼んだ。なお今回の調査区に関わったグリッドは、南北はS～Y、東西は35～39であった。調査区の中央付近の基準杭（U-37グリッドの東北隅の杭）の座標値及び経緯度は以下ようになる。

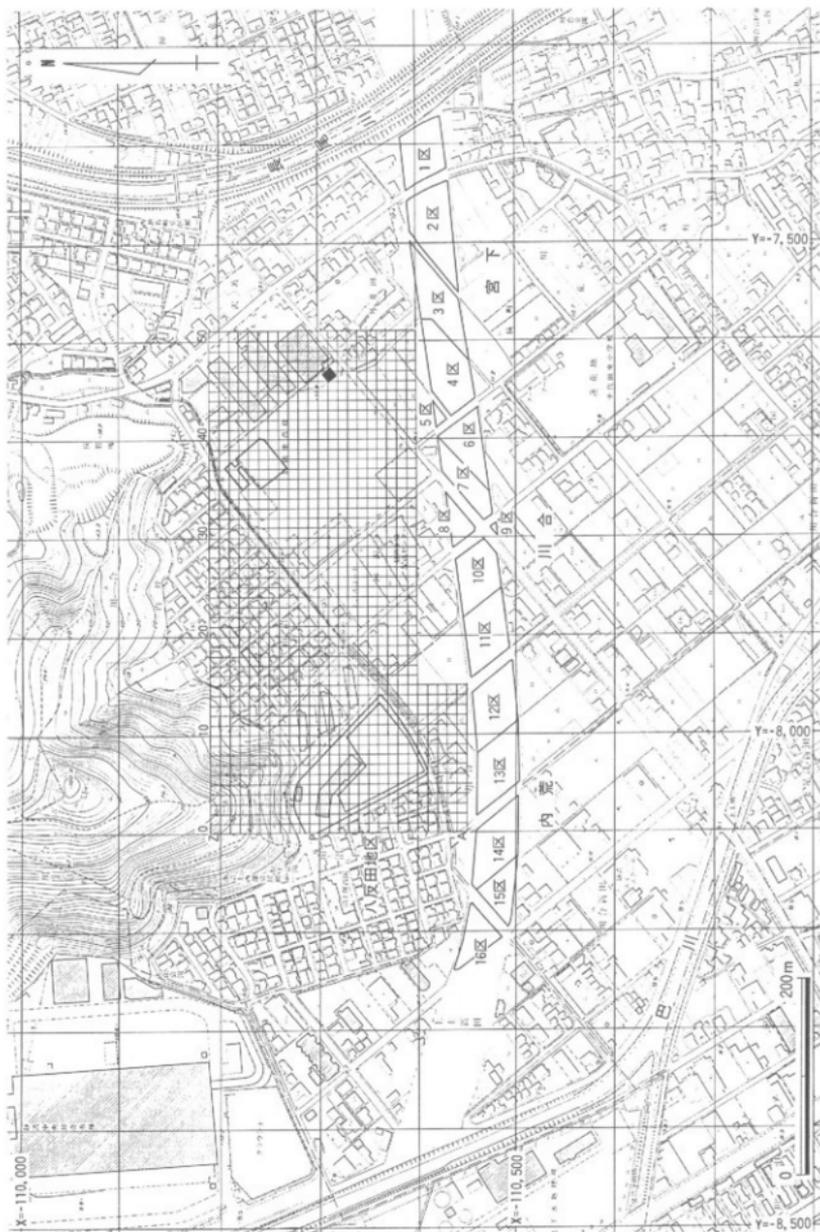
U-37グリッド杭 $X = -110,240$ $Y = -7,720$

北緯 $35^{\circ} 00' 22'' .1887$ 東経 $138^{\circ} 24' 55'' .4679$

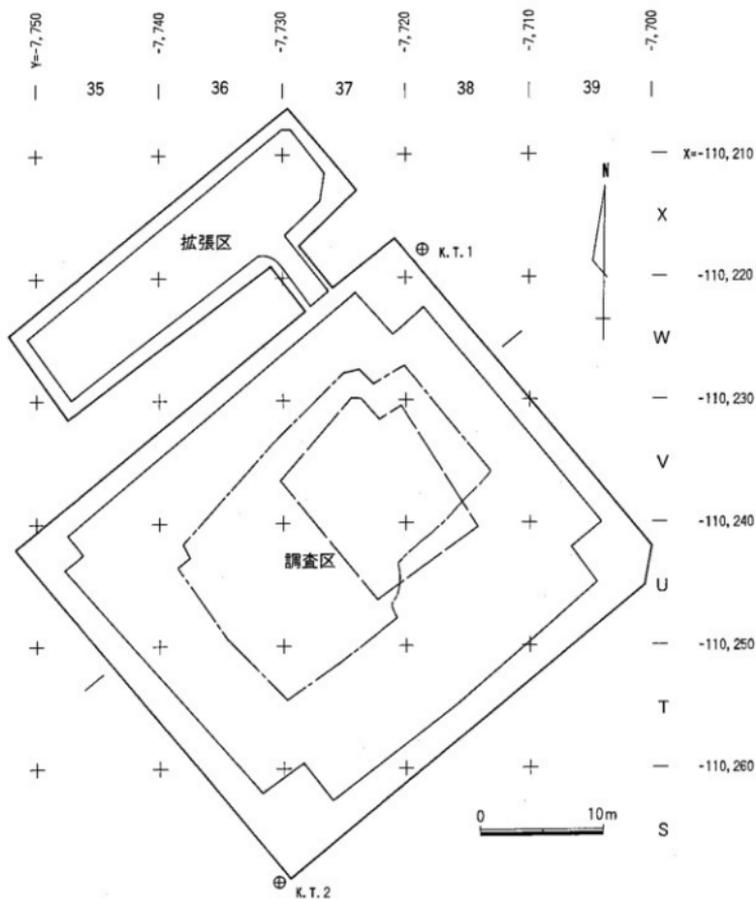
なお、グリッド杭設置以前（調査第1・2面）では、現地に仮基準杭（KT-1及び2）を設置しこれを平面基準点とした。この杭は、グリッド杭設置に際し測定し国土座標上に落とした。

KT-1 $X = -110,217.732$ $Y = -7,718.582$

KT-2 $X = -110,269.172$ $Y = -7,730.363$



第5区 川合通勤グリッド位置図



第6図 調査区グリッド配置図・掘削模式図

主軸方位 N-12° 53' 58" -E

調査の方法

調査は、周辺での調査の成果や平成6年度に行われた確認調査の結果を元に、近世、律令時代、古墳時代、弥生時代の各時代にわたり合計6面程度の遺構面が想定され、最下面では地表下5m程度になると予想された。しかしながら建設予定地により決定された調査区は確認調査地点より北西に100m程離れた地点となり、それにより土層の堆積状況や深さなどについてもかなりの違いが予想された。そのため、これらの試掘結果を参考にしつつも、現地の調査に当たっては、集水溝等での先行する掘削に際しての土層観察で下位の状況を把握して、その都度、調査の適切な進め方や方法を検討しながら進めていくこととした。

結果として今回の調査では、近世2面(調査第1・2面)、律令時代2面(調査第3・4面)、古墳時代(後期)2面(調査第5・6面)、弥生時代(中期)調査第7面の合計7つの遺構面の調査を行い、土層観察を含めての最終的な掘削面(8面及び最終レベル面)の深さは地表下約6.5m(集水溝での観察は地表下約8mまで)となった。調査の過程で2回中間層を除去したため、便宜的に、上中間層を挟んで、調査第1~4面までを上層、第5~7面までを下層とし下中間層以下を8面以降(遺構面は確認されなかった)とまとめた。なお、拡張区については計画される工事内容とその面積的な問題から上層のみ調査を行うこととなった。調査を行った面積は、調査区地表面では1,400㎡、法面を除いた上層での面積は1,250㎡だが、集水溝や排水路等を設定したため実際の1・2面での調査面積は各1,100㎡、3・4面での調査面積は各1,050㎡、下層では540㎡、8面以降で210㎡となり、拡張区は地表面では300㎡だが調査区外との境界のフェンス及び側溝の保護のため一部後退し、上層(3面が確認された)で190㎡となった。これらの各調査面を合計した延べ面積は6,910㎡(7,610)となる。

掘削は、法切りオープンカットにより行われたが、掘削が深くなること、湧水が多いこと、礫層等の崩壊しやすい壁面であることを考慮して、通常以上の安全勾配(1:2以下)をとり、特に流路の影響により上下を通じて砂礫層となる南側法面については、流路により調査対象面が残されていないこともあり、安全の面からさらに緩やかな勾配をとった。また、掘削は表土・盛土(約1m)及び上下中間層(約2m及び1m)は建設重機を利用して行い、それ以外は人力により行った。掘削排土は埋め戻しのため調査区西の排土置場に仮置き、必要に応じて建設重機により場内で移動、積み上げ、整地を行った。なお現地調査の終了後に調査区の埋め戻し作業を行った。

掘削に伴う湧水については、調査面外周に土層観察を兼ねた排水溝を巡らし法面からの湧水を受け、また表土・中間層の除去に際し、湧水の状況に併せて調査区のコーナーに土層堆積状況の観察を兼ねて掘削を行い、集水溝を設け、水中ポンプ(100V及び200V)を設置し、校地北側を流れる飛石川に排水した。

出土遺物はグリッドごとに、層位・遺構別に取り上げ、土器・木製品・石製品・金属製品等種類別に分類し台帳に登録した。なお出土遺物の水洗・注記作業は現地調査期間中に遺跡現場で行った。

図化記録は、調査第1・2面ではグリッド杭未設置であったため、先述したように仮基準杭(KT-1・2)を設置し、これを基準としてトータルステーションによる測点を行い図化した。グリッド杭の設置後はこれを基準とした。遺構平面図及び断面図は1:20縮尺を基本としたが、遺物出土状況や詳細な遺構個々図については1:10縮尺で、また概略図等では1:100~40と状況に合わせた縮尺で適宜図化を行った。また図化を行わない遺物等についても必要に応じてトータルステーションによる測点を行い記録した。

写真記録は、調査記録には中型カメラ(6×7版)モノクロを中心に、小型カメラ(35mm)モノクロ

及びカラースライドを用い、また調査状況の記録に小型カメラカラーネガをあわせて使用した。各調査面の全景写真等の広範囲の撮影の場合には状況に応じてローリングタワー、高所作業車、ラジコンヘリ等を使用した。

第2節 調査の経過

今回の発掘調査は前述のように、開始時期が遅れたため、単年度での現地調査の終了が工程的に困難となり、現地調査についても10ヵ月の工程を2ヵ年度に分割して実施することとなった。平成7年度は12月～3月の4ヵ月間で準備工および上層（近世～律令期）に予想される3面の調査を行い、年度が改まった4月～9月の6ヵ月間で下層（古墳時代～弥生時代）の調査、調査区の埋め戻し、撤去工を行うこととなった。また平成8年度に入ってから浮上した部室部分の拡張調査も併せてこの工程に組み込んで行われることとなった。

平成7年度の調査は、11月中より、調査に先行する進入路の整備を待って、調査区周辺の仮囲いの設置、プレハブ事務所の立ち上げ等の一部の準備を開始し、12月に入り本格的な準備を含め調査を開始した。

調査は重機による表土盛土の排土を行い、併せて集水溝の設置等排水及び安全確保の環境整備や資機材の搬入を進め、近現代の水田耕作土直下の調査第1面より人力による作業を行った。第1面の遺構検出を終え、一部遺構（礫詰め土坑）の排土を開始し、安全管理を行い年内の作業を終えた。1月の現地再開からは、第1面の遺構排土を継続し調査を進め、完掘状況の写真撮影及び遺構実測を行い第1面を終えた。調査区の南～東にかけては第1面の土坑が多く掘削され、下位の保存状況は良好とは考えられなかったため、第2面の精査は第1面の遺構が比較的希薄だった西～北部分を中心にを行い、確認された遺構の写真・図化の記録を行なった。また、特に礫詰め土坑が密に確認された東～南側部分はそれ以下の状況の早期把握のため先行して叩きを進めた。この先行する叩きに際し、それまで土坑壁面で確認されていた遺物が、平面的に広がる土器集中（一部で土製馬形・人形等の祭祀関係遺物が確認されたことにより祭祀遺構と判断）と確認されたため、この面を調査第3面と判断して調査区全体を精査した。それにより合計4ヵ所の祭祀遺構が確認され、調査第3面は律令期の祭祀関連と判断された。これらの祭祀遺構は遺物の保存から写真・図化の記録を2月中旬から先行して行い、調査面全体の実測は写真測量で3月中旬に実施した。以降7年度中は土層断面で確認された第4面の検出を進め年度末を迎えた。

平成8年度は7年度の経過を受け、調査第4面の検出作業から始め、検出精査された第4面の写真撮影及び図化記録を手取りで行った。記録終了後第4面の叩きを行い遺物を確認したが、その際井戸（SE01）が検出された。4面叩き及び確認遺構の図化等の追加記録の終了後、5月下旬より建設重機による中間層（約2mの砂礫層）の除去を行った。除去の終了後再び人力による作業を行い、6月初旬より調査第5面（古墳時代後期水田）の調査に入ったが梅雨時ということで悪天候による作業の中断が度々あった。

また、6月10日より新たに建設重機を使用して拡張区の表土盛土を除去し、拡張区の調査を開始した。拡張区は本調査区の作業状態に併せて作業を進め、7月初旬に第1面（本調査区第1面に相当）、7月下旬に第2面（本調査区第3面に相当）、8月上旬に第3面（本調査区第4面に相当）の調査を行い以降第3面の叩きおよび補足作業を本調査区の作業状態に合わせて進め、9月初旬までに調査を終了した。

一方、本調査区では調査第5面の水田解体中に、より古い段階の畦畔痕跡と見られる木製品の集積が確認され5面下水田と把握し、引き続き調査第6面の水田遺構を調査した。7月の下旬には第6面の水田調査を終了し、その耕作土下に広がる包含層（9層）の調査に入った。この層の上面にかなりの凹

凸があり、特に調査区の西側の微高地状の高まりについては調査区外周の排水路での土層観察で下部に盛土が観察されたため、包含層下面を調査第7面と判断し、8月より精査を行い方形周溝墓を検出した。また7面遺構の下位については、調査区の中央近くに土層観察のテストピットを設定し観察した状況では7面の下に砂を中心とする中間層(約1m)の下でシルト質の土層が確認された。遺物や遺構は確認できなかったが、その一部の層界では攪拌の可能性も考えられる凹凸が観察された。そのため、ここまでの確認が必要と判断されたが、方形周溝墓については盛土除去等の調査が残っており、また調査終了後の埋め戻しの日程確保の必要もあり、調査区を二分し、西半分は7面の方形周溝墓の調査を続け、東半分につき8月26日より建設重機を使用して下中間層を除去し8面以下の確認を並行して行ったが、平面精査では8面以降においては遺構・遺物は確認されなかったため全面調査は見合わせた。一方、方形周溝墓については調査区内の調査終了の後、西側の調査区法面部分拡張を調査区内の片付けと併せて9月9日より行い、調査区内の作業は9月14日に終了した。

以降は調査区の埋め戻しと現地の撤収作業を行った。途中埋め戻し作業に際し9月27日に調査区の壁面より井戸(S E02)の断面が確認されその記録作業を30日まで行った。諸作業は悪天候等の影響があったが10月4日には埋め戻しを終了、9日には現地プレハブ事務所の解体、14・15日に仮囲いの撤去を行い、現地作業を終えた。

現地撤収以降は中原整理事務所を中心に整理作業を行った。

第IV章 調査の概要

第1節 調査第1・2面（近世以降）

1 第1面の遺構（第7図、図版1・2）

調査第1面は、ランド造成土下の近現代（学校建設当時まで）の水田耕作土（暗灰色シルト）の直下で確認され、確認面はやや褐色がかる暗灰色シルト面であった。

確認された遺構には礫詰土坑（SF）、杭列（SA）、疑似畦畔（SK）などがあり、この他拡張区で浅い溝状遺構が複数検出されている。この溝状遺構は覆土も周囲の土に若干赤褐色の混和物が混ざっている程度で、またそのプランもあまり明瞭でない。おおむね互いに平行あるいは直交しており、この方向が確認された畦畔の方向に一致することから、耕作痕の可能性が高い。調査区の南側には流路跡と考えられる砂礫の堆積がこの面を切り込んで確認され、この部分ではこの面を含め上層全ての土層が削りとられていた。南側で確認された遺構の一部はこの堆積の上部となる黒褐色色に覆われていた。

遺構面の年代については年代を明確に示す遺物は少ないが、周辺でのこれまでの調査成果と比較すると、旧耕作土直下で確認されており、遺構の状況等から八反田地区第1遺構面や川合遺跡第1遺構面に対応し、近世後半～近代の年代が考えられる。

（1）礫詰土坑（SF）

調査区では48基、拡張区では2基の合計50基が確認されている。その形状や規模には個体差が大きいが、覆土は基本的に砂及び礫で、その層位や状況から八反田地区（第1・2遺構面）や川合遺跡（第1・2遺構面）での土坑と同じ性格をもった遺構、具体的には、洪水で埋没した水田の復旧に際して、水田を被覆した砂礫を埋め込む（副次的に水田に客土する土も得る）ために掘削されたものと考えられる。以下のような性格を明確にするため、この性格の土坑を特に礫詰土坑と呼称する。

礫詰土坑の分布は均一ではなく、調査区の南東に多くが集中して、南西では散在的で、調査区北半ではかなり疎で、北端付近に若干見られるといった偏在した分布を示しており、さらにこの偏在と確認された畦畔痕跡や礫詰土坑の形状、配置との間にはある程度の相関関係が窺える。

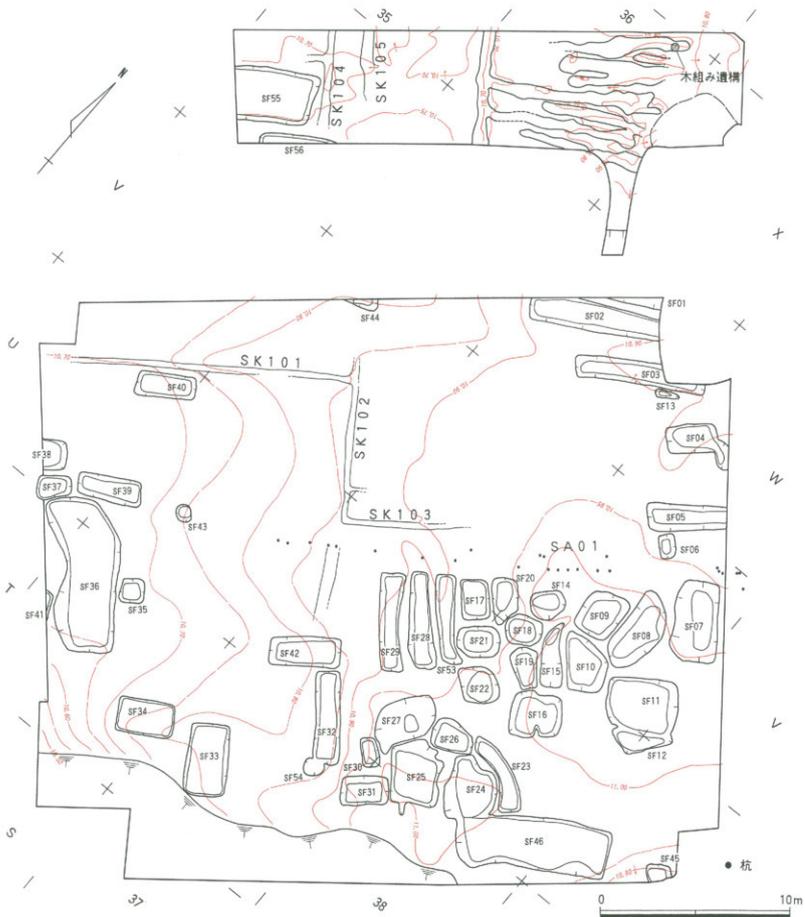
個々の土坑の形態はその規模と共に個体差が大きく、かなりバラついた印象を受け、外見上からは方形、長方形、円形、不整形との分類もできるが、この内明確にその形が意図されていたと思われるものは長方形で、他のものはこの長方形の変形か不整形が偶然その形状を呈したものと思われ、土坑の形状は掘削場所の状況に併せかなり柔軟に掘削されている様子が窺える。なお、この長方形についてはさらに細長い短冊形を呈するものが比較的定形的に捉えうる。

規模については、面積（検出上面）は平均では5.28㎡だが、最大は24.02㎡～最小は0.40㎡、容積では平均2.35㎡、最大11.47㎡～最小0.05㎡とばらつきが極めて大きい。ちなみに計算上では、今回確認された礫詰め土坑が50基で平均容積2.35㎡ならば、第1面調査面積約1,450㎡に均等で約8㎡の厚さの土砂を処理できることとなる。

土坑の配置については、下記のようないくつかのパターンが認められるが、先に述べたように土坑分布の偏在も併せて、調査区全体を通じての掘削の規格性は考えにくい。

①隣接するものが直交するもの T-37グリッドのSF33・34や、U-37グリッドのSF32・42では形状的にも比較的似た土坑が長軸方位を直交させて隣接している。この2例が調査区の西南側で見られた。

②同じ方向性をもって平行しているもの W-37グリッドでのSF01～03の細長い短冊型の土坑がほぼ平行して並んでいる。この配置は静清バイパスに伴う調査や八反田地区の調査でも確認されている。また、U-37グリッドのSF28・29・53も幅狭の短冊型の土坑が平行している。調査区の北東側で顕著に



第7図 第1面全体図

見られた。

③特に方向に規格がなく、まとまってある範囲を占めるもの U・V-38グリッドを中心とするSF07～12・14～22の集中、U-38グリッドを中心とするSF23～27・30・31・46の集中では、土坑の形状や方向にはそれほど規格性がうかがえず、かなり柔軟に不整形の土坑がすき間を埋めるように掘削され、土坑を配列するというより面を占めるといった感じを受ける。調査区の東南部で

この2カ所に分かれて集中が見られた。

④単独に所在するもの U-35グリッドのSF40は周辺にはかの土坑が所在せず、畦畔SK101に平行して掘削されている。

このうち1・2の比較的整った配列を持つものの方向性は確認された畦畔痕跡及び杭列の方向と一致するものが多く、当時の復旧が水田区画に規制され行われていた様子を物語り、またこれらの土坑の配置パターンのばらつきからも、水田復旧は当時の土地所有形態に併せて行われていたと見られる。

出土遺物については、土坑の時期の遺物は少ないが、これらの土坑を掘削した際、下にある律令面及びその包含層の遺物が巻上げられ、引き続いて砂礫共に埋め戻されたため、結果として土坑によっては覆土中に律令期の遺物がかなりまとまって出土する場合があった。

SF02 調査区の北端近くのW-37グリッドで検出された。東端部は調査区外で確認できなかったが、形状は長方形で、短冊形を呈し胴部中程でややふくらむ。規模は、確認長7.02m、最大幅1.4mで深さは0.58mが確認された。覆土は中～小礫を多く含む酸化による褐色部分を交える青灰色粗砂であった。長軸方向はN-61°-Eを測る。

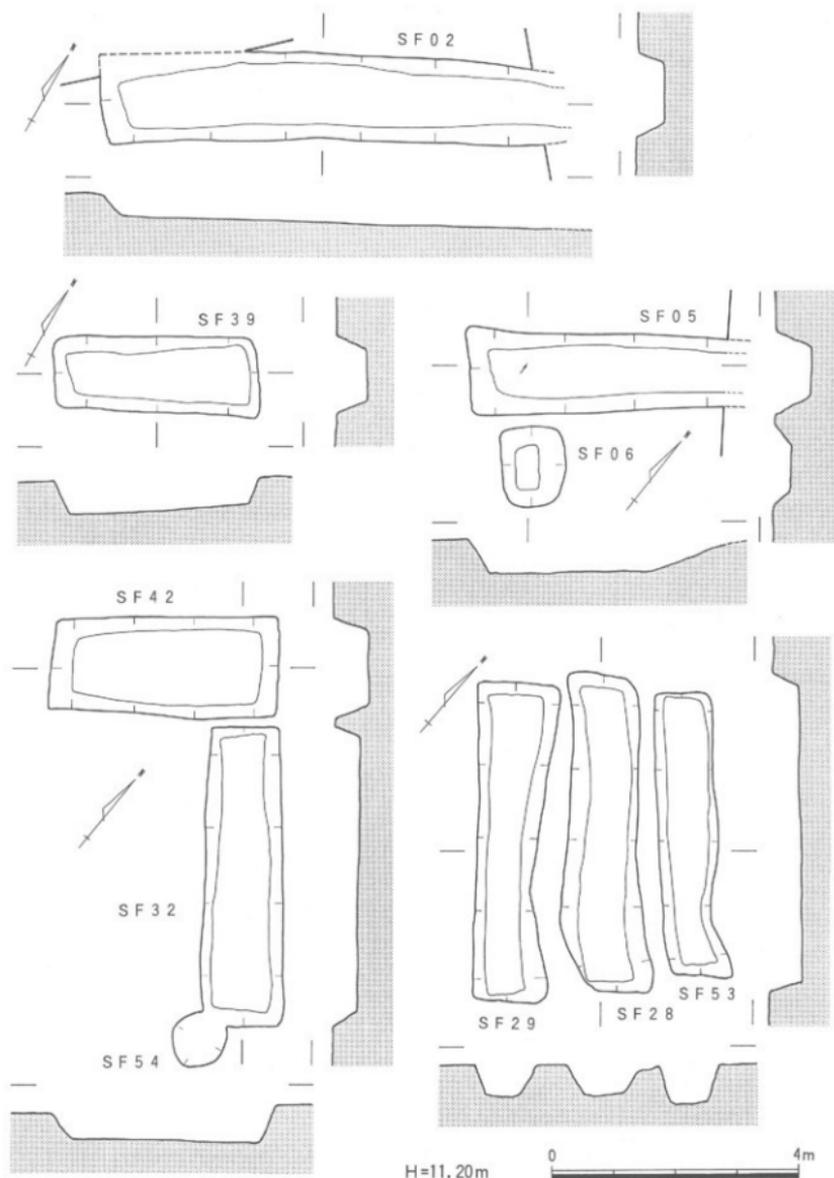
この土坑のすぐ北に隣接してSF01の南辺のラインが一部確認されている。この土坑は大半が調査区外となるため状況は不明だが、確認された範囲ではSF02と同様な方向性を持ち、極めて近接していることから同じ規格で掘削されたと考えられる。また、やや離れ南に所在するSF03は規模はやや小型(6.58×1.23×0.59m)だが方向はN-57°-Eと近い、これらの方向性は畦畔SK101(N-55°-E)・SK103(N-52°-E)や杭列SA01(N-57°-E)等の水田区画の方向とかなり一致しており、これらの土坑の掘削は、近接する畦畔は確認されていないが、水田区画による規制がなされていたものと考えられる。

SF05・06(第8図・図版3) V, W-38グリッドで検出された。やはり東端は調査区外で確認できなかったが、西辺がやや裾広がりとなる短冊形を呈する。規模は、確認長4.2m、最大幅1.4mで深さは0.59mが確認された。覆土は上部は02と同様だが、中部では黒みが強い色調で、最下部では礫がやや小形で、灰色粘土ブロックを交える。長軸方位はN-50°-Eを測る。

この土坑の西端近くの南側に隣接してSF06が検出されている。形状は長方形で規模は1.22×1.02×0.29m、上面面積1.21㎡、底面面積0.25㎡で容積は0.21㎡と小型だが、長軸方向はN-36°-WとSF05にほぼ直交しており関連がうかがえる。

なおこれらの土坑のすぐ南側に近接し、水田区画に係わる杭列であるSA01が延びており、この方向性はN-57°-EとSF05に比較的近く、また位置的な点からもこれらの土坑の掘削はSA01に規制されたものと考えられる。

SF39(第8図) U-35・36グリッドで検出された。平面形はやや短い短冊形を呈する。規模は、長さ3.3m、幅1.3mで深さは0.58mを測り、上面面積3.97㎡、底面積2.31㎡、容積1.81㎡を測る。覆土は上部はやや褐色の中～大礫を中心とし、下部は黒味が強く礫は小さくなる。長軸方位はN-61°-Eで、ここまでの杭列の連続は確認されていないが、SA01の方向に近い。この土坑の南に接し大型のSF36が直交する方向に位置し、また西には同様な方向を持ち、連続あるいは平行する形でSF37・38が位置している。



第8图 土坑实测图

S F 42・32 (第8図) U-37グリッドで検出された。平面形は長方形だが細長く短冊型に近い。規模は、長さ3.64m、幅1.62mで深さは0.59mを測り、上面面積5.78㎡、底面積3.44㎡、容積2.72㎡を測る。覆土は上部はやや褐色の小～中礫を中心とし、下部は黒味が強く礫は小さく粘質土ブロックを交える。長軸方位はN-52° -Eを測る。

この土坑の南側にS F 3 2が検出されている。形状は短冊型を呈し、規模は4.88×1.31×0.73m、上面面積6.05㎡、底面積3.65㎡で容積は3.55㎡を測り、南西の角に円形の小土坑(S F 54)を伴う。長軸方位はN-38° -WでS F 42と直交しており、また両者の東辺がそろっているなど同一の規格で掘削されたことをうかがわせる。

またこれらの方向性は杭列S A 01や畦畔S K 102(N-36° -W)・103に近いあるいは直交するものである。掘削は水田区画に規制されたものと考えられる。

S F 28・29・53 (第8図・図版3) U-37グリッドで検出された。平面形は基本的には細長い短冊型を呈するが南・北の両端では各々東・西側へ反り、西辺ではややふくらみ、東辺ではややへこんでいる。この形状は、東西に並存するS F 29・53の面する辺の形状に対応しているようである。長さ5.11m、幅1.37mで深さは0.57mを測り、上面面積6.01㎡、底面積3.36㎡、容積2.69㎡を測る。長軸方位はN-40° -Wを測る。覆土は上部ではやや褐色で礫径は大きいが下部では黒みが強く礫径は小～中であった。側壁にはS C 02に由来する多数の土師器が見られ、これらの土坑により律令期の遺構面が攪乱されている様子がうかがえる。

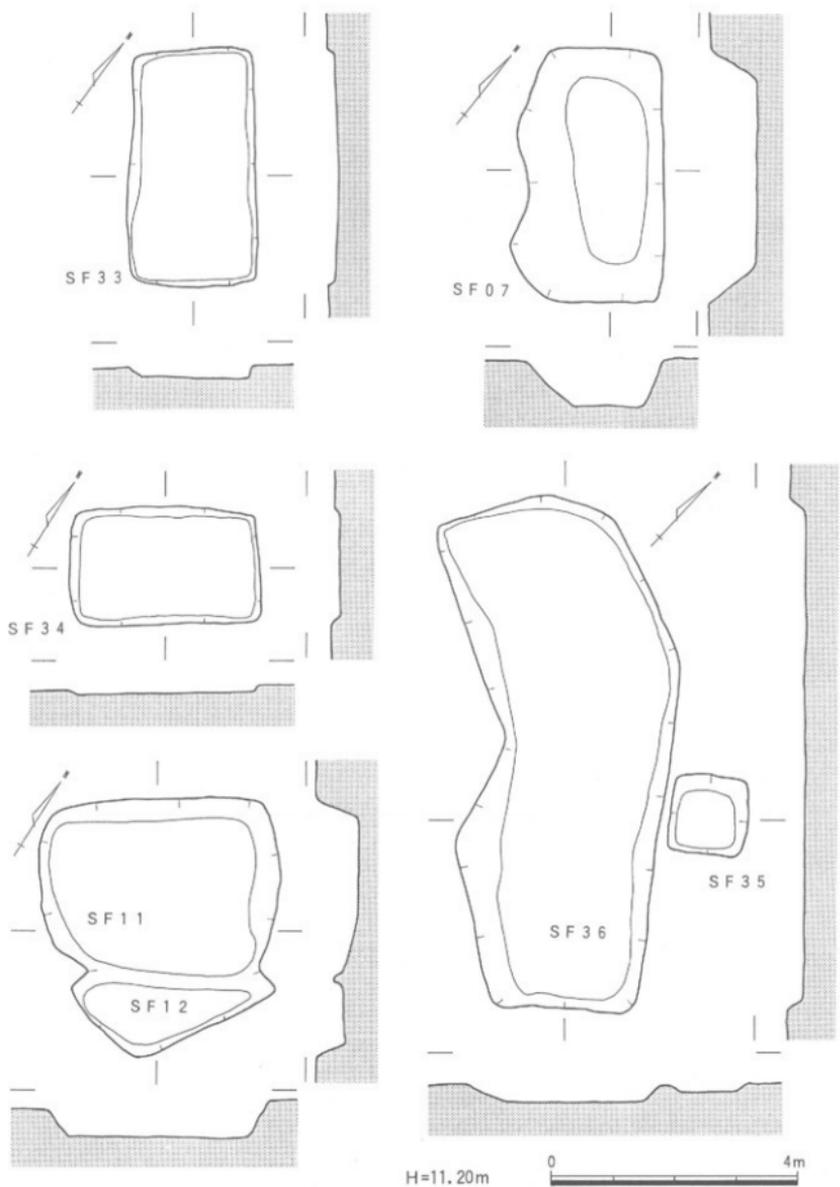
西に隣接するS F 29は、規模は5.12×1.32×0.56mで上面面積5.64㎡、底面積3.08㎡、容積2.45㎡を測り、長軸方位はN-39° -Wで、東に隣接するS F 53は、規模は4.60×1.00×0.73mで上面面積4.24㎡、底面積2.65㎡、容積2.51㎡を測り、長軸方位はN-42° -Wとその規模や方向性は近似しており、また形状の面でも基本的にはやや歪んだ短冊型でこの3基は1組のものと考えられ、この方向性については北側に所在するS A 01に直交するものに近い。

S F 33 (第9図) T-37グリッドで検出された。平面形は長方形で幅広の印象を受ける。次に述べるS F 34と共に他の土坑からやや離れ所在し、上面の一部に黒褐色砂が薄く被っていた。規模は長さ3.88m、幅2.06mで深さ0.23mを測り、上面面積7.58㎡、底面積6.44㎡、容積1.63㎡を測り、平面規模に比べ浅い。覆土は小礫が中心で上部はやや褐色がかかる。長軸方位はN-34° -Wを測る。

S F 34 (第8図) S-34グリッドで検出された。平面形は長方形で幅広の印象を受ける上面の一部に黒褐色砂が薄く被っていた。規模は長さ3.08m、幅1.90mで深さ0.20mを測り、上面面積5.63㎡、底面積4.53㎡、容積1.00㎡を測り、S F 33と同様平面規模に比べ浅い。覆土は小礫が中心で上部はやや褐色がかかる。長軸方位はN-59° -Wを測り、S F 33と直交している。この土坑は隣接するS F 33とその形状や規模等で共通点が多い。

S F 07 (第9図) V-38、39グリッドで検出された。西辺の上端ラインに乱れがあり不整形のプランだが、ほかの辺は直線的である。底面の形状は楕円形に近い。プランに乱れの見られる西辺では土坑の法面は他の辺に比べ緩やかなことからこの乱れは崩れによって生じたものと考えられ、上面プランは長方形を意図していたと見られる。規模は長さ2.46m、最大幅2.46mで深さは0.82mを測り、上面面積9.03㎡、底面積3.23㎡、容積5㎡を測る。覆土は上部は酸化による褐色部分を交える細礫で下部は還元状態で中～大礫に粘質土ブロックを含む。長軸方位はN-36° -Wで、北辺に接するS A 01にほぼ直交し、掘削はこの水田区画に規制されたものと考えられる。

S F 11・12 (第9図・図版3) T・V-38・39グリッドで検出された。上面の検出時には1基と見られたが、排土中に上部の崩れた側壁が確認され2基と判断した。平面形は両者の内比較的に整ったS F 11は上面形では概ね幅3.9m・高さ2.7mの台形で長軸方向はN-59° -E、この方向はS A 01の方向



第9图 土坑实测图2

にかなり近い。深さは0.74mを測る。下面の形状は三日月形に近い不整形で北壁は極めて緩い傾斜となっているため、上面面積は10.43㎡、底面積4.17㎡で、容積は5.38㎡と小さい。この底面の形状については明確な理由は解らないが、覆土の排土に際しこの11の方は極めて湿潤（隣接の12では乾燥していた）だったことからこの湧水のため下面の掘削を一部見合わせさせた可能性もある。一方SF12はSF11と北辺で接しており、外形的には幅3.3m・高さ1.3mの三角形を呈し、下面の形状もほぼ同様で上面面積2.76、底面積1.73㎡、深さは0.5m、容積は1.11㎡を測る。長軸方位はN-48°-Eであった。両者の間はちょうど障子の棧のように壁が立ち上がっている。形状等から類推するとSF11が先行して掘削され、その後12が掘削されたため12は形状が中途半端なものとなっていると考えられる。覆土は両者ともやや褐色の細礫で、上面は南側流路の覆土最上部の黒色粗砂で覆われていた。なお、SF11の覆土中より蹄鉄が出土している。

SF36（第9図） T・U-35・36グリッドで検出された。上面形は不整形だが、S字状にカーブした長方形を呈している。最大幅3.22m、長さ8.3m、上面面積24.02㎡、底面積18.13㎡と今回確認された確認土坑の中では平面的には最大の規模を持つが、深さが0.33mと浅いため容積は6.9㎡であった。長軸方位はN-45°-Wで北側に位置するSF37・39等に直交する方向性を持ち、SA01のここまでの連続は認められないが概ねSA01にも直交しており、水田区画による規制が考えられる。覆土はやや褐色の小礫が中心だが、土壌分がかなり多く、湿潤であることと併せて粘性が若干感じられる。祭祀遺構SC01を破壊していたため、東壁では多くの須臾器が壁上に見えている。なお、中央東側にSF35が隣接している。これは上面で1.28×1.24mの正方形で深さは0.15mで容積は0.18㎡の小型の土坑だが36に比べ覆土の礫は大きい。その位置関係から両者には何らかの関係が考えられるのかもしれない。

（2）水田畦畔（SA、SK）、（第7図・図版5）

ここでは調査第1面で確認された水田畦畔の痕跡について触れる。対象とするものは現地で杭列として確認されたSA01もその状況から水田畦畔遺構と考える。またそのほかの水田畦畔と考えたものは疑似畦畔Bとして確認されたSK101～105である。これらの畦畔関係遺構の方向性はかなり平行あるいは直交している。また拡張状で多く確認された浅く不明瞭な溝状遺構もこれらと同様の方向性を持ち、このことからこれらの遺構も耕作に関係したものと判断した。

SA01 グリッドではU-36・37及びT-37・38だが、調査区中央のやや北よりを横断して確認された2本の杭列で、方向性はN-57°-Eである。確認された全長は24.7mを測り、杭は北列で9本、南列で16本の合計25本を数えるが南列の方が残存は良好であった。杭は基本的には先端をとがらせた角杭でやや外側に傾いて確認されている。杭間の距離は約0.9mで本来はこの幅で盛土を持った大畦畔であったと考えられるが盛土は残存していない。他の畦畔との方向性の類似や地籍図との照合から道を兼ねた地境の大畦畔であったと考えられる。

以下に述べる水田畦畔痕跡は疑似畦畔Bとして土質の違いで平面のみで確認され、不明の点も多い。方向性としてはSA01に平行あるいは直交するものが大半であった。

SK101 U・V-35・36グリッドで確認された。直線的に東西方向へ延び、その東端SK102に直交して接合している。主軸方位はN-55°-E、全長は14.5m、幅は0.21～0.35mが確認された。

SK102 U・V-36・37グリッドで確認された。直線的に南北方向へ延び、南端で直角に東へ曲折しSK103となり、確認された北端から1m付近でSK101に直交して接合する。主軸方位はN-36°-W、全長は8.4m、幅は0.27～0.4mが確認されたが、北側には更に連続していた様子が伺える。またSK103との接合部から北へ1.6m程度の所で東側に直交して分岐していることが確認された。

SK103 U・V-37グリッドで確認された。直線的にSA01のすぐ北側を平行して東西方向へ延びている。西端で直角に北へ曲折しSK102となる。主軸方位はN-52°-E、全長は6.3m、幅は0.26～0.39

mが確認されたが、東側には更に連続していた様子が伺える。

S K104 拡張区のW-35グリッドで確認された。直線的に南北方向へ延びている。北側は調査区外へ延び、南側はS F56近くで不明瞭となっている。調査区北側から1.6m付近で直交して分岐し、西へ1m程度延びている。主軸方向はN-34°-W、全長は4.9m、幅は0.26~0.55mが確認された。

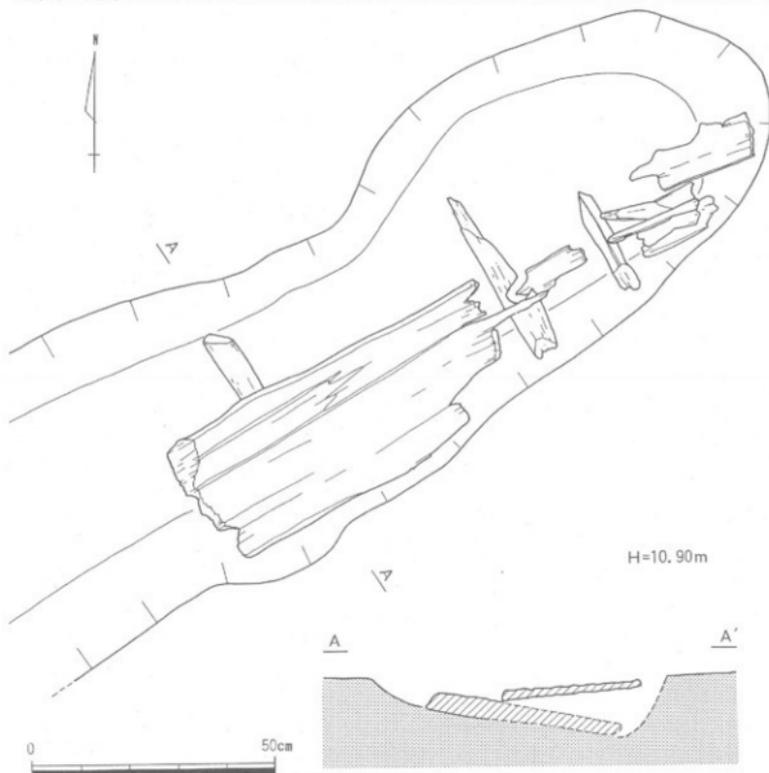
S K105 拡張区のW-35グリッドで確認された。S K104に平行し直線的に南北方向へ延びているが北から2m付近で東側のラインは不明瞭になり、西側のラインも段違いに折れ曲がっている。北側は調査区外へ延び、南側は不明瞭となっている。主軸方向はN-38°-W、全長は3.3m、幅は0.57~0.6mが確認された。

(3) 木組み遺構 (第10図・図版5)

拡張区のS-36グリッドで検出され、溝状遺構の端部で確認されている。

基本的には3本の棒材と1枚の板材からなり、板材の下端は棒材と接していたが上端は離れており、釘等による両者の接合は認められなかった。また、板材の下からは遺物や特に変わった状況は見られなかった。

残存部の西側では比較的残存は良好で板材も本来の端部を残していると見られるが、東側の保存状態



第10図木組み遺構実測図

は悪く、板材は断片化し、棒材の残りも悪い。現状で推定される形状や規模は約1.4m×0.3mの板材と3本の40cm程度の棒材を横板とそれを留める杭の様な形に組み合わせたものが横倒しになっている状態に近いが、本来立ててあったものか不明である。

この遺構は、調査第1面での畦畔の方向におおむね平行あるいは直交し、この方向性の一致から耕作痕等の耕作に関連するものと考えられる溝状遺構から検出されており、木組みの方向もこの遺構に一致するものであるので、耕作に関連する施設の一部であった可能性も考えられるが、現状では性格や用途は不明である。

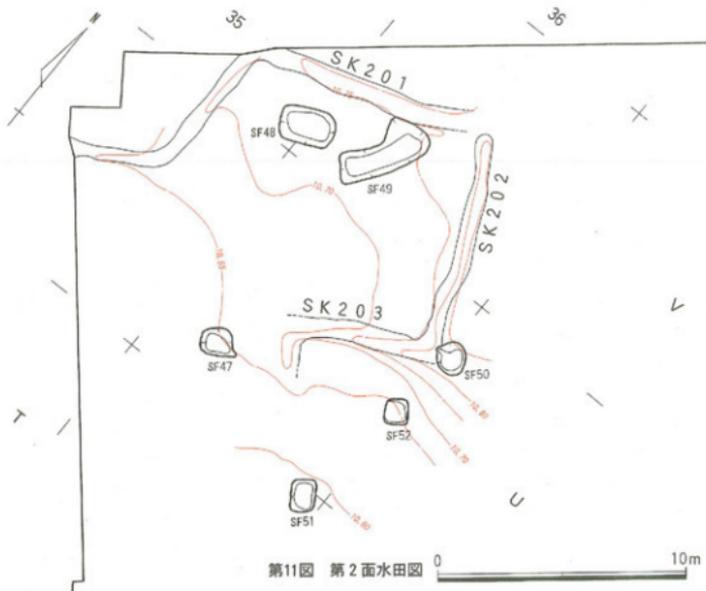
2 調査第2面の遺構

調査第2面については、1面の遺構による攪乱が少なく比較的状況が良好と考えられる調査区西隅を中心に検出されている。近世前半の年代が考えられる水田面である。確認された遺構には水田畦畔（SK）、隙詰め土坑（SF）、杭列（SA）がある。以下に遺構の種別ごとにその状況をまとめる。

（1）水田畦畔（SK）（第11図・図版6）

先述の様に2面の水田については、1面の土坑による攪乱の少ない部分を中心に検出されている。水田畦畔は3層（暗褐色シルト層）上面で数・の高まりが確認されているもので、残存状況はそれほど良好ではない。また、水田区画の方向性は第1面の水田のものとは異っており、全体として東へ15°程傾いている。1枚の大きさが確定できる水田はなく、水田1枚ごとの規模等については不明である。なおこの畦畔に伴う水田面につき刺さる形でキセル（13-3）が出土しており、このキセルの年代とこれまでの周辺部での調査の成果からこの水田の時期は近世前半と考えられる。

確認が部分的であったため、畦畔の全形や全体規格等不明の点が多いが3本の畦畔（内1本は2カ所で屈曲しており3本とも考えられる）が確認されている。



SK201 U-35、V-35、36グリッドで検出されている。2カ所で屈曲し、調査区外では分岐している可能性があるがここでは1本の畦畔とする。方向等の記述の便宜上屈曲部で3つに分け、西からSK201-①、②、③とする。全体を合計した検出全長は17.73mを測る。

SK201-① U-35グリッドで検出された。検出長は3.5mで西は調査区外へさらに延びている。幅は下端で42~62cm、残存高は2~4cm、方向はN-57°-Eを測る。東側は約60°北へ屈曲しSK201-②へつながる。

SK201-② U、V-35グリッドで検出された。南はSK201-①に屈曲して接続しているが、北側については南へ約70°屈曲してSK201-③に接続しているほか調査区外となるため分岐しさらに北へ延びているとも考えられる。確認された検出長は5.68m、幅は下端で53~68cmを測り①よりやや広く、残存高は1~5cmを測る。方向はN-1°-Wを測る。

SK201-③ V-35、36グリッドで検出された。西はSK201-①に屈曲して接続しているが、東側では高まりの残存が不明瞭となり状況ははっきりしない。検出長は8.55m、幅は下端で70~81cmを測り②、③よりかなり広いが、残存高は2~3cmと余明瞭でなく、特に東側では先述のように不明瞭であった。方向はN-71°-Eを測る。なお、この畦畔の南に並んでSF48、49の礫詰土坑が検出されている。特にSF49は畦畔に接して確認され、土坑掘削に畦畔との関係が伺われる。

SK202 V、U-36グリッドで検出された。南側はほぼ直交してSK203に接続するが北側は水口状に途切れている。検出長は8.72m、幅は下端で46~73cmを測り、残存高は4~7cmと比較的良好であった。方向はN-23°-Wを測る。確認の南端となるSK203との接続部にはSF50が掘削されている。

SK203 U-36グリッドで検出された。東はSK202と直交して接続する、西側では高まりが不明瞭となり西への連続ははっきりしないが、南に直角に屈曲している状況が伺える。検出長は6.1m、幅は下端で72~94cmを測る。残存高は4~10cmと比較的良好だが、西側ではあまり良好でない。方向はN-63°-EとSK202にほぼ直交する。

(2) 礫詰土坑 (SF)

調査第2面では6基の礫詰土坑(SF47~52)が確認されたが、これらの土坑は第1面で確認された土坑に比べ小規模で、その配置も散在的であり両者の間にはその性格や掘削の目的に差異が考えられる。主な土坑について簡略に触れる。

SF48・49 V-35、36グリッドで畦畔SK201-③の南に東西に並んで検出されている。SF48は2.34×1.56mの楕円形で、確認された容積は0.98m³を測る。第2面ではSF49に次ぐ規模である。SF49は48の東側に位置し、歪んだ長方形の北角が崩れた形状を示す。規模は3.84×1.92mで容積は2.09m³が確認され、第2面の土坑では最大のものである。

SF50 U-36、37グリッドで検出されている。1.38×1.05mの楕円形で容積は0.18m³が確認されている。この土坑は畦畔SK202とSK203の接続部で確認され、畦畔を一部掘込んで掘削されていた。

これら第2面の礫詰土坑は、第1面の土坑の平均容積が2.35m³であるのに対し、第2面の平均は0.64m³で、第2面では最大のSF49の容積も第1面の平均に及ばない程、規模は小さい。また、第1面の礫詰土坑はその方向性は水田区画(畦畔)に規制されながらも田面に面的に広く展開しているのに対し、第2面の土坑は、SK202、203がさらに連続していたと考えるならば、畦畔に接して掘削されている様子が伺われ、水田に面的に広がっていく様子は伺えない。このような状況から第2面の礫詰土坑は第1面の土坑に比べ、その処理の対象となる砂礫の量がかなり少なかったものと考えられる。

また、土坑の覆土については、第1面では砂と礫が大半で粘質土はブロックとして交える程度であったのに対し、第2面では礫に対する灰色の粘質土の割合が多かった。このような状況を考え併せると第1面の土坑群は水田全面を覆うような砂礫の処分と言った大規模な水田復旧に伴うものであったと考え

られるに対し、第2面の土坑はかなり小規模な復旧あるいは耕作中に出てきた礫を廃棄するためのものと言った性格が考えられる。

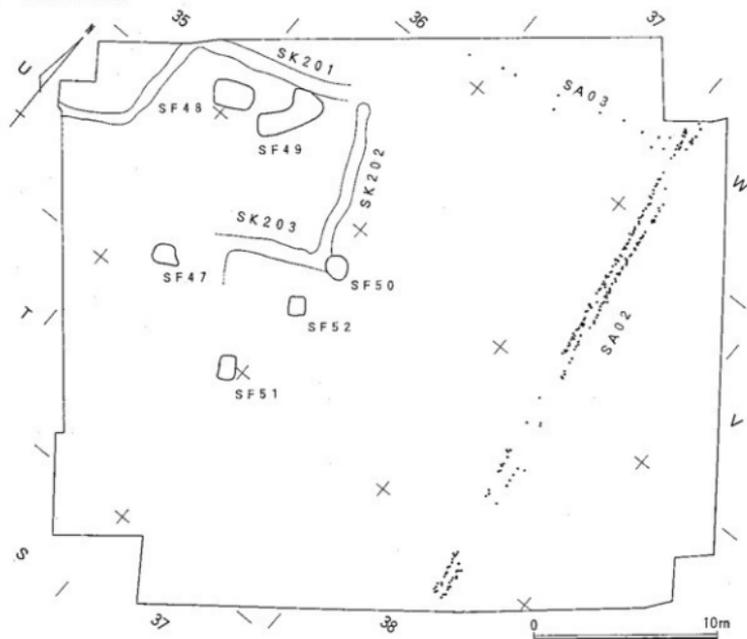
(3) 杭列 (SA) (第12図)

SA02 T-W-38グリッドで検出され、調査区を南北に貫いて確認されるが、調査第1面の礫詰土坑により所々で分断されている。南側は洪水痕跡の流路により切れ、以南への連続は確認できないが北側にはさらに連続していく様子が伺える。杭列の確認全長は29.3mを測り、その方向はN-11°-Wを測る。SA02は0.6~1m程度の間隔を持った2本1対の杭列で、杭は直径2~4cmの細い丸材(枝材)をかなり密に打ち込んだもので確認された杭は213本を数える。杭の先端は1方向から斜めに切断して尖らせる程度の加工で、特に尖らせるための加工が見られないものも多い。

SA03 W-36~38グリッドで確認され、検出長は11.9mを測る。東側はSA02におおむね直交して止まっている。方向はN-70°-Eを測る。杭列はSA02と同様に2本1対を成していると思われるが、その間隔は0.7~0.85m程度で、杭数は合計で12本とSA02に比べ少なく、特に南側の列は目立って少ない。また当然その密集度は極めて低い。杭の状況はSA02と同様であった。

これらの杭列については、その方向性は第1面の水田区画の方向とかなり異なっているが、第2面で確認された畦畔の方向にはいくぶん近いものも見受けられることから、第2面の水田区画に関連していたものと考えられる。

3 出土した遺物



第12図 第2面杭列

調査第1および第2面まで(中近世以降)に関連して出土した金属製品は合計で10点を数えるが、このうちグラウンド造成土直下の旧耕作土より出土した自転車のベル等の明らかに現代と判断される2点については省略する。

1は蹄鉄で礫詰め土坑(SF11)の上部で確認されている。平面形は馬蹄形だが、左右非対称で右側がやや開く。先端部は上に18cm程折上げられている。釘穴は左側に5カ所、右側に4カ所が確認され、うち右側の2カ所では釘が残存している。釘の残存のない左側の状況では各釘穴(上面幅は3~5cm)はやや狭い幅1~4cm程度の溝でつながっている。一部釘の残る右側ではこの溝を覆うように幅9~10cmの鉄をかぶせ、その上から釘が打たれている。農耕における蹄鉄の普及年代から考えると近世にまで遡る遺物とは考えにくい。

キセルは4点が出土している。完形品はなく、雁首が2点、火皿のみと吸口が各1点であった。

2の雁首は調査第1面の礫詰め土坑の検出時の出土で、雁首部はほぼ完存している。脂返しの湾曲はきわめて緩やかで、首の内部にラウが一部残存する。管の成型の継ぎ目は上側に認められ、梅花?模様の痕跡が見られる。また、首部上側にはタタキ痕が観察され、平坦に潰れている。形態的には18世紀後半の年代が考えられる。

3はやはり雁首部だけがU字型に大きく捻曲って、第2面の田面に刺さるような形で出土した。2に比べやや火皿が深く碗型を呈し、首部との接合部には補強帯が巻かれる。ラウに取りつく部分は1段太く巻かれた痕跡があり肩付と見られ、たが状の横線の装飾がつけられている。管の成型の継ぎ目は左側に認められる。大きく捻曲っているため脂返しの湾曲は不明だが、火皿の補強帯や肩付と見られることから形態的には今回出土のキセルの中では最も古い様相をもち、編年的には17世紀前半代の年代が与えられている形態である。

4は火皿のみが旧耕作土直下の調査第1面の清掃中に出土した。火皿はやや深く碗型を呈している。

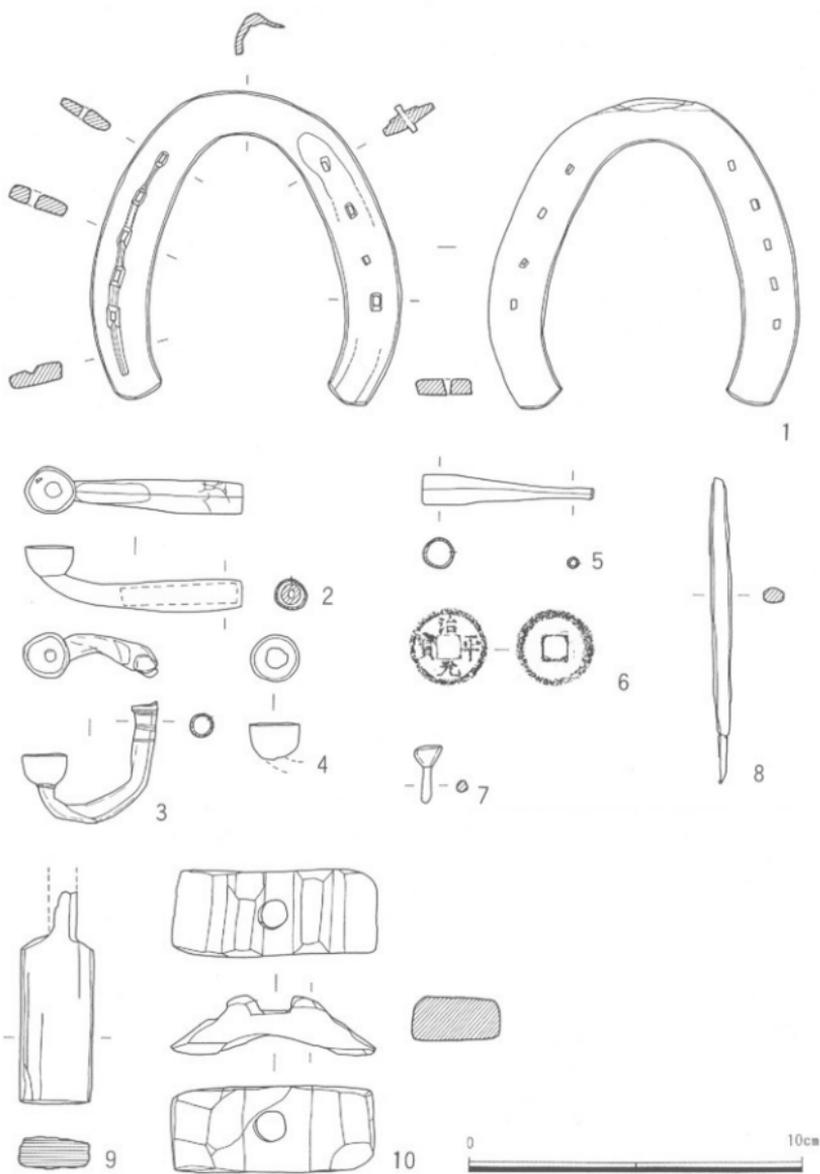
5は吸い口で1本の管で作られたもので継ぎ目は左側に確認される。吸口部径は3cmを計る。礫詰め土坑から出土している。

6の銅銭は宋銭の治平元寶で、楷書体で初鋳は1064年である。鋳上りは良く、真銭と考えられる。第2面水田の耕作土の叩きに際し検出されている。

7・8は不明品で、7は鋳状製品の頭部のみであり、飾り金具等の一部ではないかと考えられ、第2面の田面から出土している。8は下端が細くなる角棒状の鉄製品で、鉄釘あるいは鉄鎌の脚部とも考えられるが、上端部は欠損し、下端は折れ曲がっており明確にはできない。第2面水田の耕作土の叩きに際し検出された。

9・10の木製品はどちらも不明品である。9は拡張区の調査第1面で検出された、幅2cmで厚さが1cm程度の材を加工し、先端部(図上側)を幅7~8mmに狭め、現存する部分では羽子板様の形状を呈している。現存する長さは6.5cmを測り、本来の幅(約2・)を持つ部分の長さは4.8cmを測る。先端は欠損しているため全体の大きさや形状も不明である。10は2.5×6.0cmの大きさで高さは1.8cmを測り中央に9mm程度の穿孔がなされている。形状的には脚や屋根の様な形状とも見える。おそらくは穿孔部に組み合わされていた部材であろうと考えられるが、本来の製品の用途・性格や形状は不明である。

このほか、中世に属する遺物に陶磁器片があるが、調査第1・2面の水田耕作土や土坑覆土などに混在し、プライマリな包含層は残存せず、遺物の量も少ない。これらに含まれていた青磁・白磁片については12世紀終末から14世紀にかけてのものが見られる。出土資料が破片であるため、図化は見合わせ写真を掲載した。



第13図 遺物実測図1 (中近世以降)

第2節 調査第3・4面（律令期）

1 第3面の遺構

本遺跡の遺構・遺物の主体となるのは律令期であり、これらは3・4面から検出されている。第14図をもとに遺構の在り方をみてゆく。ここで検出されたのは、祭祀を示すと推定される遺構群であり、その種類と数は、土器集中箇所（SC01～05）5箇所、石組遺構一ヶ所、自然流路（SR01）一条、不明遺構（SX01・02）二基、井戸（SE02）一基、他に幅の狭い溝が検出されている。

遺構の分布は自然流路を境に異なり、南半には土器等を用いた祭祀痕跡と、石組み遺構からなり、北半は堅穴とか土坑状の不明遺構、井戸、幅の狭い直交する溝及び柱穴が分布している。以下、各々の遺構ごとにその概要を列記する。なお第15図には、祭祀跡の遺物分布図と石組遺構の配置を掲げた。

（1）祭祀跡(SC)（第14、15図）

SC01（16図、図版8）

T-36グリットに位置し、ここは調査区の最も南西の遺構である。確認坑で一部カットされてはいるが、土器の分布状態からみて、大半は残存するものと推定される。土器分布は長さ3m、幅1mの範囲に集中し、その長軸は北西方向を示していた。遺物の分布状態は第16図に示したが、土器以外に滑石製紡錘車1点（第76図-2）と瑪瑙製勾玉1点（第76図-3）が、土器分布の長軸中央付近から出土した。この遺物群に伴う堀方等の遺構は検出されず、遺構形成の当初段階から平坦な状態であったと推定される。このことは本調査区は、約100m程東を流れる長尾川の氾濫源であり、周囲から土砂が供給される地形であることから類推される。

さらに土器類の出土状態で注目されるのが、中央部を境に東と西の土器片の大きさが相違することである。というのは、西半では完形及びそれに近い壺・瓶類の大きな破片が見いだされ、それに反して東半では細かい土器片が集中している。土器は第17・18図に示したが、西半出土のものが多く、それらの大半は貯蔵形態の土器類に集中している。土器はほとんど須恵器が占めており、土師器はごくわずかで図示できたのは第18図-23の甕口縁部と24の甕底部のみであった。また器種としては、壺G類と呼称される19の長頸壺、22の平瓶などが出土する。

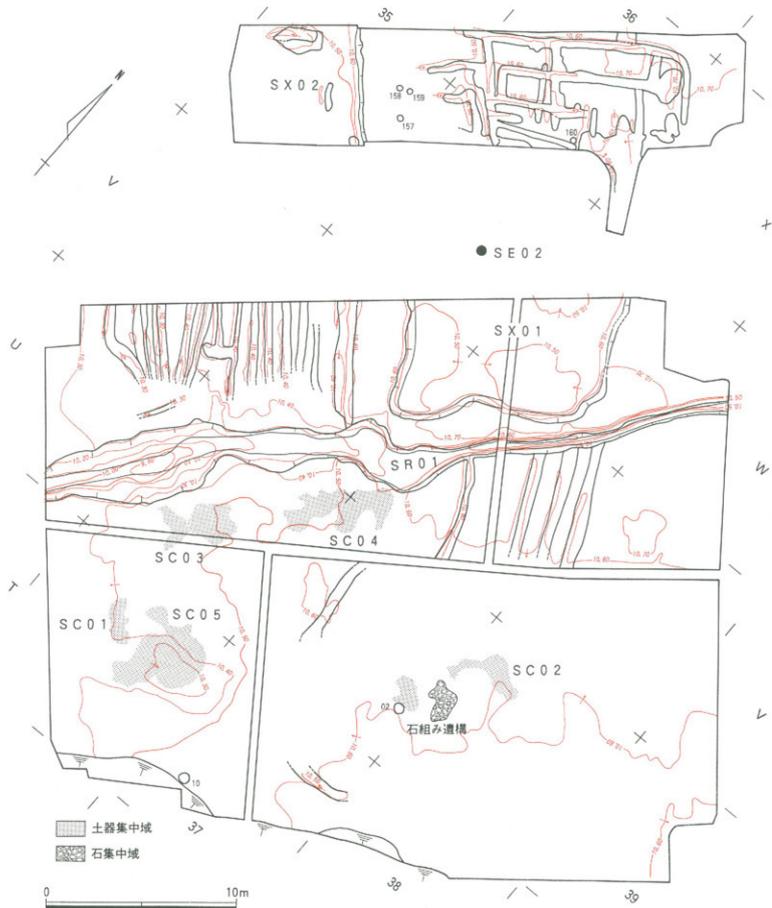
以上のように、本遺構は平坦部に営まれること、瓶・壺類という貯蔵形態の須恵器が大半を占めること、紡錘車・勾玉を伴うこと等の特徴が見いだされる。そしてさらに瓶類のなかには、朱または丹が塗られた痕跡が確認されるものもある。どのような方法で祭祀が施行されたかは知る由もない。しかし、一つの可能性として、西半の完形品に近い壺・瓶類は、供物の容器として置かれ、東半の土器は祭祀の最後に砕かれた状態を示すのではないか。さらには紡錘車と勾玉の共伴は祭祀の性格をも反映したものといえよう。

本遺構は、土器類の出土状態からみて、平坦地で執行された祭祀行為の痕跡を示すものと推定される。後述するSC02は、祭祀行為後に土坑状の凹地へ祭祀具を一括投棄したものと考えられるが、本遺構は明らかにSC02の祭祀行為とは異なる。

本遺構の時期は、須恵器坏類と壺G類から奈良時代末から9世紀初頭段階と推定される。しかし共伴する瑪瑙製勾玉の年代とはかなりの差が認められ、伝世品を使用する祭祀の可能性もある。

SC02（第19図、図版8）

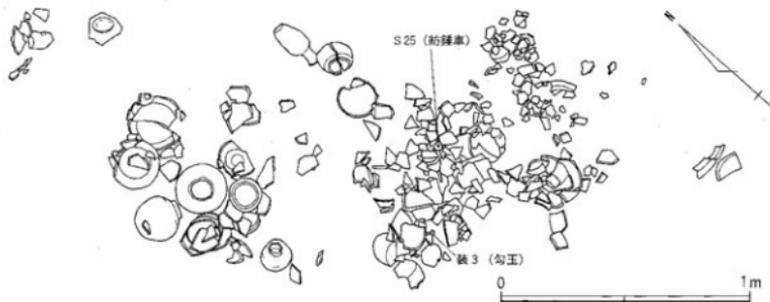
調査区の東端に位置し、U-38グリットで確認された。近世の礫詰土坑16・19・21・22に周囲をカットされるため土器集中の範囲は確実には把握できないが、およそ長径3m程の楕円形を呈している。最も



第14図 第3面遺構全体図



第15図 祭祀遺構と第1面土坑の位置関係



第16図 SC01 実測図

分布が密となる部分は、長径3m、短径1.5m程、長軸の方向は北西を示している。

本遺構は掘り方と推定される施設はもたないが、完掘の結果では浅い凹みが認められた。このなかからは須恵器環、土師器環・甕、土製人形・馬形・手づくね土器、不明土製品が多量に出土した。土器類は須恵器が少く、土師器環は大量に出土し、第20・21図に示したもので58点に達している。ほとんどが口縁部の破片であるが、甕も多く24点を数える。祭祀具としては、馬形が最も多く24点、ついで人形4点、ミニチュア土器4点が図示された。馬形は丸胴で鞍が表現されたものが一点、他の23点はすべて都城型の土馬といわれるものであった。

これらの遺物の大部分は破片の状態で出土している。しかし、土師器環では接合の結果、完形に復元できた点数は約3割に該当し、それは58点中19点であった。

調査においては、周辺の川合遺跡とか静岡市神明原・元宮川遺跡で出土しているような木製祭祀具が伴うか否かが注目されたが、本遺構からの発見はなかった。全体の傾向としては、木片等の植物質は遺存していたことから、祭祀具としては当初から伴わないものと判断した。

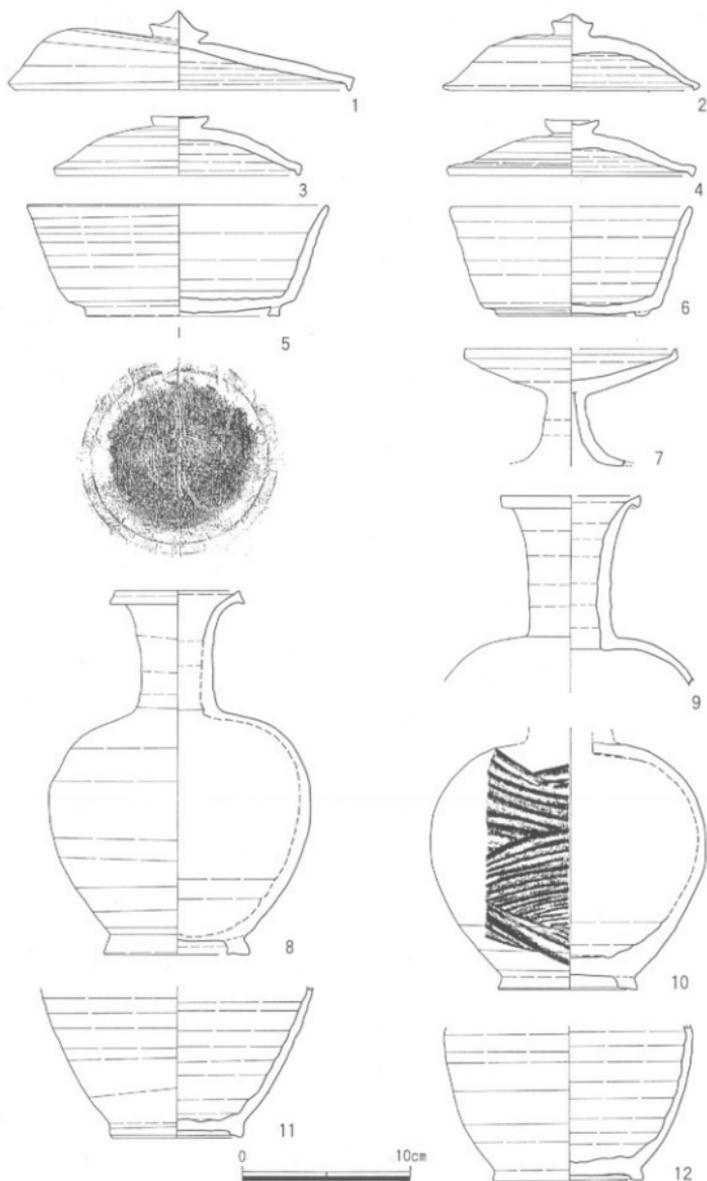
この遺構は祭祀遺物を伴うことから、祭祀遺構であることは確実である。また大部分が小破片で、何の規則性もなく散乱した状態で出土したことから、自然の凹みを祭祀執行後の用具廃棄場所として利用したものでないかと推定した。さらにこの遺構の断面観察では、木片・炭化物とかの混入物を伴うものの、それらも含めた遺物群は底まで約5cmの厚さを計測したが、連続した状態で出土した。従ってこれらは、短期間の内に施行された祭祀の痕跡を残す遺構と推定された。また図中の括弧で示した範囲の下部では、遺物の分布範囲が狭く限定されることから、この範囲を参考として図の右下に引き出して図示した。

遺構の所属時期は、有高台須恵器環の底部が平底となること、古墳時代から継続する土師器環の最終段階に当たることから、8世紀前半と判断される。

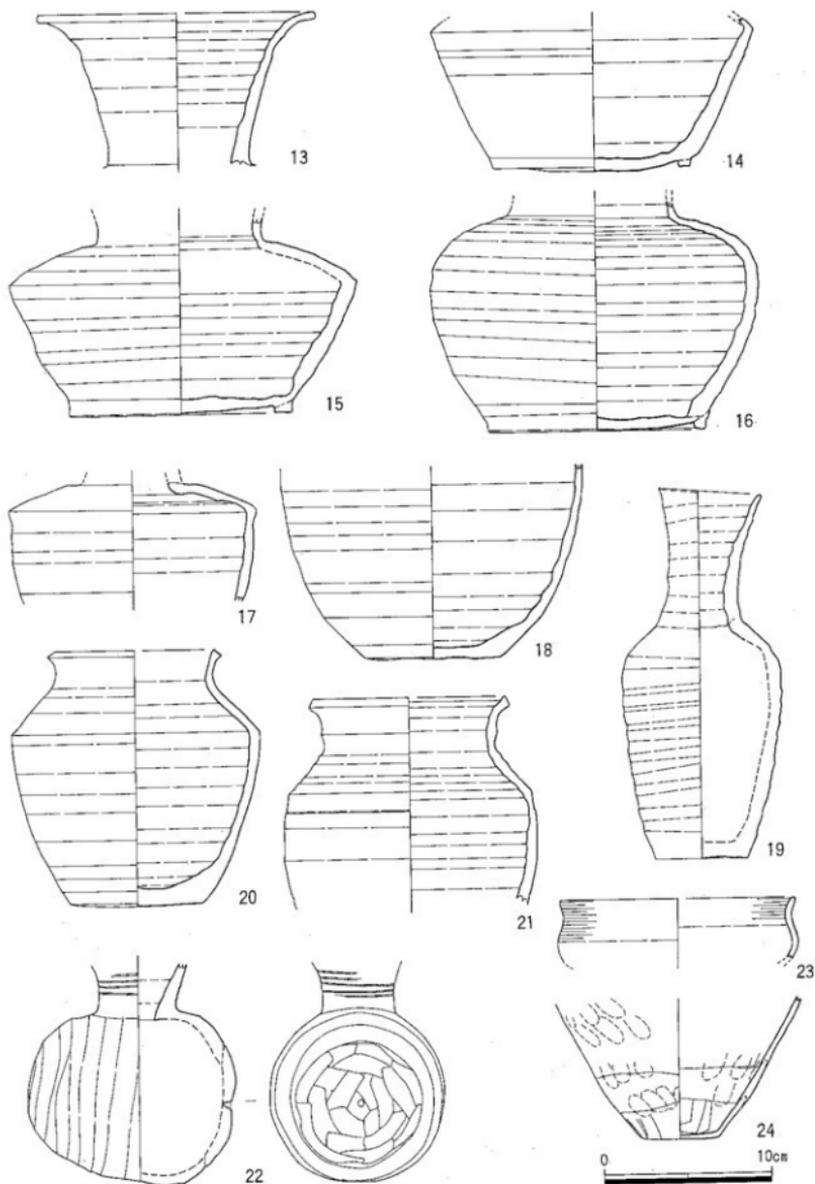
本遺構の特徴として、土製の祭祀遺物を伴うこと、土器類は供膳形態と貯蔵形態が認められるが土師器が圧倒的に多数を占めること、これらはいずれも小破片で出土していることから、使用後に一括投棄された状態が類推されること、時期としては極めて限定された一時期と思われることが指摘される。

SC03 (第24図、図版9)

U-36グリット、調査区の北西、SC01の北西5m、SC04の西南4mに位置し、ここは自然流路SR01の南岸にあたる。土器類の分布は疎の印象を受けるが、おおよその広がりをくくると、長さ4m、幅2



第17図 遺物実測図2 (SC01 土器1)



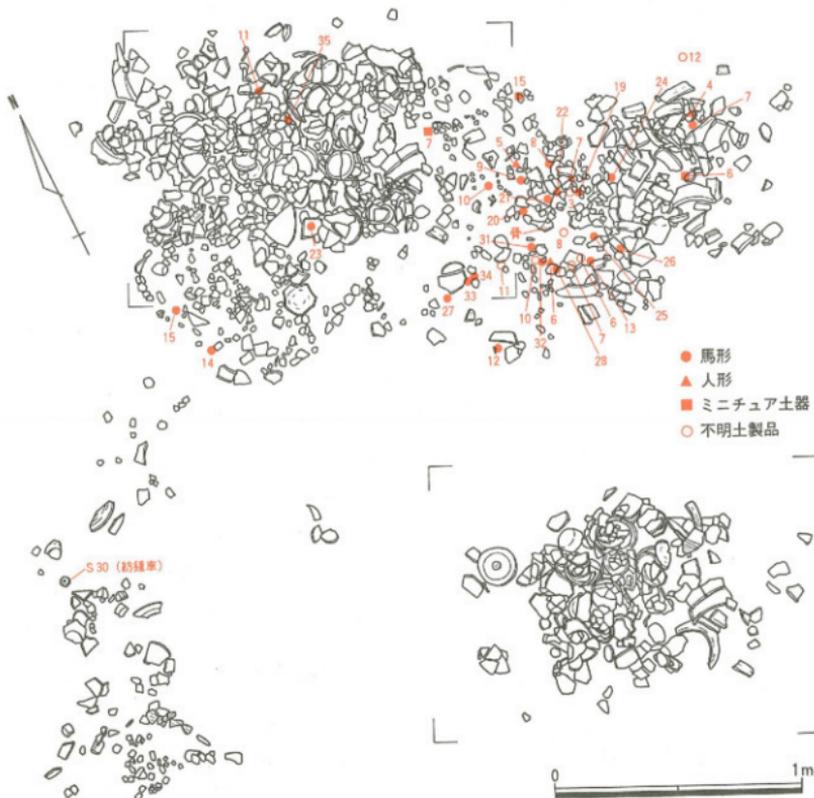
第18圖 遺物実測圖3 (SC01 土器2)

mの楕円形の範囲で、長軸方向は北東を指し、先のSC01・02とは直交する関係にある。またこの遺構に伴う掘り方などは確認されず、当初から平坦な環境で行なわれた祭祀行為の痕跡と推定した。

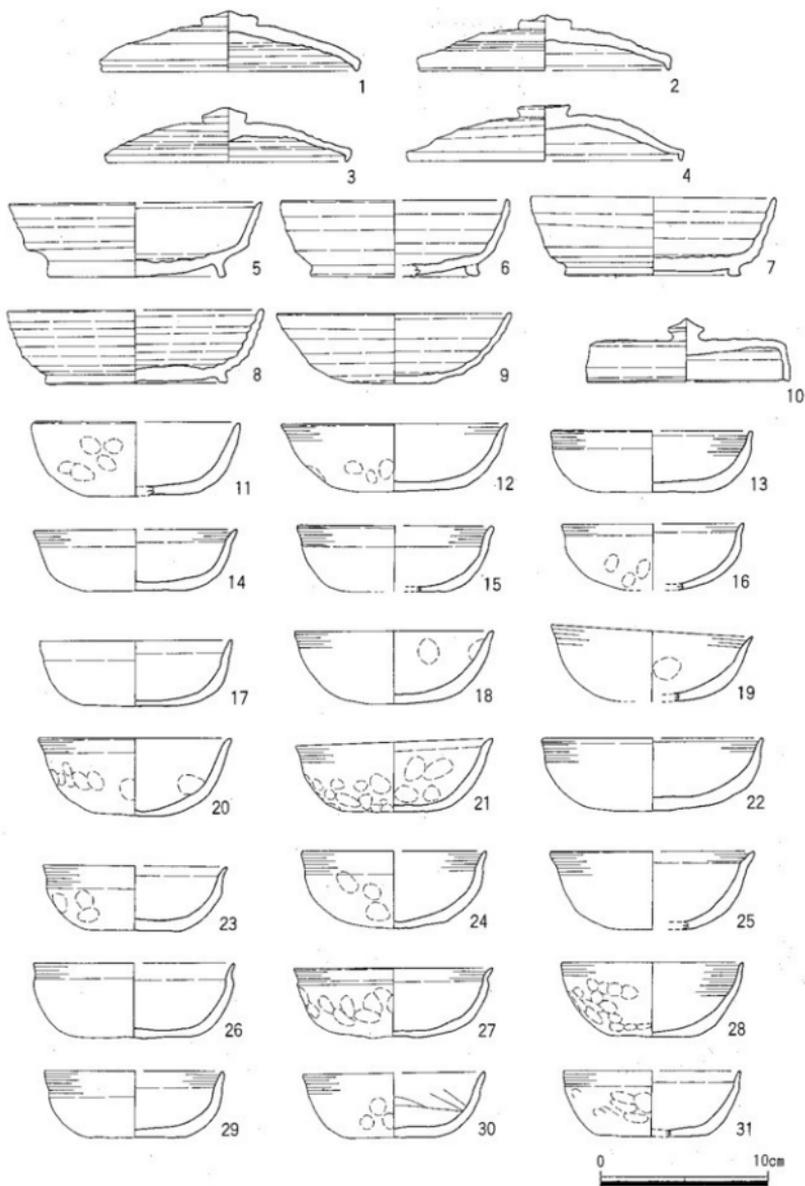
出土土器は第25・26図に掲げた。須恵器と土師器がみられるが、須恵器が圧倒的に多く出土し、かつ器種別には貯蔵形態の壺・甕類が主体を占めている。これはSC01の在り方とも類似している。土器は小破片が大部分であり、これらのなかでも接合関係のある事例は、SC01・02と比較して相対的に少なかった。

本遺構からは大きく二つの時期の土器が出土している。第25-1～3と第26図-17の五点は、8世紀前半代を示す

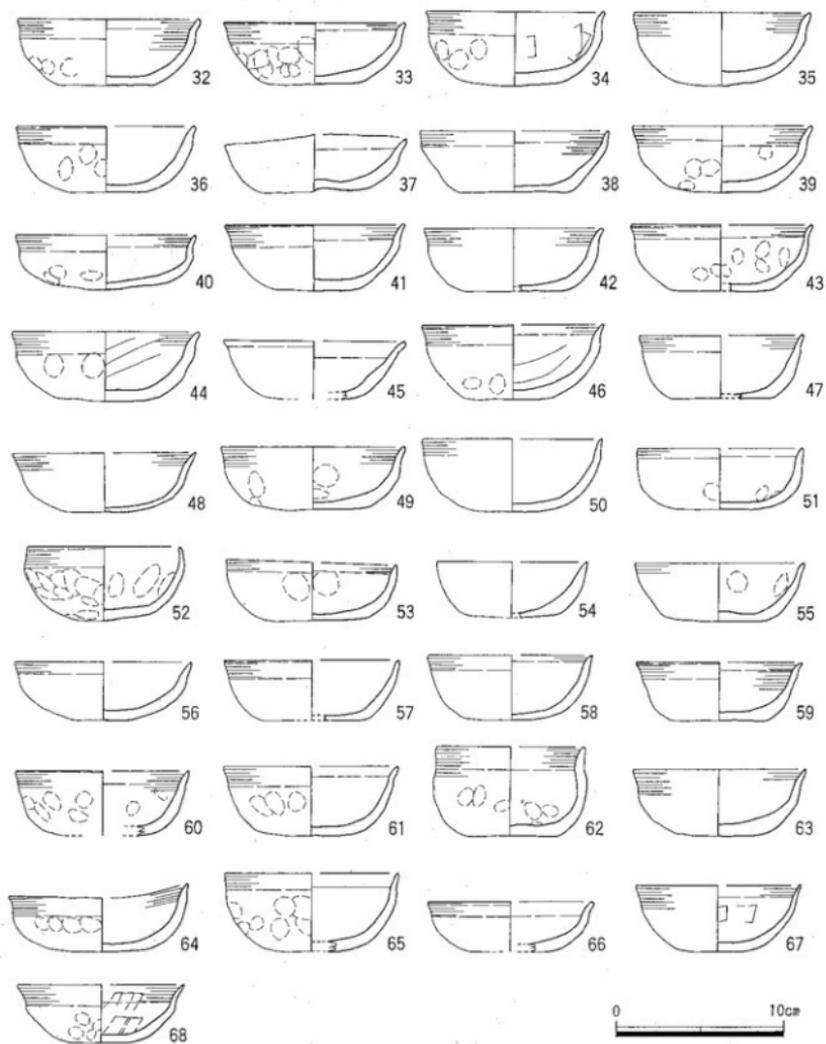
のに対し、第25図-4の軟質須恵器杯と第26図-16の甲斐型杯が、およそ9世紀後半に位置付けられる。このように両者の時期は連続性がなく、かつ他の貯蔵形態の壺と甕も須恵器であることから、後者の二点は混入した可能性が高い。従って本遺構の年代は、SC01を除いた他の祭祀遺構と同じく、8世紀前半代と考えるのが妥当であろう。



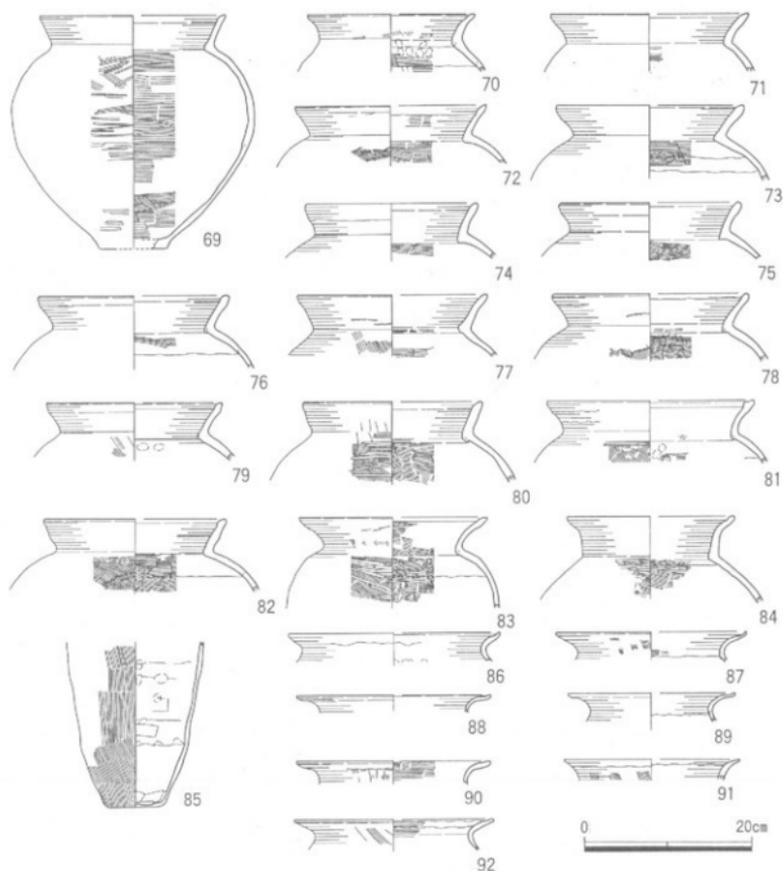
第19図 SC02 実測図



第20図 遺物実測図4 (SC02 土器1)



第21图 遗物実測図5 (SC02 土器2)

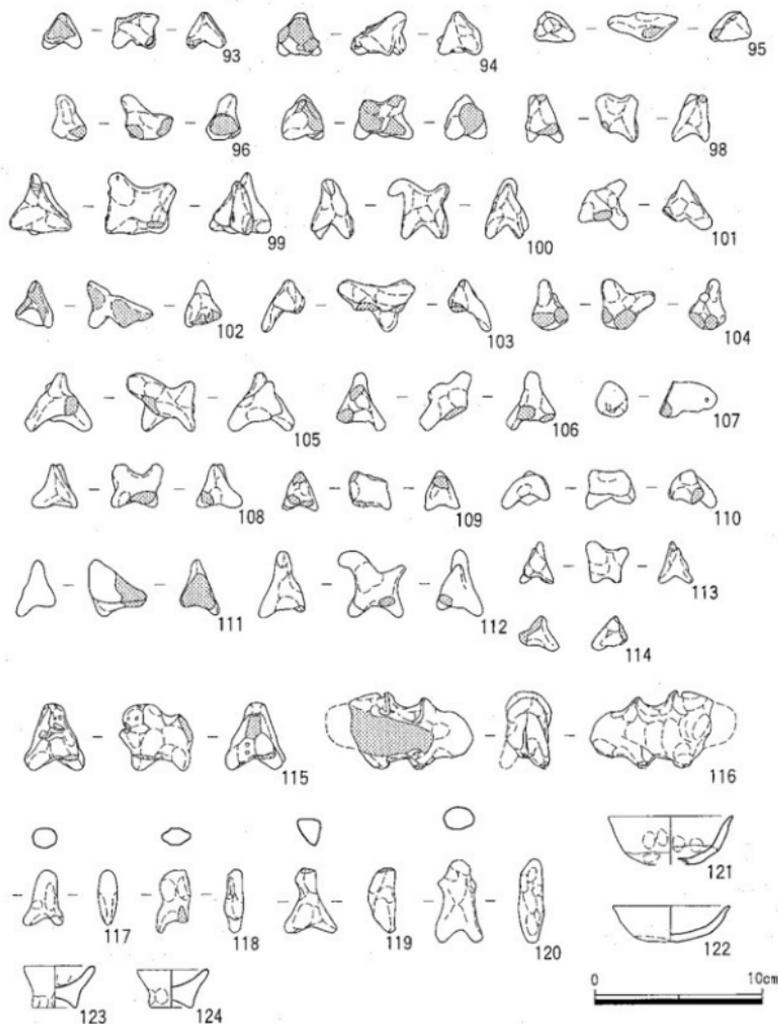


第22図 遺物実測図6 (SC02 土器3)

SC04 (第27図、図版10)

調査区中央部のやや北側、U-36・37、V-37グリットから発見され、自然流路SR01の南岸に位置している。本遺構は、自然流路の南岸に位置することから、約4m離れているSC03との立地の類似性が指摘される。これに伴う掘り方等の痕跡はなく、SC02を除く他の祭祀遺構と同様に、平坦な環境で営まれたものと類推される。土器類の分布は、密でなくSC03と同様な印象を受けるが、広範囲に土器分布が認められる。おおよその広がり第27図から計測すると、長さ6m、幅2mの細長い楕円形の範囲で、長軸方向は北東を指している。

このように本遺構の土器群の分布は、他と比較しても大きな広がりをもつことが指摘される。しかし、これらの破片は相対的に小さく、出土した土器量からみれば、完形品に近いものや接合可能な点数は少ない。

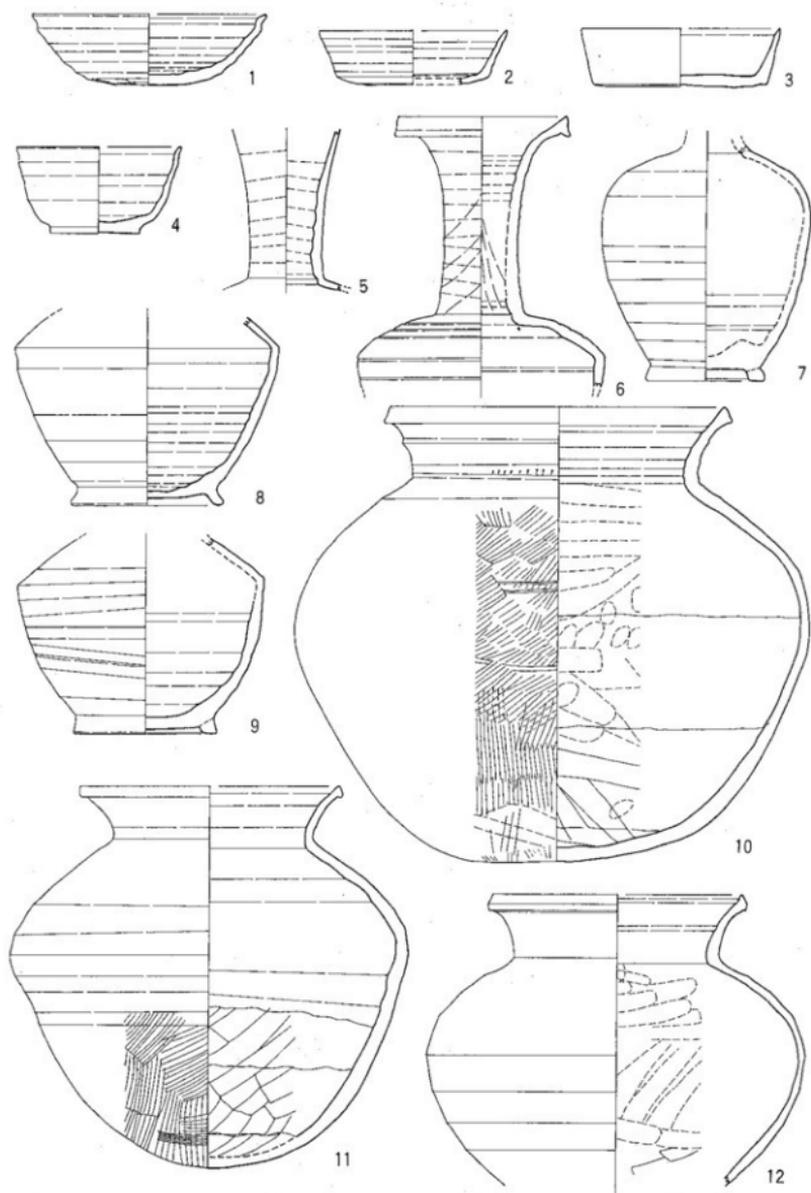


第23図 遺物実測図7 (SC02 土製品)

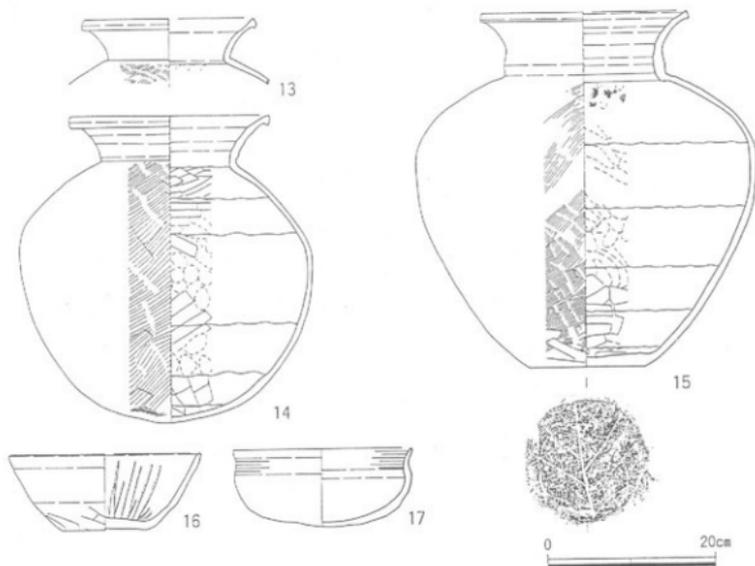
本遺構に伴う土器類は、須恵器が圧倒的多数を占めるが、その器種をみると供膳形態の坏・坏蓋が圧倒的多数を占めている。出土土器は第28～30図に掲げたが、供膳形態の須恵器坏蓋と坏が大半を占める。その内訳は、坏蓋23点、坏23点（高台12点、無高台11点）それ以外には、貯蔵形態の甕3点、長頸壺1点、また壺G類といわれる長頸壺が1点出土する。ここでも土師器はわずかに少量が伴うのみであり、図示したのは56点中3点のみであった。



第24图 SC03实测图



第26圖 遺物実測図8 (SC03 土器1)



第26図 遺物実測図9 (SC03 土器2)

土師器は、第30図に掲げた駿東型甕の口縁部破片が出土している。

本遺構の時期は、須恵器環をみると、口径が大きく器高が低い安定感のある形態を呈し、高台環の底も平底に移行していることから、8世紀2四半期と推定される。しかし、一点のみ第29図-47は壺G類であり、この出現は8世紀後半から末といわれる。これは一点のみ時期の異なる事例であり、先のSC04のように、平坦地で執行された祭祀跡に、土器が混入したものと推定される。

またここからは、第30図-57にかかげた人形土製品が一点出土するが、この出土状態からみて本遺構の性格等を検討する場合の参考程度の資料と位置付けられる。

SC05 (第15図)

本遺構はSC01の東側、T-36グリットに位置し、近世の雑詰土坑・33・34・51に囲まれた直径約6m程の園内に土器が分布する。ここも当初から平坦な場所と推定され、土器も接合不能な小破片が大部分で、その分布の状態はかなり粗く、全体に散在するという程度の状況であった。

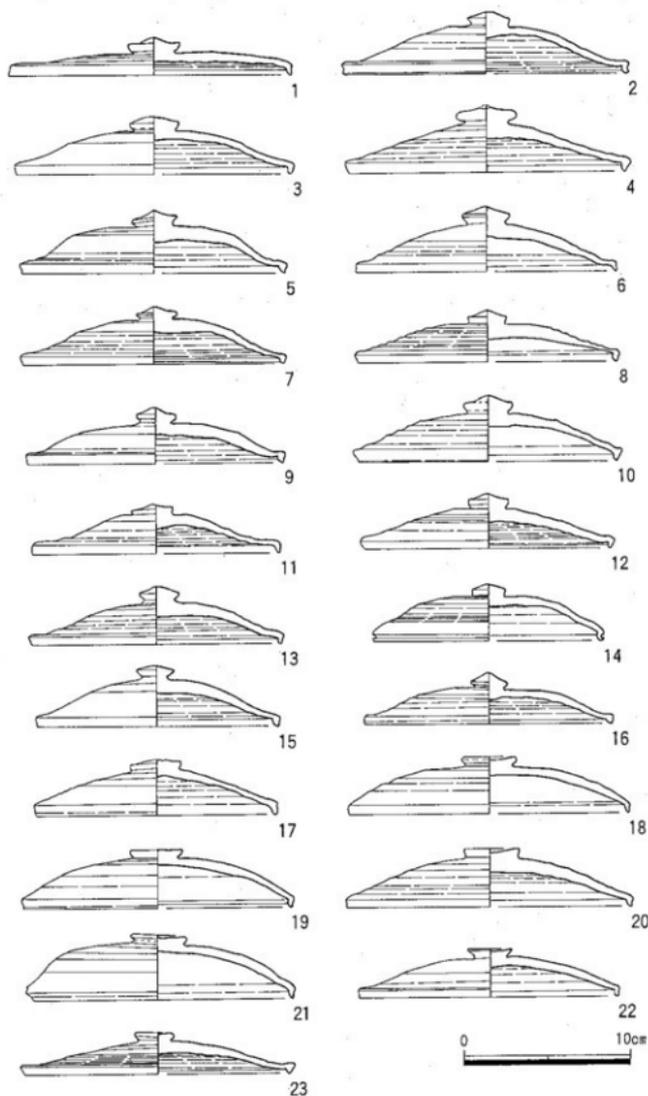
出土した土器は第51・52図に示したが、須恵器と土師器はほぼ同量が出土しており、一方に偏る傾向はない。出土した土器の種類と器種は、須恵器環蓋7点、有高台環6点、無高台環1点、はそう1点、土師器環11点、甕5点であった。

出土した土師器のなかには、地元の系譜の土師器(第32図-16~19・24~26)と遠江地域を中心に分布する一群(第32図-20~26、第33図-27~31)が含まれており、在地産の土師器環のみで構成されるSC02の様相とは異なることが指摘される。土師器の器種ごとの特徴として、供膳形態の環類では、在来系譜の環と外来の遠江地域の環が同数なのに対し、貯蔵形態ではすべてが遠江系である。祭祀の執行者及び祭祀の性格を考える上での参考となる事例であろう。

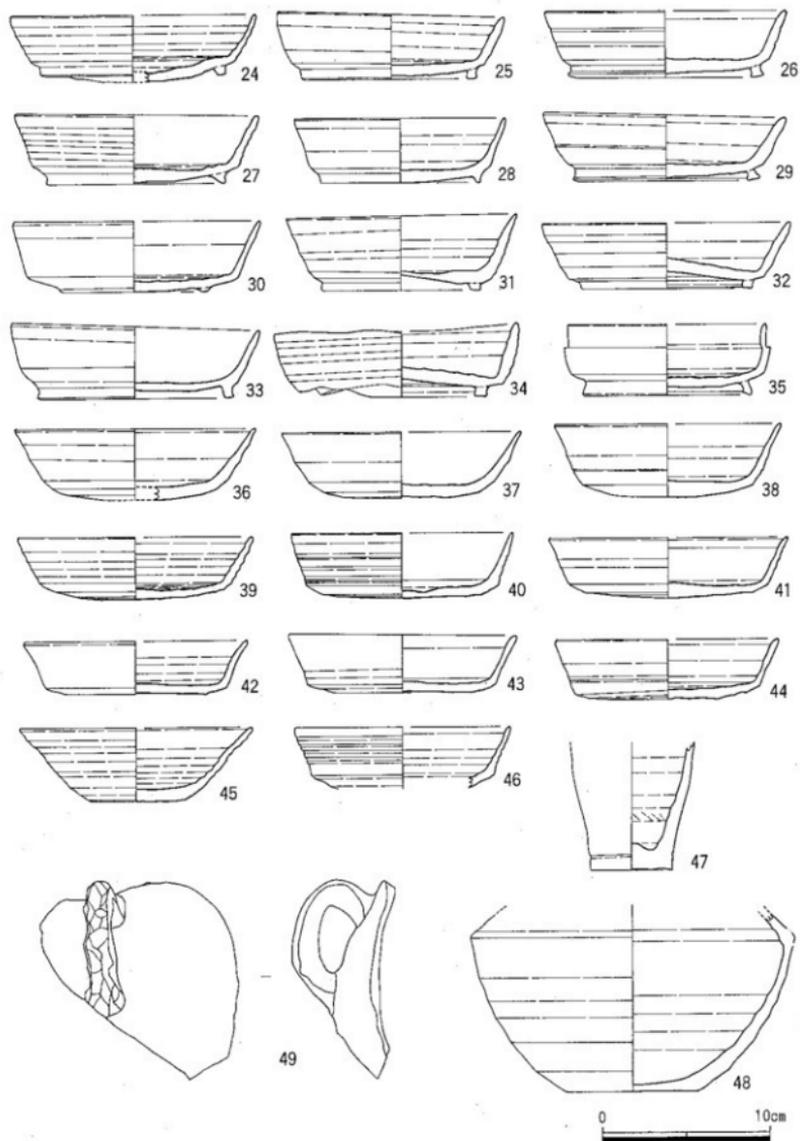
土器は8世紀前半を主体とする時期であり、これが遺構の年代と考えられる。



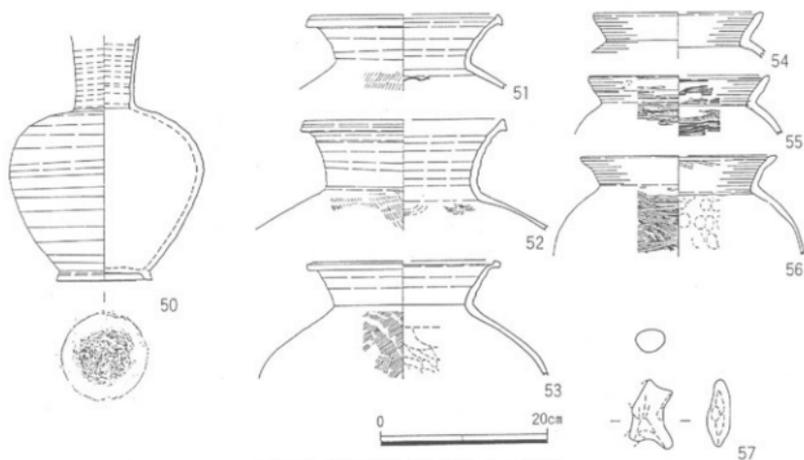
第27图 SC04 实测图



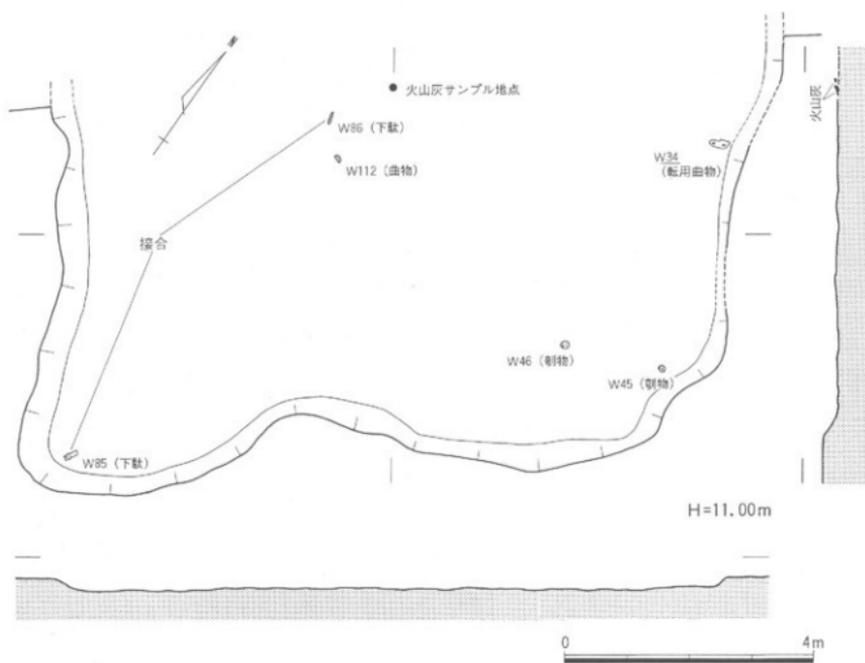
第28图 遗物实测图10 (SC04·土器1)



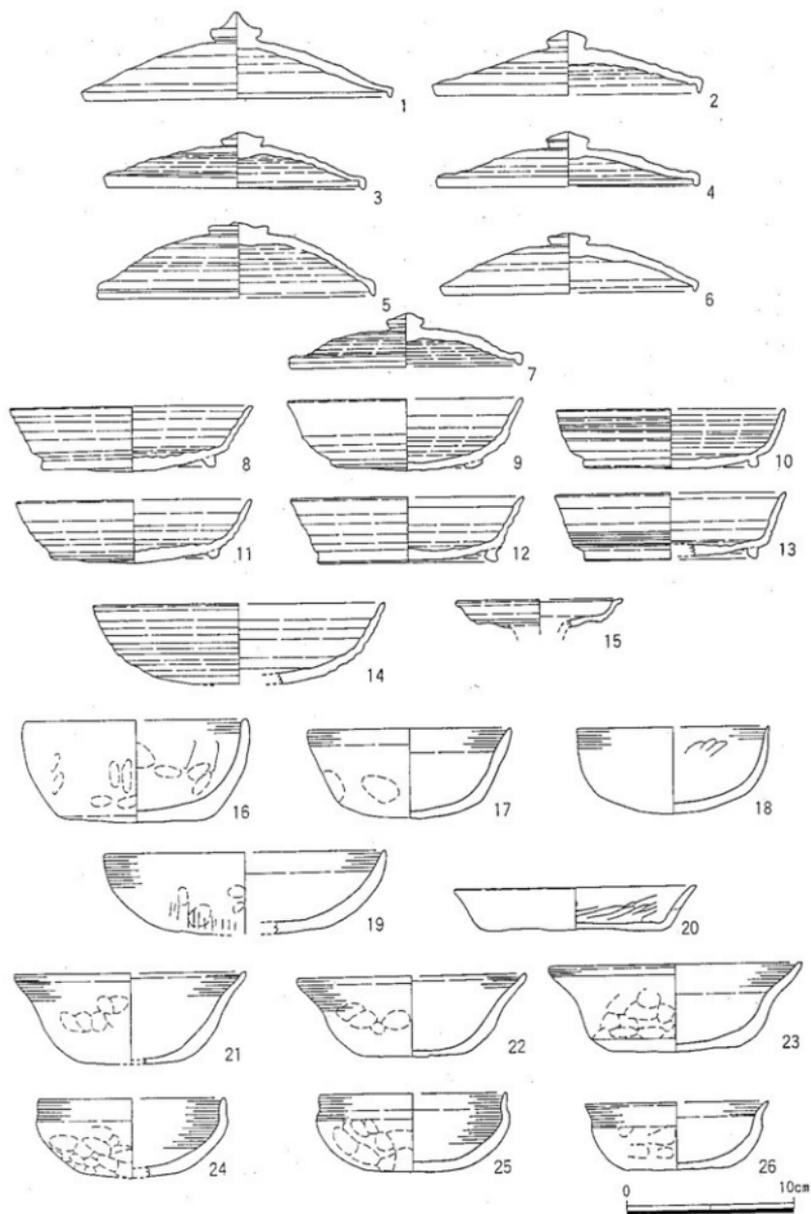
第29圖 遺物実測圖11 (SC04 土器2)



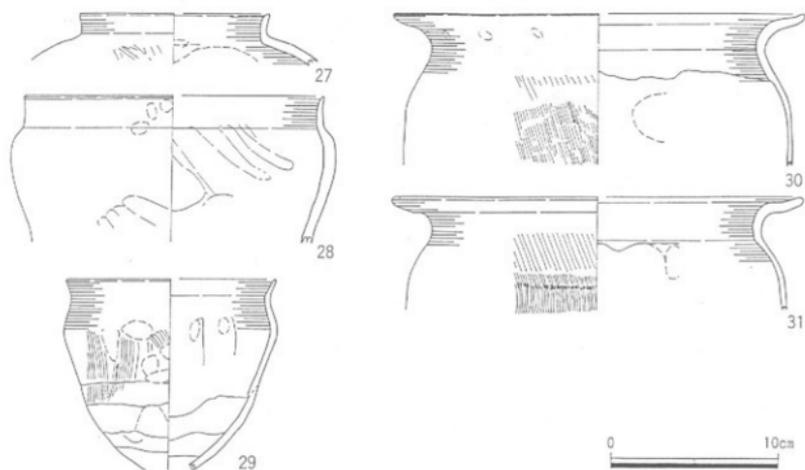
第30図 遺物実測図12 (SC04 土器3)



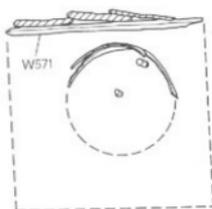
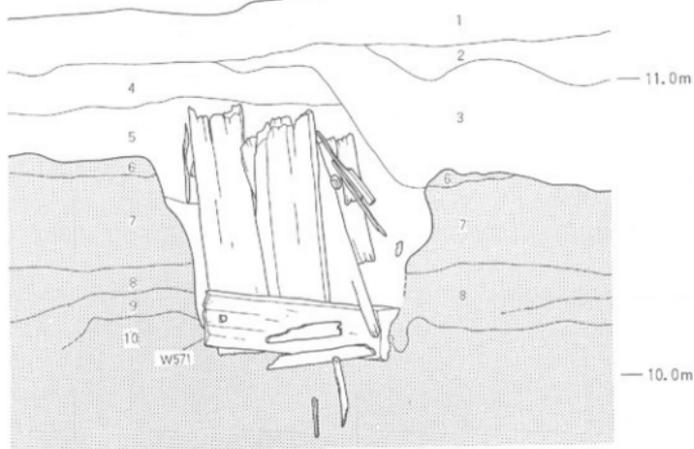
第31図 SX01 実測図



第32圖 遺物実測圖13 (SC05土器1)



第33図 遺物実測図14 (SC05 土器2)



第34図 SE02実測図

- 1 暗灰色シルト (1層)
- 2 灰色シルト (土坑埋土)
- 3 砂礫 (土坑埋土)
- 4 青灰色粗砂
- 5 暗灰褐色シルト (2層)
- 6 暗褐色ブロック含む青灰色シルト (4a層)
- 7 青灰色シルト (4b層)
- 8 灰褐色シルト (砂をまじえる)
- 9 灰褐色シルト
- 10 礫 (5層)

(2) 性格不明土坑

SX01 (第31図・図版10)

調査区の北側、自然流路の北岸に近接して検出されたもので、V・W-36・37グリットに位置している。本遺構は、調査区外に延長しているため規模は、東西辺が約11mであることを確認したにすぎない。残存する規模と形状は、検出面からの深さ約0.2m、平面形態は南辺が「く」の字に屈曲し、東西辺ともに不規則に曲線を描くが、全体的には方形を呈する竪穴状の遺構である。

この遺構の壁は緩やかに立ち上がり、床面は多少の凹凸はあったが、全体的には平面的な形状の底面をもっている。

出土遺物には木製品があり、第31図に示したように壁寄りと中央部から下駄、曲物、刳物が出土しているが、その状態からみて本来この遺構に伴ったものか、流入したものは判然としない。中央部と南西コーナー部から出土した下駄が接合したことから観て、人為的でなく自然の営為で運ばれた可能性が高いと推定される。

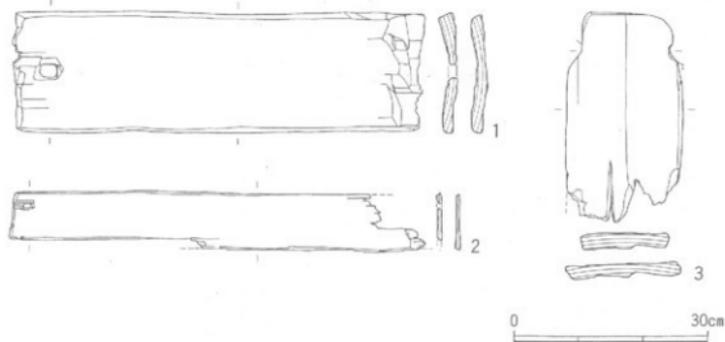
(3) 井戸

SE02 (第34図・図版11)

W-36グリットで検出された。この地点は拡張区と調査区の間位置し、調査終了後の埋め戻しに際し、壁面の一部を傷付け断面で確認された。井戸枠に使われた木製品と水溜めの曲物側板が確認されたのみで時期を示す遺物はないが、土層観察では調査第三面と判断される。井戸枠は確認長75cm～85cm、幅約20cmの板材を三枚縦に並べ、その最下部に横板を内側にあてて止めてあったが、釘や木組等による板材間の接合は確認できなかった。底面は5層の上部を少し掘り下げた砂礫層で、ここには水溜めの施設と考えられる曲物側板の一部が確認され、この固定用とみられる細い枝杭が二本みられる。曲物は円形で直径は35cm前後と推定される。

また底面から50cm～70cm付近でこの縦板の裏側にも板材がみられ、断面でも埋土が変化することとあわせ、外側に二段目の横枠を構成していたものと考えられる。なお、この二段目の横枠の材の中に三枚の縦板の南と北の外側に木口を当てる形の板材片が確認されたことから、井戸枠の大きさは断面で確認された0.6m～0.7mがほぼその幅と考えられる。

井戸枠の構造材に一部加工が見られるものが含まれていた。第35図-1(W571)は横板で、63.8cm×18.9cm×2.5cmを測る。端部近くで2.6cm×2cmのやや丸みを帯びた長方形の穿孔がみられる。また右端には表裏に切断痕が明瞭で、上側面に圧痕がみられる。この穿孔は井戸枠の接合に使われた形跡はなく、もとは長い材であったと見られることから建築材の転用材と考えられる。第35図-2(W585)は、64.3cm×8.8cm×0.9cmを測るやや薄手の板材だが、左端はきれいに切り落とされ、左上に1cm×0.7cmの長方形の穿孔が見られる。この二者は大きさや穿孔等から建築材の転用と考えられる。第35図-3(W575)は長を大きく欠損しているが33.7cm×18.3cm×2.6cmを測る。両側縁から切り欠きを入れて頭部を作り出し、切り欠き部には緊縛痕がわずかに観察される。形態的には輪カンジキ型田下駄の足板に近い。

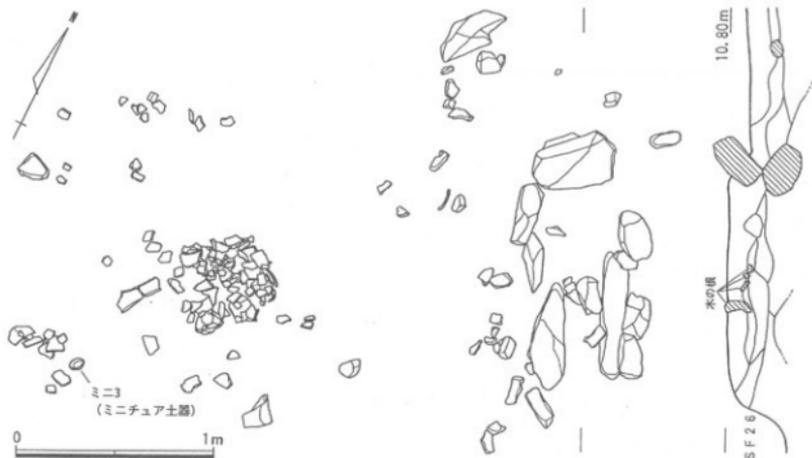


第35図 遺物実測図15 (SE 02 木製品)

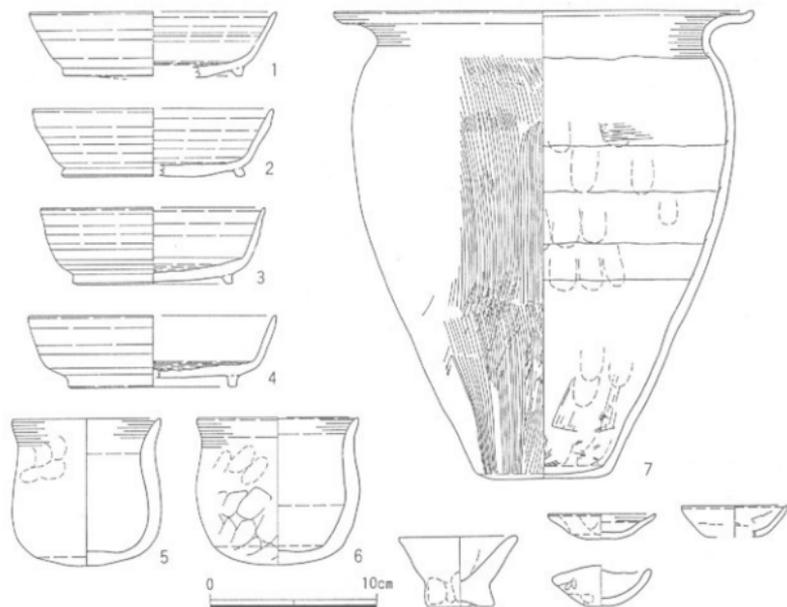
(4) 石組み遺構 (第36図、図版9)

調査区南東、W-39グリットから発見された。これは8世紀前半、人形・馬形土製品、手づくね土器などを伴う祭祀遺構であるSC02の南に近接する位置にあたる。

遺構は図示したように、長さ0.6mから0.3mの角礫を細長い「コ」の字に配置したもので、残存状態から計測すると、長さ1.5m、内幅0.3mから0.4mとなる。長軸はほぼ南北を示している。南側で約0.3m程の掘り方が検出され、北側にもわずかに落ち込みが確認されることから、この遺構の掘り方の規模は、長さ1.5mとなる。このことから石材は掘り方と同じ範囲のなかで配置されたことが確認される。幅については、調査では確認されなかった。石材は横穴式石室のように何段かに積まれた形跡が一ヶ所で認められ、正面の南面する大きめの奥壁に該当するものは、二段で広口積みされる。しかし、他の石材の配置からみると複数段に積まれた事例は認められなかった。これらの石材の散乱状況からすると、人為的な行為により動かされているのではないかと推定される。



第36図 石組み遺構実測図



第37図 遺物実測図16 (石組み遺構、土器、土製品)

この石組み遺構からは、第54図に示した須恵器坏、土師器甕・鉢・手づくね土器が出土している。遺構の年代は、水平口縁の「遼江型甕」の出現期とされるであろうが、とりあえずSC02との配置関係を考慮すれば、8世紀前半ということになるうか。

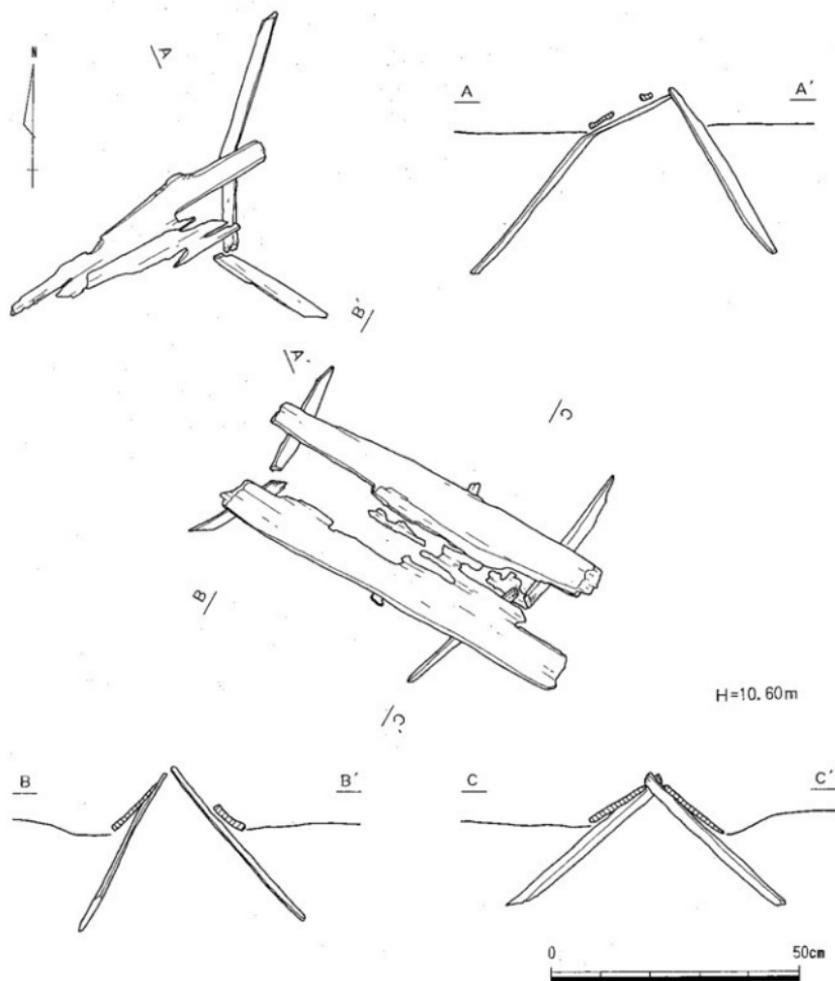
これは、なんらかの祭祀に関係する遺構と推定され、ここから約2m西の細かな礫が集中する地点からは、ミニチュア土器が出土している。

(5) 木組み遺構 (第38図、図版16)

第38図でみるように、拡張区X-36グリットから検出された。棒状の骨組を合掌型に二ヶ所で組み、その間に直交する板材を渡した構造と推定される。二基設置されていたようであるが、北側の一基は合掌型の棒状骨組みが一ヶ所残存し、直交すると思われる板材も一枚が確認された。これらは、他に関連する遺構等はないようであり、単独で設置された可能性がある。また二基としたが本来は同一の施設の可能性も残されている。

残りのよい南側のものから規模を計測すると、合掌の骨組みは基盤に突き刺した状態で、B-B'の断面で角度70度に関き、棒の長さ40cm、C-C'では100度に関き棒の長さは40cmであった。合掌型の頂点部分に使用されている板は、75cmと80cmで、幅は最も大きいところで15cmであった。

北側のものについては、南と類似した構造と推定されるが、合掌型の骨組みの角度は途中で曲がることから明確でないが、南のものとは大差ないと推定される。しかし、骨組みの棒の長さは断面A-A'でみると、左が60cm、右が40cmを計測し、左右の長さが異なる。板は遺存状態が悪く一枚が確認されているにすぎない。



第38図 木組み遺構実測図

合掌部の交点は接合したり、緊縛されたような形跡はなく、板は図示したレベル以下からは出土しなかった。このことから、本遺構は平面で図示した範囲が露出して機能していたと推定される。年代については、検出面からの類推で律令期に属するものとしておく。

(6) 自然流路

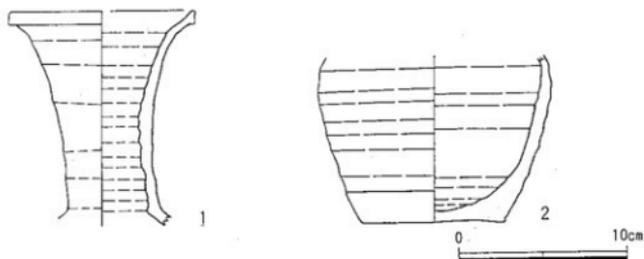
SR01 (第14図、図版10)

U-35グリットから、W-38グリットにかけて、調査区の北寄り、北東方向に36m程が確認された。幅

は東側が0.7mと狭く、西では広いところで3.7mを計測する。流路としては川岸が明確でない部分もあり、一定した幅をもたず、検出面からの深さは0.3m~0.4mを測る。

地形から見ると、この周辺は北東から平野部に流入する長尾川が形成した扇状地であり、まさにこの付近は扇の付根部分に該当している。このため、遺物が確認される弥生時代以降はいうに及ばず、それ以前からも盛んに土砂供給がされる。本調査区においても歴代の河川堆積物が確認されており、このSR01は、古墳時代から続く微高地及びその縁辺を南下するため、河川の埋没が進んだ奈良時代の後半ではきわめて弱い流れの状態、澁みのような流路が推定される。

出土遺物は植物遺体などが主で、土器類は第39図に示した須恵器壺と長頸瓶の破片が出土したのみである。これらの土器の年代から、祭祀遺構と同時存在と判断し、奈良時代の流路であろうと推定した。



第39図 遺物実測図17 (SR01 土器)

2 4面の遺構

第40図に4面の遺構全体図を掲げた。この面は祭祀遺構を主体とする3面から約10cm~20cm下げた面から多くの遺構が検出された。この面を調査第4面とし、上面とは区別した。この面は祭祀関連の遺構は一ヶ所と少なく、多くの柱穴や、護岸の杭にみられるように人為的な痕跡を強く残す遺構、さらに拡張区では掘立柱建物確認されるなど、明らかに上面とは異なる日常生活域を顕すような施設・環境が想定される遺構群を検出した。

4面で発見された遺構は、祭祀遺構一ヶ所、多量の杭が打たれた自然流路一条、掘立柱建物一棟、井戸一基、土坑、多数のピットであった。以下にそれらの概略をまとめてみる。

(1) 祭祀跡

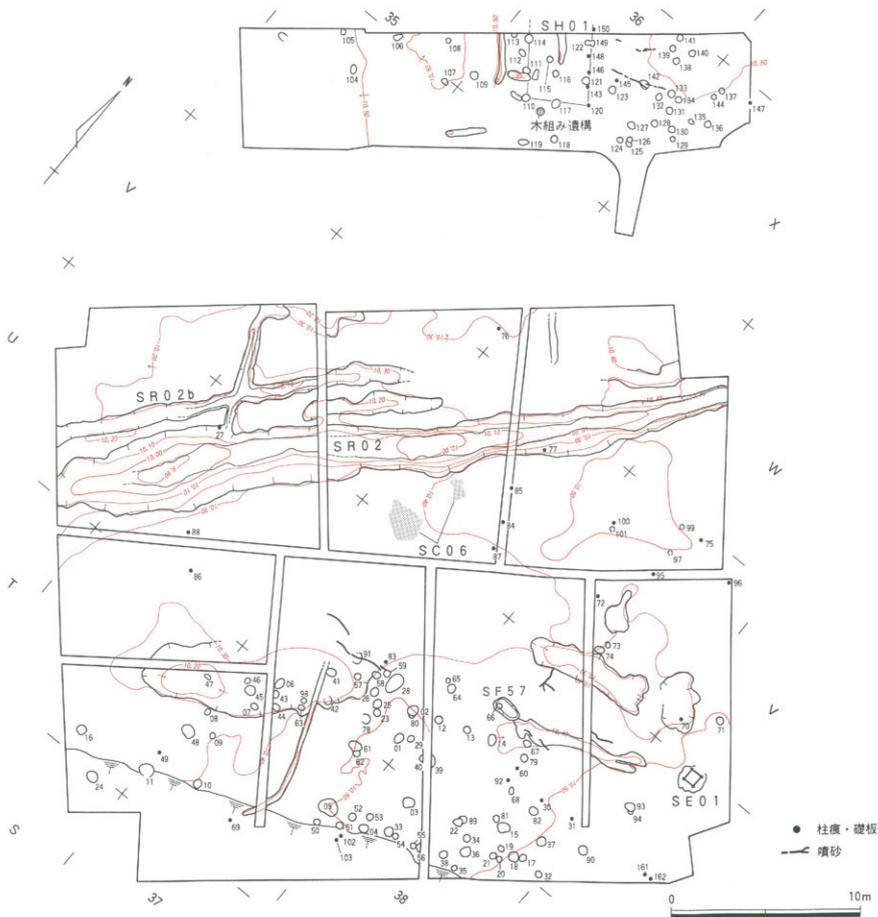
SC06 (第41図・図版14)

四面の遺構では唯一の土器集みがみられる祭祀遺構である。V-37グリットに所在し、自然流路SR02の南岸に位置している。第3面の祭祀遺構では、土器が一定の範囲に集中していたが、このSC06ではそれらとは異なり、三ヶ所に分散する傾向が観察された。土器の分布範囲はおおよそ、南北4.5m、東西2mの範囲であるが、このなかにさらに北側では1m1mの土器集中のブロック、これより約2m南に0.6m1.5mのブロック、さらにそれに近接して0.8m1.7mと、三ヶ所の土器集みが認められた。

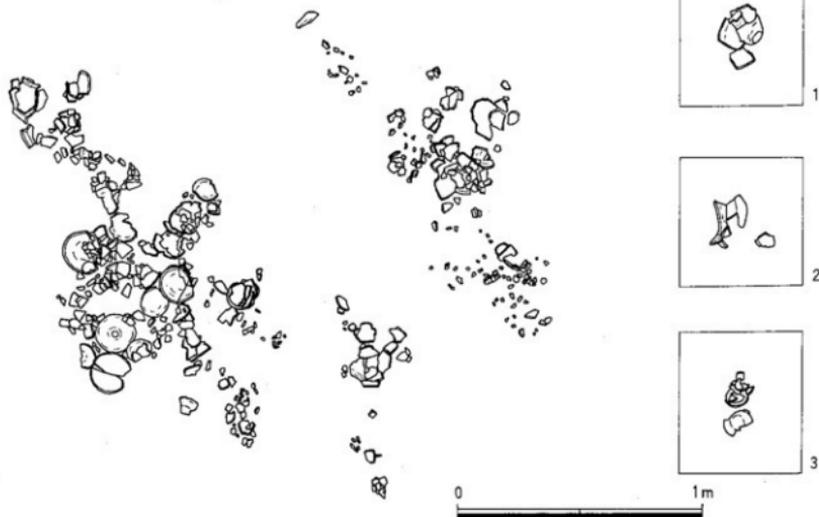
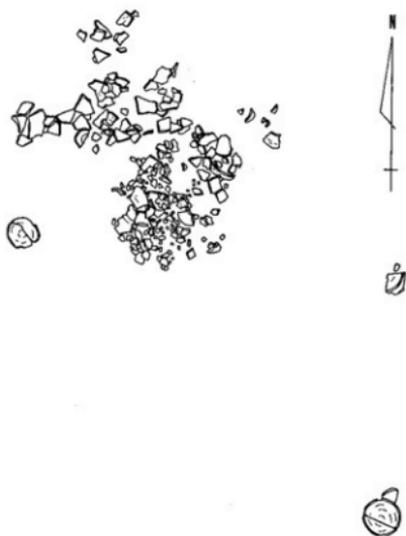
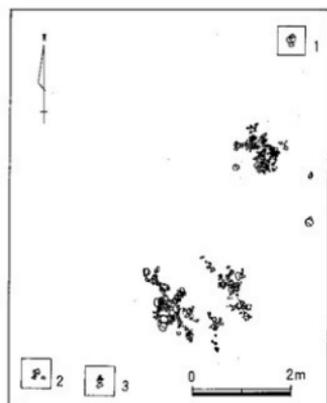
これらの土器は、大きめの破片から、細かく破砕されたような破片まで多様出土状態を示し、なかでもいちばん南に位置するまとまりのなかでは、接合可能な須恵器壺蓋がまとまって出土している。これ以外の二ヶ所では、土器破片も小さく、接合される例も少ない傾向が指摘される。

出土した土器は第42図に載せたが、須恵器と土師器が同量程度出土し、器種では供膳形態が多くを占めている。一点のみであるが、23に示した人形土製品の破片が出土している。

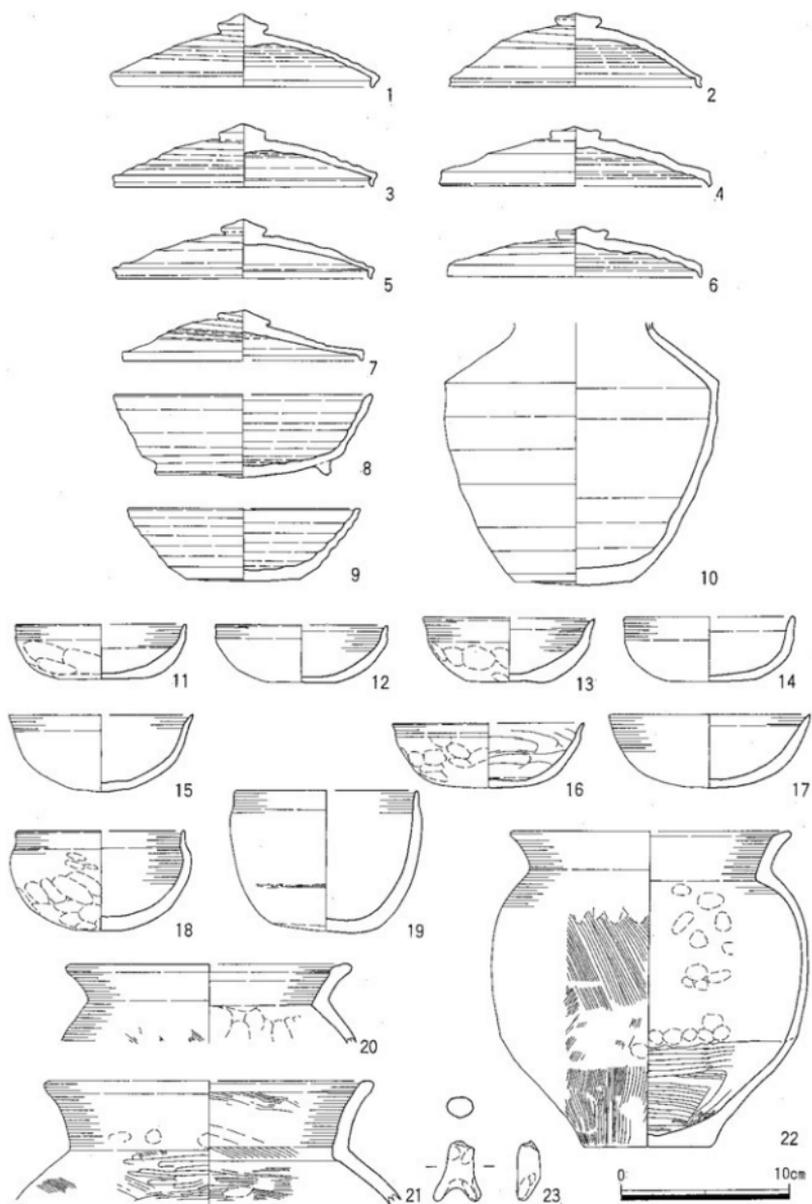
本遺構の年代は、須恵器壺底部が高台より突出すること、及び古墳時代からの系譜をひく土師器壺が



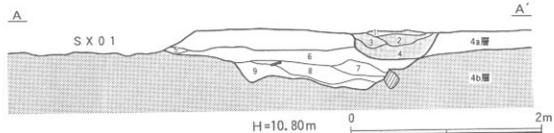
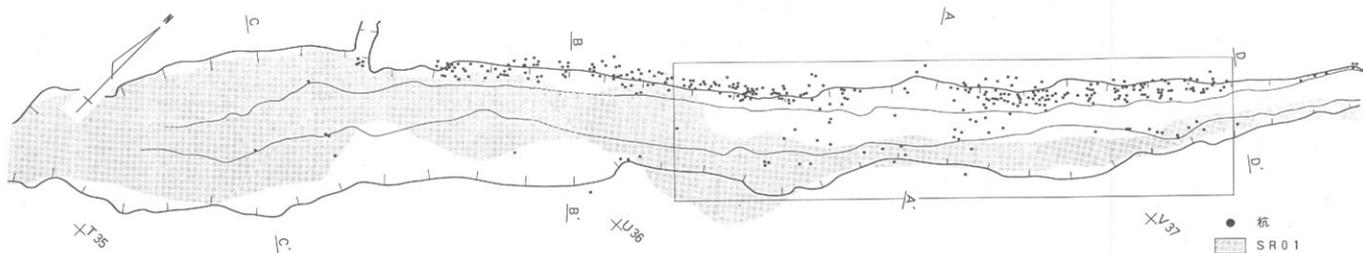
第40図 第4面遺構全体図



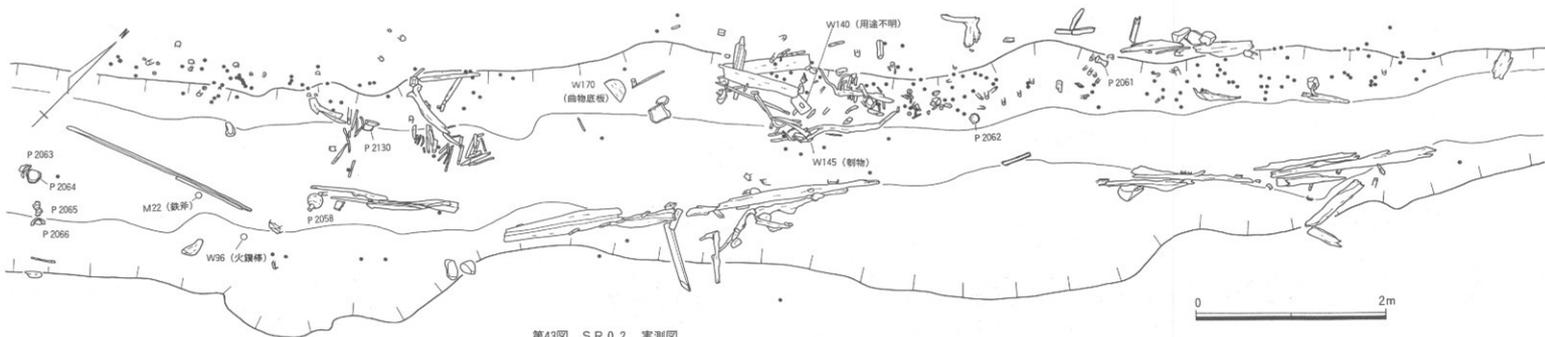
第41圖 SC06 実測圖



第42圖 遺物実測圖18 (SC06 土器)



- | | | | |
|--------|-----------------|--------|--------------------|
| SR01層土 | 1 暗褐色土 | SR02層土 | 5 レキ (1~5cm程度) |
| | 2 暗灰褐色土 (粗砂まじる) | | 6 暗灰色土 |
| | 3 暗灰褐色土 | | 7 暗褐色土 |
| | 4 暗灰色土 (植物質多い) | | 8 暗褐色土 (植物質多い) |
| | | | 9 青灰色砂質土 (8の土を交える) |



第43図 SR02 実測図

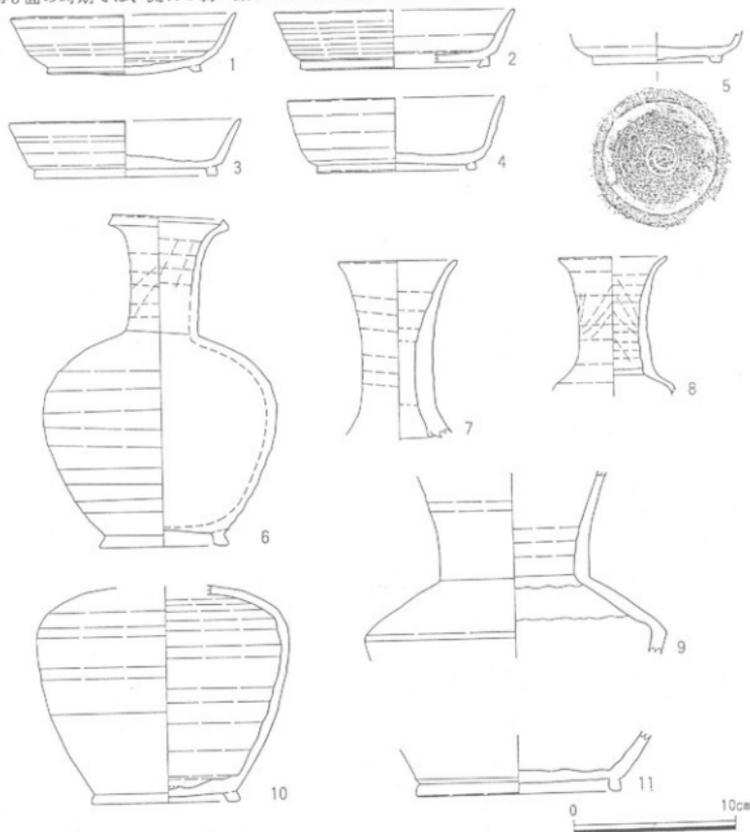
伴うこと等から、8世紀第1四半期頃と判断され、第3面のSC02と並行する時期と考えられる。

本遺構を構成する三ヶ所の土器集中は、基本的には個々の遺構という可能性もある。しかし、一定の祭祀行為の実施された範囲を、一つの遺構のまとまりとして想定すると、他の祭祀遺構の土器集中範囲が示しているように、三ヶ所個々の狭い範囲が一基づつの遺構でなく、三ヶ所を括ったまとまりで一つの遺構と位置付けるのが妥当ではないかと考えられる。

(2) 自然流路

SR02 (第43図、図版12・13)

北側の岸に多量の杭が打ち込まれ、今回報告する木製品の大半が出土した自然流路である。検出された位置は調査区の中央より北側で、方向は北東方向を指し、U-35グリットからW-38にかけて直線に延びている。一部には枝状の支流が認められるが、3面の自然流路SR01と同一のものである。SR01は、第3面の時期では、流れの弱い瀧のような埋没の進んだ状態であるのに対し、このSR02の時期には



第44図 遺物実測図19 (SR02 土器)

有る程度の強い流れが予想され、より人為的な関わりが類推される流路の状態と思われる。

長さは36m検出され、幅は広い部分で4.3m、狭いところでは1.3mを計測する。また西半部においては、図示したようにSR02bという支流が幅1m、長さ19mにわたって確認され、かつそれに直交に近い角度で接続する溝も認められた。検出面からの深さは、0.2mから0.5mを計る。なおここからは葦とかの植物遺体が多く検出され、その位置は図のスクリーントーンで示したように、東半は南岸、西半は流路にはまる形で見いだされた。

流路の形状は、上面のSR01より直線が主体となり、流路らしい流れの強さが推定される。明らかに溜りの状態の上面とは異なる流路の様子が類推される。

この流路には護岸用であろうか多量の杭が打ち込まれていた。その数は約350本を数え、大半は北岸の直交する溝のり位置から北寄りの北岸に大半が集中し、南岸には僅かに散在する傾向であった。第39図の部分拡大図にみるように、三本程度並ぶような打ち方は見られるが、杭列を形成するような規則的な打ち方は確認されず、必要に応じて何回にもわたって打たれたものであろうと推定される。

この流路からの出土遺物は、須恵器環・長径瓶・壺等の土器類（第44図）、曲物・刺物等の木製品、鉄斧とかの鉄製品と多様な種類が出土する。それらは出土状態からみて、廃棄されたり、木製品等は流れついたものと判断される。なお流路中には、土製品・木製品の祭祀遺物は発見できなかった。これらのことから本遺跡では、基本的に木製品を使用しない形態での祭祀が執行されたものと類推される。

(3) 掘立柱建物

SH01（第45図、図版16）

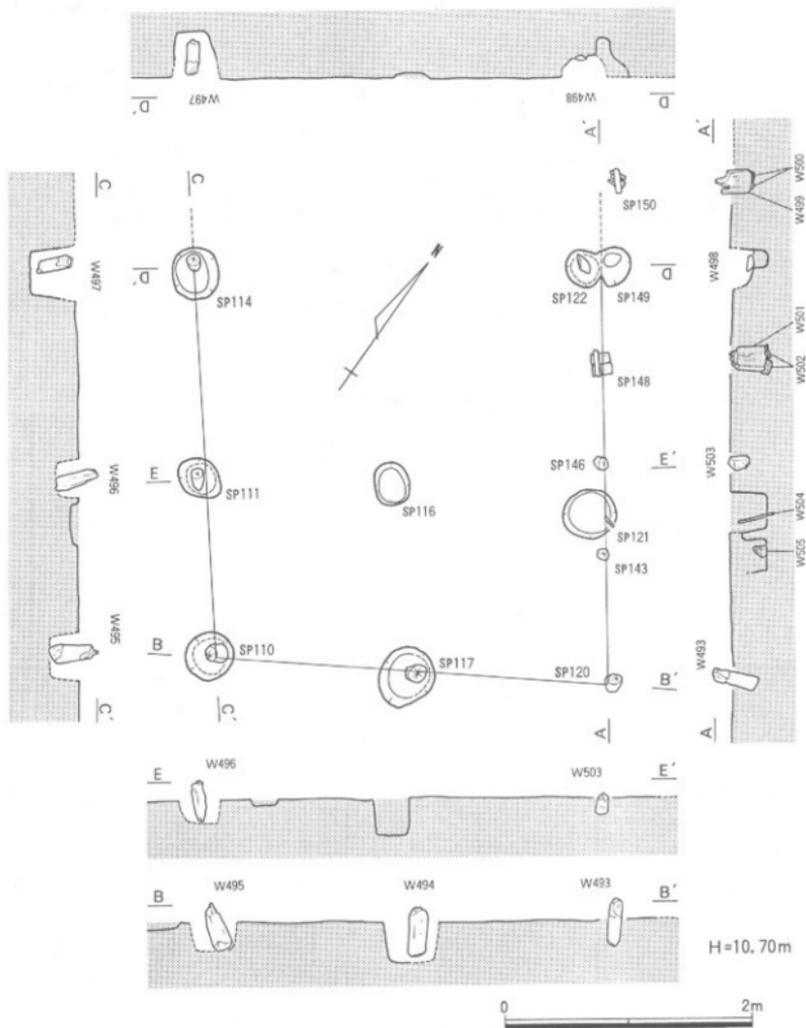
追加調査区の北端、X-36グリッドで確認された。一部は調査区外で未調査のため全体は確認されていないが、長軸は北西方向を向き、短辺は2間、長辺は調査区外にのびるため間数は不明であるが、二間以上の規模であろうと推定される。短辺の長さは、柱間が1.6m、二間の全長3.2m、柱根が残る長辺の西側で1.4mと1.75mの柱間を計測するが、しかし相対する東側の柱根の数と柱間はかなり相違している。東側では、直線に並ぶ5本の柱根が確認され、配置関係からみてこの建物を構成した柱であろうと思われる。この建物の柱配置の最終段階では、断面に示した柱根及び柱穴が同時存在であろうと推定した。東側の柱穴列の規模は、全長4m、柱穴間は断面A-A'で計測すると、SP120とSP146間が1.7m、SP146とSP122間では1.6mを計測した。

5本の柱根は直線に並ぶが、その間隔は短いものでSP143とSP146間で僅か0.7m、SP416とSP418では0.9m、SP148とSP150間では1.5mであった。このように狭い間隔では、南辺と西辺の柱間のバランスがとれない。修復とかに伴う立て替えの結果生じた現象とも推定されるが、南と西の他の辺の柱穴は移動した形跡は認められなかった。個々の柱穴は円形を呈し、直径は0.3mから0.5mであった。また東辺の北側の柱穴SP150とSP148には礎板を伴っていた。建物の性格は不明であるが、居住のための施設よりむしろ、倉庫風の建物と考えられる。周辺に所在する宮下遺跡でも、これと類似した小型の掘立柱建物が検出されている。第46図には本遺構の柱根と礎板を図示した。

時期は土器等の遺物を伴出しないことから明確でないが、検出面等周囲の状況から類推して8世紀に位置付けられるであろう。

第4面の掘立柱建物は、先述した宮下遺跡の建物との規模の類似性が認められる。一方の官衙域と考えられる西南の内荒遺跡では、杭列で区画された中に整然と配置された平安時代前期の建物群が検出されている。

第47図には検出された柱根と礎板の位置を示したが、一定の範囲に集中しており、そこになんらかの施設が存在したことを類推させる。また第50図には柱根列と、さらに第51図に、追加調査区から絵馬を



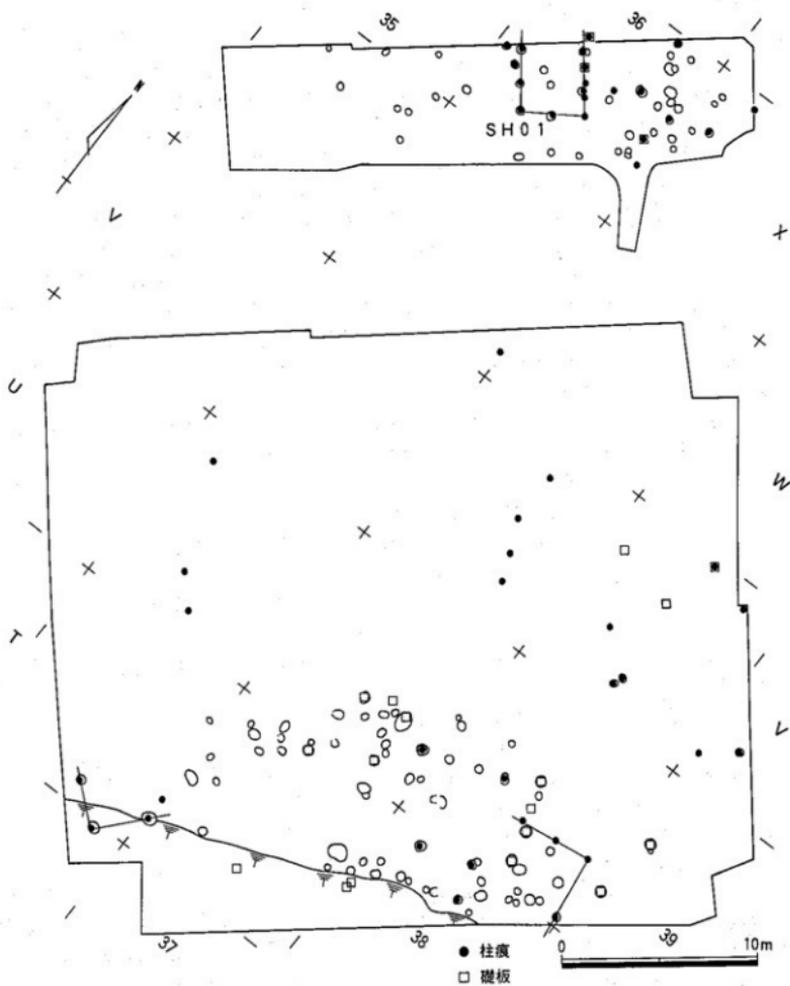
第45図 SH01 実測図

出土したSP130の図を掲げた。

なお、第48図にはT-37グリット、河川跡の岸に所在する柱穴SP69の礎板平面図と、第49図にはそれらの実測図を示した。特に、1・2・3は接合することが確認されたもので、転用材であることが明らかとなった。



第46図 遺物実測図20 (SH 01ほか 木製品)



第47図 柱痕、礎板分布図

(4) 井戸

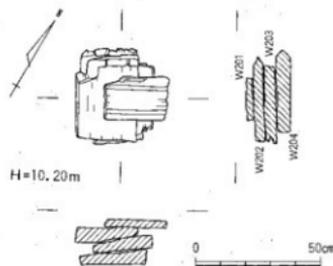
SE01 (第52・53図、図版15)

U-39グリッドで確認された井戸である。上面は青灰色シルトに覆われ4面の叩きに際して確認された。掘り方は南で一部破壊を受けているが、おおむね南北1.3m東西1.4mのやや隅丸方形に近い不整形を示し、5層の最上部となる青灰色砂礫層を掘りこんでいる。検出面から掘り方までの深さは0.25mを計るが、井戸枠内はさらに一段深くなり、最深となる中央付近では掘り方より0.13m程下がり、この底面の標高は9.7mである。井戸枠は内法で南北0.7m東西0.75mで正方形に近い。

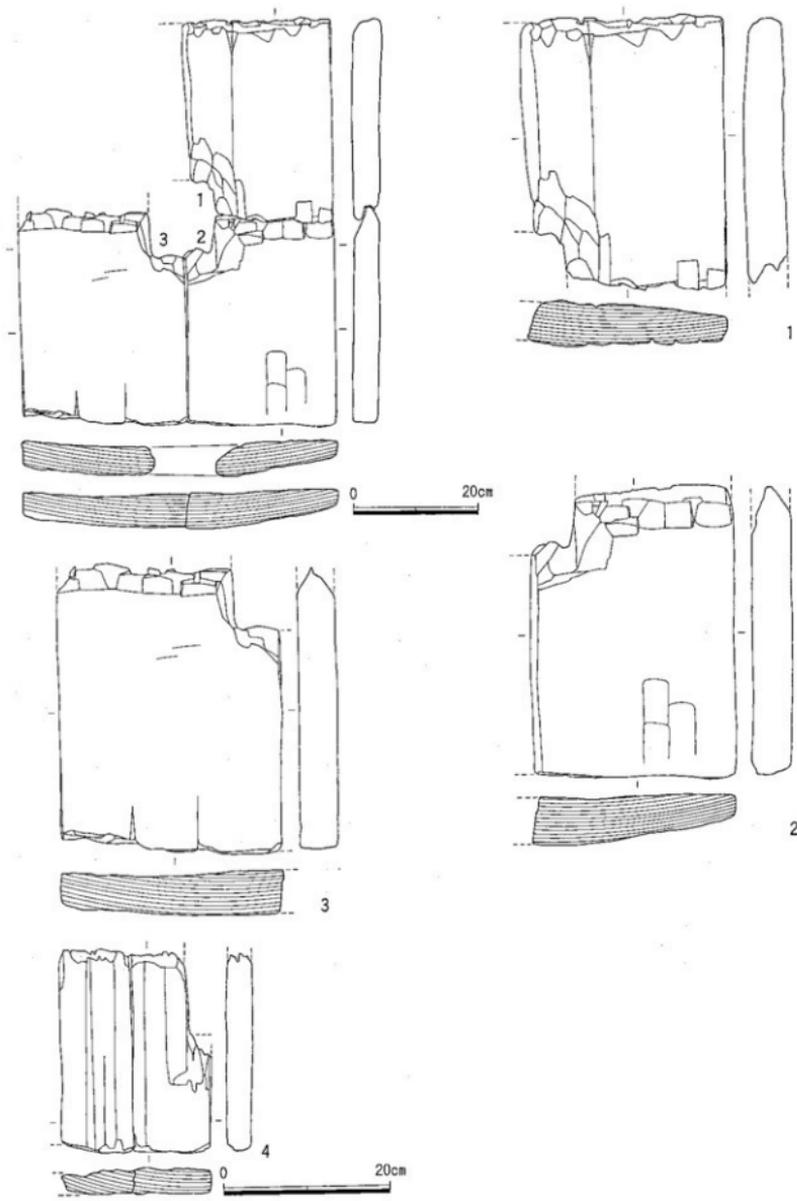
井戸の構造は、四隅に複数の柱杭を打ち込んで立て、横板をこの柱杭の外側に渡すもので、柱に横板を落とす溜構造や横板の端部同士の組み物等は確認されず、単に柱杭に横板を渡し架け、裏込めの土圧で横板が柱杭及び相互にもたれかかる形で井戸枠を安定させていたと考えられる比較的簡易な構造をとっていた。ただ、暗灰褐色粘質土からなる掘り方埋土には5cm～20cm程度の礫が多く見られ、特に横板に沿って並び、横板を押さえている様子もあり、井戸枠の安定のために掘り方の埋め方に配慮していた様子がうかがえる。井戸枠内には水溜め等の設備は見られないが、先述したように掘り方は井戸枠内が一段掘り下げられている状態であった。

柱杭は第54図に示した。北東で2本(2-1・6)北西で3本(1-2・4・5)南東で2本(2-2・7)南西で2本(1-1・3)合計9本が確認されている。四隅とも基本的には柱杭は長(6・5・7・3)短(2-1-1-2-2-2-1-1)が対となって打たれている様子が、四隅とも短い杭が外側(横板寄り)に配されている(3本が打たれている北西では4はやや隅から離れて打たれ、6・1-2が長短の対を成している)。杭は掘り方の底面からさらに0.2mから0.3m程打ち込まれている。検出された杭には丸太杭は見られず、割り材もしくは角材だが、いずれも先端は尖らせて杭としての加工がなされている。杭の上端はちぎられたように欠損、風化しているほか、南西に50°～70°程度傾き、北東方向からの強い力を受けた様子が窺える。

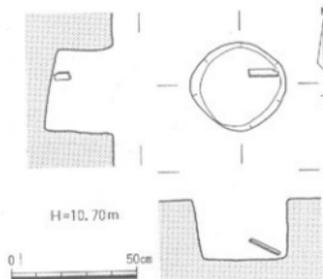
横板は第55図に示した。各辺一段が確認された。北及び東辺を中心に井戸枠内や横板周辺に板材の破片が見られることから、さらに何段かあった可能性がある。各板は長さ80cm前後、幅(高さ)0.25m～0.3m程度で、西辺の横板(9)の端部には斜めに切断されており転用材と考えられる他は端部の切断痕(鋸?)は確認されるが、ほぞ等の加工はなく、小口部で組合せがあったとは考えられない。また、確認された横板については北と東辺の横板は内側に、南辺の横板は外側に傾き、また西辺の横板はやや南側に飛び出すようにずれている。先に述べた柱杭の傾きと併せ、北東方向からの強い力により井戸枠全体がこの方向に歪んでいる状態で、その方向からの洪水等の影響によりものと考えられる。



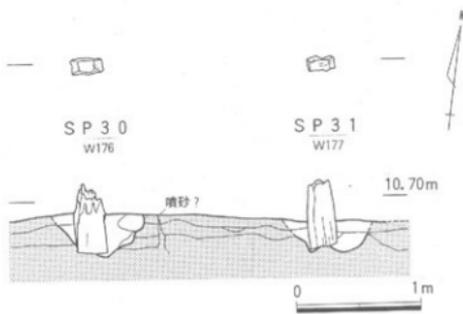
第48図 横板出土状況 (SP69)



第49図 遺物実測図21 (SP69 木製品礎板)



第51図 絵馬出土状況 (SP130)



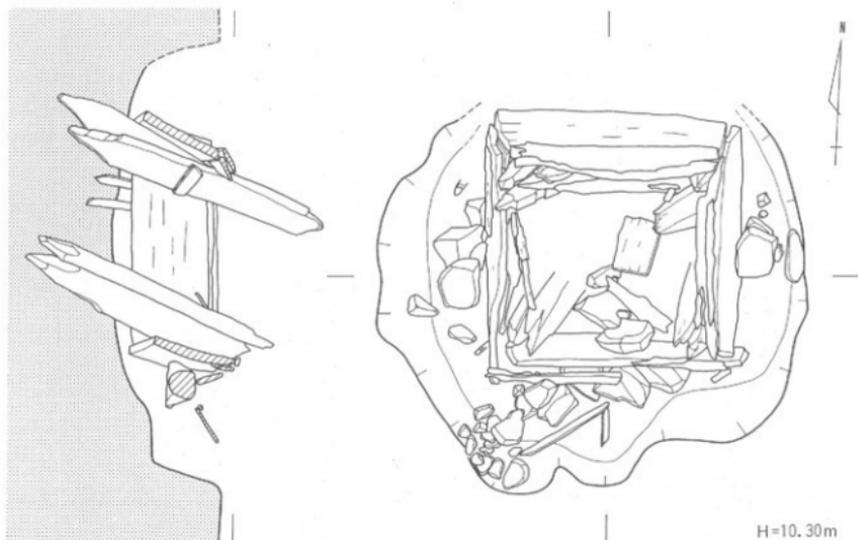
第50図 柱根倒実物図

井戸枠内の埋土は大きく上下二分され、その層界には1cm~2cmの厚さで植物質の有機物が堆積していた。この状況から下層までは比較的穏やかに堆積し、澁み状態となっていたものがその後急激に埋没したものと考えられる。上層には井戸枠の構造材の一部と考えられる木片も確認されることからこの上層の堆積は井戸枠全体を歪ませた際に急激に起きたと考えられる。

遺物には、井戸枠内の覆土上層、下層、掘り方埋土から土師器片が出土しているが小片で、また覆土中よりは製品と考えられる木製品はみられなかった。

井戸枠の構造材として使用されていた木製品では、柱杭として使用されていたものは、先端部を尖らせて杭とするため加工されていたが、これ以外の加工のみられるものがあった。(第54図)である。長さは各々79.6cm、76.3cm、73.4cmを測り、いずれも丸太を半割し先端部を尖らせた形状であったが、この半割面にも削りの刃痕が観察されるほか、横断面形では半割面の中央が突出し、この突出の側面にも刃痕が明瞭に観察された。整理の過程で1-1と1-2、2-1と2-1がこの突出部で接合することが確認され、接合状態では直径12cm程度の丸太材の両側に各々深さ4cm~5cm、3cm~4cmの溝を材の全長に渡って削りだしていたと確認された。またこの二組は、佐藤洋一郎氏(静岡大学農学部)の指導によるDNA鑑定を実施し、さらに各々を二つに割って先端を加工して杭に転用したものと考えられる。本来の長さは、両者の長さを合計するだけで1.5mを超えるものとなり、この大きさから転用前は建築材であったと考えられ、用途としては、この溝に壁板を落とし込む構造をもった柱材と考えられる。また、5(W326)は89×9.6×4.6cmの角材だが、残存部のほぼ中央に深さ1.3cm、長さ7.8cmのホゾ状の切り込みが付けられており、建築材の転用材と考えられ、6(W322)も94.6×9.8×4.5cmで隣あう二面が割り材の角材だが、割り面以外の二面には鱗状の加工痕が明瞭に観察され、杭への再利用前は割りだしの角柱状の大型材であったと考えられる。

また横板では、前述のように9(W300)の一方の端部が両側から斜めに切断されており、建築材等の転用材と考えられる。

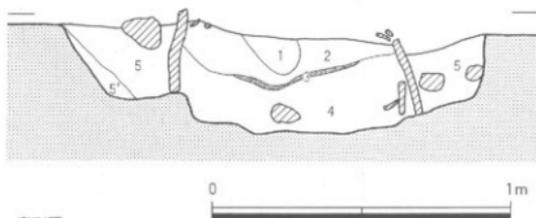


井戸内覆土

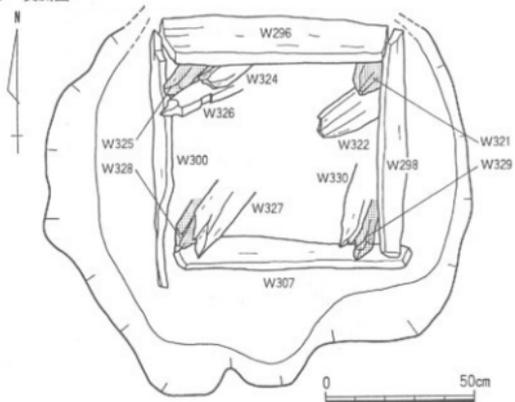
- 1 暗灰色粘質土 (礫を含む)
- 2 暗青灰色粘質土
- 3 植物質の集積
- 4 暗灰褐色粘質土

掘り方埋土

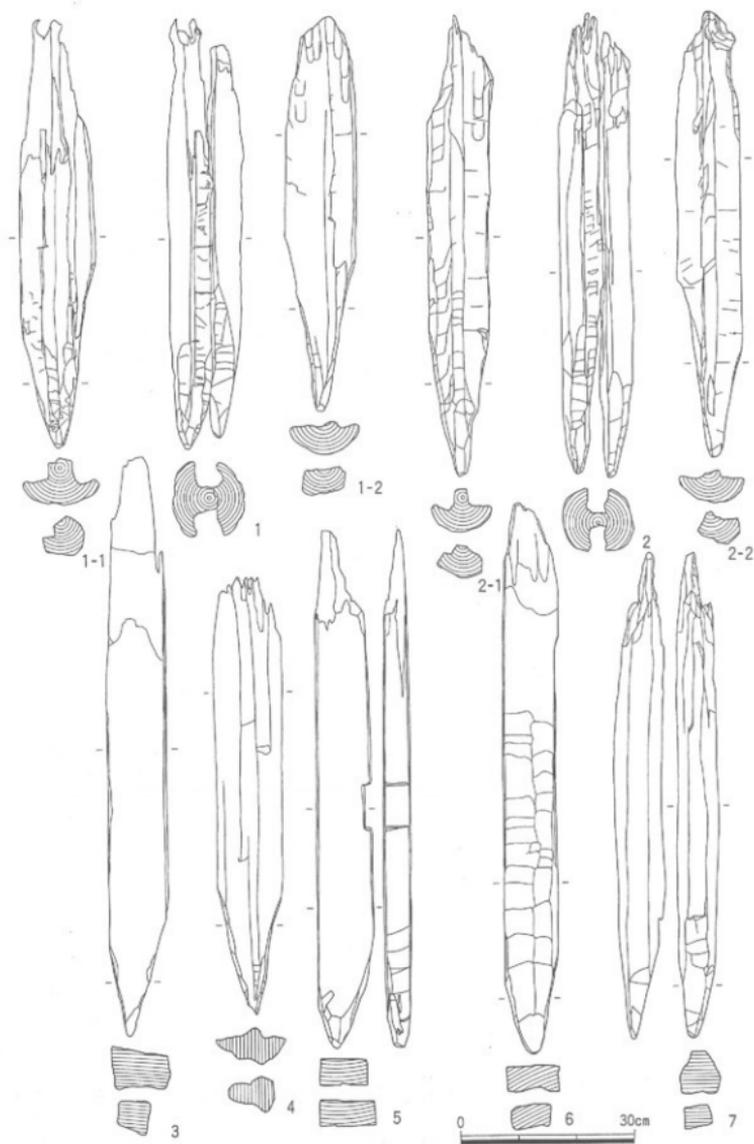
- 5 暗灰褐色粘質土 (礫を多く含む)
- 5' 暗灰褐色土(5に地山の砂が混ざる)



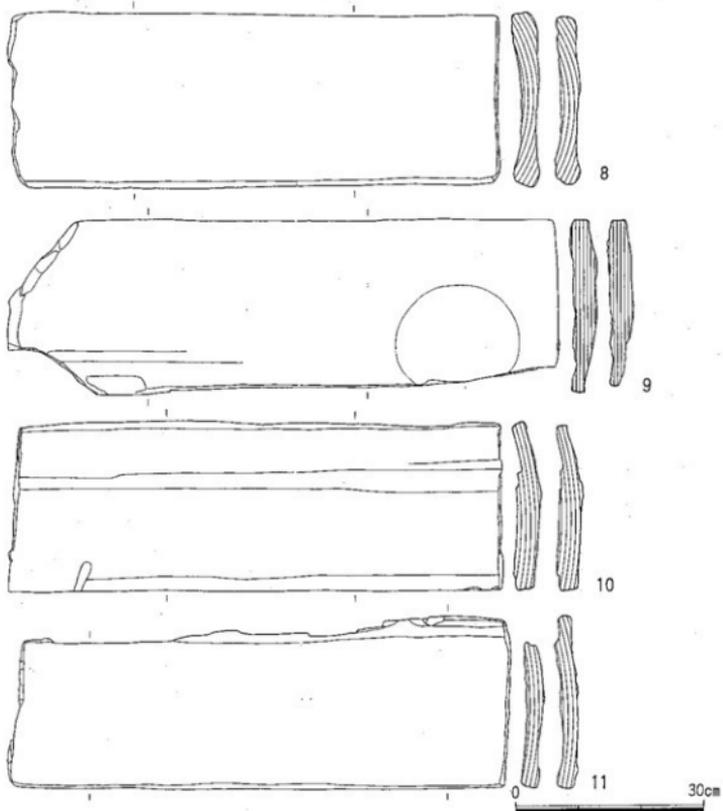
第52図 SE 01 実測図



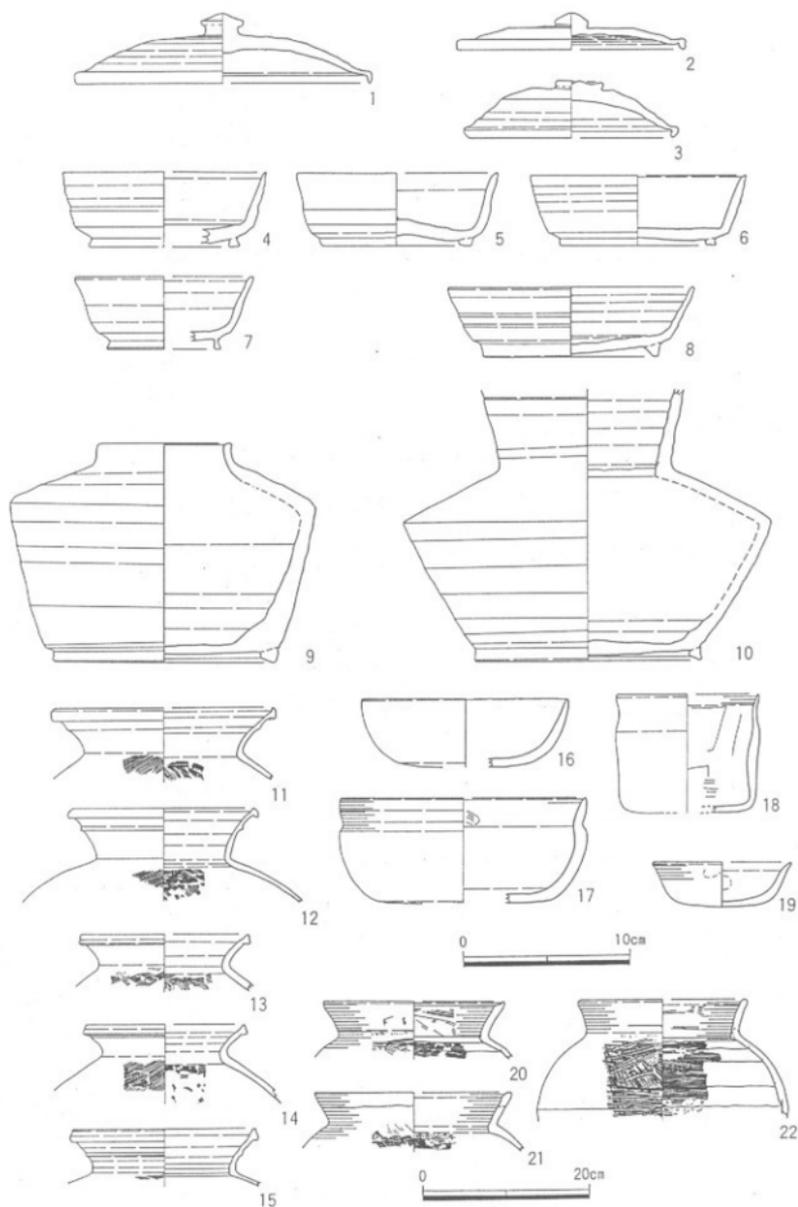
第53図 SE 01 杭接合関係



第54圖 遺物実測図22 (SE 0 1 木製品杭)



第55図 遺物実測図23 (SE 0 1 横板)



第56図 遺物実測図24 (SF・SP土器)

3 出土遺物

(1) 奈良・平安時代の土器

土器の概略と分類

本遺跡の第3面・4面からは、テンバコでおおよそ150箱の土器が出土している。これから遺構ごとに土器の記述にはいるが、土器類の種類を中心とした概略と、分類の基準について整理してみる。

土器の種類は、圧倒的に土師器が多く約9割を占め、須恵器少量とわずかに灰釉陶器が伴う。これらの年代としては、古いのは7世紀代も見られるが、多くは奈良時代前半の土師器・須恵器であり、9世紀の須恵器では遺構に伴う一群がある。また静岡県中東部地域においては、奈良時代から平安時代にかけて、湖西市湖西窯と藤枝市助宗窯の須恵器が流通する。本遺跡でもこの両者の窯の製品が認められるが、生産地の検討までは行っていないが、個々の記述のなかで気付いたことを指摘したい。なお、この須恵器については、藤枝市博物館の八木勝行氏に実現して頂き、種々の教示を頂いた。八木氏によると、本遺跡の須恵器の大半は助宗窯の製品であるといわれる。

灰釉陶器は、黒笹14・90号窯式期の皿・椀がわずかに出土している。これは隣接する川合内荒遺跡の多量な灰釉陶器群（9世紀～11世紀）の、前半の時期に該当するものである。

なお、本遺跡の土師器のうち、駿東型・遠江型については、胎土・色調・調整手法等が分布の中心地域とは異なる事例が認められる。これらは、主として甕に顕れており、個々の事例については、記述のなかで補足してゆく。

A 土師器

土師器には、供膳形態として、坏・盤・鉢・コップ形があり、最も多くバラエティーに富むのが坏類である。これらには、駿東型坏・甲斐型坏がごく僅かみられ、大半は古墳時代からの系譜を引く、丸底・指成形・口縁横ナデの在来系譜の坏である。

煮沸・貯蔵形態は、短頸壺・水平口縁の甕（遠江型）、緩い口縁の長胴甕、在来系譜の駿東型甕が認められる。図にそって、各々の形態の特徴を抽出してみる。

供膳形態

盤・大きな口縁部と底部をもち、器高は低く、扁平な器である。調整にはヘラ磨きを多用する。

鉢・形態・法量からみて三者に分類される。

A類、第32図-23のように平底で、体部中央で外側に屈曲し、上半に回転の横ナデを施す。胎土は精選され、明るい淡明褐色を呈する。法量は口径14cm、器高3cmから4cmと、須恵器坏類に類似した大きさをもっている。

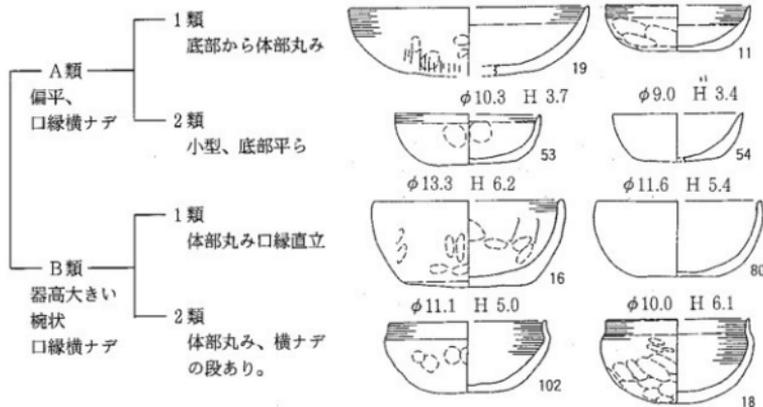
B類、甕A類の底部から胴下半部を、鉢として転用している（第33図-29）

C類、体部が深く直立し、口縁部を横ナデ調整する。指成形で体部をヘラ削り調整する。SC02・SC06と石組み遺構から4点が出土する。大きいもの（SC06出土・第42図-19）で、口径11cm、器高8.8cm程度である。

コップ形・コップ形須恵器の模倣形態（第56図-18）で、色調・胎土は西の系譜の土師器に類似する。坏・古墳時代からの在来系譜の坏で、形態・手法から以下のような二形態に分類され、さらにそれぞれが二つに細分される。

A類、扁平で口縁に横ナデが見られるもの。大きなものは体部が厚い。底部の状態により二つに細分される。

A1類、底部から体部にかけて丸みをもつ。



第57図 土師器坏の分類

2 A 2類、底部が平底傾向のもの。小型品に多い。

B類 器高が大きく、深い椀状を呈する体部をもつ。口縁部形態・手法により二者に細分される。

B 1類、体部が丸みをもち、口縁部が直立する。器面調整程度の口縁部横ナデを施す。

B 2類、体部が丸みをもち、口縁部のり横ナデが強く、明瞭な段が認められるもの。

なおこれらの土師器坏は、指成形・ヘラナデ調整を受け、底部には、木葉痕が残されるのが一般的で分類・手法との関連は特に認められない。従って本文では、指成形・ヘラナデ調整、底部木葉痕については、必要以外は記述から除くこととする。

煮沸・貯蔵形態

短頸壺 第33図-27が一点出土する。丹塗りで丁寧に調整される。

甕 形態から三者に分類される。

A類（遠江型甕）遠江地域に分布の中心をもつ甕である。水平に大きく開く口縁部をもち、口唇部が肥厚、指成形し、外面縦刷毛、内面横ナデ調整される。

B類 口縁部の強い回転ナデにより、段が生じる長胴甕である。出土量はきわめて少ない。第32図-28が出土する。胎土は精選され色調は明褐色、輪積み指成形され、西の系譜の土器との類似点を多くもっている。

C類（駿東型甕）静岡県東部地域を中心に分布する球胴甕である。口唇部の内側を肥厚させ、口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁は丁寧に横ナデ調整され、胴部は斜めに刷毛調整されその上を横位のヘラ磨きを施す。胎土精選、色調は暗茶褐色を呈する。

D類 第22図-84にみられるもので、SC02から一点出土する。

B 須恵器

供膳形態では坏類及びその蓋が圧倒的に多く、高坏が僅かにみられる。貯蔵形態は、少量ではあるが広口壺・長頸壺・長頸瓶・短頸壺・横瓶・甕類が出土する。坏類は量も多いことから分類をしたが、他は本文中で説明する。

坏類は、高台と無高台の二者に大きく分けられる。

A類(無高台坏) これは更に、底部形態により二つに細分される。

A 1類、丸底を呈するもの。

A 2類、平底を呈するもの。

B類(高台坏) 底部と高台の形状により二分される。

B 1類、高台接地面から底部が突出するもの。

B 2類、高台と底部が同一面で接地するもの及び、高台のみ接地し、本来の高台の機能を果たすもの。高台の形状は、端正な方形・ひしゃげた方形・内側または外側に尖る台形状の高台、三角形を呈するもの等、多くのバリエーションをもっている。

なお助宗窯の坏類は、A・B類ともに大中小に法量分化することが知られており、口径で計ると大型は16cmから20cm、最も多い中型は13cmから16cmの間、小型は9cmから13cmに分布している(佐野 1994)。本文では特に断りのない場合は、法量についてはこの数値を用いて大中小と記述する。

C 灰釉陶器

供養形態の碗・皿が僅かに出土している。時期は黒笹14・90号窯式期である。個々に記述する。

以上のように、土師器・須恵器・灰釉陶器について概略と分類について述べた。しかし、土師器については、冒頭でも述べたように坏・甕類において、分布の中心で出土するものとの差が認められる。特に、図示された形態での分類が不能である坏類については、厳密な検討を経ているわけではなく、肉眼観察を前提にした、一応の目安程度の認識で行なった分類であることをお断わりしておく。

2 各遺構出土の土器

SC01(第17・18図、図版24・25)

図示したように、須恵器が22点、土師器2点を掲げた。須恵器の種類は、1から4が坏蓋、5と6が坏B2類、7が高坏、8から12が長頸瓶、13から19は壺類、22は横瓶である。

須恵器

1の蓋は、かなり歪んでいる。口径は20cmで大型の坏に対応する。つまみの擬宝珠は、頂部が尖り丁寧なつくりである。縁の返しは断面が三角形で、側面からの強いナデにより断面弧状を呈する。2のつまみも1と同じような擬宝珠をもち、縁の返しは低いひしゃげた断面三角形である。3・4は、中央部が凹むボタン状のつまみをもち、径は両者ともに14.6cmである。坏蓋4点はともに、体部中程まで回転ヘラ 削りがされる。

坏は5・6の二点を図示した。両者ともに坏B2類である。5は、体部の立ち上がり強い箱坏といわれる形態を呈する大型品であり、口径17.8cm、高台外径11.5cm、器高6.8cmを計測する。助宗窯の坏類は、三種類に法量分化することが知られており、この坏は大の規格に該当する。高台はひしゃげて低くなっているが、方形を呈し、底部外面には焼成前につけられた「×」印のような記号が認められる。6は同じ形態をもつ坏B2類で、高台がさらに低い点を除いて、形態・手法は5と類似する。口径14.2cm、高台外径8.7cm、器高6.6cmを計り、法量の規格では中型に該当する。なおこの高台は、助宗窯に特有な削出しにより作られる。この5と6は、箱坏の形態を呈し、典型的な助宗窯の製品である。

7は一点のみ出土した高坏であり、坏部は坏蓋と同じ成形調整をし、円筒状の脚に急激に大きく広がる裾をもっている。

8から12までは長頸壺であり、8と9は球胴、11と12はやや細長い胴部と思われる。高台は、接地面が平坦であるがやや中央が凹む8、10から12の三点はわずかに外側に尖る。10には胴部全面に墨のような黒色の顔料が刷毛で塗られた痕跡が認められる。これは焼成後に施されている。なお11にも同様な

事例が胸部全面に認められるが、その痕跡はかなり薄い。さらにこれらの長頸壺は胎土・色調の差があり、8・9は須恵器特有の青灰色、11と12は灰釉陶器に類似した精選された胎土で、乳白色を呈し、焼成は良好である。

13から15の三点は、広口壺で14と15は肩が強く屈曲する。14は体部の回転ヘラ削りが肩部直下まで達している。つくりは椗で底部が高台接地面より突出する。15は、肩部直下が接合段階の強いナデにより凹む。この広口壺にも先の長頸壺同様に胎土・色調に差が認められ、13と14は須恵器そのもの、15は灰釉陶器のような胎土と明るい白味のある色調をもっている。

16の短頸壺は体部全体が丸もち、胸部最大径は中位よりやや上になり、20cmを計測する。須恵器の胎土・色調を呈している。

19は、須恵器の長頸壺で壺G類と分類されるものである。やや胸部が太い形態で、頸部から口縁部が傾く。肩部には弱い稜がみられる。計測値は、口径5.9cm、底径5.6cm、器高22.5cmを示し、底部は摩滅のため観察できない。

22は成形調整ともに雑なつくりの平瓶である。

これらの須恵器は、削り出し高台と、壺G類の長頸壺の年代観から、8世紀末から9世紀前半と考えられる。他の壺・瓶類についても、ほぼ近接する時期と思われる。

土師器

このSC01では、共存する土師器は極めて少なく、23と24が辛うじて図示可能であった。24は鉢B類としたもので、成形・調整・胎土・色調ともに甕A類、遼江型の甕の下半部そのものを転用し、疑似口縁を作り出している。甕と異なる点といえば、縦刷毛目調整を丁寧にナデで消していることがあげられる。

SC02 (第19図～23図、図版25～28)

図に示した土器群は、馬形・人形・ミニチュア土器等の祭祀遺物とともに投棄されていたもので、極めて一括性・同時性が高く、奈良時代前半の土器群として年代観の指標となるものである。

土器の種類と点数では、土師器が圧倒的に多く、須恵器は極一部を占めるにすぎない。図示した点数を参考としてあげると次のようであった。須恵器では坏壺4点、短頸壺蓋1点、坏5点が、土師器では坏58点、甕24点となり、須恵器は全体の一割強にすぎない。

須恵器

坏壺はつまみの擬宝珠が退化した1～3と、中央が凹む4のような形態がある。返しは断面が三角形で低い。法量は大きいのが4で径16.2cm、最小は3の14.3cmを計測する。器高は4点ともに、3.5cm前後で類似した値となっている。

10は丁寧に作られた短頸壺蓋である。擬宝珠も端正に整い、縁は丁寧に面取りされる。天井は大半が回転ヘラ削りされ、外面全体に降灰がみられる。

坏はA1類が1点、B2類を4点図示した。無高台丸底の9は、全体を薄く仕上げるが、底部には粘土を貼りつける。高台平底のB2類は、5と6が高台接地面と底部が同一、7と8が底部が高台接地面から離れる形態である。形態は、口径に比較して器高が低く4点ともに共通する。法量の差もあまりなく、特に器高は4.5cmから4.8cmの間に集中し、口径も最小の6が14cm、大きいのが8で15.4cmを計測する。高台の形状は、各々バラエティーに富み、5のように細長いもの、6・7の方形高台、8の外に尖る形状が観察される。このように5から8の4点は、高台の形態は異にするものの、口径と器高の比率がごく近いこと、法量が一定の値に集中することから、同一産地・同一時期を示すと思われる。なお細部調整では、7に回転ヘラ削りが、5と8には底部回転ヘラ切離しがみられる。

須恵器は坏2類がほぼ一定の形態にまとまること、また古墳時代から継続するA1類の最終段階にも

位置付けられることから、A 1 類を8世紀初頭、B 2 類を8世紀前半におくことができる。

土師器

SC02のなかで圧倒的に多いのが土師器環であり、本遺跡から出土したものは形態・手法・胎土・色調等多種多様な様相をもっている。今回行った検討は、先に概略で述べたが、一応の傾向の把握程度での分類と、手法の特徴の整理である。

A 1 類の扁平体部丸み形態は、図20-12～15・17・22にみられる。なかでも13・14・22はこの形態の典型的な例である。体部は他に比較して厚みがあり、口縁部の横ナデ調整は弱い稜が生じる程度で、全体にどっしりとして安定感がある。単純に口径と器高の比率からみれば、皿形態に近似しているであろう。さらに胎土・色調をみると、12・13は赤色粒子を混入し体部が厚く、さらに12は他に比較して重いのが指摘される。15は細礫を多く含み、17では白味のある色調を呈する。22は、色調は暗く茶色味が強く、体部が厚く、重量がある。く口径と器高をみると、13が12cmと3.7cm、14では12.2cmと3.7cm、22は13.2cmと4.4cmを計測する。

A 2 類、扁平小型平底風は、図20-29・30・31、図20-37・38・54・55・57・59が良好にこの形態を顕わす。口径と器高の比率を大型のA 1 類と比較すれば、器高の比率が高くなることから、やや深い印象をうける。15は口唇が尖り、体部下半が極端に厚い。これらは底部に平坦面をもち、比較的安定がよい。54は、胎土に細礫を混入し、比較的重い。図21-49は口径11.2cmと小型ではあるが、形態はよく類似する。

B 1 類、器高が高く・丸い体部・口縁直立の坏は、図20-11・18・20・21・24・28、図21-35・36・44・50・51・58・60・65が本類に該当する。口縁部回転横ナデの強弱により、その付近の形状は若干異なる。横ナデを明瞭に残す図20-21・24・28では弱い段がなく、口縁部がわずかに外反する形状を呈する。法量にも大小があり、大型のものは、図20-11の口径12.2cm、器高4.5cm、小型では図21-65の口径10.4cm、器高4.1cmを計測する。全体的な法量からみると、口径では10cm代に、器高は4cm代のものが多く認められる。個々の特徴をあげると、胎土に細礫を多く含むのが図20-11と図21-37、色調が赤みの強い褐色を呈するのが、図20-18・21・24と図21-50・60・65は重量があり、他には赤色粒子を含む図20-24、胎土が精選された色調の暗い暗褐色の図21-36・60、図21-35のような白く明るい褐色の色調を呈するものもある。胎土が精選される例として、他にも図21-44がある。図21-50は体部の表面に赤褐色の化粧土のような幕があり、体部本来は暗褐色を呈した暗い色調のため、その相違は明瞭に確認される。数としては多くないが、他にもこのような事例は確認される。

B 2 類、器高が高く、丸い体部、口縁部に強い横ナデの段をもつ形態の坏は、B 1 類と共に本遺跡出土の土師器環類の主体を占める。特にこの形態を代表するものをあげると、図20-26・27、図21-34・39・46・52・61がある。さらに、A 類でみたように小型化とともに平底風を呈する傾向は、B 2 類でも認められ、図20-23、図21-32・40・43・63・68がそれに該当する。口縁部は強い横ナデにより外傾する図20-23・26・27、図21-39・43・40・46のような形態が多く、わずかに内傾する図21-52のような事例もある。法量は口径10.5cm前後、器高は4cmから4.5cmの間に集中しているが、大きいものでは図20-26の口径12cm、器高4.6cmがある。胎土・色調は今まで述べたような項目が特徴であり、細礫を含むのが図20-23・26、図21-43、赤色粒子は図20-26、図21-34に混入され、胎土精選される例が図21-68にみられ、赤みの強い赤褐色の色調も図21-32・39・61に、さらに重量のある図21-46のような事例もある。

壺はA・C・D類が出土している。図示した数では、在来系譜のC類が最も多い。

壺A類、図22-86から92に7点を示した。口縁部を水平に口唇部は粘土を盛り上げて肥厚させる。83・91のように水平の部分が短い例もあるが、形態はどれも類似している。推定口径は、20cmから25cmを計測する。85は本類の胴部下半の事例である。外面縦の刷毛、内面は指頭押圧で調整されている。本遺跡の壺類も坏類と同様に、胎土色調が一定せず、バラエティーに富む。86は色調が暗く、胎土に雲母を多

く含む例が多く、87・88・90・91・92にみられ、90は赤色粒子をわずかに含み、92では細礫を多く含んでいる。静岡県西部地域に分布する本類の甕は、胎土精選され、指成形で薄く作られ、色調も明るくベージュ系である。このような点を比較すると、形態と調整手法には相違しないものの、胎土・色調・厚みに差のある印象を受ける。

甕C類、駿東型と呼称されるもので、図22-69に図示されるような、口縁は「く」の字に屈曲し、平底で球胴の甕を云う。古墳時代中期から平安時代まで継続し、静岡県中部から東部にかけて分布する。その西端は安倍川であり、本道跡はこの西端地域の典型的な事例といえる。口縁部の細部形態はかなり変化があり、72の口唇部のように、内外またはどちらか一方の面を面取りするものが、69・72・81・82・83にみられる。さらに成形の特徴として、口縁部外側に粘土帯を貼り付け、厚みをもたせている例も75にみられる。口縁部外側の回転ナデ調整は、胴部上半にも及び頸部付根から、1cmないし2cmに及んでいる。さらには、胴部上位の刷毛目がほとんどなく、丁寧にヘラ磨きする76のような例もある。胎土・色調は、79は精選され、焦茶色味の強い分布の中心地域のものと同様である。逆に76は、焼成軟質砂質多くザラザラし艶がなく、明らかに79とは相違する。この傾向が指摘されるのは他に83がある。さらに70は明るい色調で明黄褐色、白味が強く、細礫多量に含み、比較的薄く作られる。74においても細礫多量に混入するのが顕著に認められる。

甕D類、図22-84が一点出土する。全体の形状は不明であるが、口唇部肥厚、口縁内外横ナデし、胴部に刷毛後ヘラ磨き調整をする手法が、C類駿東型に類似することから、球胴平底ではないかと推定される。口唇部はやや内傾するが丁寧に面取りされ、頸部は筒状を呈する。色調は暗茶色で、白色礫を多量混入する。頸部の円筒状の形態、胎土の白色礫多量混入は、駿東型甕には認められない手法である。口径は約20cmと推定され、駿東型甕の法量と類似する。

SC03 (第24・25図、図版28～30)

この遺構は、先のSC01同様に須恵器が圧倒的に多く、図示した17点のうち15点を占める。土師器の須恵器に占める比率は、一割強でこれもSC01と同様である。

須恵器

須恵器環類はA1類が1点、A2類は3点出土し、高台の付けられる環B類は共伴しない。4は深い碗状の形態であるが、無高台であることからA1類とした。

環A1類、無高台丸底のもの、図25-1が1点認められる。体部から底部にかけて丸みをもち、口縁部はやや外反する。底部はヘラ削り調整される。計測値は、口径14.1cm、器高4.3cmである。

環A2類、無高台平底環は、体部が箱環となるものが図25-2・3で、両者ともに口径に比較して器高の低い形態をもつ。2は底部のヘラ削りが屈曲部にまで及んでいる。3は小型の法量を示し、口径12cm、底径10.4cm、器高3.5cmを計測する。両者は、その形態から8世紀前半に比定される。4は体部下半が丸みをもち、深い碗状の形態を呈する。体部の厚みと比較して、底部には粘土を貼り付けて約2倍の厚さを保つ。焼成は軟質で色調も白みが強い。体部の内外には焼成段階で生じた線状の煤痕がみられる。これは信濃の諏訪地域で、主として9世紀代から10世紀前後にかけて生産される軟質須恵器といわれるもので、明らかに先の二点とは異なる時期・系譜の須恵器である。

瓶類は5～9の5点図示した。完形のものはないが、6・8・9のように肩部の屈曲が強いものと、7にみるように緩やかに弧を描く二者がある。色調はSC01と同様、須恵器のように青みの強いのが9と8、灰陶器にみるような乳白色を呈するのが、6と9である。7は、胴部より上を欠損するが、胴部は倒卵形、頸部は細く絞まった形態を呈することから、水瓶の可能性もある。

甕は図24・25-10～15の6点を図示した。このうち11は、胴部上半は回転によりナデ調整し、下半は外面叩き、内面ヘラナデを施し、胴部最大径の位置で上下を接合している。

このSC03出土須恵器群は時期幅がひろく、1の奈良時代初頭期から、4の9世紀から10世紀前後にまで及ぶ。甲斐型の坏の年代観もこれらの最終時期に該当している。

土師器

16・17の二点を掲げた。16は甲斐型坏で、体部内面放射状暗文、外面下半へうり割りを施す。甲斐地域の編年では甲斐 期に比定され、9世紀後半に位置付けられる。

17は、やや扁平な形態であるが、坏B類に分類される。

SC04 (第27図～30図、図版30～32)

この遺構からは、須恵器として坏蓋・坏A・B類、壺、瓶類が出土し、土師器は甕C類が出土する。土師器甕は極端に少なく、わずか3点のみである。

須恵器

須恵器蓋は、図28に23点を図示した。形態は1・23・22が扁平であるが、他は緩い弧状を呈し、2・3・5・7では、3.5cmから3cm程度で器高が高く、4では直線的な体部のため底辺の大きい三角形となる。縁の返しは、23のように低く断面三角形のもの、5のように側面下部を強くナデするため凹むもの、側面中央の回転ナデ押さえで弧状となる19・20・21、体部の先端を内側に折り曲げたような6と18のような例が認められる。つまみの形状は、いままでもみてきたのと同様な形が認められ、端正な形の擬宝珠、接合部が太く低い擬宝珠で退化したもの、中央部が凹んだボタン状をしたものがみられる。法量のうち大きいものは、1の径17cm、小さいものは14の13.8cmを計測するが、15cmに集中する傾向が認められる。

須恵器坏類にはA2類・B1類・B2類が認められる。

坏A2類、無高台平底の形態は、36から46まで11点が図示された。これらを平底と一括したがしかし、底径が小さく、体部が大きく開く図29-45は、軟質須恵器と呼称され、9世紀から10世紀にかけて信濃地域で生産された須恵器である。焼成が弱く軟質で、内外に焼成段階で生じた細長い黒斑をもっているのが特徴である。さらに底部が厚く丸みをもつ、36・37・38・41、40・42～44は箱坏の形態をもっている。このように、SC04出土の坏A2類は、多種多様な要素を含んでいる。口径は13cmから15cmの間に集中している。法量分化の規格でいえば、中型が大半であるといえよう。

坏B1類、高台接地面から底部が突出する形態は、図29-24にみられる。丸底の無高台坏に鉢巻きのような高台を付している。口径14.6cm、高台外径10cm、器高4cmをはかる。

坏B2類、底部が接地面より突出しない形態であり、25から34まで10点を掲げた。このうち高台接地面が底部とほぼ同じ形態が、27～30である。これらは体部より厚い底部を有し、高台の形状は個々の差が大きく、27は低い三角形、28は小さく、30では小さく低く一定しない。なお、30では、高台の貼り付け位置が他よりも内側に寄る。31から34の高台は方形を呈するもので、ほぼ一定した形状を呈する。31・32・34の中央部が抉られたような底部は、回転糸切り難しが深く食い込んだ例として、助宗窯製品には一般的に認められる痕跡である(八木 1990)。口径は13cmから15cm程度で中型の法量をもっている。これらは、器高が低く、口径が大きい8世紀前半代の特徴をもち、高台が変化しかつ底部の厚い形態が古い様相を呈するものと考えられる。24は湖西窯の製品で8世紀初頭に位置付けられる。

35は、高い高台のつく合子状の坏であり、出土例は少ない。口径11.8cm、高台外径10.1cm、器高4.3cmを計測する。

47は、壺G類と云われるもので、胴下半がやや凹む。形態は胴径の細いスリムな形が推定される。底部は回転糸切り未調整である。底径は5cmである。

図30-50は長頸壺で、胴下半が回転へうり割られ、底部外面にはバツ印「X」のような記号が残される。肩には自然降灰がみられ、胴下半には青色の顔料が残るのが観察される。

土師器

土師器甕C類、54から56の三点を掲げたがいずれも口縁から胴上半である。55は分布中心地域のそれと類似した胎土・色調であるが、56は白色の細礫を多量に含む。

SC05 (第32～33図、図版33・34)

須恵器

須恵器では、坏蓋7点、坏A1類1点、坏B1類4点、坏B2類2点を示した。

蓋は、端正な擬宝珠で器高が高く、断面三角形となる。体部の削りの範囲は広く、下半にまで及んでいる。返しは縁を強く折り返したように低く内傾する。大きめな坏蓋であり口径と器高は、18.2cmと5.2cmを計る。他は径が14cm～15cm前後を示すもので、退化した擬宝珠のつまみをもつ。5は体部が丸いたため器高が大きく、4.5cmを計測する。

坏A1類では14がある。口径は17.4cmと大型で、全体に丸みが強い。淡黒色を呈し焼成は軟質である。坏B1類では、坏A1類にそのまま鉢蓋き状の高台を巻いた形態を表すのが9・10・11であり、8は体部下半が強いナデのため屈曲し、稜が生じている。高台は低いが形状は個々に変化がみられる。この坏B1類は、器高が低く、口径が大きい扁平形態で、法量の差もあまりない。ちなみに8の口径・高台外径・器高は、14.6cm、10.3cm、3.9cmを示している。

坏B2類は、12と13が認められ、底部が平底となり、底部から体部への境が屈曲し、強い稜が生じている。他は前者との差はあまりなく、形態・法量ともに類似している。

土師器

このSC05から出土する土師器には、他には見られない一群がある。図51-21～23は、シルクハットのような形態で鉢A類とした。これらは、形態にその特徴が認められ、体部中央が屈曲し外反する。これらは、指で成形調整されており、口縁部を横ナデする。胎土は精選され、明るい淡明褐色の色調である。法量は三点ともに、須恵器坏よりやや高い器高と類似した口径をもち、23は口径15.4cm、底径7.9cm、器高5.3cmを計測する。20は全面丹塗りの遠江地域に広く分布する盤である。鉢A類と20は、遠江地域の系譜を引く土師器と推定される。

土師器坏類で分類の対象となるのが、16から26の11点である。その内訳は、A1類が19、B1類は16～18の三点、B2類は24～26の三点である。本遺構出土の土師器坏類の特質として、他の遺構出土の坏類は、必ず各類の要素を合わせもつ折衷型式があるのに対し、これらは分類の検討に抽出した要素をそれぞれの類が供えており、その分類から外れる折衷様式はないということがあげられる。このように、SC05出土の土師器坏類の一括は、形態・特徴からみても、他の遺構にみられるような多種多様に変化する坏類の、前段階の時期の所産として位置付けられる。さらに須恵器の年代観を加味すれば、これらは8世紀前半でも早い時期に位置付けられるであろう。

土師器貯蔵・煮沸形態は図52に示したが出土は少量であり、27は丹塗り短頸蓋の小破片、28・29は甕B類とした緩い口縁の甕、30・31の二点は遠江型の甕A類である。甕B類は29の胴部に縦刷毛目を施すが指によるナデ調整が多用される。この両者は胎土精選され、色調も白みをもち、遠江の手法をうけた甕である。30の甕は、細礫多く軟質な焼成であり、分布中心地域のそれとは異なるが、31は遠江型甕の手法に類似している。

SC06 (第42図、図版31・32)

この祭祀遺構のみ第4面で検出された。須恵器が11点(坏蓋7点、坏A類1点、坏B1類1点、壺1点)と、土師器12点(坏類8点、鉢1点、甕3点)を図示した。この遺構出土土器は、他と相違し須恵

器・土師器がほぼ同数出土する。

須恵器

須恵器坏蓋は、比較的器高の高いものが多く、2では4.4cmを示す。縁の返しは今まで指摘してきた、低い三角形の7、側面中央のナデが弧状を呈する2・5、体部の端を折り曲げたような4など各種の形態がみられる。またつまろは、退化した擬宝珠をもち、比較的類似した形態を保つ。法量をみると、器高の高い2では、径15.2cm、器高4.4cmを計る。

9の坏A1類は、図20-9と類似した形態手法をもつ。8は、坏B1類で突出した底部をもつ、両者ともに湖西窯の製品であろう。10は平底で、肩が強く屈曲し、体部の高い位置まで回転ヘラ削りを施す。底径7.1cmを計測する。

土師器

19は器高の高い土師器鉢C類であり、指成形・底部木葉痕・口縁部回転横ナデ調整が認められ、坏類と同じ成形・調整を受ける。底部は丸底、口径11cm、器高8.6cmを計測する。

土師器坏類は11から18の8点を図示した。坏A2類の扁平・小型平底風の坏が多くみられ、11から14の4が該当する。つずれも口径10cm強、器高は3.4cmから3.9cmに集中する。口縁部横ナデの程度により若干の形態差を生じ、11と13は体部が厚いが、他には成形・調整・胎土色調に相互の差はみられない。坏B1類に分類されるのが、15と17であり、器高大きく、丸底である。法量を15でみると、口径11cm、器高4.6cmを計る。

坏B2類には18があり、深く、体部が丸みをもち、口縁部横ナデが強く、段が生じている。口径10cm、器高は6.1cmを示す。

甕C類は、20から22の3点を掲げた。22は口唇部が内傾し、面取りされる。また本来は、口縁部内外に施される回転横ナデが、胴部上位にまで及び、その範囲は頸部屈曲の頂点から約3cmである。また胴部には縦刷毛目調整のみで、ヘラ磨きはみられない。内面底部付近は、棒状工具によるナデ調整される。駿東甕は、平安時代にはいると、次第に胴部のヘラ磨きは消滅するようである。しかし、21においては、胴部の残存が少ないが、観察できるのはヘラ磨きのみで刷毛目はみられない。20には、22と同じ調整の内傾する面取りされた口唇部をもつ。胎土色調は20と21が、分布中心地域の駿東甕と異なり、特に21では、白色礫と細礫が多量に混入している。なおこの調整手法・胎土の変化は、分布の中心地域にも、駿東甕の最終期、折戸53号窯式期に近づくに従い生じる現象である。しかし、他の須恵器と土師器が8世紀の初頭段階を示すことから、この甕C類の時期に関しても同時期とし、きわめて地域色の強い一群としておきたい。

SR01 (第39図)

第3面の流路から検出されたのが、須恵器長頸瓶と壺である。1の瓶は頸部から口縁部の破片であり、丁寧に調整され、口径11cmを計測する。2は底部静止糸切り離しによる壺で、底径は8.6cmである。

SR02 (第44図、図版35)

4面で検出された流路SR02から出土した土器を図示した。須恵器B1類が1点、B2類は4点、瓶・壺類が6点を数える。

須恵器

須恵器坏B1類として、1がある。丸底に鉢巻のような高台を付したもので、高台接合段階の強い押圧による凹みもみられない。器高(3.8cm)比較して口径(14.1cm)が大きく全体的に扁平な印象を受ける。

坏B2類は、いづれも器高が低く、口径が大きい形態を呈し、底部は回転ヘラ削りされる。高台も方形が多い。これらはきわめて近似した特徴をもつ坏類である。なお5は焼成は軟質で、本体と高台部分

は異なる粘土で作られ、本体は暗青色、高台は白味の強い色調に発色している。3と4の口径・高台外径・器高は、前者が14.4cm、11.4cm、3.5cm、後者は13.6cm、10.2cm、4.6cmを計る。この坏B2類の時期は、低い形態・端正な方形高台からみて8世紀前半ではないかと思われる。

6の長頸瓶は、球胴に近く丸みをもって成形されるが、胴部最大径は上位にある。全面に赤色の発色する顔料が塗られている。瓶類にしては小型であり、口径7cm、高台外径8cm、器高20.6cmを計測する。完形品である。

7と8は、壺G類と呼称される長頸壺である。両者ともに口縁部のみ残存するが、8は回転で粘土を強く押しつけて引き上げた痕跡が明瞭に残る。これは頸部が太く、口縁部の開きが弱い。肩部の径は、推定で約8cm前後となり、7よりも小型の形態でないかと思われる。これは白みが強い色調をもっている。両者ともに、助宗窯の製品である。

本遺構出土の須恵器は、坏類は8世紀の前半、壺G類は8世紀末から9前半とかなり限定された時期である。従って、この間が流路として機能した期間であろうか。

石組み遺構（第37図、図版34）

第37図は、第3面の石組み遺構から出土したものである。須恵器坏B1類1点（1）坏B2類（2～4）が3点、土師器鉢二点（5・6）が見られる。また壺A類もそれらに伴う。

須恵器

須恵器坏類は、A類とB類の差と、高台の形態差はあるが、基本的には4点ともに器高が低く、口径が大きい形態であり、底部から体部への移行も緩やかなカーブとなる。時期的にも近似したものではないかと思われる。

土師器

5と6の二点の土師器鉢は、鉢C類としたもので、他の例が少ない形態である。他にはSC06（第42図-19）とSC02 第21図-62）から一点づつ出土する。両者ともに口縁部ナデ調整によりやや外反し、底部は丸底を呈する。体部と底部は厚くつくられ、体部と特に手持ちヘラ削りにより薄くする調整が認められる。法量は、5が口径8.8cm、器高8.8cm、6では口径9.6cm、器高8.8cmを示す。胎土は比較的精選され、色調はやや暗い。

SF09（第56図、図版35）

本遺構からは、2のひしげで扁平になった須恵器坏蓋が出土している。口径14.4cm、器高2.2cmを計測する。中型の坏に対応する蓋であろう。

SF10（第56図）

13と14の須恵器壺が出土する。いずれも口縁部破片である。

SF15（第56図）

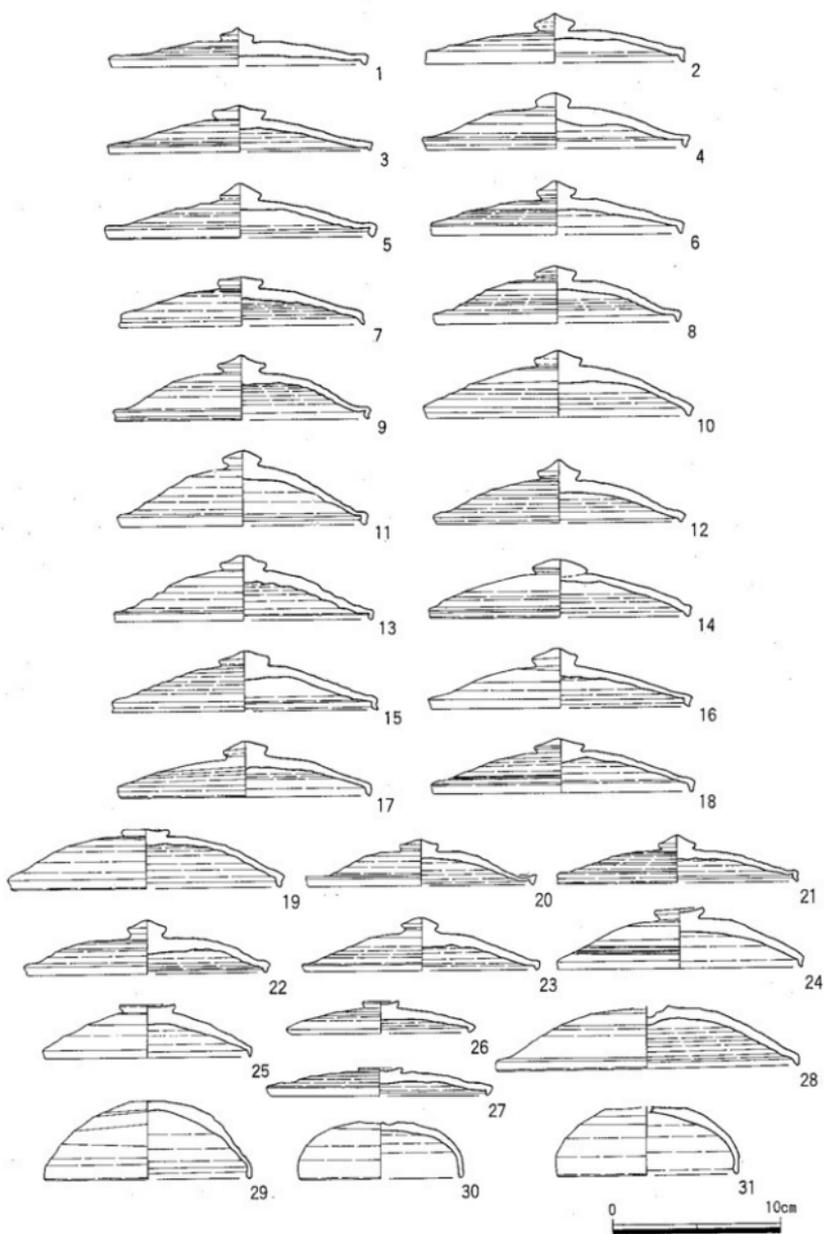
22の土師器壺C類が1点出土した。口唇は肥厚させ、口縁内外横ナデ、胴部刷毛目後へう磨きされる。これは、分布中心地域と同じ形態手法をもっている。色調は黒褐色である。口縁部径は19.6cmを計測する。

SF21（第56図）

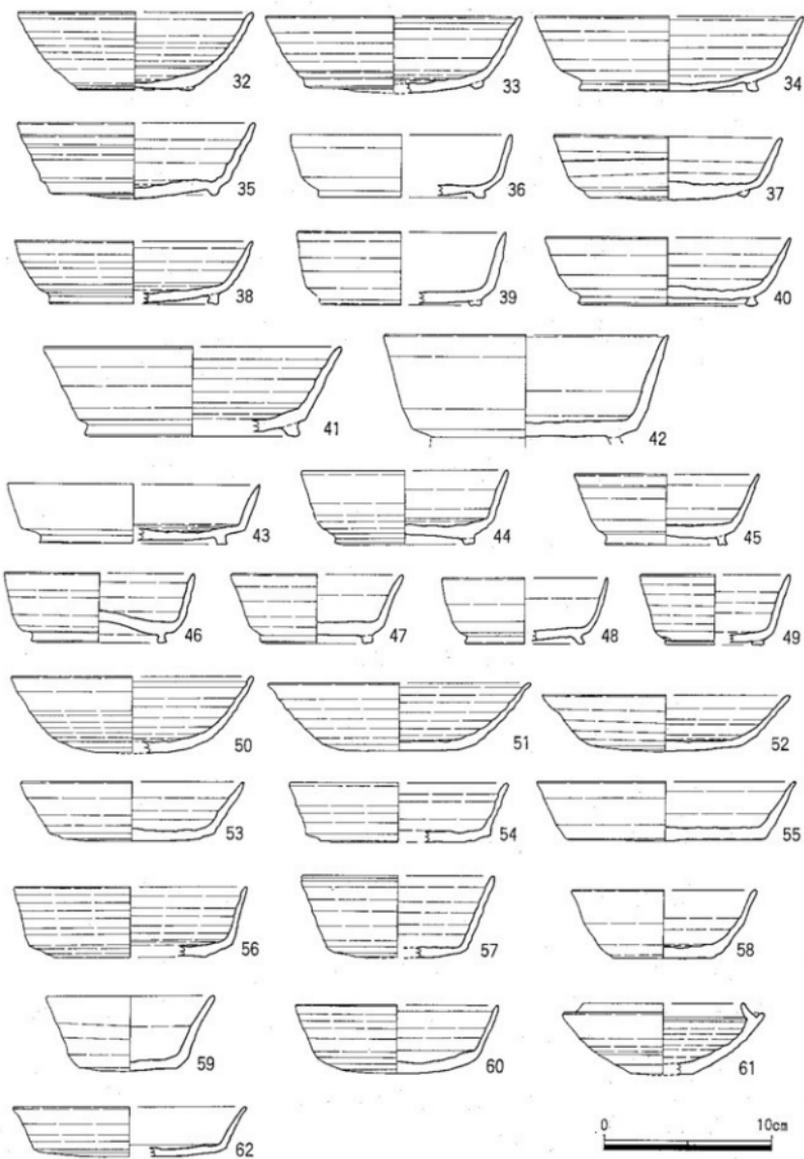
16と17の土師器坏が出土している。16は扁平で小型平底風であり、坏A2類に分類されるであろうか。17は他のどの土師器坏とも類似性のない形態である。口径15cm、底径10.6cm、器高6.4cmを計測し、扁平で、強い口縁横ナデ調整で明瞭な段ができる。

SF24（第56図）

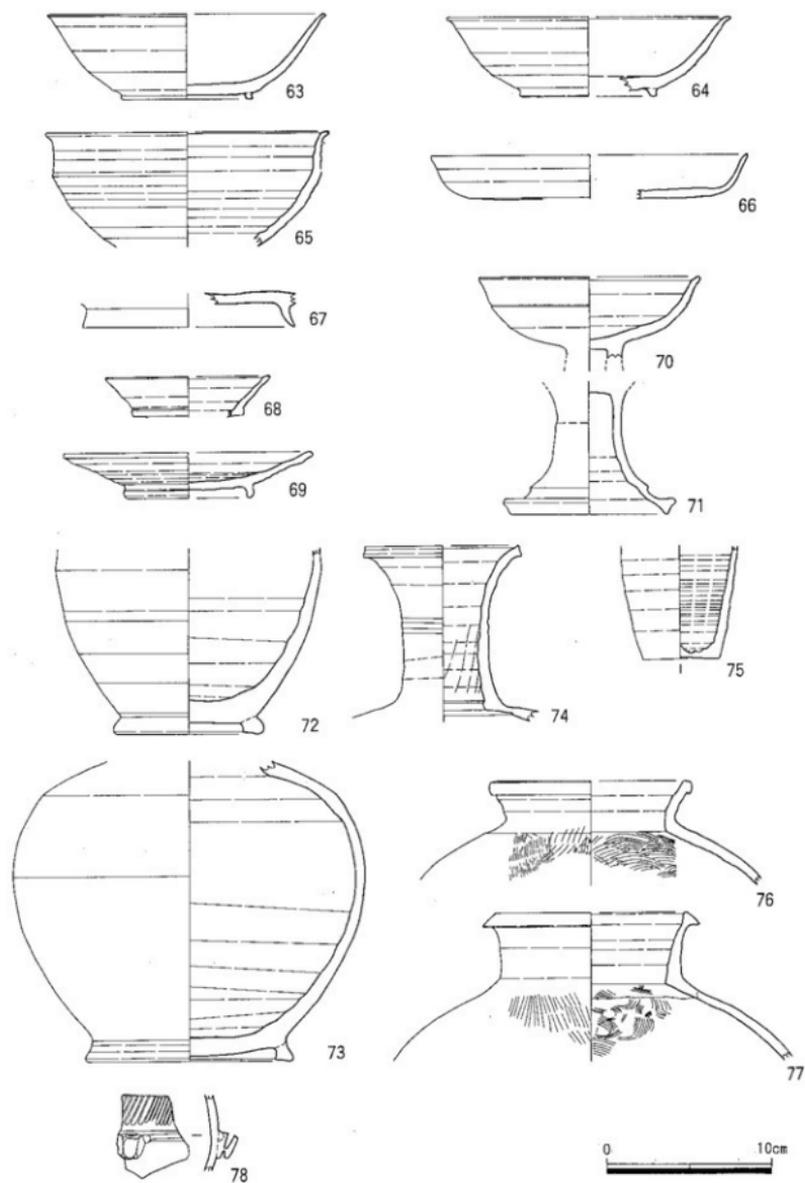
9の短頸壺が出土した。底部径は大きく、全体にズングリとしている。胴部は直線に立ち上がり、肩は強く屈曲し、その上には自然の降灰がみられる。口縁部への屈曲は緩く立ち上がっている。口径・



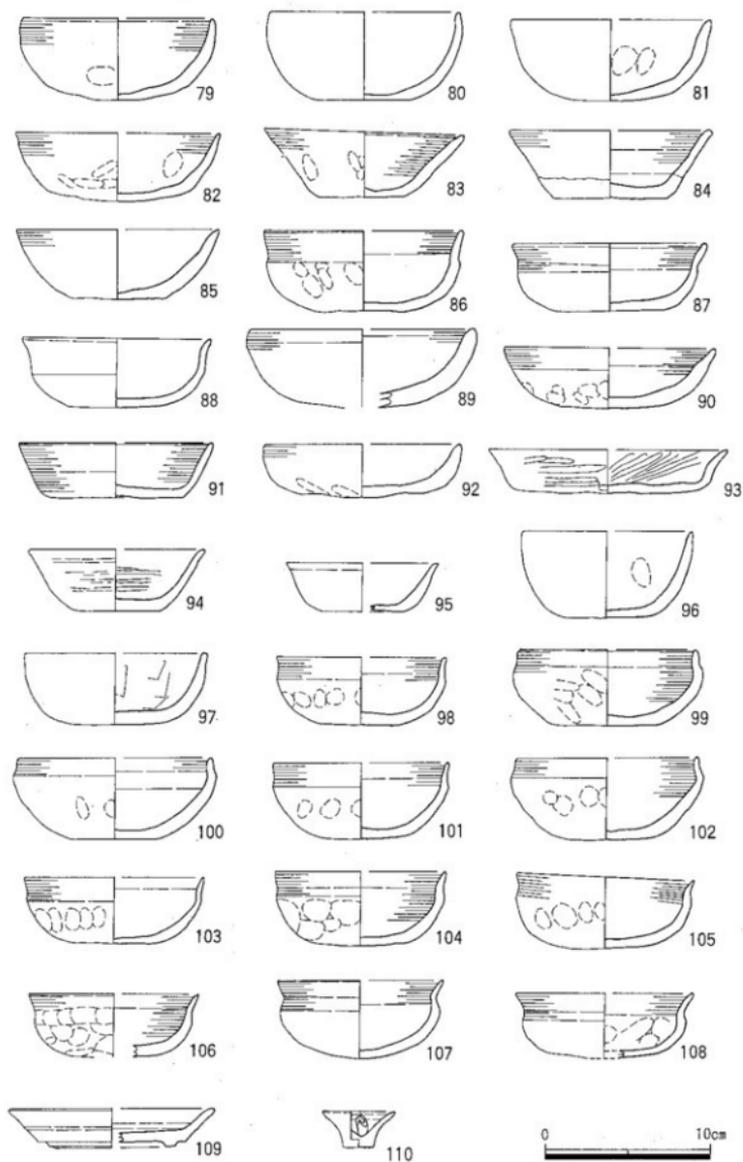
第58图 遺物実測図25 (律令期包含層 土器1)



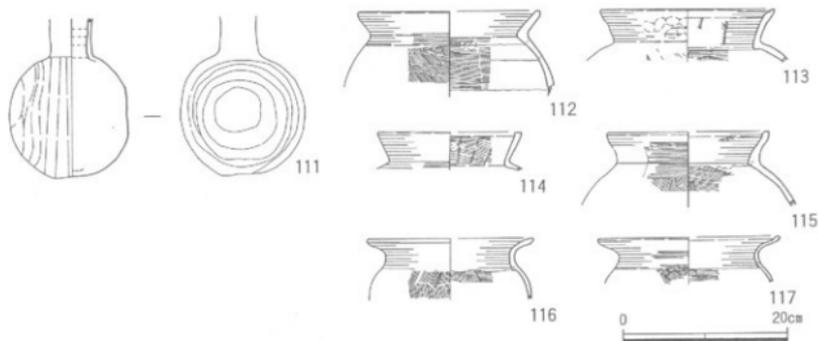
第59圖 遺物実測図26 (律令期包含層 土器 2)



第60图 遺物実測図27(律令期包含層 土器3)



第61图 遗物实测图28 (律令期包含層 土器4)



第62図 遺物実測図29 (律令期包舎層 土器5)

肩部径・高台外径・器高は、それぞれ7.8cm、18.6cm、13.1cm、13.2cmを計り、短頸壺としては小型の法量をもっている。

SF 28 (第56図)

図示した1の坏蓋と20の土師器甕C類が出土する。1は、端正な擬宝珠状のつまみが付けられる。器高は4.2cmと比較的高い。径は17.8cmである。

20は駿東型の甕である。口唇が尖り、内傾する口唇が面取りされるため断面三角形を呈する。分布中心地域のそれとは異なり、胎土は白礫・細礫が多く混入し、焼成は弱く、黄色で赤みの強い色調である。

SF 36 (第56図)

SC01を認知する以前に、SF36出土として扱ったもので、4・6の須恵器坏B 2類が2点ある。両者ともに、箱坏を呈しているが、器高が低い。6は外にやや尖る形態の方形高台で、口径13cm、高台外径9.3cm、器高4.2cmを計る。時期は箱坏であることを考慮すれば、8世紀中頃であろうか。

SF 37 (第56図、図版35)

体部へのへら削りが高い位置に及ぶ須恵器坏B 2類の5が出土した。底部は糸切り離しが食い込んだ痕跡がみられる。丁寧な手法で作られる箱坏である。これは、口径が12.1cmで、小型の法量をもっている。

SF 38 (第56図)

18は土師器で、口径8.4cm、底径6.7cm、器高7.2cmを示し、須恵器のコップ形態を模倣したものと思われる。指成形、口縁には横ナデを施し、口縁部直下と体部下半には指押さえによる凹みが生じている。遠江地域の精選胎土と明るい色調で、黄褐色を呈する。内側は板によりナデ調整される。ほとんど類例のないタイプの土師器である。

SF 43 (第56図、図版35)

須恵器坏B 2類が1点(7)と須恵器甕が二点(11・12)出土している。これらは当初、SC03が認知されなかった段階で、SF43として取り上げたものである。従って、先に述べてきたSC03に伴うとも推定されるが、一応取り上げた段階を優先してSF43出土としたものである。

7は、器高が高く、箱坏の典型のような体部形態を呈する。体部下半に回転へら削りがみられる。口径10.8cm、高台外径6.9cm、器高4.4cmと、小型の法量の坏である。

SP28 (第56図)

19の小型環が出土する。これは祭祀遺物にみられる形態で、SC02からも他の土製の祭祀遺物とともに出土する。他の環類は小型化すると平底風となること、口径は8.4cm、器高2.7cmを計ることから、形態・法量からみても、祭祀遺物の仲間ではないかと思われる。

包含層出土遺物 (第58図～62図、図版36～38)

須恵器

第58図には須恵器環蓋を図示してみた。つまみの付く形態の蓋27点と、合子状の環蓋3点を示した。つまみは、高い端正な擬宝珠がわずか、その退化形態が多い。中央部が凹むボタン状のものは、24から27の比較的小型のものに認められる。

第59図には、須恵器環A1類(50～52)、A2類(53～60・62)、B1類(32～35)、B2類(36～49)というような種々の形態が認められ、61は1点のみ合子状の環が出土する。

これらの環類は、遺構で述べたものが網羅されているという印象であり、特筆すべきものはない。産地について、図上での形態からいえば、高台の有無に関係なく、本体から底部にかけて、全体が丸い形態は湖西窯の製品であり、環A1類とB1類がそれに該当する。また環A2類とB2類は、基本的には助宗窯製品と推定した。

42は、高台を欠損し、多少歪んでいるが、口径は17cmの大型品であり、丁寧な調整で端正に作られる。他に大型品として、SC01から出土した図17-5があり、これは18cmの口径をもっている。

皿のような低い体部に高台のつく形態は除き、器高が高く輪環形態の助宗窯製品のなかで、最大の口径は20cm程度までは確認される。これらの事例は、大型のなかでも特に大きい法量を持ち、生産量も数少ない限定生産品であろうか。

全体の傾向として、助宗窯の方形高台・輪環の最終段階では削出高台と壺G類を共伴するが、本遺跡では削出高台の頻度は極めて少ない。図示できたのはSC01出土、図17-6のみである。このことは近接する川合内荒遺跡の8世紀末から9世紀前半の様相とは相違している。

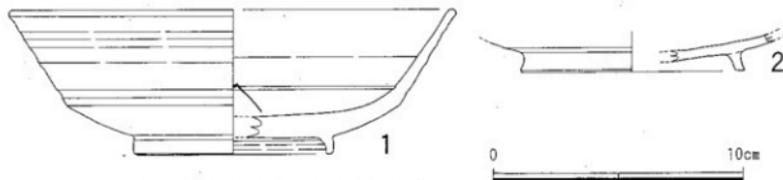
第60図は環類でない須恵器、灰釉陶器を図示した。内訳は、66が須恵器盤、65は鉢か、70・71は高環、68ははそうの口縁部、75は壺G類、76と77は甕、72から74は甕である。いづれも破片であるが、75は胴下半が残され、底部糸切り未調整、径は4.6cmを計測する。

66の盤は、遺構からの出土は認められない形態であり、丁寧に調整される。底部へう削り調整され、口径18.3cm、器高2.7cmである。

67は、土師器大型盤の底部と高台周辺である。

灰釉陶器

灰釉陶器は、63・64・69であり、63の碗は体部下半の回転へう削りが高く、内面のみ施釉され斑点状に発色する。64の碗も同様で、特に内面への施釉は濃緑色に発色する。両者は方形高台をもち、黒笹14号窯式期に比定される。69は皿であり、内面重ね焼き、高台は崩れた爪形を呈する。黒笹90号窯式期のも



第63図 遺物実測図30 (律令期 緑釉陶器)

のである。

土師器・その他

第61図は土師器環類を集めた。細部の記述は省き、ここでは形態分類を主として扱う。A1類は、89・90・92が、A2類では、85が認められる。また器高が大きく丸底のB類としては、B1類が、79・80・81・96・97が本類に含まれる顕著な事例であろうか。さらに口縁部のナデにより段が生じるB2類では、86～88、98～108が該当している。

図の表現では明確でないが、駿東型の坏が包含層より出土している。83・84・91・94の4点がそれに当たり、91は箱環の形態を模倣し、見込み部には放射状暗文がみられることから、8世紀後半の様相を残すが、他は9世紀から10世紀にかけての所産である。94の体部内面には横位のヘラ磨きが観察される。

93は体部内面に放射状暗文、全面丹塗りの土師器盤であ、指による成形と調整がされる。これは、遠江地域で8世紀前半に集中して出土する。

109・110は陶器であり、前者は体部が弱く屈曲する皿、後者は不明である。これらの時期は、奈良・平安時代より新しい。

須恵器・土師器

第62図には、須恵器横瓶(111)と、土師器壺A類(116・117)の遠江型壺と、C類(112～115)の駿東型壺を図示した。111は、SC01出土の第18図-22と類似形態・調整手法をもっている。

(2) 墨書土器(第64図、図版38)

今回の調査で出土した墨書土器は、墨痕とみられるものが観察された点数では30点を数えるが、大半が破片で、ごく一部の墨痕がみられる程度で、文字が判読されるものはその内の9点であった。包含層からの出土が多く、その性格を示すような遺構に伴っての出土やまとまった出土状況はなかった。年代も同一でなく調査第3面からそれ以降と幅がある。

判読された文字は「大伴母子若麻万呂」(1)、「千□□(犯カ)万呂」(2)、沙弥万(3)、「弥万呂」(4)、「」(岡)5・8、「川万呂」(7)、「俗月」(6)、「□檀」(9)で、

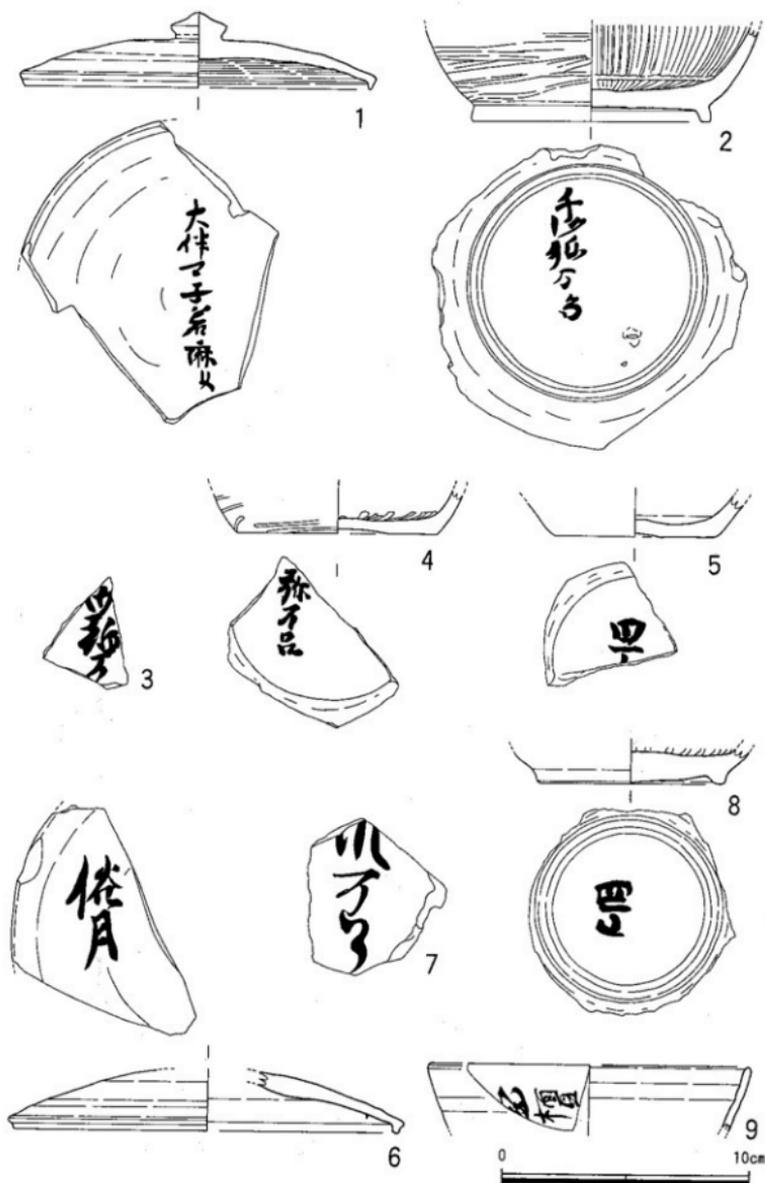
で、このうち複数の点数が確認されたものは「」(岡)だが、「沙弥万」「弥万呂」は合わせて「沙弥万呂」との人名とも考えられる。判読した文字では、人名を示すと考えられるものが多い。

「大伴母子若麻万呂」(1)は調査第三面上の包含層下部で離れた地点で出土したものが接合した。須恵器坏蓋の内面中央に一行墨書がみられる。坏蓋は復元径14.5cm・器高3.1cmを測り、宝珠型のつまみを持つ。

「千□□(犯カ)」(2)は土師器有台環の底部外面のやや上より一行墨書される。底部のみの出土で、張り付け高台の径は9.8cmを測り、中央には回転糸切り痕を残す。

「沙弥万」(3)と「弥万呂」(4)は土師器無高台環の底部外面の中央付近に墨書されていたものと見られる。中央に回転糸切り痕を残し周囲はヘラケズリされ、64-3の推定される底径は8cmを測る。土器の状況も似ており、前述のように両者は同じ「沙弥万呂」の墨書であった可能性がある。(岡)5・8)字は2点が確認されている。どちらも土師器坏の底部外面の中央に書かれている。1点(8)は張り付け高台の径は7.6cmを測り、中央に回転糸切り痕を残し、内面には放射状の磨きがみられる。他の一点(5)は無高台環で中央に回転糸切り痕を残す。この文字については同じ川合地区の内荒遺跡で7点・10点が確認されているほか、池ヶ谷遺跡でも例が見られるなど静岡平野北部で比較的その例が知られている文字である。

「川万呂」(7)は上下が破損しているためあるいは最初の文字が「川」でない可能性も残るが、人名とみられる。近接の内荒遺跡で「川万呂」が2点、またこれに近い「川万」等の文字の出土が知られ



第64圖 遺物実測圖31 (律令期 墨書土器)

地理的にも時期的にも近いことからその関連について注目される。

「俗月」(6)は須恵器坏蓋の正面に縦に書かれ、上下に続く文字はないようである。

「口撞」(9)は須恵器坏の側外面に横方向で複数の文字が書かれているが、破片であるため上の文字については判読できず、またこれに続く文字の有無も不明である。

なお、墨書土器等の出土文字資料については国立歴史民俗資料館の平川南教授にご教示とご指導を賜った。

土製品(第65図～67図、図版41・42)

土製品は、人形土製品、馬(動物)形土製品、ミニチュア土器及び土鍾が出土しており、このうち人形については、祭祀遺構としたSC02から集中的に出土している。他は大半が包含層からの出土であるが、土鍾は拡張区から多く出土し、出土地点に偏りが認められる。土鍾は実用品の可能性が極めて高いが、他は祭祀に使用された土製品と考えられる。

(3) 人形(第65図-1～10、図版41)

断面が円形または楕円形で、縦長の胴部と突起状の手足の表現をもち、指による成形と押圧調整を受けるものを人形土製品とした。第64図-10が欠損もあまりなく、その典型的な形態を呈していると判断される。

最も残存が良いと思われる10で大きさをみると、長さ5cm、手足は2.5cmから3cmを測る。図でみるように、これらの大きさはほぼ一定で、胴・手足の表現の差も認められない。きわめて類似した祭祀遺物といえるであろう。

これらの大半は欠損または激しく摩滅し、完形品と思われるものはない。残存の状態をみると、胴下半から足が残るのが6点(2～7)と多く、一部欠損するが胴部と手足を残すものが9と10の2点、胴部上半と手を残すものが8であった。このように上半身を欠く人形が多いことが大きな特徴といえる。

10点を図示したが、出土位置をみると4点がSC02から出土している(3・4・7・10)。さらにSC04からは1点(9)SC06からも1点(5)が出土し、図示した10点中、6点が明確な祭祀遺構から発見されている。他の4点は、包含層から出土した。

これらは、祭祀行為後の一括投棄に伴う遺物と判断され、かつ他の遺跡出土の事例と比較すると、一般的傾向としては、形態が形式化・簡略化されシンプルであること、かつ小型であることが指摘される。なおSC04・06から一点づつ出土した人形については、混入した可能性もある。

(4) 土鍾(第65-11～32、図版42)

長軸方向に穿孔を持つ円柱から紡錘形の土製品をまとめた。今回の調査では、合計22点の土鍾が確認され、基本的には調査第3面及びこれに伴う包含層の遺物であり、奈良時代の遺物と考えられる。遺構に伴って出土したものはなかったが、22点のうち17点が拡張区から出土しており、出土地点にはかなりの偏在が見られる。

大きさについては破損しているものも多いが、長さは2cm～4.4cm、太さは0.9cm～2.1cm、穿孔径も0.35cm～1.1cmとかなりのバラツキがある。重量は破損しているものも多いため比較対象とはならないが、現存重量では1.2～15gとバラツキが大きく、特に際立った集中は見られないようである。10gを超えるものは大型のⅢ・Ⅳ類の須恵質のものに限られ、Ⅰ・Ⅱ類はおおむね5g～10gの範囲の前半を中心に分布している。

ここでは外形により簡略に分類する。

I類

胴部の膨らみをもつものうち、細長いもの。次にのべるII類とその大きさ等では共通点が多いが、形状が細長い印象を与えるもの（長さで径の比がおおむね0.4以下）

6点（12・20・21・27・30・32）が確認されている。欠損しているものが多いが、長さは3cm～4cm程度、太さは1.2cm～1.5cmと大きさは比較的まとまりがある。また穿孔径は0.35～0.45cmとかなり集中している。

II類

胴に膨らみをもつもの内、I類に比し太いもの。

8点（11・16・17・18・22・23・26・31）が確認され数的には最も多い。長さは2.8～3.4cm、太さは1.4～1.7cmとI類に比べると形状によりやや太いが大体同様な大きさにまとまっているが穿孔径は0.4～0.7cmとI類に比べ大きく、形状の選択は必要とされる穿孔径により行なわれたと考えられる。

III類

II類と同様胴にふくらみを持ち太い形状だが、端部に向取りがなされるもの。

5点（13・14・24・25・28）が確認されている。長さは2.9～4.4cmとややバラツキが大きいが大さは1.8～2.1cmとかなりまとまる。I・II類と長さはさほど変わらないが、かなり太く続くIV類と共に大型の一群である。また5点ともに須恵質でこの点でもIV類と共通する。穿孔後も0.65～1.1cmとややバラツキがI・II類と比べかなり大きい。

IV類 胴にふくらみが見られないもので、大型のもの。

2点（15・29）が確認された。胴に膨らみが見られないといった形状ではV類に近いことになるが、大きさはじめと印象は大きく異なり両者は異質である。長さは4.05cmと3.37cm、太さは1.65cmと2.02cm、穿孔径0.8cmと0.85cmのように大型である。須恵質であること、サイズ・穿孔径などからIII類と共通点が多い。

V類

胴に膨らみが見られないもので、小型のもの。

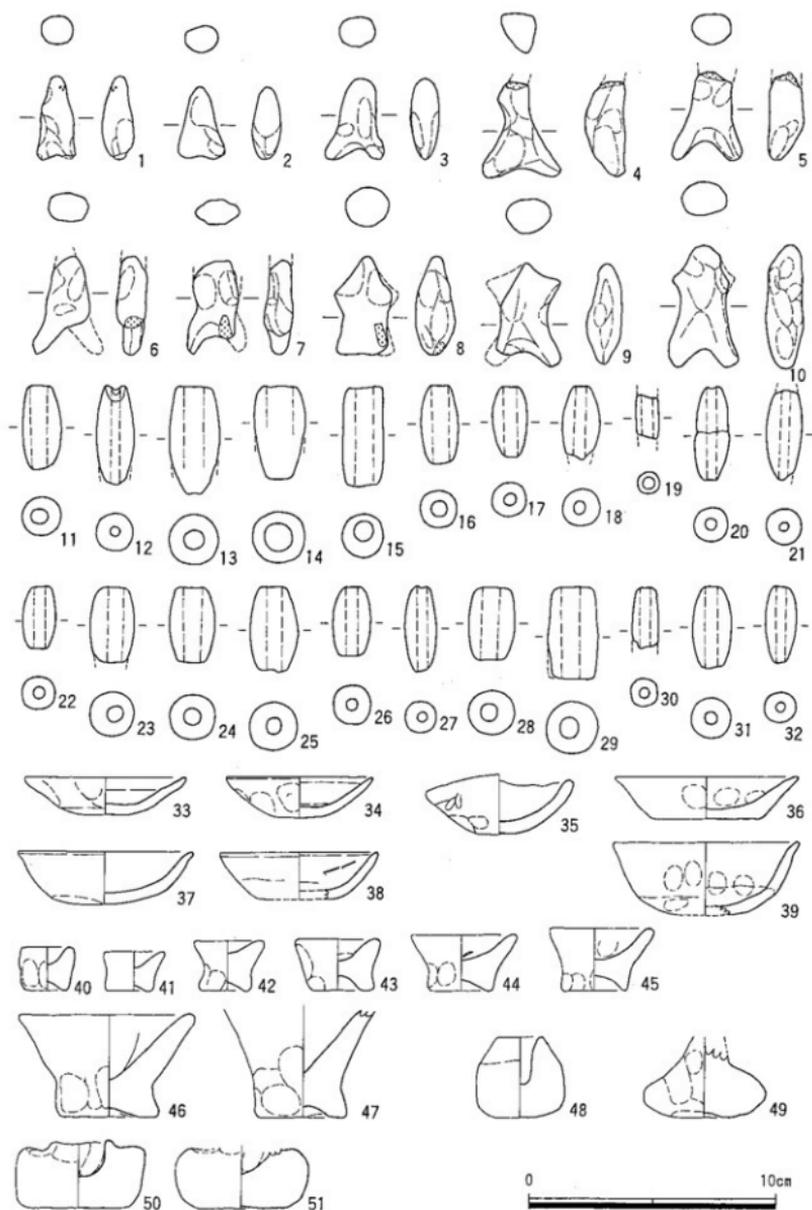
1点（19）が確認されている。上下両端ともに欠損しているが、残存長1.76cm、径0.9cmを測る。大型のIII・IV類だけでなく、比較的小型のI・II類に比べても際立って小型であるが、穿孔径は0.5cmとやや大きく、器壁が薄く作られている。他の土鍾とはかなり異なった印象を受け、鍾としてより、管玉形土製品として祭祀遺物と考えられる。

以上見てきたように、V類は他と比べ異なった性格が窺われ祭祀遺物と考えられる。またI・II類とIII・IV類はその大きさ等に共通点があり、両者とも土鍾としての実用性も備えている。それぞれの共通する性格・用途があったと思われるが、出土状況や遺物の状況からでは各々の用途は判断できない。

(5) ミニチュア土器（第65図-33～51、図版42）

図示したように、環形を呈するものが7点（33～39）と、脚付の鉢形を呈するもの8点（40～47）須恵器の平瓶形を呈するもの2点（50・51）不明2点（48・49）がある。これらの出土位置は第三面からで、なかでも調査区の南半に集中し、遺構に伴うものとして、37・39・44・45がSC02から、33・35・38・46は石組み遺構から出土している。出土は祭祀遺構の集中する地点と重複する傾向にあることから、これらの祭祀遺物は本来一括廃棄された結果、散在したものではないかと類推される。

環形を呈するものは指による成形・調整を受け、なかには粗いナデを施すもの認められる。形態は、大きく、扁平で器高の低いものと（33・34・36・37・38）、底部が丸底風で器高の高いもの（35・39）が認められる。大きさの大小を前者でみると、小さい33と大きい36の口径・底径・器高は、6.6cm・2.2cm・1.5cmと、7.5cm・4.5cm・1.8cmを測る。さらに器高の高いものでは、37は7.1cm・3cm・2.2cmを計測する。環形の



第65図 遺物実測図32 (律令期土製品、人形ほか)

器高の高いものとして二点あげたが、両者の形態は大きく相違し35は小型で底部が小さく34に類似し、39は底部が大きく全体に大型である。35と39の口径と器高は、3cmと2.2cm、7.6cmと3cmである。これらの色調・胎土は実用品としての土師器環類との相違はなく、比較的胎土は精選されかつ焼成も良好であり、色調は明褐色を呈するものが多く認められた。

脚付の鉢形を呈するものは、坏形と同様に指成形・指調整を受けており、各々類似した形態もっている。それらの個体差は形態より大きさに顕れており、大型と小型の区分が明確に認められる。まづ小型のものは40～45の6点であり、口径2.2cm～4.3cm、底径1.8cm～2.6cm、器高1.6cm～2.6cmの間に分布している。さらに大きさを観察すれば、40と41、42と43、44と45は大中小の三種類に細分可能なような近似した値を呈する。

46と47は脚付の鉢形でも大きいもので、形態も体部が脚部より大きく表現される。成形・調整・胎土・色調は小型との差はみられない。完形品である46の大きさは、口径7.2cm、脚径3.8cm、器高4.2cmを示す。

(6) 馬形土製品 (第66図・67図、図版41)

42点図示可能であったが、飾馬の事例は一点あり、鞍と思われる表現が第67図-42に認められる。他はすべて裸馬の事例である。後者は藤原宮以降の時期に出現する都城型土馬といわれる簡略化された裸馬で、成形・調整は、先述した人形と類似し、指で頭部と足をつまみ出して突起状とし、ナデ調整を施す。これらのほとんどはどこか部位が欠損している。これらのなかで、ほぼ完形を保つ例がわずかに見られ、第66図-1・4・18と第67図-35・36の5点がそれに該当している。

これらは本来祭祀遺物という性格から、きわめて近い時期で一定の場所で使用されたものと推定され、42点中24点がSC02から、人形土製品・ミニチュア土器とともに出土している。他の馬形土製品もこの周辺の出土が多い傾向が指摘される。ちなみに、SC02から出土したものを列挙してみる。

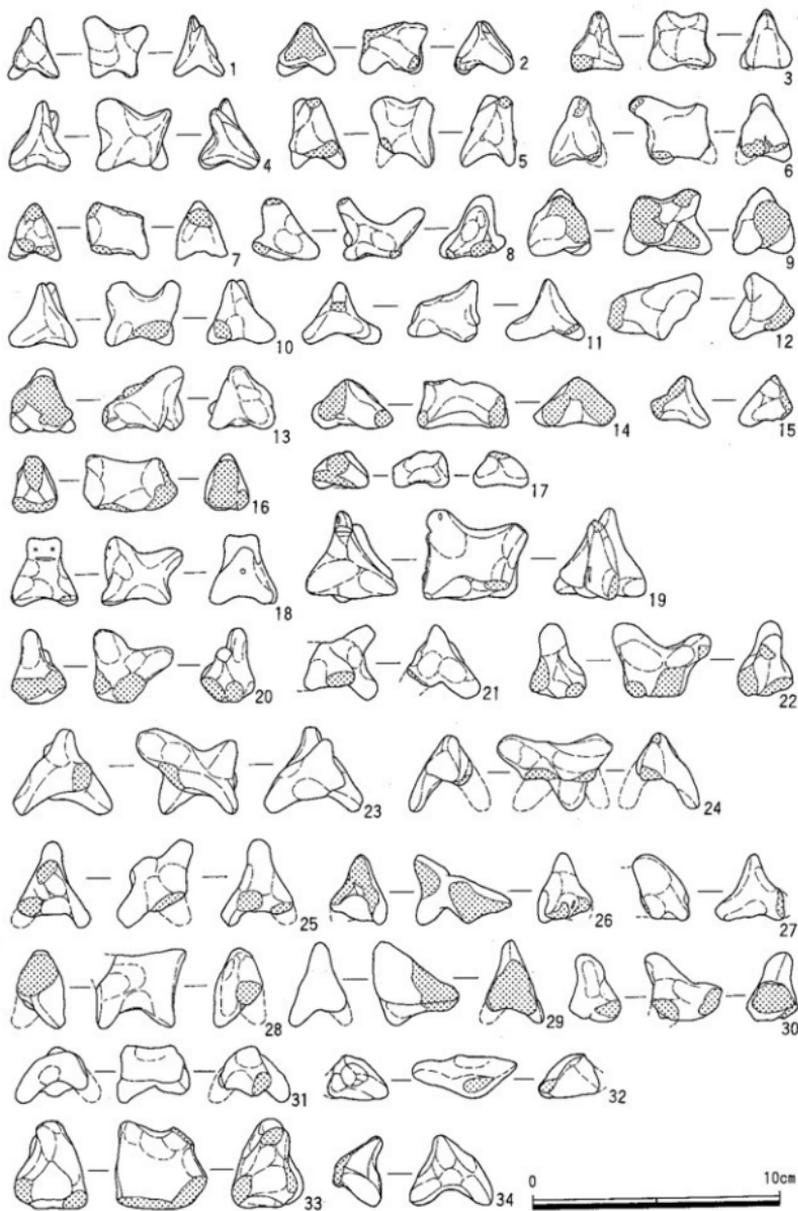
第66図-1・2・4・5・7・9・10・13・15・20・21・23・24・25・26・29・30・31・32、第67図-35・36・39・40・42

本遺跡から出土する馬形土製品は、本来の形態が不明で形態や手法の観察が容易でないことと、成形・調整に大きな差異が認められないことから、この記述では気付いた事柄を指摘する程度としておく。これらは形態からみて、大型で指頭押圧痕を残す飾馬と、極端に省略された小型の裸馬の二者が認められる。前者は、先に冒頭で指摘した鞍と思われる表現のある第67図-42であり、同図41も大きく指頭押圧が明瞭に残ることから42と類似した形態と判断される。42は、全体的に断面楕円形の筒型の胴部に、鞍と足が低い突起状に付けられる。指頭押圧により成形され、ナデ調整を受けている。一方の端部が欠損しているため大きさは不明であるが、残存する値を計測すると、長さ7.5cm、幅2.5cm、高さ4.6cmを示す。ちなみに41では高さ4cmを示し、大きさからも類似する形態であることを類推させる。

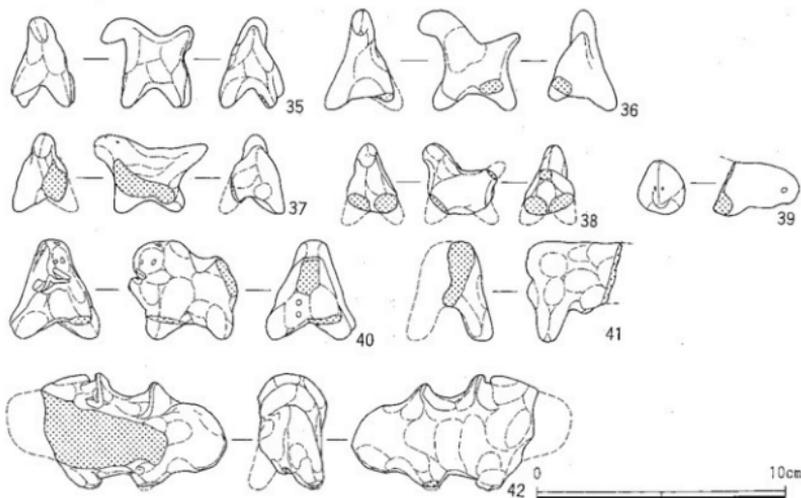
大半を占める後者の都城型土馬の形態を観察すると、細部においてわずかであるが幾つかの特徴が認められる。これらは、頭部と思われる突起部分が屈曲し下を向く例(第67図-35・36)、目と口が刺突と線刻で表現されるため頭部が突起状でなく扁平となる例(第66図-18・19、第67図-40)が認められる。このように極端に省略される裸馬形態の後者では、もはや馬という形でなく第一印象からいえば、犬に近いというような感覚を強く受けるまでに変化している。

凡その大きさは、目と口が表現される18では最大値で、長さ3.1cm、幅2.8cm、高さ2.8cmを示す。やや大きい19は、長さ4.2cm、幅3.3cm、高さ3.7cmを計測する。さらに長さは不明であるが、最も大きいと思われる40は、幅3.6cm、高さ4cmである。

また頭部が屈曲する35では長さ3.7cm、幅2.6cm、高さ3.6cmを計測し、36はそれぞれ4cm、2.8cm、4cmと近似した値を示している。



第66圖 遺物実測図33 (律令期 土製品 馬形1)



第67図 遺物実測図34(律令期 土製品 馬形2)

極端に省略され突起状の表現のみの場合は、さらに小型化がすすみ1では、長さ2.6cm、幅2cm、高さ2.5cmとなる。同様に他を計測すると、4は3cm、2.5cm、2.5cmであり、やや大きい23では、それぞれ4.1cm、4cm、3.4cmを示す。他も本来の大きさは、およそこれらの値の範囲に納まるものと推定される。

このように本遺跡の馬形は、土製品のなかでは最も多く出土する種類であるが、その形態や手法に明確な差異は見られず、きわめて限定された時期に、限られた一定のメンバーにより作成されたものと推定される。

都城型土馬の出土する周辺の遺跡では、静岡市神明原・元宮川遺跡、藤枝市郡遺跡をあげることができ。

(7) 木製品(第68図～74図、図版43～51)

本遺跡からは図に示したような多種多様な各種木製品が出土する。種類ごとの内訳をみると、曲物・皿・碗・剣物といった容器類、農具の柄と推定されるもの、上部に刻みの入る付け札状の細長い板、角状の木筒、馬形、馬の描かれた絵馬、下駄、櫛、スプーン状木製品、火きり臼等が出土している。なかでも曲物等の容器類は多く出土する傾向があり、これは周辺に所在する宮下・内荒遺跡の状況と類似している。

なお遺構を構成する部材として、SH01には柱根(第46図)、SP69は礎板(第49図)、SE01(第54図・55図)は井戸四隅の柱材と横板材がある。これらは先に遺構で記述しているのので、これからの説明のなかには含めず省略する。以下、種類ごとにその概要をまとめてみる。

曲物(第68図・69図、図版43～46)

曲物は24点を図示した。これらの円板と側板の結合方法は、円板の内面周縁を一段低くつくり、ここに側板を立て樺皮で結合するものと、円板と側板を木釘により結合する方法の、大きく二種類が認められる。前者は第67図-1～4の4点を数え、なかでも1・2・3・4には樺皮が断面で示した箇所に残存しているのが観察される。この方法は、樺皮結合曲物A(奈文研 1985)という方法に近いが木釘は使

用していない。

後者は、第67・7～9と第68図に掲げた18点である。なかでも7は高さ5cmの側板が固定されたままで出土しており、この結合方法の実際を如実に示している。側板は円板本体に接する内側と、さらにその外側をめぐる2.2cmの低いものとの二枚から構成され、円板の周囲四箇所から木釘が打たれている。樺皮は、一列内三段綴じで、残存は良好である。側板内部には縦方向のケビキが認められる。

さらに木釘の痕跡は、8・9・10・11・12・14・15の7点にも認められる。しかし16～24の9点には、円板に施された木釘の跡が明確には観察できない。これらの結合方法は明確でないが、円板内側の段と樺皮の痕跡は認められない。またこれらには、残存する範囲で、1.5cmから2cm程度の円形の穿孔がある。18と20は中央付近に一ヶ所、21は大きめの孔が一ヶ所程度縁に近い位置、さらに24では縁に寄った位置に二ヶ所の孔が認められる。これらは曲物板から他の目的に転用されたと推定される例である。

曲物円板の直径は、一部推定値も加わるが、最も大きいのが1の18.7cmであり、最小は遺存状態が良好の7で11.9cmを計測する。また23は楕円形の曲物の可能性もあり、復元径は25cmを示す。

前者の樺皮結合と、後者の木釘による結合には法量分布からみて大きな特徴がある。前者の直径は、それぞれ、1が18.7cm、2は16cm、3は17cm、4が16.4cm、5は15.4cmであり、いずれも15cmを超える。一方の後者は小型の直径をもち、7(11.9cm) 8(18.2cm) 9(16cm) 10(10.6cm) 11(11.6cm) 12(12.2cm) 16(10.6cm) 18(11.6cm) 21(12.3cm) 22(9.8cm) 24(34.8cm)を計測する。このなかで30cmを超えて前者の法量に近いのは24のみであり、他は15cm以下が多く、さらに9cmから12cmの間に12点中6点が集中している。両者合めて、これらは身と蓋の関係にあり、相互に近似する値を示すものがより一対の関係に近いといえる。

曲物の作成方法で一点のみ他と異なる手法が認められるのが、6の例である。これはわずかに段があり、4mmから6mmの小孔を対に穿ち、円板の全周を6分割する程度の間隔で配置されるようである。この小孔は紐を通すのが適当と思われる、可能性としては他の用途に転用された段階での穿孔という可能性も考えられる。

以上述べてきた曲物のなかには、炭化した痕跡が5点(2・8・10・16・24)認められる。その範囲も8のように全面に及ぶものと、小さく円形を呈するものがある。

これらの曲物は3・4面ともに出土するが、遺構に伴うものは僅かであり、SX01から4が、SR01からは2と7、SR02では6と8がみられるのみである。他は包含層からのもので、1・5・10～12・16・18・22・24が第3面から、第4面からは3・13・23が出土する。なお19と20の二点は、第一面からの出土であるが、二点と数少なく曲物ということでこの節に含めた。

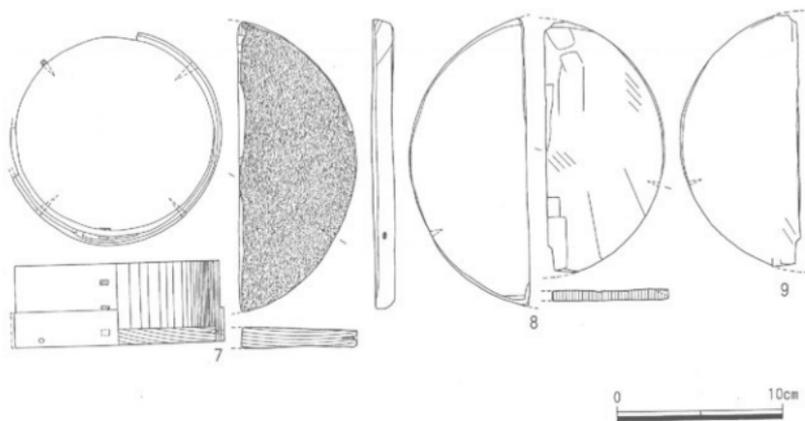
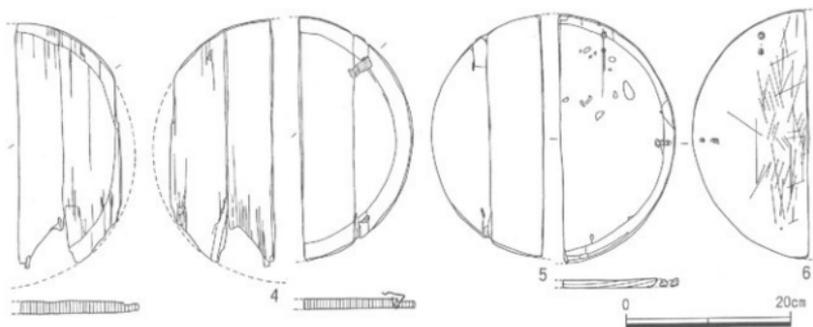
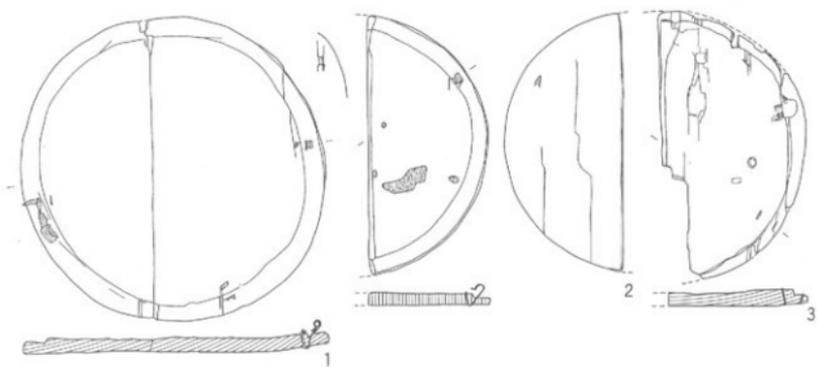
挽物容器(第70図、図版47)

図示したような挽物容器が6点確認された。形態は25から28の4点が盤状、29は高台付きの皿状を呈する。30は無高台の環形土器に類似した形態をもっている。盤については25と26の断面でみるとおり、底部内面から口縁部まで、6mmから1cm程度の弱い立ち上がり、底部は平らに焼き出している。

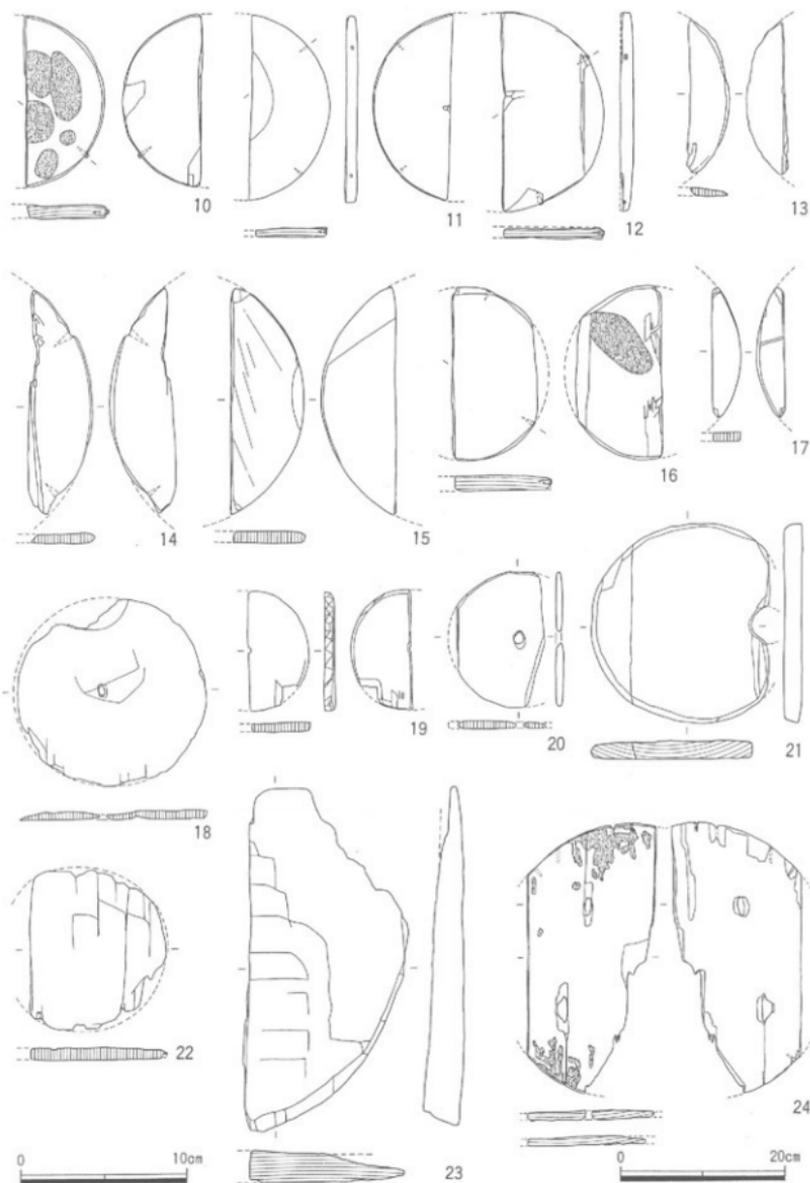
直径をみると25では18cm、26は17cm、27は11.5cm前後を計測する。これらは、基本的には土器類のサイズを反映した法量をもっている。なおこれらの内外面には刃物痕のような傷跡が顕著に認められる。29は口径14.8cm、厚みは底部中央で0.7cm、最大の厚さ2cmを測る挽物の高台付き皿である。皿部は口径2cm幅で水平な平坦面をもち、そこから中央部へ緩やかに6mm程削り込む。高台部は直径が10cmあり内側の削りは省略されている。これも土器と近似した法量をもつといえる。

30は無高台の碗状を呈する挽物容器であり、推定値は口径13.6cm、底径7.6cm、器高4.6cmを示す小型の容器である。対部は直線的に大きく開き、口縁部は先端がやや尖る。

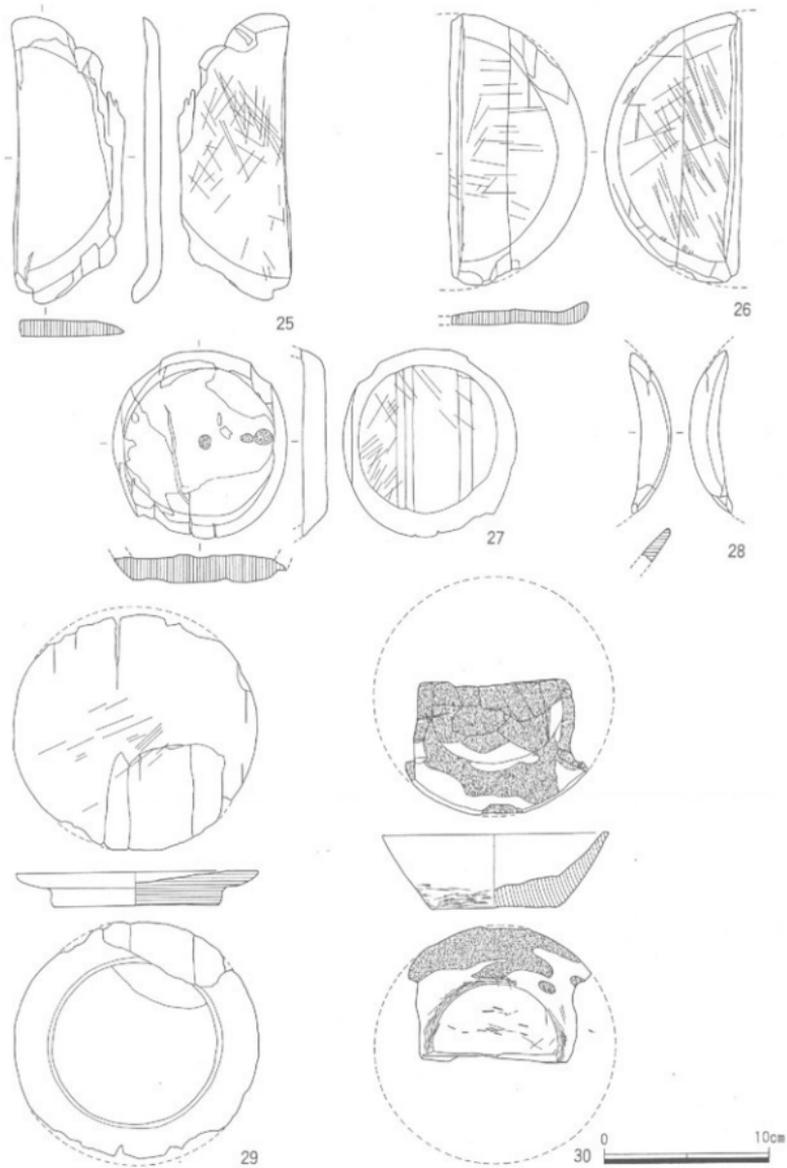
これらの出土位置は様々であるが、SR01から26、SR02では27、SX01には29・30が出土し、他は包含



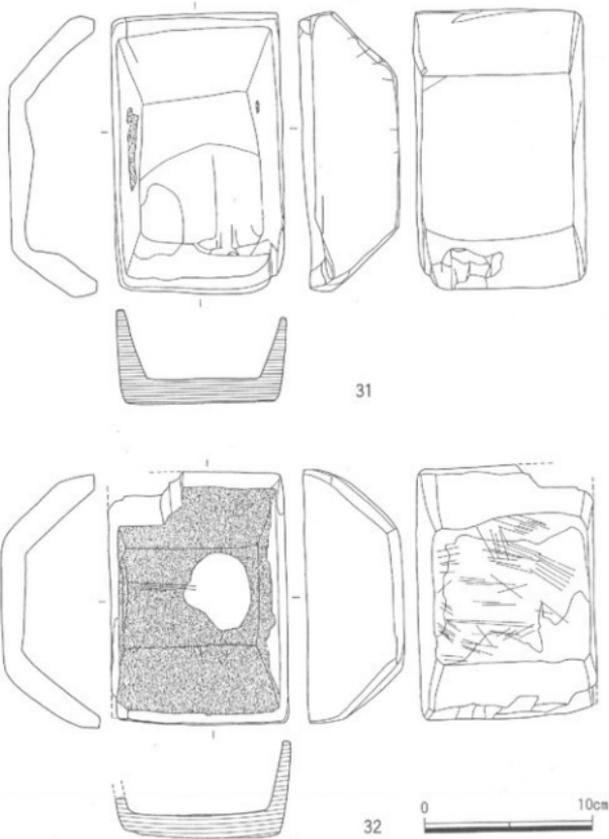
第68図 遺物実測図35 (律令期 木製品容器1)



第69圖 遺物実測図36 (律令期 木製品容器 2)



第70図 遺物実測図37 (律令期 木製品容器 3)



第71図 遺物実測図38 (律令期 木製品容器4)

層からのもので、25は4面28は3面に伴った。なお30は内外ともに見込み部(底部)から、口縁部にかけて約三分ノ一程度が炭化している。

刳物容器 (第71図、図版47)

刳物容器は、ほぼ原型を残す31と32の2点が出土した。2点ともに長方形で、断面逆台形を呈し、丁寧に削り調整されている。31は4面のSR02から出土したもので、板目を使用している。長辺17cm、短辺10.1cm、器高5.7cmを計り、見込み部の削りが平坦でなく、図で示したように中央付近が盛り上がる。

32も4面SR02から出土したもので、31と同様な形態の刳物容器である。一部体部から口縁部を欠損するが、全体の形態は推定される。長辺15.3cm、短辺10.6cm、器高5.8cmを計る。これは内外ともに平滑に削り調整されている。図示したように、内面の大半が炭化している。

農具 (第72図-1~6、図版48)

農具としては、泥除け、鎌に使用したと推定される柄が出土している。

1～4は泥除けに使用されたものであるが、4は第1面に伴って出土したものである。参考としてここに掲げた。他の三点は第3面から出土したものである。

1は半裁された状態と推定され、形態は中央部に膨らみをもつ長方形であろう。長さ27.1cm、幅9.5cm、厚さ0.8cm～1cmを示す。柄が挿入される孔は計測不可能であるが、比較的大きいと考えられる。2と3は直径16.3cmと19.1cmの円形を呈し、柄孔の形態は2では約15cm程の方形、3は太い円形と思われるが計測は不能である。さらにこの3は、縁がわずかに立ち上がるのが確認される。

農具の柄と考えられると滑り止めの突起のつく製品が二点出土している。5は柄の全体が判明する例であり、長さ17.6cm、断面は楕円形で直径2.9cm程と推定される。先端に弱い突起の滑り止めがあり、もう一方には、本体のホソ孔に挿入された結果収縮したと思われる痕跡が認められる。6は本体部寄りを欠損するが、長さ20.5cmで、断面は長方形を呈し、幅4.7cm、厚さ1.5cmを測る。これは四面の面取り加工がされ、丁寧な加工がされている。なおこの柄頭には、0.8cm 0.4cmの長方形の穿孔が施されているが、紐等の擦痕等は認められない。

これら両者ともに、農具の柄と推定されるが断面の大きさ等からみて、大きな力の加わる道具にはならないと考えられる。5は4面、6は3面から出土している。

付け札状木製品（第72図-7～11、図版49）

図示した木製品は5点、そのうち7～10の四点は端部両側面に刻みが入る。11は先端付近の刻みはなく、小さい穿孔が施される。形状は一般的に荷札木簡といわれるものと類似しているが、幅に比較して寸詰まり、かつ板に厚みのあることが特徴となっている。大きさをみると前者で最大と最小の7と10では、長さ13.2cmと9.3cm、幅3.3cmと2.3cm、厚み0.9cmと0.6cmを計測する。これらの4点はそれぞれ近似した値ではあるが、各々長さ幅厚さに若干の差をもっている。これらの出土位置は、7は4面、8～10は3面から出土したが、9は唯一遺構に伴ったものでSR01から発見された。11も含めてこれらの形状は類似しており、用途は共通したものでなかったかと類推される。

一点のみ出土した11は長方形の板状で刻みはないが、端部中央に穿孔をもつ。3面から出土したもので、長さ11cm、幅2.6cm、厚さ0.9cmを計測する。なおこれらには墨痕及び墨書の痕跡は認められなかった。

木簡（第72図-12、図版49）

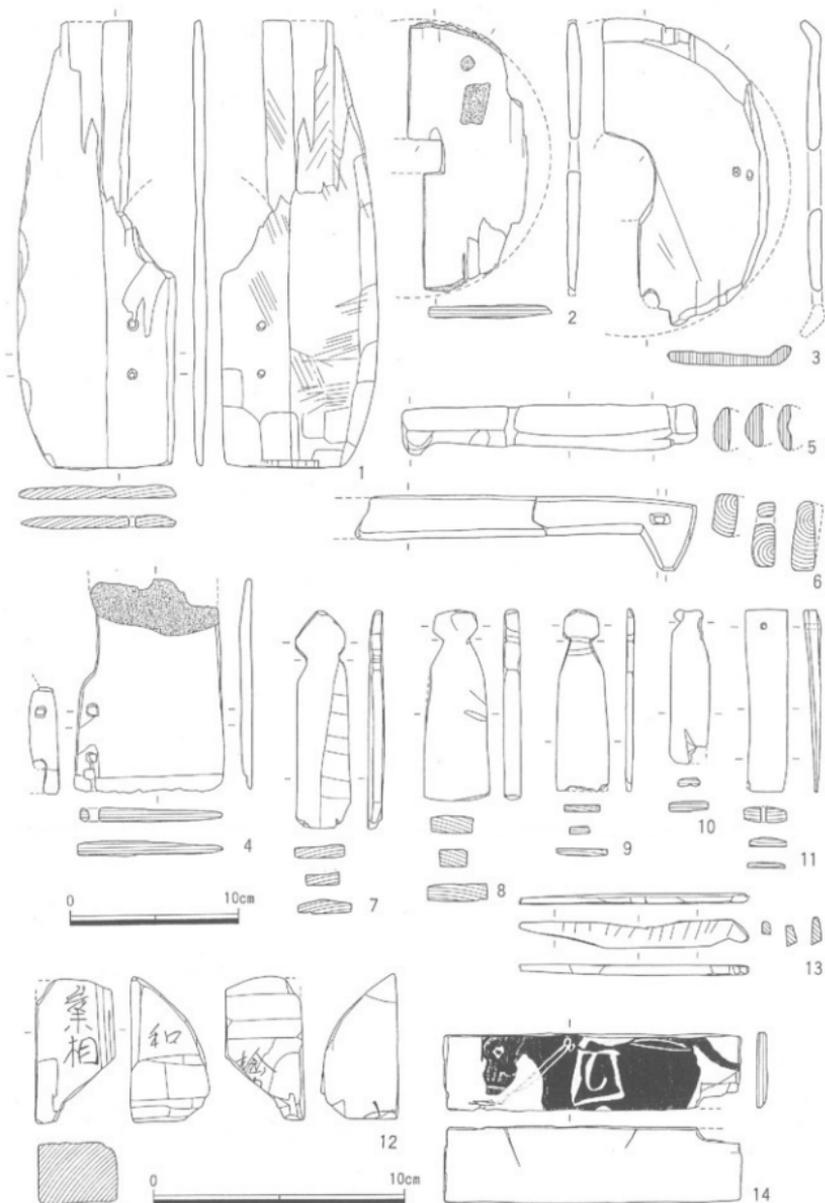
木簡は当初の形態を止めるものでなく、他の用途に転用された結果、図に見える墨書が残ったものと推定される。断面が3.2cm 2.5cmの正方形に近い形態で、三面に墨書が認められる。図示したように、「□相」「和」「檢□」などのように判読される。この木簡は図示した左側から右にかけて、冒頭の文字が一字分の間隔を下げて記載されている。この角柱状の形態は周辺での出土事例もなく板状でもないが、木に墨書されることから木簡の一種と考えた。これは、4面の最下部から出土した。なおこれも墨書土器等の文字資料と同じように、国立歴史民俗博物館教授・平川南氏に教示をいただいた。

絵馬（第72図-14、図版49）

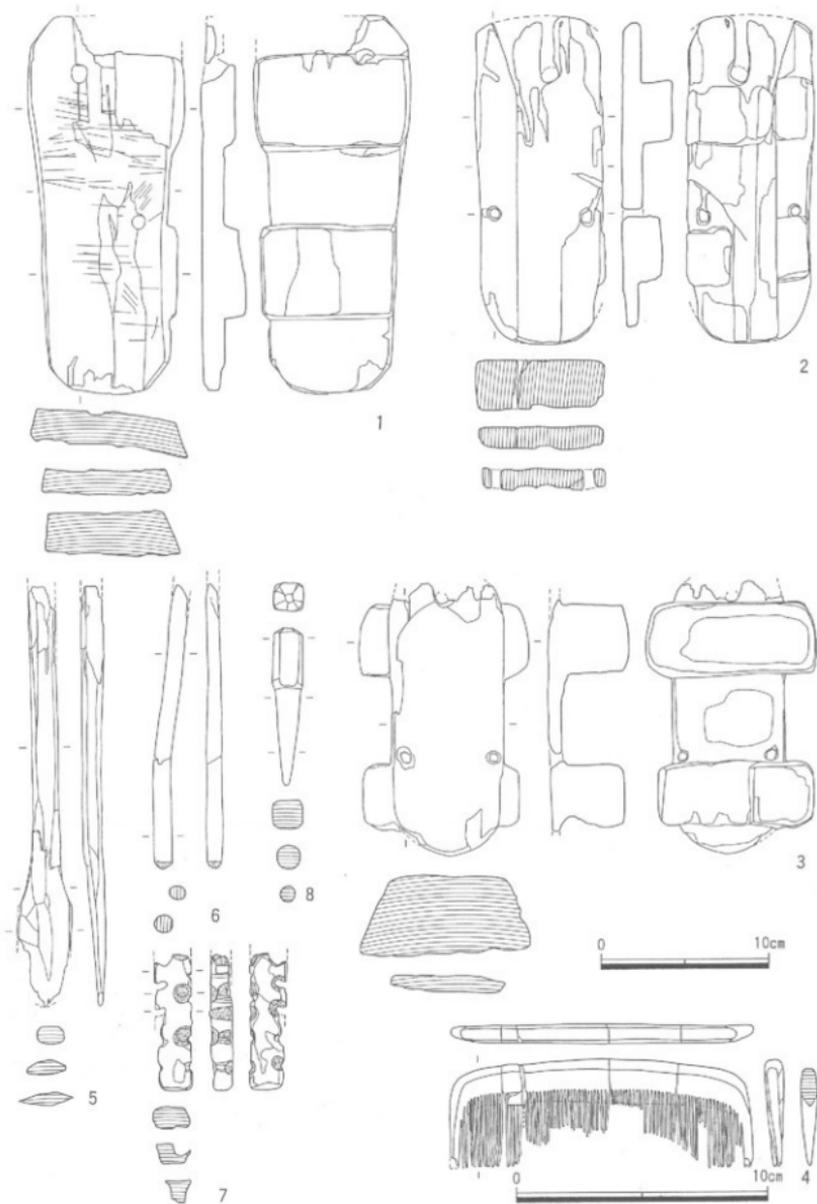
4面拡張区、SP130から出土した。上下は欠損するが、横幅は11.8cm、縦3.1cm、0.4cmの絵馬である。残存する縦の長さは3.1cm、厚さ0.4cmである。馬の側面の姿を墨で塗り、朱描きで手綱・鞍・馬尻を描く。またこれに赤外線をあてると、肉眼観察ではみられない顔面の様子（特に目）が認識できる。

馬形木製品（第72図-13、図版48）

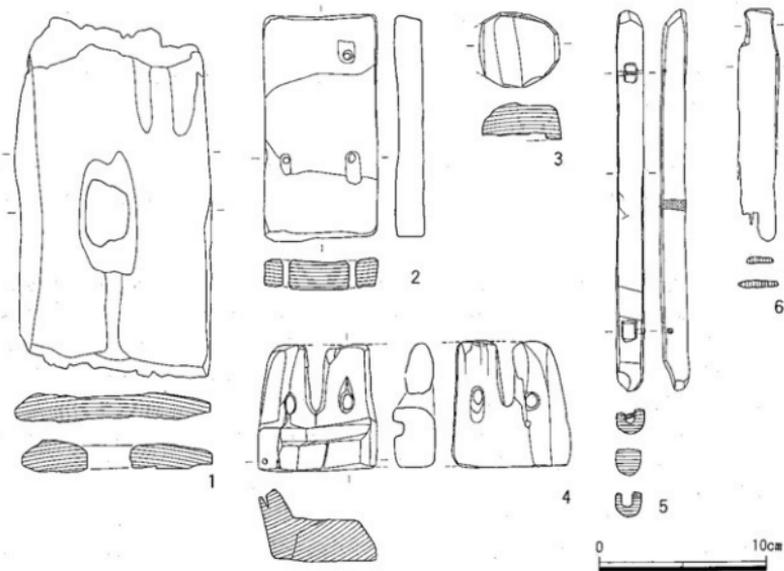
馬形代と思われる板状の木製品が一点、4面から出土している。扁平な板材の四側面を削り馬の側面形を表現している。この事例は今回の調査で一点のみ出土したもので、胴から尾にかけて細長い裸馬である。図の右側が頭部と思われ、これは短い突起状に表現されている。また逆の尻尾は、細長く立ち上るように表す。なお背中の中央は僅かに抉られるため、凹んだような形状を呈し、腹部は直線で表現



第72図 遺物実測図39 (律令期 木製品農具ほか)



第73図 遺物実測図40 (律令期 木製品 装身具ほか)



第74図 遺物実測図41 (律令期 木製品 用途不明)

される。大きさは、長さ13.6cm、最大幅1.6cm、厚さ0.6cmを計測する。

下駄(第73図-1~3、図版50)

下駄は3点図示したが、律令期のものは2点で3面から1・2が出土し、3は近世の1面からの出土である。1は下端部の角が丸く、上端部を大きく欠損する。平面の形は長方形でなく、上端部にむかって広がる形態を呈する。しかし、三ヶ所確認されるべき鼻緒の穿孔が一ヶ所不明であり、かつ下端部に向かって幅が狭くなることから考えると、この不明の穿孔は削りにより消滅した可能性がある。これは長さ22.9cm、本体の厚さ1.6cm、上端部の推定幅は9.4cm、下端部は7.2cmを示している。鼻緒の付けられる三ヶ所の穿孔位置のうち、頂点にあたる孔は中心より約1.4cmずれており、右足用の下駄と判断される。歯は幅が4cmと広く削りだされ、使用痕跡も顕著に認められ、最も残存する後歯でも、本体から約1cmの厚みを残すのみである。

2は下端部が丸く1と類似しているが、上端部はほぼ直線的で隅丸形である。平面形は、上下幅が同じで長方形を呈している。長さ19.9cm、幅7.8cm、本体の厚み1.4cmを計測する。鼻緒は三点の穿孔が確認されるが、頂点の孔は中心から約1cmのズレが認められ、この下駄は左足用であることが判明する。歯は一部で欠損し遺存状態が悪いが、幅は3.6cm程度で、遺存する厚さは1.6cmを測る。

3は近世の下駄で、歯を含めた横断面が台形を呈する。

へら状を呈する不明木製品(第73図-5、図版50)

両端を欠損するが、残存長約25.4cm、柄の部分は幅1.6cm、厚さ1.3cm程度、先端の太い部分は幅3.2cmで、断面も厚いが、先端に向かい幅も厚さも先細りする。3面拡張区から出土したものである。

火きり棒(第73図-6、図版50)

上部を欠損するが、長さ17.2cm、直径1cmの火きり棒である。先端が炭化し使用痕跡が明確に認めら

れる。4面SR02の覆土中からの出土である。

火鉢白（第73図-7、図版50）

一端を欠損する火鉢白で、長さ8.2cm、幅2.3cm、厚さ1.3cm、使用痕が顕著に残る例である。4面拡区の細長い溝から出土した。

櫛（第73図-4、図版50）

3面のSR01から出土した横櫛である。横12.1cm、縦4.3cm、最大の厚み0.8cmを計測する。歯の中央付近を欠損するが、全体の形態を良好に残している。櫛の歯は、1cm当たり5本から6本を削りだし、精巧な作りをしている。

用途不明木製品（第74図）

第74図には用途不明の木製品を掲げた。厚みのある板状のもの（1・2・3）厚い板の端に突起のつもの（4）二つの孔と、溝をもつ棒状のもの（5）、（6）は薄く細長い板状を呈するものが認められる。これらのうち5は、断面が上面が平坦、側面と下部は丸い蒲鉾形を呈する。図示したように上下の端付近に二ヶ所の挟りが見られ、図の上の挟りには木釘が残存していた。両端ともに加工痕が認められることから、ほぼ完形の部材であると思われる。長さ22.9cm、幅1.7cm、厚さ1cmである。

これらの木製品の出土位置をみると、遺構に伴うものは、1が4面SR02から、3は4面拡張区の細長い溝から出土する。他は2・5が3面、6は4面から発見された。なお4は近世の1面から出土したものである。

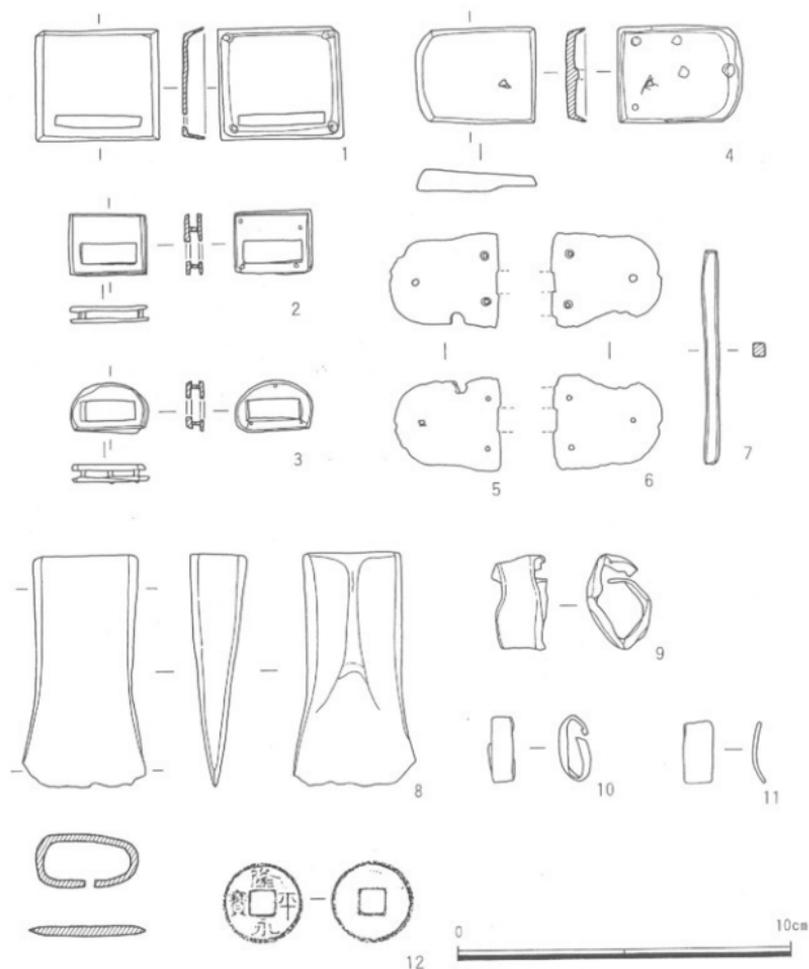
金属製品（第75図、図版53）

調査第3・4面に関連する金属製品は、図示した11点（12は下層の遺物）がある。このうち注目されるものに6点と数的にも多い帯金具があり、このほか銅銭（隆平永寶）鉄斧、刀装具とみられる2点の銅製品がある。

（8）帯金具（第75図1～6、図版53）

合計で6点が出土し、内訳は巡方2点、丸柄1点、鉈尾1点、紋具2点である。いずれも調査第3面（拡張区2面）及びその包含層から出土しており、遺構に伴う状況でなく基本的には単独で出土している。1の巡方の表板は、3面の直上となる包含層の最下部から出土した。裏板を欠失し角の一部と脚鉾に欠損はあるが保存は良好で、色調は黒褐色を呈するが裏面等の一部では銅地金の色が見えている。平面形は3.3cm 3.7cmの方形で、垂孔は0.35cm 2.55cmと細長い。表面の側面部は明瞭に面取りされ、側面形は上辺中央がやや膨らむ逆台形を呈し、高さは0.7cmを計る。表面には擦痕がほぼ全面に観察され、やや右上がりの横方向のものが顕著である。また側面には右下がりの横方向の擦痕が観察され、漆様の黒色の塗料が一部残存している。また裏面には四隅に脚鉾が付く、右上のものは欠損し根元の痕跡のみを残すが、右下は鉾の脚を3mm程残している。また裏面には研磨等の整形の痕跡は認められない。鉈上がりは良好でX線撮影でも気泡はほとんど見られない。その大ききや垂孔の状況から田中広明氏の種類（田中 1990）でのIV類（8世紀末～9世紀）に位置付けられる。

2の巡方は、第3面でT-36グリットの北東よりを中心に分布していた礫や炭化物粒を交えるやや黒褐色を呈する土中より、横に立った形で出土した。裏板も残りほぼ完存、保存状態は良好で、全面に銅地金の色が見えている。両板の間隔は2.5mm～3mm表裏とも同形同大で、平面形は1.9cm 2.3cmの長方形、垂孔は0.65cm 1.7cmと大きい。表板は側面の立ち上がりはなく板状で、裏板に比べ厚い（2mm～1.5mm程度）が右に向かい薄くなり、表面は四辺に面取りがなされている。裏面の四隅に脚鉾がつくが右側の二本は内側に寄っている。裏板は表板より薄く（1mm程度）やはり面取りがなされているが表板程明瞭ではない。四隅に穿孔があり表板の脚鉾を受けるが脚鉾との位置がずれ、鉾が斜めに留められているものがある。X線撮影では左右とも上の角に穿孔の痕跡が見られ、補修が行なわれたと考えられる。器面



第75図 遺物実測図42 (律令期 金属製品)

には明瞭な擦痕や塗料等の痕跡はみられないが、垂孔の側端面には縦方向の条痕が観察され、表板では裏面にバリ状の突出が見られることから切断の痕跡と考えられる。また一部の角は垂孔のラインより一回り広く丸くなっており、切断に先立って穿孔がなされ、これをもとに各辺の切断が進められたと考えられる。

3の丸柄は、2の巡方と同じくT-36グリットの北東寄りを中心に分布していた礫や炭化物粒を交えや黒褐色を呈する土中より横になった状態で出土した。両者の距離は1.8m程でかなり近くで出土し

ている。2と同様に裏板も残りほぼ完形、保存状態も良好で、ほぼ全面に銅地金の色が見えている。両板の間隔は2mm～3mm、表板は1.45cm 2.3cmで裏板は1.55cm 2.3cmと裏板がやや大きく、垂孔は表裏ともに0.6cm 1.65cmと大きい。表板は側面の立ち上がりのない板状で、裏板に比べて厚く(2mm～1.5mm程度)側辺部には明瞭な面取りが見られる。裏面には垂孔上の中央及び垂孔下の両端の計3ヶ所に脚鉾が付けられる。裏板は表板よりやや薄く(1.5mm～1mm程度)弱いがやはり面取りがなされる。表板と同位置に穿孔がなされ脚鉾を受けている。器面の状態や垂孔の切断痕については2と同様な状況が観察される。2の巡方とは出土地点も近く遺物の状況にも共通点が多くセット関係も考えられる。2の巡方とともに田中分類では1類(8世紀前葉)に位置付けられる。

4の鉈尾は、1と同様第3面の直上となる包含層の最下部から出土している。裏板を欠し脚鉾も根元を残すのみだが、全体的に保存は良好である。2.9cm 3.6cmで左辺が弧を描くが湾曲はそれほど強くなく、全体的にやや角張った印象を受ける。表面の側辺部は面取りがされ、側面形は逆台形を呈し高さは。を呈し高さは0.5cmを計る。上下の側面には元側から上辺は1cm、下辺では1.1cmのところ革帯の装着位置の段差が1.5mm程見られる。脚鉾は元側の両端に二ヶ所、金具中央及び先端の中央に各一ヶ所の計4箇所が確認されるが、先に述べたように根元を残すのみである。また上辺の中央付近にも一ヶ所 鉾の根元のような高まりが認められるが位置的には脚鉾とは考えにくい。表面は銅地金の質感が顕れている他の帯金具とは異なりざらついた感じを受ける。X線撮影では気泡が多くみられ錆上りがありあまり良好でない。

5及び6の絞具については、いずれも拡張区第2面(調査第3面)直上の包含層下部より出土している。両者の出土地点は近接(0.8m程度)しており、形状や大きさも極めて似通っていることから、元は一個体であった可能性が高い。両者ともほぼ同形同大で、銅製の薄い金属板を整形し折り曲げ、弓金具を挟んで留めていたと考えられる。短辺の中央には弓金具がはまる切り欠きが見られるが、折り曲げ部で破損し、分断したとみられる。革帯へは鉾止めされたとみられ、先端に二ヶ所、元側に一ヶ所の鉾孔が残されているが元側の一個と先側の二個とは穴の穿孔方向が逆になっている。なお両者伴、元側の孔には鉾の一部が残っている。

なお、帯金具については田中広明氏(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)に遺物を実見いただき数々のご教示をいただいた。ここに記して感謝いたします。

(9) 鉄斧(第75図-8、図版52)

鉄斧は鉄製の斧頭のみが確認されている。調査第4面の流路(SR02)の覆土下部より出土した。全長7cm、袋部3.1cmを測る。全体的に保存は良好で内面等に一部丹塗?のような赤色の塗料が観察される。

(10) 銅銭(第75図-9、図版52)

銅銭は隆平永寶で拡張区3面で出土した。隆平永寶は皇朝十二銭の4番目として796年(延暦15年)に鑄造された。この鑄造に際し一時銅製帯金具の使用が禁止(延暦15年)されており、銅製帯金具の終焉期の年代を示す遺物であり注目される。保存状態は良好である。隆平永寶の出土例は静岡市内では神明原・元宮川遺跡の稲妻地区がある。

(11) その他の銅製品(75図-7・10～12、図版52)

7は銅製の棒で長さ6.5cm、4mm角を測る。やや弓なりに曲っており縦方向に亀裂が見られる。用途及び性格不明。

10は幅1.5cm～2cmの薄い銅板を2.8cm 1.9cmの楕円形に巻いている。巻きの端部は0.7cm程重複する

が接合の痕跡は残っていない。側縁は3mm～4mmの幅で内側にまわり込んでいる。11は幅7mmの薄い銅板を1.95cm 0.9cmの楕円形に巻いている。巻きの端部はちぎれたように破損している。側縁はやや内側にまわりこんでいる。10・11はその大きさは異なるが、どちらも薄い銅板を楕円形状に巻いたもので、形状からは刀装具（11は大ききから刀子か）の可能性が考えられる。

12は調査第5面の遺物（古墳時代後期）であるが、下層から出土した金属製品は一点のみなのでここに掲載した。幅9mm、長さ2cmの厚さ約1mmの小型の銅板である。上下とも欠損した様子があり、また緩やかに湾曲していることから10や11の様な形状でもあったと考えられる。

(12) 石製品（第76図、図版52・55）

本遺跡からは9点の石製品が出土し、第75図に図示した。他の遺物からみれば種類・数量ともに数少ない。出土した石製品は、紡錘車、勾玉、管玉、砥石、叩き石等である。

紡錘車は1と2の二点が出土している。1は蛇文岩製で、SC02から出土し断面は台形を呈し、0.8cmの穿孔がされている。基部は3.6cmの径で厚み0.5cmである。短い頂部の径は2.5cm、全体の厚みは1.34cmを示す。重さは26.9gを測る。2は断面が短径と長径の差がない崩れた台形状であり、長方形を呈する基部が部厚い形態である。これはSC01から出土し、滑石製で径0.7cmに穿孔されている。計測値は、長い基部の径3.5cm、頂部の短径2.7cm、全体の厚み1.7cm、基部の厚み1cmを示す。二点の紡錘車は頂部と斜面、基部の底に放射状の線刻がされており、なかでも2では斜面部と基部の底に斜格子の線刻もみられる。これらの紡錘車は、二点ともに地元の安倍川産である。

3は勾玉で、第3面のSC01から出土した。2の紡錘車から0.35m離れ、多くの須恵器類に共伴して出土した。カタカナの「コ」の字を呈する形態で、穿孔される上部と反対の端部の突起の大きさの差が見られ段階のものである。これは、めのう製で長さ3.4cm、厚さ0.94cmを計測する。二方向から穿孔されているが、大部分は一方向からのものである。なおこの勾玉製作の年代観としては7世紀後半であろうが、しかしこれが出土したSC01からは須恵器壺G類も伴い、遺構の年代観は8世紀末から9世紀前半となる。結果的に、勾玉とSC01の年代は約百年の差が生じることとなる。遺構の性格、勾玉の使用目的等、多くの検討課題が提起される。

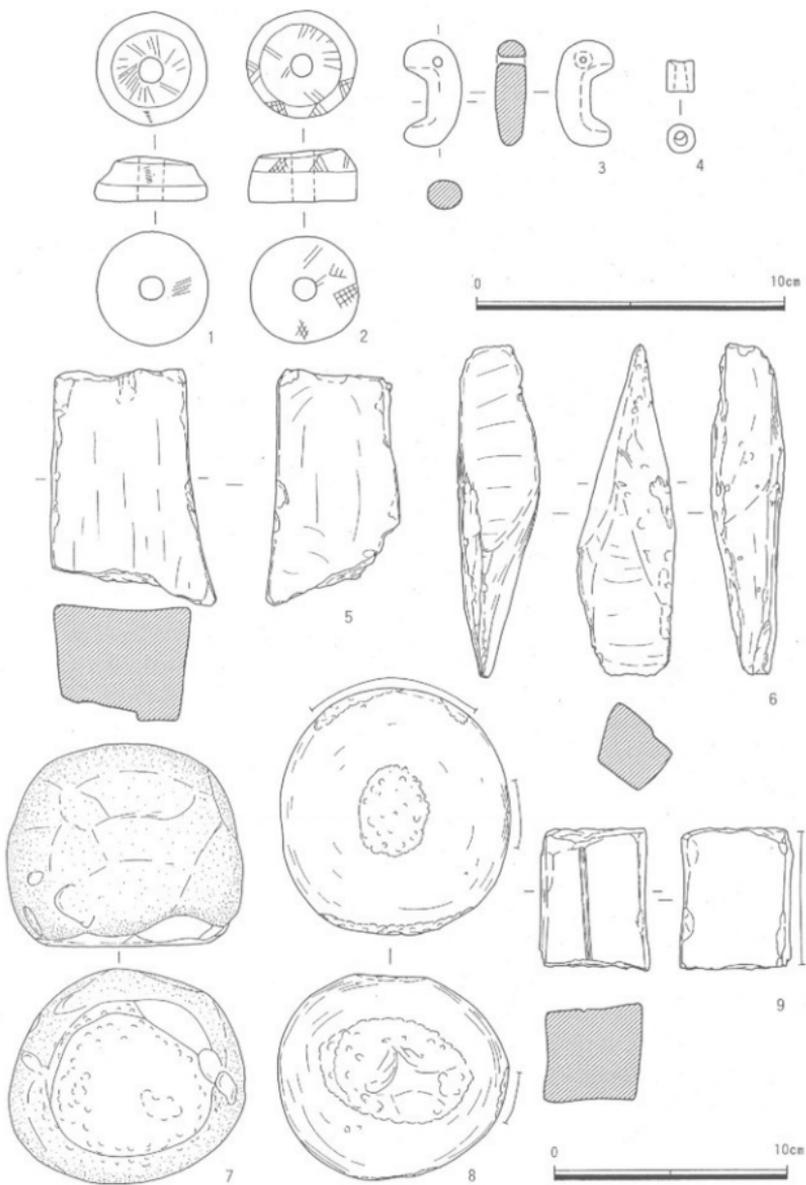
4は端部の周辺のみ残る管玉であり、丁寧な面取り加工を施している。第3面の包含層から出土したもので、長さ1.01cm、本体径0.82cm、孔内径0.4cmを計測する。凝灰岩質チャートで、緑色を呈している。これも3と同様に、製作年代との差が生じる事例である。

5と9は置き砥石の残欠であり、四角形の柱状を呈する。5は包含層から出土したもので、長さ10.3cm、図の上端での幅5.8cm、厚さ5.8cmである。四面ともに平滑な使用痕が認められ、そのうちの一つの面には、断面に図示したように周縁の面より更に凹む幅3.8cmの浅い溝状の研磨痕が認められる。これは重さ530gを計り、本遺跡の東側を流れる長尾川産の中粒砂岩を使用している。

9は断面が4.5cm程の正方形を呈し、長さ6.2cm残存する。これは端部の破片でなく、両端ともに欠損している。研磨は四面ともに平滑に使用されるが、そのなかの一つの面には、幅2.5mm程の「V」字の断面をもつ細い溝が認められる。これも5と同様に長尾川産の中粒砂岩を使用している。

6は手持ち用の砥石で、竜紋岩質凝灰岩で包含層から出土している。これは砥石として、使用された研磨される面は少なく、割れているため三角形に尖る。長さ14.5cm、幅4.1cm、重さ169.7gを計測する。

7と8は第3面と4面から出土した叩き石である。1は長さ8.8cm、幅10.2cm、叩いた面は一面で6.5cm程度の円形である。長尾川産の粗粒砂岩で、重さは1,135gを計測する。8は第四面下の砂礫層から出土した地元産の竜紋岩の叩き石である。これは10.2cm 9.9cmとほぼ円形で、重さ1,376gを測る。叩きの面は、図示したように表裏と側面の三面が認められる。表裏叩き面は、大きいので6.5cm 4.5cm、小さい



第76図 遺物実測図43 (律令期 石製品ほか)

面が4cm 3cm、側面部は小さく2cm程度である。

第3節 調査第5・6面（古墳時代）

調査第5面と6面は、上下を厚さ1.1m～1.8mを測る洪水堆積の砂礫に挟まれている。5面は水田、6面は方形周溝墓からなり、弥生時代中期から古墳時代中期の間は、大きな洪水に会うことはなく、低地ではあるが比較的安定した環境が類推される。基本的にこの時期には、弥生時代中期から古墳時代中期にかけて、広範囲にわたり水田・墓・集落が営まれていたことが明確となった。周辺の川合遺跡・瀬名遺跡でも類似した遺構が検出されている。

以下、これらの調査面の遺構の状況を述べてみる。

1・第5面の遺構

(1) 水田（第77図、図版18・19）

調査区北半から発見された水田で、洪水により堆積した青灰色細砂に覆われていた。従って畦畔の検出は比較的容易であり、非常に遺存状態が良好といえる水田である。水田の耕作土は、腐食した植物遺体を含む暗褐色土である。

水田区画は、1.3m～2mと幅の広い大型の東西方向の畦畔（SK501）一条と、0.4m～0.6mと幅の狭い南北畦畔6条に囲まれており、前者はその大きさからみて単なる区画ではなく、通路とかの機能を合わせ持つ畦畔と推定される。第77図の断面模式図をみると、前者は田面から0.2mと高く、後者は他界部分で0.1mを測る。この5面の遺構検出段階では、他に水田区画に伴う施設等は認められなかった。

なお調査区が狭い範囲であることから、一枚の水田の形状・規模等の全体が判明する事例はなかったが、そのなかでもST503は北西コーナーを欠くが、唯一規模の推定可能な例であり、東西7m～8.5m、南北5.5～6.5mであった。他は南北が計測される水田はなく、東西はST505が7m、ST506では6.5mを計測する。従って、これらの水田の個々の面積・規模は、ほぼ同一であろうと推定される。

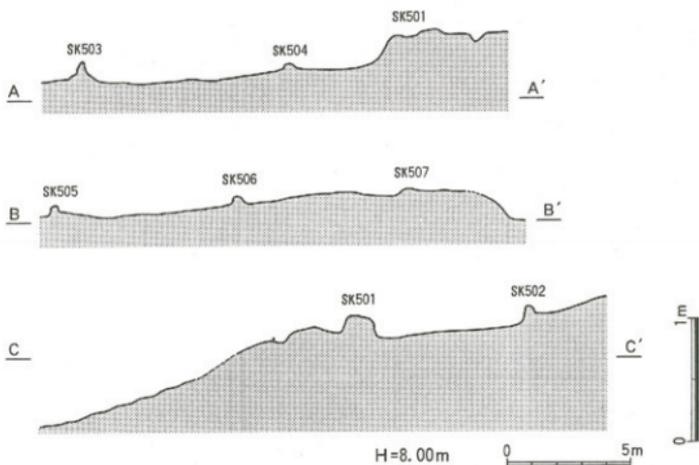
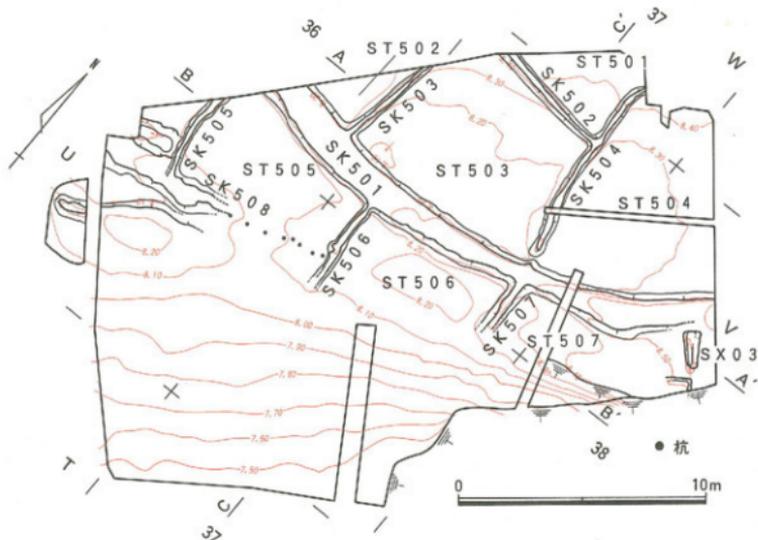
この水田面は本来は南側にも広がっていたと推定されるが、図にみるように洪水により削られ、斜面の様子を呈していた。標高でみると水田面は、8.4m～8.1m程度の差であるが、南斜面では調査区端が7.5mを示し、水田端部との比高差は約0.6mを計測する。

(2) 足跡・杭列（第78図、図版18・19）

図示したのは、調査区西端の畦畔SK505・508・506周辺に囲まれた田面に残された足跡と、SK508からSK506にむかう線上に、直線に打たれた杭列である。

足跡は32箇所を数え、長さ20cmから30cm、幅は15cm程度であった。足跡の形状は周辺の土圧により変形しているが、32個からなる全体の配置からみて、直線的に進んでいるという一定の方向性・規則性のが確認される。検出においては、指とか踵の痕跡は確認されないため、足跡の進行方向等は把握できなかった。足跡の配置からして、水田を横切るような痕跡とも考えられる。

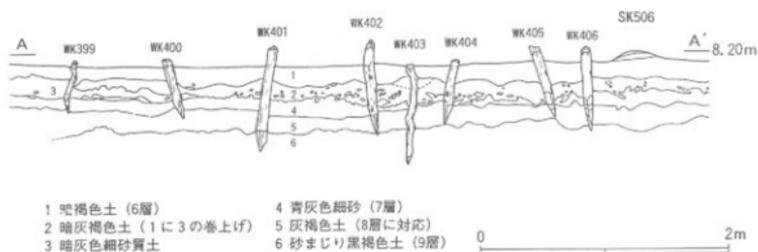
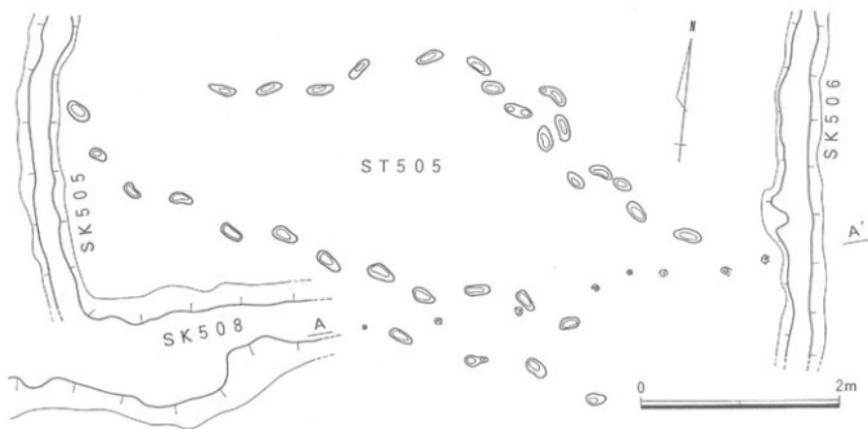
杭列は、SK508からSK506の間、約4mにわたり直線に、8本の杭が打たれたものである。各々の杭間隔は一定でなく、0.3m～0.8mに及んでいるが、多くは0.6m～0.8mに集中する。杭の長さは40cm～85cm、径は5cm～10cmである。これらは木の幹とか、枝の太い部分をそのまま利用したもので、先端を鋭利に削るとか、枝の跡を平坦にする程度の荒い加工が認められるのみで、全体には樹皮をそのまま残すものが大半である。この杭列は、位置関係からみて、畦畔SK508に伴う補強として打たれたものと推定さ



第77図 第5面遺構 全体図

れるが、このような機能と考えられる杭列は他には見られず、かつ他の遺跡の事例からも一列の直線を呈する畦畔の補強材はなく、さらに事例検討を必要とする。

この水田からは、第84図-2・3の田下駄と田下駄の横木が出土した。



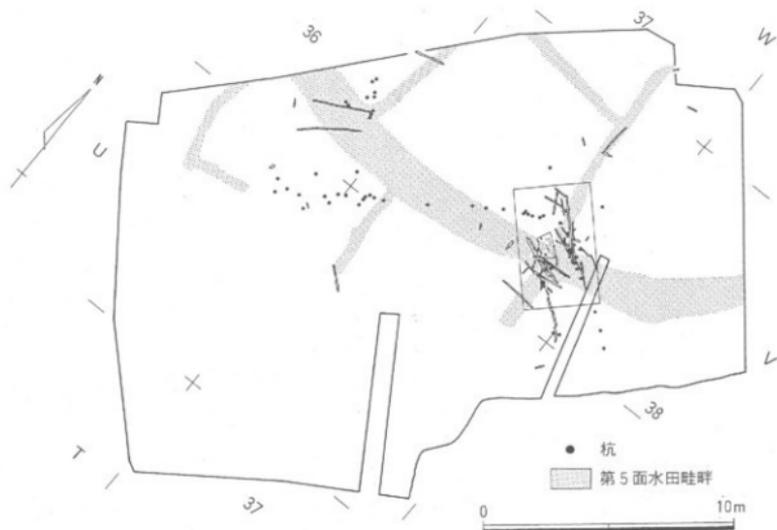
第78図 第5面杭列・足跡

(3) 第5面下水田 (第79図・80図、図版19)

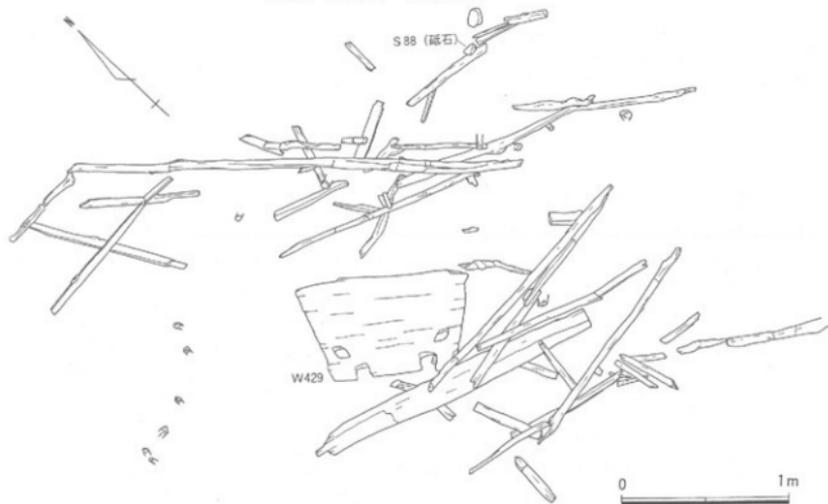
5面の畦畔を除去した段階で検出した水田であるが、検出されたのは図示したように、水田畦畔の痕跡と推定される杭列と、補強材として使用されたV-37グリットの木材群である。

第79図には杭と木材群の位置を示し、さらに上面の水田畦畔を相互比較の参考にトーンで図示してみた。杭列は主としてV-37グリットに位置し、北東方向に直線に約13m伸び、その先端は木材群に達している。上下の杭列の位置関係は、西端は5面のSK508付近にあるものの、より東ではさらに北側に開いていることから、上下の杭列はそれぞれ関連性のない位置に打たれたものと推定される。もう一方の杭列は、前者と直交しないが南東方向に直線約7mにわたっている。杭の本数は前者が30本、後者は10本と後者の分布は粗であり、一定した間隔・配置には打たれていない。また前者においても、杭の粗密は認められ東と西の端に杭が集中して打たれている。

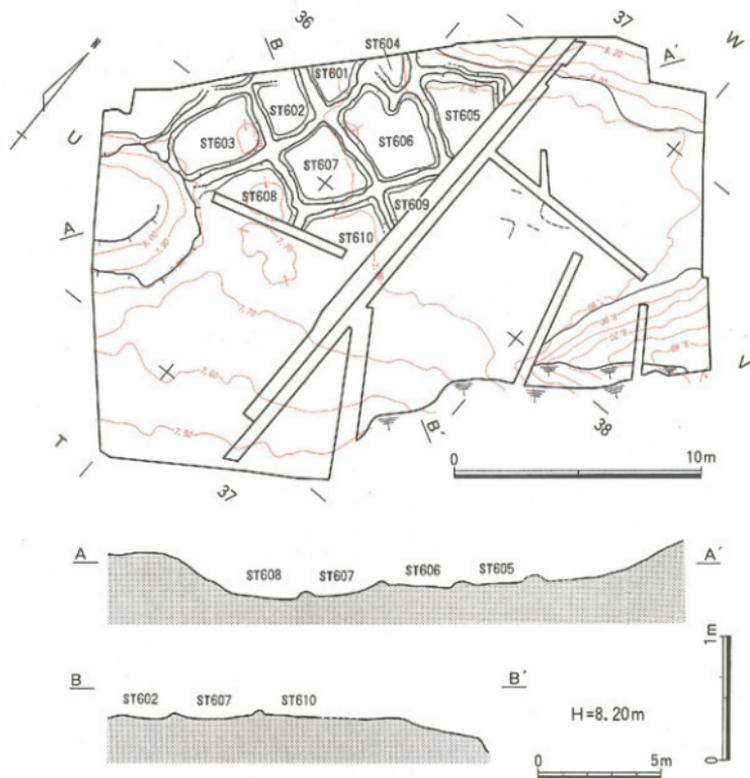
補強材群は、杭列畦畔の交点の補強材としての使用が推定される。その出土状態は第80図に図示したが、木材群は南北3.5m、東西3mの範囲に集中し、各々の出土位置の高低差もなく、同一面に分布する。全体的な分布の傾向としては、棒状の木材の方向が南東方向と、やや一定の規則性はみられる程度である。他は、目立った特徴はみられない。なおここからは、準構造船の部材と思われる大型の製品が出土する。これらは補強材を多用する畦畔の名残で、土盛部は洪水により削られたものと判断される。従って、木材群も辛うじて遺存した痕跡程度と考え、ここでは調査事例程度の紹介としたい。畦畔の補強に転用された船材は、本遺跡周辺の瀬名遺跡2区からも舷側板が発見されている。



第79図 第5面下 遺構全体図



第80図 第5面下 木製品 出土状況



第81図 第6面遺構全体図

2・第6面の遺構

ここからは洪水により運ばれた、青灰色細砂に覆われた10枚の水田を検出した。軟質の灰色シルトが水田の耕作土と考えられる。水田の形態は、多少歪んでいるが正方形または長方形を呈し、一辺は長いもので3.5m、短辺で2mを示す。畦畔の規模はほぼ同一、その幅は0.7m前後を計る。

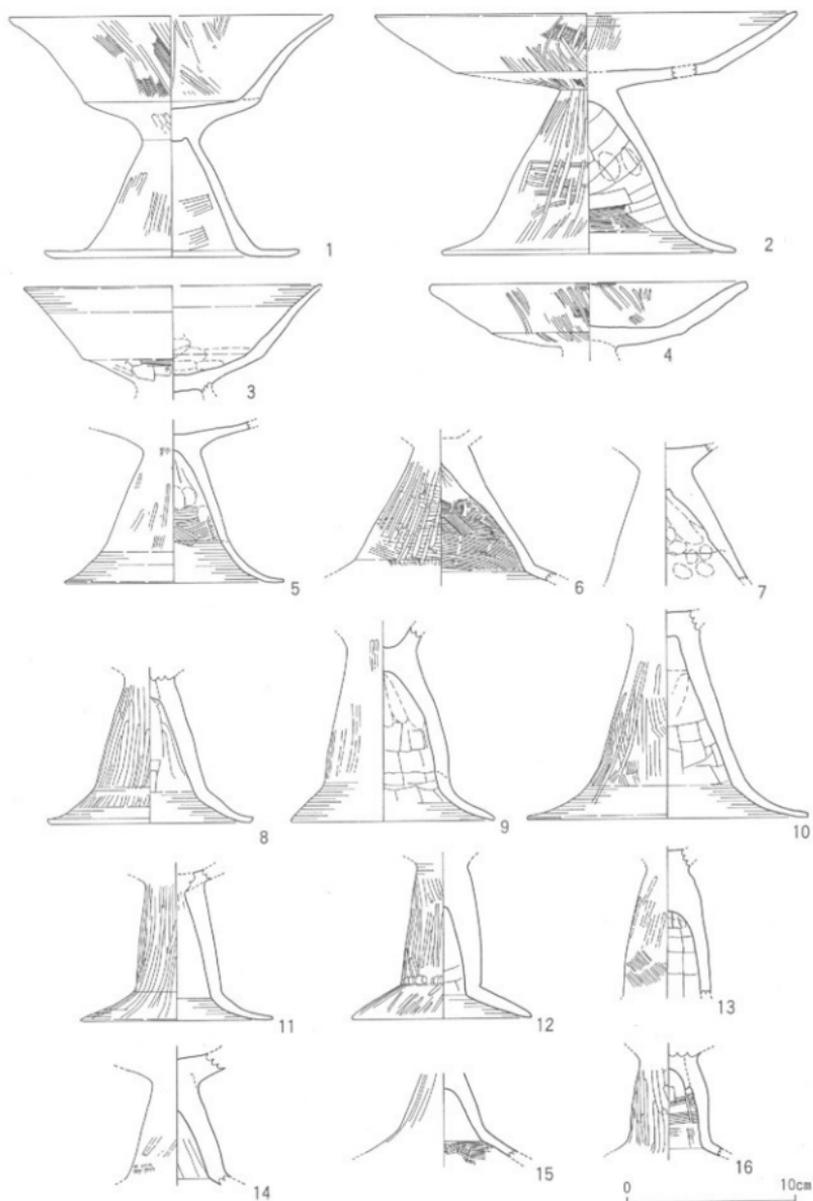
図の断面でみるように、この水田は南側は急激に傾斜し、北東と南西方向に高くなる地点に営まれている。この小区画水田は、静岡市曲金北遺跡の古墳時代前期から中期の小区画水田との類似が指摘される。なおこの水田からは第85図4～8の木製品が出土している。

3・出土遺物、包含層・9層も含む

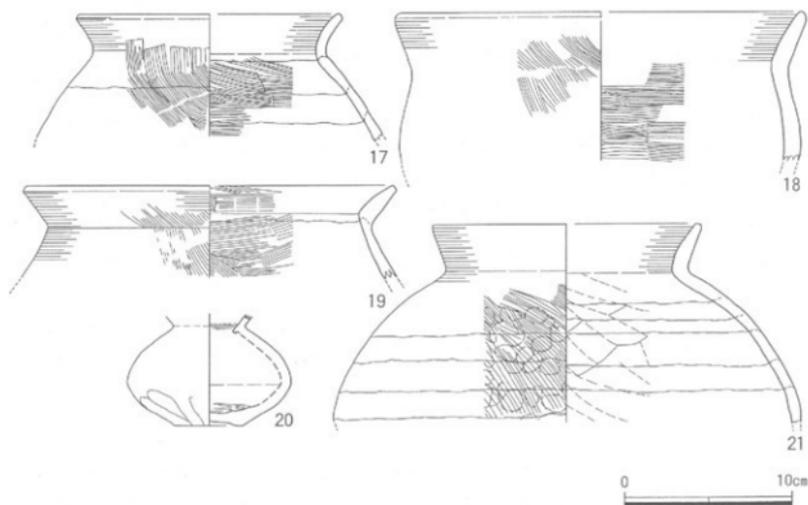
(1) 土器(第82・83図、図版40)

9層からは遺構は検出されなかったものの、土器等が散らばって出土した。そのうちの21点を図示したが、その多くが高環であった。

第82図-1～16は高環である。全体の形状がおおよそわかるものは2点のみで、残りは環部のみし



第82図 遺物実測図44 (古墳時代 土器 1)



第83図 遺物実測図45 (古墳時代 土器 2)

くは、脚部のみのものである。

1・2は坏部と脚部が揃っているものであり、2点とも口縁部と体部の境で稜をもち、脚部は円錐形を呈している。1の坏部は口縁部が緩やかに外反するもので、口縁端部でやや直立気味に立ち上がる。また脚部は裾部で鋭く屈曲し、横方向へ水平に延びる。2の坏部は浅く、口縁部はほぼ直線的に立ち上がるものである。また脚部は1の脚部同様円錐形であるが、2の脚部の方が内湾の度合いが大きく、裾部へ大きく外側に膨らむ。裾部には屈曲を持たず緩やかに広がる。

3・4は坏部のみのものである。2点とも口縁部と体部の境で稜をもち、3は1の坏部と同様な形状をしており、口縁部は緩やかに外反する。4は2の坏部と同様な形状をしており、浅い坏部で、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。

5～16は脚部のみのものである。5～7は円錐形を呈する脚部である。5は1の脚部と同様な形状をしているが、裾部は屈曲せずに緩やかに広がる。6は2の脚部と同様な形状をしており、大きく内湾しながら外側に広がる。7は5・6に比べ、若干低脚気味であり、14に近い形状をしている。8～10は1～7同様、円錐形を呈する脚部であるが、1～7の脚部と比べ外側には広がらず、11～13の円柱形の脚部に近い形状をしている。また9・10は比較的長脚で、9は脚部中位にエンタシス状の膨らみを持ち、8・10はほぼ直線的に広がる。裾部は緩やかに屈曲し、明確な稜を持たない。11～13は円柱形を呈し、細長い高坏の脚部である。外側には広がらず、ほぼ直線的に裾部に達する。13の裾部は欠損しているものの、11・12裾部で稜を持って屈曲し、横方向に直線的に延びる。14～16は低脚な高坏の脚部である。14は15と同様に円錐形をしているが裾部との接点で15程広がらず、円柱形に近い形状をしている。15は最も低脚であり、裾部へは稜を持たずに緩やかに大きく広がる。16は円柱形で、ほぼ直線的に裾部へ達し、裾部は11・12同様直線的に延びるものが想定される。

高坏の坏部は、口縁部と体部の境に稜をもち、比較的深いものと浅いものがある。脚柱の形状には円錐形、円柱形、低脚のものがあり、脚柱の広がり方によっても違い、また裾部は鋭く屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。高坏の調整方法は、基本的には外面にタテハラミガキがされているが、2・

6のようにタテヘラミガキされる前にヨコヘラミガキがされているものもみられる。これらの高坏は、当遺跡南側に位置する川合遺跡の第6遺構面からも同様な形状をしたものが出土している。

第82図-17~19・21は甕である。口縁部及び頸部のみで、胴部は一部残存しているのみである。17・18の口縁部は頸部で緩やかに屈曲し、17は外側、18はほぼ直立に立ち上がる。19・21の口縁部は頸部で稜をもって屈曲し、外側に立ち上がる。また胴部は、18は直立気味であるが、21は球形であり、17・19もまた同様に球形の胴部が想定される。

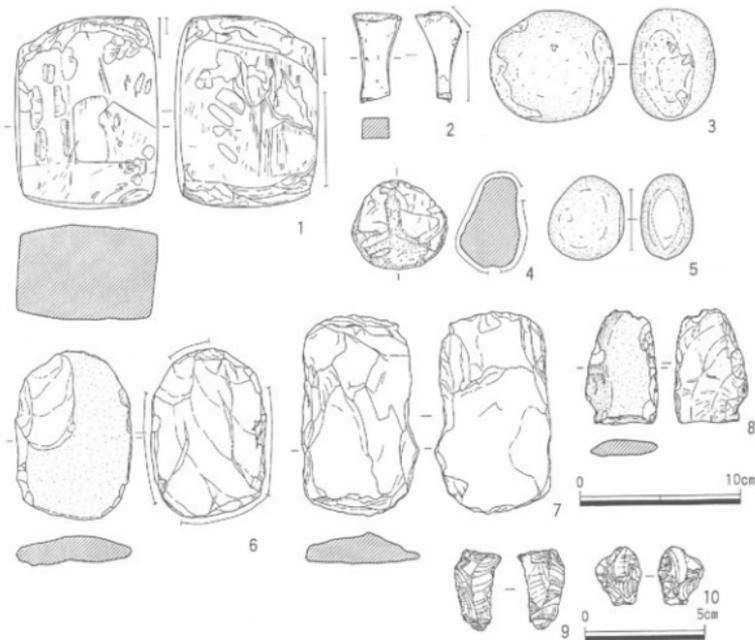
甕の調整方法は、基本的には胴部内外面がハケメ調整され、口縁部内外面がナデ調整されている。また口縁部の形状は素縁であり、肥厚などはみられない。

第82図-20は埴である。胴部中位に胴部最大径を持ち、横に広い球形をしている。口縁部は欠損しており、底部は上げ底気味である。

ほとんどの土器の胎土には長石が見られるが、角張った小石粒は曲金北遺跡出土の古墳時代中期後半の甕などの胎土にもみられた。図示した土器はすべて土師器であり、古墳時代前期~中期の土器と考えられる。

(2) 石製品 (第84図、図版55)

古墳時代の5・6面からは図示したような10点の石製品が出土し、いずれも包含層からの検出されたものである。これらの出土位置は遺構に伴うものではなく、1~4・7・8の6点は、6面水田を挟むよう



第84図 遺物実測図46 (古墳時代 石製品)

に所在する北東と南西の微高地部分から、他は洪水による砂礫混じり粘土層から出土している。石材は、9・10の黒曜石を除き、他はすべて長尾川上流に産する地元産である。

1・2は砥石である。1は置き砥石で、竜紋岩質凝灰岩から作られ、長さ12.1cm、幅8.9cm、厚さ5.9cmを計測する。欠損することなく、ほぼ使用されていた状態と考えられ平滑な研磨面が角面に認められる。2は手持ち砥石の端部で、四面ともに急激に細くなるまで使用されている。長さは5.6cm、幅3cm、厚さ2.9cmを計測する。これも竜紋岩質凝灰岩である。

3～6は叩き石である。これらは側面を均一に敲打面として使用するため、3～5の3点は図示したように全体に丸みを持っている。最も大きい3の大きさは、長さ7.8cm、幅6.9cm、厚さ5.15cmを計測し、かなり円形に近い形態となっている。重さは411.9gで花崗岩である。4・5ともに重さが1561gと115.6g、小型の叩き石である。5は粗粒砂岩製で、長さ4.8cm、幅5.3cm、厚さ3.3cmを示し最小である。6は一点のみ大きく楕円形を呈し扁平であることから、叩き石としても前者の4点とは敲打の対象が異なるというような用途が推定される。薄い側面のほぼ全面を敲打面として使用しているが、図示したように扁平な面は、自然面を大きく残し、もう一方は形を整えるための荒い剥離加工を施す。石質は中粒砂岩で、長さ10.1cm、幅5.7cm、厚さ1.6cm、重さは170.5gである。

7は長さ12.8cm、幅は7.3cmと広い打製石斧、8は欠損する打製石器で、両側端に細部の押圧剥離が施される。また9・10は黒曜石の剥片である。

これらの石製品は古墳時代の調査において出土したものであるが、遺構に伴うものでなく、出土した位置も微高地とか、洪水の堆積物に混入した状態と推定されるため、結果として各時代にわたるものが見られると考えられる。

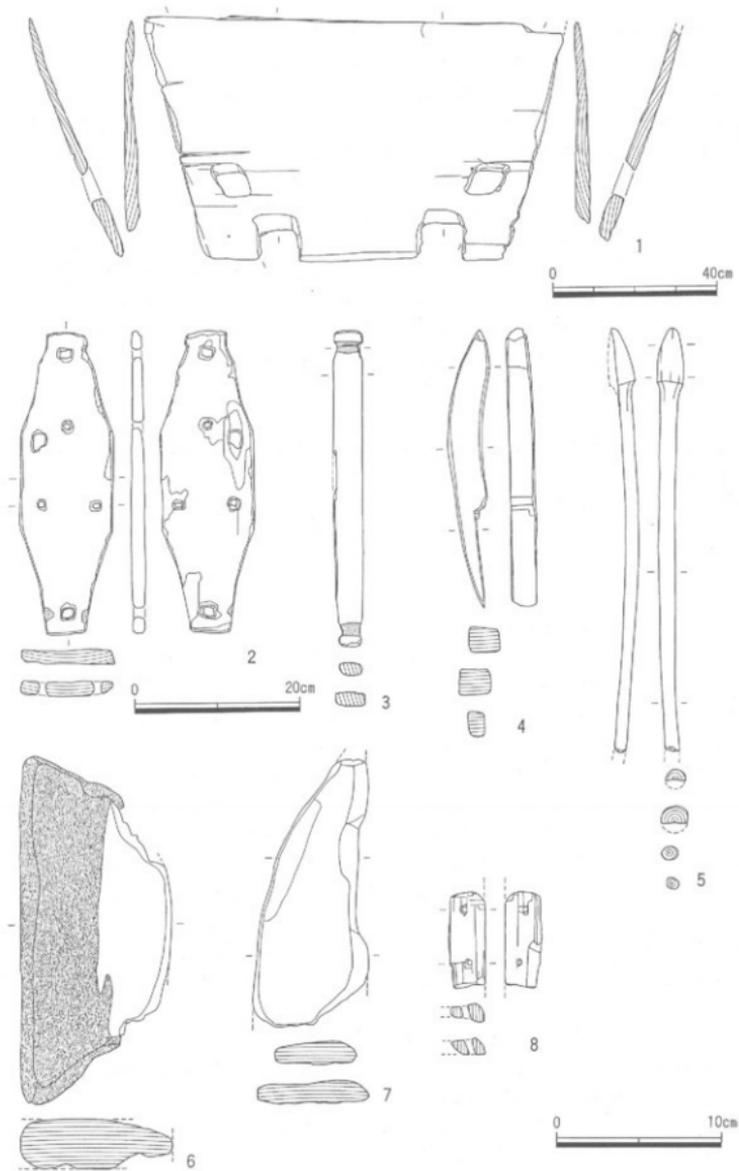
(3) 木製品 (第85図、図版54)

5・6面からは図示したように、8点の木製品が出土している。5面は水田地域、6面は墓域が形成されていたが、これらの遺構の性格を反映するような木製品は数少ない。

1は5層水田の下部から発見された、大畦畔の補強材として使用されていた舟材の一部と推定されるものである。形状は逆台形を呈し板状で、厚みのある短辺には11.8cm 8.8cmの挟り込みが二ヶ所、その5cm程上には、8.8cm 6.4cm程度の菱形の穿孔が施される。これらの挟りと穿孔は左右対称の関係が認められる。全体の大きさは、長辺が106.1cm、短辺72.8cm、幅60.7cmの大きさである。さらにこれの細部加工を観察すると、他の部材と接する短辺の側面及び、挟りと穿孔の角度がほぼ一致することが指摘される。これは短辺側面を水平にした場合、板は50度から60度に設定されていたこととなり、さらに挟りと穿孔接合する部材も、短辺側面に平行するとの推定が成り立つ。このような検討から、この部材は準構造船の仕切りの機能をもつ隔壁に相当するのではないかと類推される。この資料については、特に近藤和船研究所の近藤友一郎氏に現地にて実見いただき、貴重なご教示を受けたものである。考古学での資料を求めれば、埴輪の準構造船のなかでは、大阪市長原高廻り二号墳出土例の隔壁が最も近いのではないかとと思われる。

2は輪カンジキ型田下駄の足板であり、5面水田から出土している。形態は中央部が広く平行で、端部に向かい先細りする。両方の先端には輪と結束するための穿孔が認められ、また中央部の側面が平行となる位置には、鼻緒を通す孔が二等辺三角形の配置で三ヶ所あけられる。これは長さ37.1cm、幅11.4cm、厚さ2cmを測る。図の下端部には使用痕が認められ、それをトーンで表した。3も5面水田から出土した田下駄の横木で、長さ38.8cm、幅3.7cm、厚さ1.8cmを計測する。形状は図示したように、やや分厚く細長い断面長方形の棒状である。両端には結束するため切り込みが入り、使用痕跡が明瞭に観察される。

4から8の5点は、全て欠損し本来の形状を残すものはない。4と5は6面から出土し、4は幅2cm



第85図 遺物実測図47 (古墳時代 木製品)

程で厚さ1.6cmの板が弓なりの形状を呈し、表面には丹が塗られている。5は図示したように、矢のような形状を呈し、急激に窄まる先端部の付根を本体より太く削り出し、断面の径が1cm前後の細長い棒状の本体部をもつ製品である。これは下部を欠損するが、長さ26cmが残存している。

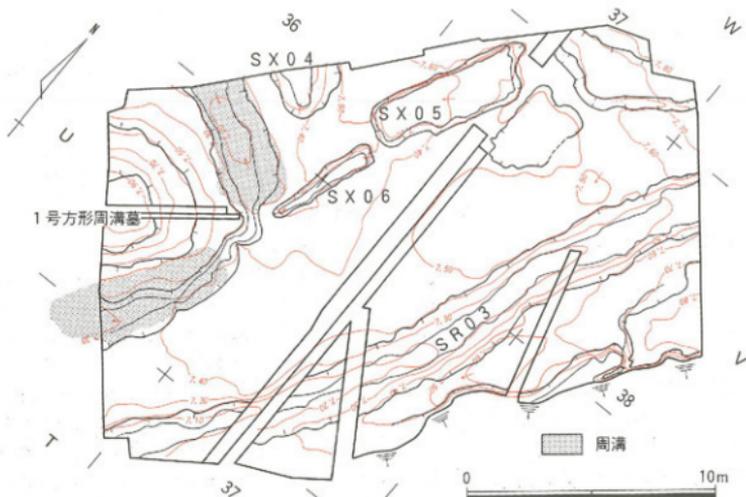
6～8の三点は6面の微高地部分から出土したものであるが、6・7は分厚い板状の製品で、6は一面が炭化している。8は小さい穿孔が二ヶ所認められる細長い板状と思われる製品である。穿孔は斜位に施され、長さ5.9cmが残る。

4節 調査第7面

調査第7面は10層上面で確認された。遺物包含層の9層を除去したところ、9層上面で地形のとおり調査区西・北・東の各角が高まり中央が谷状を呈し、その最も低い部分を自然流路（SR03）が北から南西方向に流れている。これらの高まりの内、西側のものは周溝が確認されことから、一号方形周溝墓と認定した。北側のものは裾部に浅く溝状のものが確認されたが、ごく一部が調査区にかかっているだけで全体的な地形の傾向が北が高いことなどもありその状況は明確でなく、その性格もなんともいえない。また東側の高まりは、南側は上層から見られた深い洪水痕で大きく削りとられ明確でないが、他と違い比較的平坦な面が確認されるのみで自然地形と考えられる。また不整形の土坑状の遺構が三基（SX04～06）検出されている。遺構面の年代については明確に伴う遺物が少ないが、一号方形周溝墓の形状やこれまでの周辺調査での状況からおおむね弥生時代中期と考えられる。

(1) 一号方形周溝墓（第86～89図、図版21）

今回の調査で発見された唯一の方形周溝墓であり、第86図の7面遺構全体図にその配置を示している。これは調査区の西端から発見され、主体部及び周溝は北北東を示し、築造当初は四隅が切れる形態と推定されるものである。調査においては、主体部と北側・東側の周溝の一部、及び盛土を確認したものである。第87図には検出段階での周溝と盛土の砂礫の分布、第88図には一号方形周溝墓の平面図、第89



第86図 第7面 全体図



第87図 方形周溝墓実測図

図には土層断面図を掲げた。

本遺構の規模で確実なものを拾うと、主体部は2m 0.6m深さ0.24cmを計測し、周溝の幅は2m前後、検出面からの深さ0.6mであった。全体の大きさは推定するしかないが、静岡平野で見られる一般的な例として、方台部中央に主体部が設置される形態とした場合、方台部の南北8m、東西7m程と推定され、周溝まで含めると、南北13m、東西11m程度の規模を想定することができる。

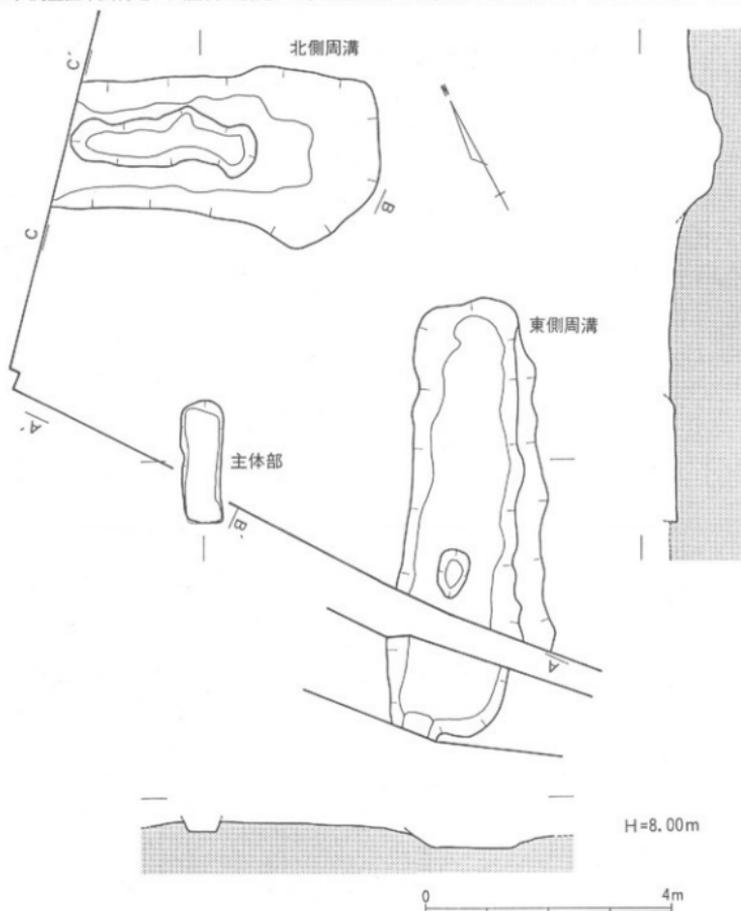
本遺構の立地は、第89図でも推察されるように、この地点は周辺に水田が形成されるような低湿地帯であり、そのなかの洪水堆積により形成された微高地の縁辺部に所在する。土層断面から標高値の差を求めると、台部の高所と周溝の岸では約0.2mの差となる。このような立地は、本遺跡の東側、長尾川を挟んで対岸一体に所在する瀬名遺跡7・8区の在り方と共通している。ここでも水田耕作には適さない洪水堆積で形成された砂礫の上に方形周溝墓群を営んでいる。このような状態のため、土層断面か

らの盛土の観察も容易でなく、僅かに腐食質の土とか黒色の強い色調等から分層した。しかし図示した土層中にはほぼ一様に多量の砂礫を含んでいる。

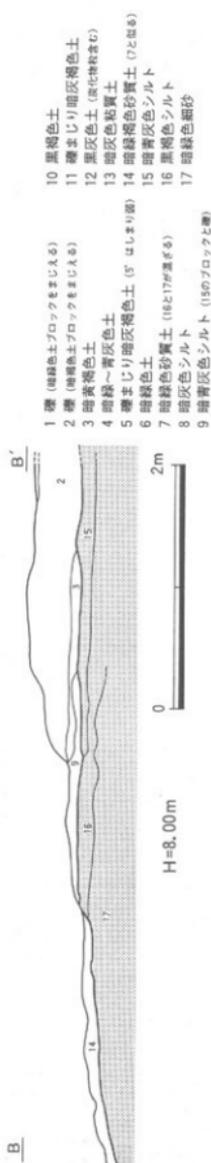
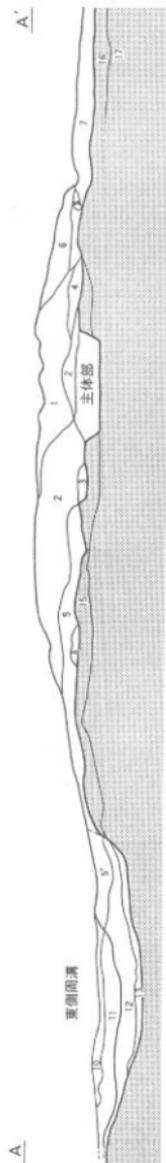
時期については、主体部及び周溝からの遺物出土はなく、盛土から細片が出土した程度であった。明確には判断できないが、周辺の遺跡の在り方、立地の特徴、及び形態・規模からみて、弥生時代中期の所産と考えてよいであろう。

第5節 第8面以降

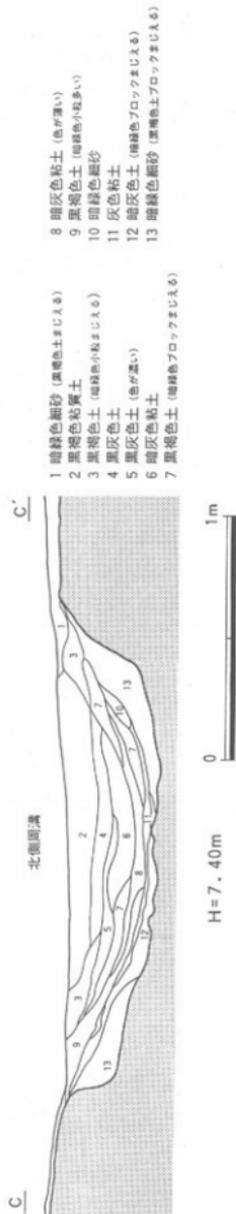
調査の経過の項で触れたように、7面の調査中、以下の土層の堆積状態を確認し調査終了面を判断するため、調査区中央付近に試掘坑を設定した。土層断面の観察結果では、砂を中心とする砂礫の中間層



第88図 方形周溝墓実測図（盛土除去）

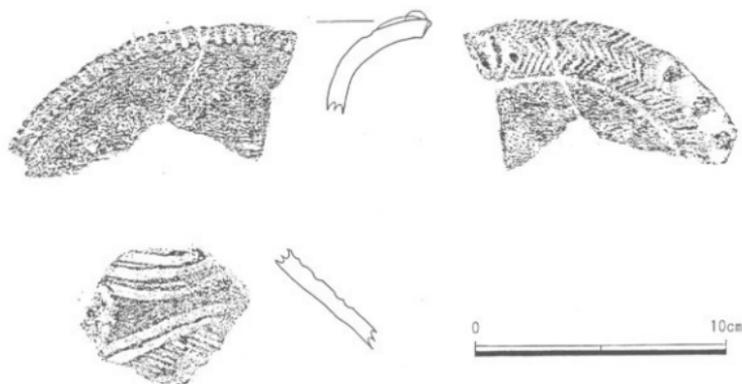


- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 礫 (暗緑色土ブロックまじえる) | 10 黒褐色土 |
| 2 礫 (暗褐色土ブロックまじえる) | 11 礫まじり暗灰褐色土 |
| 3 暗黄褐色土 | 12 黒灰色土 (酸化鉄粒含む) |
| 4 暗緑~青灰色土 | 13 暗灰色粘質土 |
| 5 礫まじり暗灰褐色土 (5'はしまり層) | 14 暗緑褐色砂質土 (白と黒色) |
| 6 暗緑色土 | 15 暗青灰色シルト |
| 7 暗緑色砂質土 (18と17が混ざる) | 16 黒褐色シルト |
| 8 暗灰色シルト | 17 暗緑色細砂 |
| 9 暗青灰色シルト (18のブロックと混) | |



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 暗緑色細砂 (暗褐色土まじえる) | 8 暗灰色粘土 (色が濃い) |
| 2 黒褐色粘質土 | 9 黒褐色土 (暗褐色小粒多い) |
| 3 黒褐色土 (暗緑色小粒まじえる) | 10 暗緑色細砂 |
| 4 黒灰色土 | 11 灰色粘土 |
| 5 黒灰色土 (色が濃い) | 12 暗灰色土 (暗緑色ブロックまじえる) |
| 6 暗灰色粘土 | 13 暗緑色細砂 (暗褐色土ブロックまじえる) |
| 7 黒褐色土 (暗緑色ブロックまじえる) | |

第89図 方形開溝墓 土層断面図

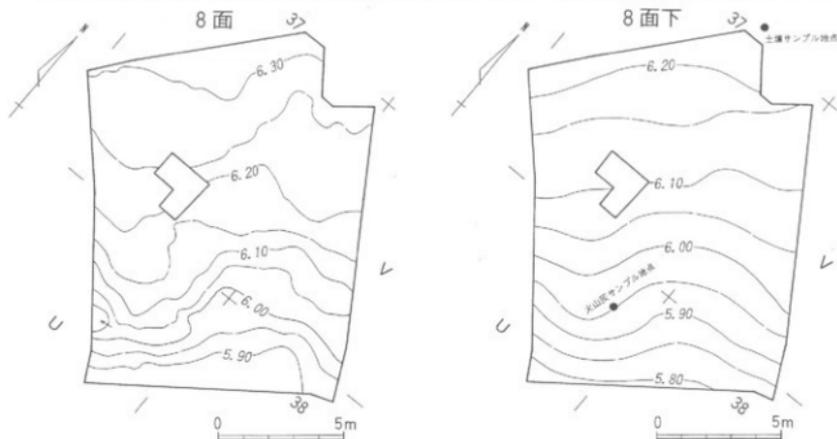


第90図 土器拓影図

(10層)は1m程度で、その下には黒褐色の腐食質に富んだ層を含む土層(11層)が確認された。これはさらに暗褐色シルト(11a)暗黒色土(11b)暗灰色土(11c)黒(灰)褐色シルト質土(11d)と細分され、以下は基本的に砂とシルトの互層となっていた。この内11d層の下面は断面観察ではなかりの凹凸が見られ、人為的な攪拌の可能性も考えられたため、この上面を8面とし下層調査区の一部(東半分)について10層を除去し、以下の各層精査を行なった。

断面観察で調査第8面と考えた11d層であるが、上面の精査では遺構・遺物は確認されなかった。上面で特に目立った地形的な変化はなく、標高は5.9m~6.3mで、おおむね北から南へ傾斜しているが、傾斜が南側で急になる。層中からも遺物はみられなかった。

攪拌の可能性も考えられた凹凸のある11d層下面でも特別な状況は見られなかったが、層境付近でスコリアと見られる黒色粗砂のブロックが確認されたため、分析を(株)古環境研究所に委託した。結



第91図 第8面・8面下地形図

果は付纏に収録したが、結論としてカワゴ平テフラ (Kg,2,800~2,900) 起源の軽石と長崎スコリアが検出されている。

以上のように平面調査において遺構や遺物等は見られなかったが、最終的な確認を含め11b~11d及び12層の最上部を含めた土壌サンプルを採取し調査終了後に(株)古環境研究所に委託してプラント・オパール分析を行なった。結果は同様に付纏に収録したが、結論としてイネのプラント・オパールは確認されず、稲作の可能性はないものと判断された。

また、この面の調査に際して掘削した集水弁の壁面で以下の土層をおおよそ標高4mまで確認した。11d層以下の80cmは砂とシルト(黒~灰)の互層が続き、それ以下は礫層(12層)となる。この12層の礫層は所々砂層を挟み、以下にも連続している様子であったが層厚では1.2m(標高で4m付近)までが確認できた。

第2表 土器観察表(1)

| 図 | 番号 | 写真図版番号 | 種類 | 器種分類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|--------|-----|------|-------------|------------|-------|--------|-----|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底(高台)径 | |
| 17 | 1 | 24 | 須恵器 | 坏蓋 | T36 3面 SC01 | 20 | 4.8 | | |
| | 2 | 24 | " | " | " | 14.6 | 4.6 | | |
| | 3 | 24 | " | " | 3面 T36 SC01 | 14.6 | 3.6 | | |
| | 4 | | " | " | T36 3面 SC01 | (14.6) | 3.4 | | |
| | 5 | 24 | " | 坏B2 | T36 3面 SC01 | 17.8 | 6.8 | 11.5 | |
| | 6 | 24 | " | 坏B2 | 3面 SC01 | 14.2 | 6.6 | 8.7 | |
| | 7 | 24 | " | 高坏 | T36 3面 SC01 | (12.6) | | | |
| | 8 | 24 | " | 長頭壺 | T36 3面 SC01 | 7.4 | 22.0 | 8.6 | |
| | 9 | 24 | " | " | " | (8.2) | | | |
| | 10 | 24 | " | " | " | (8.2) | | | |
| | 11 | | " | " | T36 3面 SC01 | (7.7) | | | |
| | 12 | | " | " | " | 9.0 | | | |
| 18 | 13 | 24 | " | 広口壺 | " | (16.4) | | | |
| | 14 | | " | " | " | 11.8 | | | |
| | 15 | 25 | " | " | " | | | 13.2 | |
| | 16 | 25 | " | 短頭壺 | " | | | 12.9 | |
| | 17 | | " | 長頭壺 | " | | | | |
| | 18 | | " | 壺 | " | (9.4) | 15.4 | 8.0 | |
| | 19 | 25 | " | 長頭壺 | " | 5.9 | 22.5 | 5.6 | 壺G類 |
| | 20 | 25 | " | 短頭壺 | " | 9.4 | 15.4 | 8.0 | |
| | 21 | | " | " | " | (11.6) | | | |
| | 22 | | " | 平瓶 | " | | | | |
| | 23 | | 土師器 | 坏 | " | (14.0) | | | |
| | 24 | | " | 鉢B | " | | | (4.8) | |
| 20 | 1 | | | 坏蓋 | 坏B2 3面 SC02 | (15.0) | 4.5 | 10.4 | |
| | 2 | | | " | " | | | | |
| | 3 | | | " | " | 14.3 | | | |
| | 4 | | | " | " | 16.2 | | | |
| | 5 | | 須恵器 | 坏B2 | U38 3面 SC02 | (15.0) | 4.5 | 10.4 | |
| | 6 | | " | " | " | (13.4) | 4.6 | 9.8 | |
| | 7 | 25 | " | " | " | 14.6 | 4.8 | 10.4 | |
| | 8 | 26 | " | " | " | (15.1) | 4.5 | (10.6) | |
| | 9 | 25 | " | 坏A1 | " | 14.0 | 4.2 | 5.2 | |
| | 10 | 26 | " | 短頭蓋 | " | (12.2) | 3.8 | | |
| | 11 | 26 | 土師器 | 坏B1 | U38 SC02 | (12.2) | 4.5 | (6.0) | |
| | 12 | 26 | " | 坏A1 | " | 13.5 | 4.1 | (8.0) | |
| | 13 | | " | " | " | (12.0) | 3.7 | 6.2 | |
| | 14 | | " | " | " | (12.2) | 3.7 | (6.0) | |
| | 15 | | " | " | " | (11.5) | 4.0 | (5.8) | |
| | 16 | | " | 坏 | " | (10.9) | 4.0 | | |
| | 17 | | " | 坏A1 | " | 11.5 | 4.0 | 6.0 | |
| | 18 | 26 | " | 坏B1 | " | 12.0 | 4.4 | 5.0 | |
| | 19 | 26 | " | 坏 | " | 12.2 | 4.7 | | |
| | 20 | 26 | " | 坏B1 | " | 11.4 | 4.7 | 4.5 | |
| | 21 | 26 | " | " | " | 12.0 | 4.4 | 5.2 | |
| | 22 | 26 | " | 坏A1 | " | (13.2) | 4.4 | 7.4 | |
| | 23 | | " | 坏 | " | (11.8) | (3.9) | 6.0 | |
| | 24 | | " | 坏B1 | " | (11.0) | 4.7 | | |
| | 25 | | " | 坏 | " | (12.4) | 4.7 | (4.6) | |
| | 26 | 26 | " | 坏B2 | " | 12.0 | 4.2 | 7.7 | |
| | 27 | 26 | " | " | " | 12.0 | 4.2 | 6.0 | |
| | 28 | 26 | " | 坏B1 | " | 11.0 | 4.5 | 5.7 | |
| | 29 | 26 | " | 坏A2 | " | (10.6) | 4.5 | 6.0 | |
| | 30 | 27 | " | " | " | (11.0) | 3.9 | (5.2) | |
| | 31 | | " | A2 | " | (10.6) | 4.0 | (7.0) | |

第2表 土器観察表(2)

| 図 | 番号 | 写真図版 番 号 | 種類 | 器 種 分 類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|-------------|-----|------------|----------|------------|--------|--------|----|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | |
| 21 | 32 | 27 | 土師器 | 坏 | U38 SC02 | 10.8 | 4.0 | 5.2 | |
| | 33 | 27 | " | " | " | 11.0 | 3.7 | 5.5 | |
| | 34 | 27 | " | 坏B2 | " | 10.8 | 4.5 | 5.5 | |
| | 35 | 27 | " | 坏B1 | " | 10.6 | 4.4 | | |
| | 36 | | " | " | " | (10.6) | 4.0 | 4.6 | |
| | 37 | 27 | " | 坏A2 | " | (11.0) | 3.4 | 6.5 | |
| | 38 | 27 | " | " | " | (11.4) | 3.7 | (6.5) | |
| | 39 | | " | 坏B2 | " | 10.8 | 4.0 | 4.5 | |
| | 40 | | " | 坏 | " | 10.8 | 3.3 | 6.5 | |
| | 41 | | " | " | " | 10.8 | 4.0 | 5.0 | |
| | 42 | | " | " | " | (10.8) | 3.8 | (6.8) | |
| | 43 | | " | " | " | (11.0) | 4.0 | (6.0) | |
| | 44 | 27 | " | 坏B1 | " | 11.2 | 4.2 | 5.5 | |
| | 45 | | " | 坏 | " | (11.0) | (3.5) | | |
| | 46 | | " | B2 | " | (11.0) | 4.5 | 4.5 | |
| | 47 | | " | 坏 | " | (9.7) | 3.8 | (6.0) | |
| | 48 | | " | " | " | (11.0) | 3.5 | (4.2) | |
| | 49 | | " | " | " | 11.2 | 3.8 | 6.0 | |
| | 50 | | " | 坏B1 | " | (10.8) | 4.4 | | |
| | 51 | | " | " | " | (10.0) | 3.7 | 5.0 | |
| | 52 | 27 | " | 坏B2 | " | 9.1 | 4.5 | | |
| | 53 | | " | 坏 | " | (10.3) | 3.7 | 5.0 | |
| | 54 | 27 | " | 坏A2 | " | (9.0) | 3.4 | (6.0) | |
| | 55 | 27 | " | " | " | 10.2 | 3.5 | 6.0 | |
| | 56 | 27 | " | 坏 | " | (10.4) | 3.5 | (4.0) | |
| | 57 | | " | 坏A2 | " | (10.4) | 3.6 | 6.0 | |
| | 58 | 28 | " | 坏B1 | " | 9.8 | 3.9 | 5.0 | |
| | 59 | 28 | " | 坏A2 | " | (10.0) | 3.5 | 6.5 | |
| | 60 | 28 | " | 坏B1 | " | (10.3) | 3.9 | (5.2) | |
| | 61 | | " | 坏B2 | " | (10.4) | 4.2 | 4.0 | |
| | 62 | 28 | " | 坏 | " | (8.8) | 5.2 | 5.0 | |
| | 63 | 28 | " | " | " | 10.4 | 4.0 | 4.5 | |
| | 64 | | " | " | " | (10.8) | 4.1 | 5.0 | |
| | 65 | | " | 坏B1 | " | (10.4) | 4.7 | 4.0 | |
| | 66 | | " | 坏 | " | (10.0) | 3.0 | 5.0 | |
| | 67 | | " | " | " | (10.0) | 4.0 | (3.5) | |
| | 68 | | " | " | " | 10.0 | 3.5 | (3.6) | |
| 22 | 69 | 28 | 土師器 | 甗C | U38 SC02 | (22.0) | (28.3) | 7.8 | |
| | 70 | | " | " | " | (20.0) | | | |
| | 71 | | " | " | " | (23.6) | | | |
| | 72 | | " | " | " | (22.6) | | | |
| | 73 | | " | " | " | (23.4) | | | |
| | 74 | 28 | " | " | " | (20.2) | | | |
| | 75 | | " | " | " | (21.2) | | | |
| | 76 | 28 | " | " | " | (22.6) | | | |
| | 77 | | " | " | " | (22.4) | | | |
| | 78 | | " | " | " | (23.2) | | | |
| | 79 | | " | " | " | (21.0) | | | |
| | 80 | | " | " | " | (21.2) | | | |
| | 81 | | " | " | " | (24.6) | | | |
| | 82 | | " | " | " | (21.6) | | | |
| | 83 | | " | " | " | (22.4) | | | |
| | 84 | | " | " | " | (20.0) | | | |
| | 85 | 28 | " | 甗A | " | | | 5.7 | |
| | 86 | | " | " | " | (25.4) | | | |

第2表 土器観察表(3)

| 図 | 番号 | 写真図版 番 号 | 種類 | 器 種 分 類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|-------------|-----|------------|--------------|------------|------|--------|-----|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | |
| 22 | 87 | | 土師器 | 甕A | U38 SC02 | (22.8) | | | |
| | 88 | | | " | " | (23.2) | | | |
| | 89 | | | " | " | (20.0) | | | |
| | 90 | | | " | " | (23.0) | | | |
| | 91 | | | " | " | (21.0) | | | |
| | 92 | | | " | " | (24.0) | | | |
| 25 | 1 | 28 | 須恵器 | 环A1 | U36S 3面 SC03 | (14.1) | 4.3 | | |
| | 2 | 28 | " | 环A2 | " | (11.3) | 3.3 | (9.1) | |
| | 3 | 29 | " | " | " | (12.0) | 3.5 | (10.4) | |
| | 4 | 29 | " | 环 | U36 3面 SC03 | (9.8) | 5.2 | 5.5 | 軟質 |
| | 5 | | 須恵器 | 長頸壺 | " | | | | |
| | 6 | 29 | " | " | " | 10.2 | | | |
| | 7 | 29 | " | " | U36S 3面 SC03 | | | | 7.0 |
| | 8 | | " | " | " | | | | 8.8 |
| | 9 | 29 | " | " | " | | | | 8.4 |
| | 10 | 29 | " | 甕 | " | 19.9 | 27.5 | | |
| | 11 | 29 | " | " | U36 3面 SC03 | (15.5) | 23.0 | | |
| | 12 | 29 | " | " | " | (15.0) | | | |
| 26 | 13 | | 須恵器 | 甕 | U36 3面 SC03 | (20.0) | | | |
| | 14 | 30 | " | " | U36S 3面 SC03 | 23.5 | 37.0 | | |
| | 15 | 30 | " | " | U36 3面 SC03 | (24.4) | 43.0 | 14.0 | |
| | 16 | | 土師器 | 环 | " | (11.4) | 4.6 | 5.2 | 甲斐型 |
| | 17 | 30 | " | 环B | U36S 3面 SC03 | 10.8 | 4.7 | | |
| 28 | 1 | 30 | 須恵器 | 环蓋 | V37S 3面 SC04 | 17.0 | 2.3 | | |
| | 2 | | " | " | V37N 3面 SC04 | (16.9) | 3.8 | | |
| | 3 | | " | " | " | (16.6) | 3.5 | | |
| | 4 | 30 | " | " | V37S 3面 SC04 | 16.6 | | | |
| | 5 | | " | " | " | (15.8) | 3.8 | | |
| | 6 | | " | " | SC04 3面 | (15.8) | 3.9 | | |
| | 7 | 30 | " | " | U36N 3面 SC04 | (15.8) | 3.9 | | |
| | 8 | | " | " | 3面 SC04 | (15.6) | 3.2 | | |
| | 9 | | " | " | V36N 3面 SC04 | (15.4) | 3.4 | | |
| | 10 | 30 | " | " | V37N 3面 SC04 | (15.6) | 4.0 | | |
| | 11 | | " | " | " | (14.8) | 3.0 | | |
| | 12 | 30 | " | " | 3面 SC04 | 14.8 | 3.4 | | |
| | 13 | 30 | " | " | V37 3面 SC04 | 15.0 | 3.5 | | |
| | 14 | | " | " | 3面 SC04 | (13.8) | 3.4 | | |
| | 15 | | " | " | V37N 3面 SC04 | 14.5 | 3.7 | | |
| | 16 | | " | " | V36N 3面 SC04 | 15.0 | 3.1 | | |
| | 17 | 30 | " | " | V37S 3面 SC04 | 14.4 | 3.4 | | |
| | 18 | | " | " | V37N 3面 SC04 | (17.0) | 3.5 | | |
| | 19 | | " | " | U36N 3面 SC04 | (16.2) | 3.5 | | |
| | 20 | | " | " | " | (17.2) | 3.5 | | |
| | 21 | 30 | " | " | V36N SC04 | 15.4 | 4.0 | | |
| | 22 | 30 | " | " | 3面 SC04 | 15.6 | 2.9 | | |
| | 23 | 31 | " | " | V36N 3面 SC04 | (15.8) | 2.5 | | |
| 29 | 24 | 31 | 須恵器 | 环B1 | V37S SC04 | (14.6) | 4.0 | (10.0) | |
| | 25 | 31 | " | 环B2 | U36S 3面 SC04 | 13.6 | 4.1 | 9.9 | |
| | 26 | | " | " | U37S 3面 SC04 | (14.4) | 4.0 | (10.3) | |
| | 27 | 31 | " | " | V37S 3面 SC04 | 14.5 | 4.3 | 10.6 | |
| | 28 | 31 | " | " | U37S 3面 SC04 | 12.7 | 3.9 | 9.6 | |
| | 29 | 31 | " | " | U36N 3面 SC04 | 14.4 | 4.2 | 10.2 | |
| | 30 | 31 | " | " | " | (14.7) | 4.3 | 8.2 | |
| | 31 | 31 | " | " | " | 13.8 | 4.6 | 9.6 | |
| | 32 | 31 | " | " | U37N 3面 SC04 | 14.8 | 4.0 | 10.2 | |

第2表 土器観察表(4)

| 区 | 番号 | 写真図版 番号 | 種類 | 器種 分類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|------------|-----|----------|--------------|------------|--------|--------|-----|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | |
| 29 | 33 | 31 | 須恵器 | 坏B2 | 3面 SC04 | 15.0 | 4.7 | (11.4) | |
| | 34 | 31 | " | " | U36 3面 SC04 | (14.1) | 4.5 | 9.9 | |
| | 35 | 31 | " | 合子 | V37S 3面 SC04 | (11.8) | 4.3 | (10.1) | |
| | 36 | 31 | " | 坏A2 | U36N 3面 SC04 | 14.4 | | 8.2 | |
| | 37 | " | " | " | " | (14.4) | 4.0 | (6.9) | |
| | 38 | " | " | " | " | (13.6) | 4.4 | 5.4 | |
| | 39 | " | " | " | 3面 SC04 | (14.0) | 3.8 | 9.6 | |
| | 40 | " | " | " | U36N 3面 SC04 | (13.4) | 4.0 | (9.6) | |
| | 41 | 31 | " | " | U37N 3面 SC04 | (14.2) | 3.7 | (10.0) | |
| | 42 | " | " | " | V37 3面 SC04 | (13.4) | 3.2 | (8.4) | |
| | 43 | 32 | " | " | U37N 3面 SC04 | 13.7 | 3.5 | 8.2 | |
| | 44 | 32 | " | " | U36N 3面 SC04 | (13.3) | 3.6 | 11.0 | |
| | 45 | " | " | " | V37S 3面 SC04 | (13.8) | 4.5 | (5.8) | |
| | 46 | " | " | " | 3面 SC04 | (12.9) | | | |
| | 47 | " | " | 長頸壺 | V37 3面 SC04 | | | 5.0 | 壺G類 |
| | 48 | " | " | 壺 | U36N SC04 | | | (8.0) | |
| | 49 | 32 | " | " | V36S 3面 SC04 | | | | |
| 30 | 50 | 32 | 須恵器 | 長頸壺 | U36N 3面 SC04 | | | 10.3 | 底 |
| | 51 | " | " | 甕 | U36 SC04 | (22.6) | | | |
| | 52 | 32 | " | " | V37 3面 SC04 | (23.9) | | | |
| | 53 | 32 | " | " | U36N 3面 SC04 | (22.0) | | | |
| | 54 | 32 | 土師器 | 甕 | V37S 3面 SC04 | (20.0) | | | |
| | 55 | " | " | " | " | (21.5) | | | |
| | 56 | " | " | " | " | (23.3) | | | |
| 32 | 1 | | 須恵器 | 坏蓋 | T36N 3面 SC05 | 18.2 | 5.2 | | |
| | 2 | | " | " | " | (16.0) | 3.7 | | |
| | 3 | | " | " | T36 3面 SC05 | 15.6 | 3.5 | | |
| | 4 | | " | " | T36N 3面 SC05 | (15.8) | 3.4 | | |
| | 5 | | " | " | T36S 3面 SC05 | (16.6) | 4.5 | | |
| | 6 | | " | " | T36N 3面 SC05 | (15.2) | 3.7 | | |
| | 7 | | " | " | T36N 3面 SC05 | (13.9) | 3.3 | | |
| | 8 | | " | 坏B1 | T37N 3面 SC05 | 14.6 | 3.9 | 10.3 | |
| | 9 | | " | " | T36N 3面 SC05 | (14.2) | 4.3 | 8.4 | |
| | 10 | | " | " | " | (13.7) | 3.6 | 10.1 | |
| | 11 | | " | " | " | (14.1) | 3.8 | 9.3 | |
| | 12 | | " | 坏B2 | " | (14.1) | 3.9 | (10.6) | |
| | 13 | | " | " | " | (13.9) | 4.0 | (10.3) | |
| | 14 | | " | 坏A1 | T36S 3面 SC05 | (17.4) | | | |
| | 15 | | " | " | T36N 3面 SC05 | (9.9) | | | |
| | 16 | 33 | 土師器 | 坏B1 | T36N SC05 | (13.3) | 6.2 | 8.3 | |
| | 17 | 33 | " | " | " | 12.3 | 5.5 | 6.0 | |
| | 18 | 34 | " | " | " | (11.6) | 5.2 | | |
| | 19 | 34 | " | 坏A1 | " | (17.0) | (4.9) | (10.2) | |
| | 20 | 34 | " | 坏 | " | 14.6 | 2.7 | 10.4 | 盤状 |
| | 21 | 34 | " | 鉢A | T36S SC05 | 14.0 | 5.5 | 6.5 | |
| | 22 | " | " | " | " | (13.8) | 4.9 | (7.0) | |
| | 23 | " | " | " | " | 15.4 | 5.3 | 7.9 | |
| | 24 | " | " | 坏B2 | T36N | (11.2) | 4.7 | (5.4) | |
| | 25 | " | " | " | T36S SC05 | (11.3) | 4.7 | (6.0) | |
| | 26 | " | " | " | T36N | (11.2) | 4.0 | (6.2) | |
| 33 | 27 | | 土師器 | 短頸壺 | T37N SC05 | (11.4) | | | |
| | 28 | | " | 甕B | T37N SC05 | (18.0) | | | |
| | 29 | | " | " | T37N | (12.4) | | | |
| | 30 | 34 | " | 甕A | " | (14.4) | | | |
| | 31 | 34 | " | " | " | (24.4) | | | |

第2表 土器観察表(5)

| 区 | 番号 | 写真図版番号 | 種類 | 器種類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|--------|-----|-----|----------------|------------|--------|--------|------|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底(高台)径 | |
| 37 | 1 | 34 | 須恵器 | 坏B1 | U37 3面 石組周辺 | (14.8) | | (10.6) | |
| | 2 | | " | 坏B2 | " | (14.4) | | (10.8) | |
| | 3 | | " | " | " | (13.4) | 4.6 | (9.7) | |
| | 4 | | " | " | " | (14.4) | 4.4 | (9.8) | |
| | 5 | | 土師器 | 鉢C | 石組周辺 | 8.8 | 8.8 | | コップ形 |
| | 6 | | " | " | " | (9.6) | 8.8 | | " |
| | 7 | | " | 甕A | 石組中央 3面 | 25.0 | 28.0 | 6.5 | |
| 39 | 1 | | 須恵器 | 長頸壺 | U36N 3面 SR01 | (11.0) | | | |
| | 2 | | " | 壺 | U36N 3面 SR01 | | | 8.6 | |
| 42 | 1 | | 須恵器 | 坏蓋 | V37 4面 SC06 | 15.3 | 4.3 | | |
| | 2 | 32 | " | " | V37S 4面 SC06 | 15.2 | 4.4 | | |
| | 3 | 32 | " | " | V36N 4面 SC06 | 15.6 | 3.8 | | |
| | 4 | | " | " | V37S 4面 SC06 | (16.1) | 3.6 | | |
| | 5 | 32 | " | " | " | 15.2 | 3.0 | | |
| | 6 | 32 | " | " | " | 15.2 | 3.0 | | |
| | 7 | 32 | " | " | " | 14.4 | 3.1 | | |
| | 8 | 33 | " | 坏B1 | " | (15.4) | 5.0 | 10.3 | |
| | 9 | 33 | " | 坏A1 | V37N SC06周辺 | (13.8) | 4.4 | 6.9 | |
| | 10 | 33 | " | 壺 | V37S 4面 SC06 | | | 7.1 | |
| | 11 | 33 | 土師器 | 坏A2 | V37S SC06 | (10.2) | 3.4 | 5.8 | |
| | 12 | | " | " | " | (10.4) | 3.5 | (4.2) | |
| | 13 | 33 | " | " | " | (10.4) | 3.9 | (5.4) | |
| | 14 | | " | 坏B2 | " | (10.0) | 3.9 | (5.1) | |
| | 15 | | " | 坏B1 | " | 11.0 | 4.6 | | |
| | 16 | 33 | " | 坏A1 | " | (11.6) | 3.7 | 6.0 | |
| | 17 | 33 | " | 坏B1 | " | (12.2) | 4.4 | | |
| | 18 | 33 | " | 坏B2 | " | (10.0) | 6.1 | | |
| | 19 | 33 | " | 坏 | " | (11.0) | 8.6 | 6.4 | コップ形 |
| | 20 | | " | 甕C | V36N SC06 | (16.6) | | | |
| | 21 | | " | " | " | (19.0) | | | |
| | 22 | | " | " | V37S SC06 | (16.6) | (19.0) | 7.4 | |
| 44 | 1 | 35 | 須恵器 | 坏B1 | U36N 4面 SR02 | (14.1) | 3.8 | 9.7 | |
| | 2 | 35 | " | 坏B1 | V36 4面 SR02 | (15.1) | 3.7 | (11.9) | |
| | 3 | 35 | " | 坏B2 | V36 SR02 | (14.4) | 3.5 | (11.4) | |
| | 4 | 35 | " | " | " | (13.6) | 4.6 | (10.2) | |
| | 5 | | " | " | W37S 4面 SR02 | | | 7.9 | |
| | 6 | 35 | " | 壺 | V37S 4面 SR02 | 7.0 | 20.6 | 8.0 | |
| | 7 | | " | 長頸壺 | W37S 4面 SR02 | 7.5 | | | 壺C類 |
| | 8 | 35 | " | " | V36S 4面 SR02 | (6.6) | | | " |
| | 9 | | " | 広口壺 | U36N 4面 SR02 | (9.0) | | | |
| | 10 | 35 | " | 壺 | V37S 4面 SR02 | | | (9.3) | |
| | 11 | | " | " | V36S 4面 SR02 | (12.9) | | | |
| 56 | 1 | | 須恵器 | 坏蓋 | U37 SF28 | (17.8) | 4.2 | | |
| | 2 | | " | " | V38 SF09 | (14.4) | (2.2) | | |
| | 3 | | " | " | U38 SF23,24の間 | (12.2) | 3.4 | | |
| | 4 | | " | 坏B2 | T36 SF36(SC01) | (12.4) | 4.5 | (8.9) | |
| | 5 | 35 | " | " | U35 SF37 | (12.1) | 4.4 | (8.9) | |
| | 6 | | " | " | T36 SF36(SC01) | (13.0) | 4.2 | (9.3) | |
| | 7 | 35 | " | " | U36 SF43(SC03) | (10.8) | 4.4 | (6.9) | |
| | 8 | | " | " | U37S 柱穴内 | 14.7 | 4.2 | 10.4 | |
| | 9 | 36 | " | 短頸壺 | SF24 | 7.8 | 13.2 | 13.1 | |
| | 10 | 36 | " | 広口壺 | U36 SF43(SC03) | | | 13.4 | |
| | 11 | | " | 甕 | " | (26.2) | | | |
| | 12 | 36 | " | " | " | 22.0 | | | |
| | 13 | 36 | " | " | SF10 | (20.0) | | | |

第2表 土器観察表(6)

| 図 | 番号 | 写真区版 番号 | 種類 | 器種 分類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|----|------------|-----|----------|----------------|------------|-----|--------|------|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | |
| 56 | 14 | | 須恵器 | 甕 | SF10 | (19.0) | | | |
| | 15 | | " | " | U36 SF43(SC01) | 21.7 | | | |
| | 16 | | 土師器 | 坏A1 | SF21 | (12.4) | | (8.0) | |
| | 17 | | " | " | " | (15.0) | | (10.6) | |
| | 18 | | " | 坏 | SF38 | (8.4) | | (6.7) | コップ形 |
| | 19 | 36 | " | 坏A2 | U37S SP28 | (8.4) | 2.7 | | |
| | 20 | | " | 甕C | SF28 | (21.4) | | | |
| | 21 | | " | " | U38 SF54 | (23.6) | | | |
| | 22 | | " | " | SF15 | (19.6) | | | |
| 58 | 1 | | 須恵器 | 坏蓋 | U38 包含層 | (15.3) | 2.3 | | |
| | 2 | | " | " | W35N 包含層 | (15.6) | 3.0 | | |
| | 3 | | " | " | 包含層 | (15.7) | 2.8 | | |
| | 4 | 36 | " | " | 2面包含層直上 | (15.6) | 3.4 | | |
| | 5 | | " | " | U38N 包含層 | (15.8) | 3.3 | | |
| | 6 | | " | " | 包含層 | (15.0) | 3.2 | | |
| | 7 | | " | " | " | (14.8) | 2.9 | | |
| | 8 | | " | " | V37N 包含層 | (14.6) | 3.4 | | |
| | 9 | | " | " | 包含層 | (15.2) | 3.9 | | |
| | 10 | 36 | " | " | V37S 包含層 | (15.8) | 4.0 | | |
| | 11 | | " | " | 南北トレンチ | (14.6) | 4.5 | | |
| | 12 | | " | " | 包含層 | (14.6) | 3.8 | | |
| | 13 | | " | " | " | (15.6) | 3.9 | | |
| | 14 | | " | " | V36S 包含層 | (15.5) | 3.5 | | |
| | 15 | | " | " | V37S 包含層 | (16.0) | 3.6 | | |
| | 16 | | " | " | T37 包含層 | (15.6) | 3.6 | | |
| | 17 | | " | " | V38S 4面 包含層 | 15.0 | 3.4 | | |
| | 18 | 36 | " | " | V37S 包含層 | 15.4 | 3.3 | | |
| | 19 | | " | " | 3面包含層 | 16.0 | 3.6 | | |
| | 20 | | " | " | 包含層 | (13.6) | 2.8 | | |
| | 21 | | " | " | V38N 包含層 | (14.3) | 2.9 | | |
| | 22 | | " | " | 3面 包含層 | (14.2) | 3.2 | | |
| | 23 | | " | " | 包含層 | (14.0) | 3.2 | | |
| | 24 | 36 | 須恵器 | 坏蓋 | 南北トレンチ | 14.8 | 3.7 | | |
| | 25 | 36 | " | " | T37 3面 包含層 | 12.3 | 3.1 | | |
| | 26 | | " | " | 包含層 | (10.7) | 1.9 | | |
| | 27 | | " | " | " | (13.0) | 1.7 | | |
| | 28 | | " | " | " | 18.0 | | | |
| | 29 | 36 | " | " | T36N 4面 包含層 | (12.2) | 4.7 | | |
| | 30 | | " | " | T37N 包含層 | (9.8) | 3.5 | | |
| | 31 | | " | " | T37S 包含層 | (10.8) | 4.1 | | |
| 59 | 32 | | 須恵器 | 坏B1 | 包含層 | (13.8) | 4.7 | (6.7) | |
| | 33 | | " | " | T36N 包含層 | (15.2) | | (9.7) | |
| | 34 | | " | " | V37 包含層 | (16.2) | 4.5 | (10.7) | |
| | 35 | 36 | " | " | U39N 包含層 | (14.0) | 4.6 | (9.5) | |
| | 36 | 36 | " | 坏B2 | U38S 包含層 | (13.2) | 3.8 | (10.0) | |
| | 37 | 37 | " | " | U38N 4面 包含層 | 13.5 | 4.0 | 9.2 | |
| | 38 | | " | " | 包含層 | (14.2) | 3.8 | (10.0) | |
| | 39 | | " | " | W38N 包含層 | (12.4) | 4.4 | (9.6) | |
| | 40 | | " | " | 包含層 | (14.6) | 4.1 | (10.2) | |
| | 41 | | " | " | T36N 包含層 | (17.7) | 5.4 | (12.5) | |
| | 42 | 37 | " | " | W37S 包含層 | (17.0) | | | |
| | 43 | 37 | " | " | U37S 包含層 | (15.0) | 3.6 | (11.2) | |
| | 44 | | " | " | W35N 包含層 | (12.2) | 4.5 | (7.1) | |
| | 45 | | " | " | T36N 包含層 | (11.0) | 4.3 | 7.3 | |
| | 46 | | " | " | U39 包含層 | (11.3) | 4.2 | 8.2 | |

第2表 土器観察表(7)

| 図 | 番号 | 写真図版 番 号 | 種類 | 器 種 分 類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 |
|----|-----|-------------|------|------------|-------------|------------|-----|--------|-----|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | |
| 59 | 47 | | 須惠器 | 环B2 | 包含層 | (10.2) | 4.2 | 6.7 | |
| | 48 | | " | " | U37S 包含層 | (9.8) | 4.0 | (7.2) | |
| | 49 | | " | " | 包含層 | (8.9) | 4.2 | (5.9) | |
| | 50 | | " | 环A1 | U36N 包含層 | | 4.6 | | |
| | 51 | | " | 环A2 | 包含層 | (15.6) | 4.1 | 7.0 | |
| | 52 | | " | 环A1 | " | 14.8 | 3.4 | 9.0 | |
| | 53 | | " | 环A2 | " | 13.2 | 3.6 | 8.4 | |
| | 54 | 37 | " | " | V36 包含層 | (13.0) | 3.6 | (8.1) | |
| | 55 | | " | " | 包含層 | (15.4) | 3.7 | (11.3) | |
| | 56 | | " | " | " | (13.9) | 4.3 | (8.9) | |
| | 57 | | " | " | T36 包含層 | (11.4) | 4.9 | (7.4) | |
| | 58 | 37 | " | " | U35N 包含層 | (11.0) | 4.1 | 6.3 | |
| | 59 | 37 | " | " | T36N 包含層 | 10.0 | 4.5 | 5.9 | |
| | 60 | | " | " | 包含層 | (12.0) | 4.0 | (8.5) | |
| | 61 | 37 | " | 合子 | T36S 包含層 | 12.2 | | | |
| | 62 | 37 | " | 环A2 | V38S 包含層 | (13.8) | 3.0 | (10.1) | |
| 60 | 63 | | 灰釉陶器 | 碗 | 包含層 | (17.0) | 5.3 | 7.9 | |
| | 64 | | " | " | " | (17.4) | 5.0 | (8.4) | |
| | 65 | | 須惠器 | 鉢 | T36N 包含層 | (17.2) | | | |
| | 66 | | " | 盤 | 包含層 | (18.3) | 2.7 | | |
| | 67 | | 土師器 | 盤 | V38S 包含層 | | | (13.0) | |
| | 68 | | 須惠器 | 包含層 | 包含層 | (9.8) | | | |
| | 69 | | 灰釉陶器 | 皿 | " | (15.3) | 2.9 | (8.0) | |
| | 70 | 37 | 須惠器 | 高环 | U38 包含層 | (13.4) | | | |
| | 71 | | " | " | T36N 包含層 | (9.6) | | | |
| | 72 | | " | 壺 | U35N 包含層 | | | 8.6 | |
| | 73 | | " | " | U38N | | | 12.4 | |
| | 74 | | " | 長頸壺 | 包含層 | (9.3) | | | |
| | 75 | 37 | " | " | W37S 3面 包含層 | | | 4.6 | 壺G類 |
| | 76 | | " | 壺 | U38S 4面 包含層 | (11.6) | | | |
| | 77 | | " | " | U35N 4面 包含層 | (11.4) | | | |
| | 78 | | " | " | 南端流路 | | | | |
| 61 | 79 | 38 | 土師器 | 环B1 | V-38 | (11.6) | 5.0 | | |
| | 80 | | " | " | T37N | (11.6) | 5.6 | (5.6) | |
| | 81 | | " | " | T36N | (12.2) | 5.0 | (7.0) | |
| | 82 | | " | 环A1 | T36N | (12.2) | 4.2 | 8.0 | |
| | 83 | | " | 环 | | 12.2 | 4.3 | 5.0 | 駿東环 |
| | 84 | | " | " | U-35 | (12.2) | 4.2 | 7.0 | " |
| | 85 | | " | 环A2 | T37 | (12.4) | 4.3 | (5.2) | |
| | 86 | | " | 环B1 | | (12.0) | 4.9 | (6.0) | |
| | 87 | | " | 环B2 | U38S | 11.7 | 4.2 | 6.4 | |
| | 88 | 38 | " | " | U36S | 11.4 | 4.3 | 6.0 | |
| | 89 | | " | 环A1 | | (14.0) | 4.8 | | |
| | 90 | | " | " | T36 | (12.8) | 3.7 | 6.0 | |
| | 91 | | " | 环 | | (11.6) | 3.4 | 8.0 | 駿東环 |
| | 92 | | " | 环A1 | U36 | (11.8) | 3.3 | 7.5 | |
| | 93 | | " | 盤 | | (14.6) | 2.7 | (11.0) | |
| | 94 | | " | 环 | | (10.4) | 3.8 | (4.6) | 駿東环 |
| | 95 | 38 | " | 环A2 | U37S | 9.2 | 3.0 | 4.8 | |
| | 96 | | " | 环B1 | T37N | (10.4) | 5.5 | 4.6 | |
| | 97 | | " | " | | (11.0) | 4.4 | 5.0 | |
| | 98 | | " | 环B2 | W35S | (10.4) | 4.2 | 5.0 | |
| | 99 | | " | " | | (10.6) | 4.7 | 5.6 | |
| | 100 | | " | " | | (11.6) | 5.0 | 5.3 | |

第2表 土器観察表(8)

| 区 | 番号 | 写真区版 番 号 | 種類 | 器 種 分 類 | 出土地点 | 計測値cm (推定) | | | 備考 | |
|----|-----|-------------|-----|------------|---------|------------|--------|--------|-------|--|
| | | | | | | 口 径 | 器 高 | 底(高台)径 | | |
| 61 | 101 | | 土師器 | 坏B2 | | (10.6) | 4.7 | 4.0 | | |
| | 102 | | " | " | | (11.1) | 5.0 | 5.0 | | |
| | 103 | | " | " | U36S | (11.0) | 4.1 | (5.0) | | |
| | 104 | | " | " | U36S 4面 | (10.4) | 4.6 | 5.5 | | |
| | 105 | 38 | | " | " | T38N | 10.8 | 4.7 | 5.0 | |
| | 106 | | | " | " | | (10.4) | 3.9 | (5.2) | |
| | 107 | | | 土師器 | 坏B2 | U38S | (10.0) | 4.9 | | |
| | 108 | | | " | " | | (10.8) | 4.0 | (6.2) | |
| | 109 | | | 陶器 | 皿 | | (12.0) | 2.4 | (7.7) | |
| | 110 | | | " | " | (面包含桶) | 4.4 | 2.2 | 1.8 | |
| 62 | 111 | 37 | 須恵器 | 横瓶 | U37N 4面 | | | | | |
| | 112 | | 土師器 | 甕C | | (22.0) | | | | |
| | 113 | 38 | " | " | " | U38N | 21.0 | | | |
| | 114 | | " | " | " | W37S | (17.2) | | | |
| | 115 | | " | " | " | U38S | (19.0) | | | |
| | 116 | | " | " | 甕A | T37N | (20.0) | | | |
| | 117 | | " | " | " | V38S | (22.0) | | | |

第V章 ま と め

今回調査した川合遺跡志保田地区は、古代駿河国の中心となる駿河国府が置かれた安倍郡の東端に所在している。さらに今までの調査成果の検討から、静岡市北東部の中規模河川に挟まれたこの周辺に安倍郡衙が置かれた可能性が高まってきている。

今回の調査では、墨書土器・帯金具・木簡・絵馬も出土し、官衙遺跡と推定するにふさわしい遺物群という印象を受ける。この遺物の傾向からみれば、以前に調査された川合遺跡八反田地区、内荒遺跡、宮下遺跡のような安倍郡衙関連遺跡と比較して何ら遜色はない。しかし、一方の遺構を見てゆくと、礎板等を伴う柱根等から類推される施設は、官衙の一部とするには貧弱な様相を呈している。しかし、この地点は、祭祀という特定の目的のために設定された場所と考えられ、小規模な建物と井戸、東西に流れる自然流路も確認された。これらの各種の遺構や、さらには流路等の存在も考慮して、この地点で執行された祭祀の性格や、さらには官衙地域内での位置付けが検討されるべきであろう。

この祭祀の特徴は、土製品主体の祭祀であり、木製品を多用する律令的祭祀とは明らかに異なっている。今回の調査で確認された木製の祭祀具は、馬形が一点のみである。静岡市南部の大谷川河口付近に所在する神明原・元宮川遺跡では人形・馬形といった木製祭祀具が多量に出土している。このように、使用された祭祀具の相違は明確であるが、一方この遺跡でも人・馬形の土製祭祀具が、多量の土器を伴い出土している。このように官衙域でも、木製や土製の祭祀具を使用する両者の祭祀形態が混在して実施されていたのであろうか。この両者は、官衙域のなかで一定の地域に限定されかつ、使用する祭祀具の種類も、執行者の身分・官位に応じて地点ごとに規制がされていたと推定される。このような祭祀形態を前提とすると、本遺跡のSC02は、官衙に関連する人々のなかでも、支配機構の末端に組み込まれた階層が執行した祭祀痕跡といえるのではないかと推定される。

明確な祭祀具を伴わず一定の器種・種類の土器を使用する形態の祭祀は類例も少なく、どのような性格のものなのかは今後の検討に委ねたい。また各種の墨書土器・木簡とかの文字資料・身分表象を表す帯金具等の貴重な遺物が発見されたが、その一方で遺構との関連性については、ほとんど検討の素材は見つからなかった。乏しい紙面という制約もあり個々の遺物の検討内容は省略させていただくこととする。このように多くの成果とともに、今後への課題も多く残された調査であったが、気付いた点を列挙してまとめたい。

(1) 川合遺跡志保田地区における祭祀形態について

本遺跡で確認された祭祀跡の特徴を整理すると以下のようになる。

- SC01 平坦地での祭祀跡。土器は須恵器貯蔵形態が主体、滑石製紡錘車1点、勾玉1点出土。土器の年代は8世紀後半から9世紀初頭。
- SC02 祭祀終了後の一括廃棄土坑。祭祀具は土製品の人・馬形とミニチュア土器。土器は土師器環が主体で、時期は8世紀前半。
- SC03 平坦地での祭祀痕跡。須恵器貯蔵形態の土器が主体。土器の多くは8世紀前半と考えられるが、他に須恵器壺G類と甲斐型環が出土する。
- SC04 平坦地での祭祀痕跡。土器は須恵器供膳形態の環・蓋が主体で、その年代は8世紀代。
- SC05 平坦地での祭祀痕跡。やや散在傾向か。土器は土師器・須恵器の供膳形態が主体で、時期は8世紀前半。

SC06 平地地での祭祀痕跡。大きく三ヶ所に土器が集中。土師器と須恵器の供膳形態が主で、その時期は8世紀前半。

以上のように本遺跡の祭祀遺構の特徴を抽出したが、これらは大きく二つに分けられる。

A類 祭祀終了後の一括廃棄土坑。SC02がその例であり、祭祀具を伴う祭祀遺構の代表的な形態。

B類 平地地での祭祀跡。祭祀具はほとんど伴わず、限定された器種の土器を使用することに特徴がある。使用される器種により以下の二類に細分される。

B-1類・供膳形態を主とするもの。なかでも須恵器が主体を占めるもの(SC04)と、土師器・須恵器が同数となるもの(SC005・06)がある。

B-2類・貯蔵形態を主とするもの(SC01・03)。

以前から祭祀遺構として検討されてきたのは、A類の土坑とか凹みを利用した祭祀であった。しかし今回の調査において発見された多くは、B類の祭祀であった。この明確な遺構を伴わず、かつ祭祀具もない状態で、祭祀遺構と判断されるのか疑問もある。しかしこれらの土器組成には明らかに偏りが認められ、祭祀行為以外の日常生活を反映する結果とも云えないことから、祭祀跡と判断した。今後の見通しとして、あえて推定すれば、土器に供え物を入れ捧げた行為の結果ではないかと思われる。

SC01は土器からみた年代観は8世紀後半から9世紀初頭に位置付けられるが、しかし勾玉との年代は約百年であり、その差は歴然としている。この事実は何を意味するのか、筆者の理解の範囲を越えているが、一つの可能性として、貯蔵形態の須恵器のなかに納められた地鎮のための、鎮禮具と考えられないか。可能性の一つとして指摘してみた。

(2) SC02出土土師器環の年代観について

第20・21図にはSC02出土の土師器環を图示している。これらは関東地域の鬼高式手法の系譜を引く環の最終段階に位置付けられるもので、指による成形と調整を施し、口径も10cmから12cm程度に小型化する。その時期は共伴する須恵器からみれば、箱環の出現前の様相で、8世紀前半の年代が与えられる。

1988年に当研究所から刊行された「大谷川Ⅲ」遺物編(本文編)のなかでは、これらの土師器をIV期前葉におき、7世紀中葉から後葉に比定している。しかしその後、1996年に開催された静岡県考古学会シンポジウム「駿河国律令社会考」資料のなかでは、その年代観の修正の必要を認める記述がある。これは、発表者である佐藤達雄氏によるもので、8世紀にまで下る事例が明らかとなったことと、木製祭祀具は流れてそって移動するため、必ずしも土器との共伴関係は明確でなく、従って7世紀代にこだわる理由がないのでは、という主旨と理解される。ちなみに静岡県中・東部において、この土師器と須恵器環類との共伴が認められる遺跡は下記のとおりであり、これらはいずれも8世紀前半に置かれている事例である。

静岡市駿府城内遺跡(城内中学校地点)(静岡県考古学会・1996)

駿河国府関連遺跡の一つであり、奈良時代のほぼ正方位の区画溝から、瓦・須恵器と共伴して出土している。土器類の年代の上限が8世紀初頭であることから、土師器環の年代もこの幅のなかに入ると考えられる。

富士川町室野坂古墳群(佐野 他・1996)

東名富士川SAの背後の丘陵上に所在する8世紀代の土器を出土する古墳群であり、E2-1号墳・D4-1号墳・D3-1号墳に須恵器環との共伴が認められる。ここでも7世紀代の土器は一点出土しているのみであり、土師器は8世紀まで下ることは確実である。

富士市東平遺跡(平林 他・1981)

東名富士インターを下った伝法地区一帯に所在する奈良時代から平安時代前期の大集落である。

ここでも、2・13・63・91号住居跡から、須恵器との共存が確認されている。集落の出現が8世紀初頭であることから、土師器の年代が7世紀にまで遡ることはありえない。

以上、代表的な事例をあげた。この土師器環の終末は明確ではないが、8世紀後半に成立する駿東型環・甲斐型環とは共存しないことから、8世紀前半には消滅すると思われる。

このように静岡県中東部地域において、8世紀前半の土師器環としては鬼高式手法の環がほとんどを占め、これらに混じってクロコ土師器や、盤状環と云われるものが若干認められるにすぎない。静岡県西部地域では、畿内を中心に使用された土器の系譜を引く土師器が用いられている。本遺跡の所在する静岡平野地域は、在来系譜の土器を使用する中東部地域に該当し、これが西部地域との大きな差となっている。

本地域は、かつての鬼高文化圏の西の外郭圏（長谷川1985）にあたり、さらにこれらの土器系譜を奈良時代に入ってもなお前半代にまで継続する地域である。

謝辞

今回の現地調査・整理事業に関しては、多くの方々の御教示と指導をいただいた。この報告を閉じるにあたり、関係機関及び関係者への感謝の意をこめて氏名を記させていただきます。敬称略

関係機関

静岡県教育委員会財務課・文化課・静岡市教育委員会・静岡県立静岡東高等学校

関係者

新井正樹・池谷初恵・伊藤寿夫・岡村涉・及川司・大川敬夫・菊田宗・佐藤達雄・佐藤正知・志村博
杉山彰悟・鈴木隆夫・鈴木敏中・瀬川裕市郎・田中広明・中鉢賢治・中野寛・松井一明・八木勝行
山田成洋・山本恵一・山本義孝・吉岡伸夫・渡辺康弘

【参考文献】

- 高橋工「古墳時代の大型船舶—船形埴輪を中心に—」『考古学ジャーナル』 NO343 1992年2月
ニューサイエンス社
- 佐野五十三「駿河国における官衙・集落の土器—須恵器を中心として—」『地域と考古学—向坂綱二先生還暦記念論集—』1994 向坂綱二先生還暦記念論集刊行会
- 佐野五十三「条里と土地開発—静岡平野における方格状地割りの導入と展開—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集 1996
- 八木勝行「志太地域における律令期須恵器について」『藤枝市郷土博物館年報・紀要』 NO2 1990
藤枝市郷土博物館
- 佐藤達雄「律令祭祀」『古代駿河国律令社会考』静岡県考古学会シンポ 1996 静岡県考古学会
- 佐藤達雄「神明原・元宮川遺跡」『水辺の祭祀』シンポジウム 日本考古学協会三重県実行委員会 1996
- 長谷川厚「古代東国における土器生産—特に関東地方、奈良時代の土師器生産について—」『古代探検』
早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集 滝口宏編 1985
- 「室野坂古墳群」 富士川町教育委員会 1996
- 「東平」 富士市教育委員会 1981
- 「大谷川Ⅰ～Ⅳ」 1900 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 「内荒遺跡」遺構編・遺物編 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986・1988
- 「宮下遺跡」遺構編・遺物編 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985・1991
- 「川合遺跡八反田地区Ⅱ」本文編・図版編 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995
- 「木製品集成図録」近畿古代編 奈良国立文化財研究所 1985

「川合遺跡志保田地区のテフラ分析」

(株) 古環境研究所

1 はじめに

静岡市とその周辺に分布する沖積層中には、富士山火山のほか天城火山などから噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が認められる。テフラのなかには、噴出年代が明らかにされているもの（示標テフラ）があり、これらとの層位関係を求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、発掘調査でテフラが認められた川合井遺跡志保田地区でも、テフラ検出分析と屈折率測定を行い、示標テフラとの同定を行なって土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった資料は、発掘調査担当者よりW-36グリットのSX01底面及びU-37グリットより採集された2試料である。

2 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

SX01底面とU-37グリット（図1）から採取された合計4試料について、テフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴の把握を行なった。なおU-37グリットで採取された土層は、下位より青灰色シルト層（層厚3cm）、白色粗粒火山灰混じり青灰色シルト層（層厚3cm）、黒色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）の連続からなる。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料について超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 2) 80°Cで恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。SX01底面の試料には、透明の火山ガラスが特に多く含まれている。形態としては軽石型のものが多く、他に平板状のバブル型も少量認められる。U-37グリットの試料では、試料番号2にスコリア及び白色の軽石が少量認められる。スコリアとしては、暗灰色のほか暗褐色のスコリアが認められ、その最大径は0.7mmである。また白色の軽石はスポンジ状によく発泡しており、その最大径は0.8mmである。また試料番号1にはスコリアが特に多く含まれている。その色調は暗褐色や黒褐色で、最大径は1.1mmである。

これらのうち、U-37グリットの試料番号1のテフラは、スコリアの岩相から、いわゆる長崎スコリアに同定される。

3 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

軽石及び火山ガラスが認められたSX01底面とU-37グリット試料番号2の2試料について、屈折率測定を行なって示標テフラとの同定精度を向上させることにした。測定方法は、位相差法（新井，1972）による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表に示す。SX01底面の試料に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は1.495-1.497である。この試料には、重鉱物として黒雲母が比較的多く含まれている。このテフラは、層相や火山ガラ

スの特徴さらに黒雲母が含まれていることなどから、838（承和5）年に神津島天上山から噴出した神津島天上山テフラ（Iz-Kt, 一色, 1982, 町田・新井, 1992）あるいは886（仁和2）年に伊豆新島向山から噴出した伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm, 徳永・横山, 1979, 一色, 1987, 町田・新井, 1992）に同定される。

一方、U-37グリッド試料番号2に含まれる火山ガラス（軽石）の屈折率(n)は1.500-1.502である。この試料には、重鉱物として黒雲母が少量含まれている。このテフラ粒は、その特徴から2,800年～2,900年前に天城火山カワゴ平火口から噴出した天城カワゴ平テフラ（Kg, 町田ほか, 1984, 葉室, 1978）に由来すると思われる。

4 小結

川合遺跡志保田地区においてテフラ検出分析と屈折率測定を違わせて行なった。その結果、SX01底面で検出されたテフラは、神津島天上山テフラ（Iz-Kt, 838年）あるいは伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm, 886年）に同定された。またU-37グリッドの試料からは、下位より天城火山カワゴ平テフラ（Kg, 2,000～2,000年）起源の軽石と長崎スコリアが検出された。

【文献】

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, P254～269.
- 葉室和親（1978）大室火山群の地質。地質雑。84, P433-444
- 一色直記（1982）神津島の地質。地域地質調査報告（5万分の1図幅）。地質調査所, 75p.
- 一色直記（1987）新島の地質。地域地質調査報告（5万分の1図幅）。地質調査所, 85P.
- 町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276P.
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」P865-928
- 徳永徹・横山勝三（1979）伊豆新島火山の噴火様式と生成運動。地理評, 52, P. 111-125.

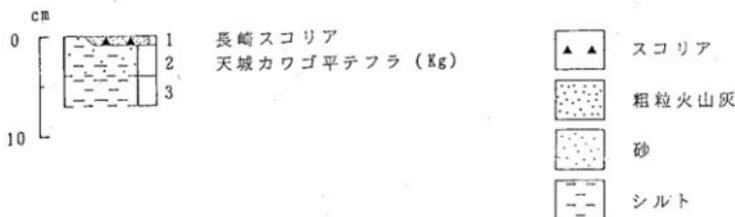


図1 U-37 グリッドのテフラ分析試料の位置
数字はテフラ分析の試料番号

表1 テフラ検出分析結果

| 地点 | 試料 | 軽石・スコリア | | | 火山ガラス | | |
|--------|----|---------|----------|----------|-------|-------|----|
| | | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 形態 | 色調 |
| SX01底面 | - | - | - | - | +++ | pm>bw | 透明 |
| U-37 | 1 | +++ | 暗褐>黒褐 | 1.1 | - | - | - |
| | 2 | + | 暗灰>暗褐, 白 | 0.7, 0.8 | - | - | - |
| | 3 | - | - | - | - | - | - |

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm. bw: バブル型, pm: 軽石型.

表2 屈折率測定結果

| 地点 | 試料 | 重鉱物 | 火山ガラスの屈折率 (n) |
|--------|----|------|---------------|
| SX01底面 | | bi | 1.495-1.497 |
| U-37 | 2 | (bi) | 1.500-1.502 |

bi: 黒雲母. ()は量の少ないことを示す. 屈折率の測定は位相差法(新井, 1972)による.

川合遺跡志保田地区のプラント・オパール分析

(株)古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール (植物珪酸体) 分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

川合遺跡志保田地区では、発掘調査において標高6.0~6.4mにかけての暗色層で耕作遺跡の可能性が示唆された。そこで、プラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みることにした。

2. 試料

試料は、北側法面において遺跡の調査担当者によって採取されていたブロックのうち、上位より暗黒色土 (試料 a)、暗灰色土 (試料 b)、黒灰色シルト (試料 c)、灰色細砂 (試料 d) の4点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法 (藤原 1976)」をもとに、次の手順で行なった。

- 1) 試料土の絶乾 (105°C ・24時間)
- 2) 試料土約 1g を秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40\mu\text{m}$, 0.02g)
※電子分析天秤により一万分の 1g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 ($300\text{W}\cdot 42\text{kHz}\cdot 10$ 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\mu\text{m}$) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール (以下、プラント・オパールと略す) を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート一枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。またおもな分類群 (イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科) については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算計数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: $10\text{-}5\text{g}$) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物珪酸体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94 (種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である。(杉山・藤原, 1987)

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1に示す。試料a、試料b、試料cでは、それぞれヨシ属、ウシク

サ族、タケ亜科のプラント・オパールが検出された。試料dではウシクサ族のプラント・オパールのみが認められた。プラント・オパール密度は、試料aでヨシ属が高い以外はいずれもやや低い値である。

5. 稲作の可能性について

イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかったことから、これらの層準に関しては稲作の痕跡は認められない。なお、試料aではヨシ属が非常に高い密度であり卓越していることから、当該層準の堆積時は本遺跡一帯湿地的な環境であったと推定される。

6. まとめ

川合遺跡志保田地区の低位暗色層においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、イネのプラント・オパールはいずれの層準からも検出されず、稲作の可能性は認められなかった。

【文献】

- 杉山慎二・藤原宏志 (1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山-古環境編一。川口市遺跡調査会報告。10。P. 281-298
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学, 9, p15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (3) - 福岡・板付遺跡 (夜臼式) 水田及び群馬・日高遺跡 (弥生時代) 水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定一。考古学と自然科学, 12, p29-41.
- 藤原宏志・杉山慎二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田跡の探査一。考古学と自然科学, 17, p73-85.

表1 川合遺跡志保田地区のプラント・オパール分析結果
検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)

| 分類群 \ 試料 | 北西断面 | | | |
|---------------|------|----|----|---|
| | a | b | c | d |
| イネ | | | | |
| キビ族 | | | | |
| ヨシ属 | 79 | 13 | 12 | |
| ウシクサ族(ススキ属など) | 7 | 13 | 12 | |
| タケ亜科(おもにネザサ節) | 22 | 13 | 48 | 6 |

推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$)

| | | | | |
|---------------|------|------|------|------|
| イネ (イネ類) | | | | |
| キビ族 | | | | |
| ヨシ属 | 4.99 | 0.82 | 0.76 | |
| ウシクサ族(ススキ属など) | 0.09 | 0.16 | 0.15 | |
| タケ亜科(おもにネザサ節) | 0.10 | 0.06 | 0.23 | 0.03 |



1 調査区第1面検出状況



2 調査区第1面全景

図版2 調査第1面

1 第1面遺構検出状況
(調査区北側)

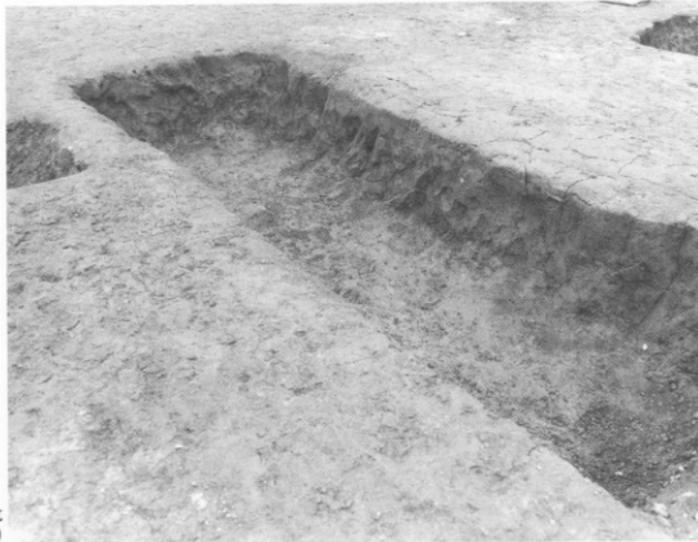


2 第1面遺構検出状況
(調査区北側)



3 第1面遺構検出状況
(調査区南側)

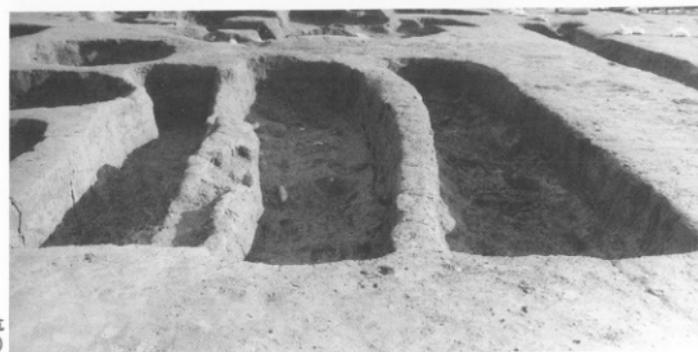




1 磔詰め土坑
(SF05)



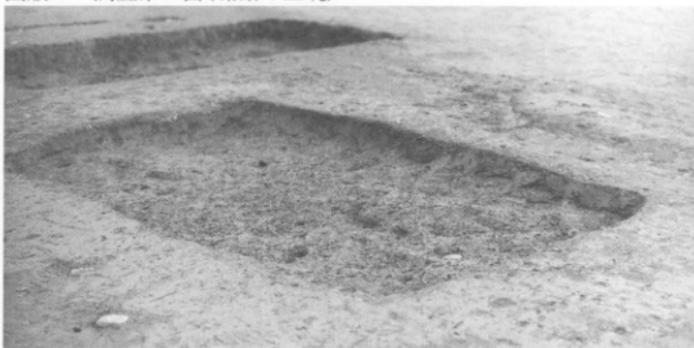
2 磔詰め土坑
(SF11, 12)



3 磔詰め土坑
(SF28, 29, 53)

図版 4 調査第 1 面(磔詰め土坑)

1 磔詰め土坑
(S F 34)



2 磔詰め土坑
(S F 40)



3 磔詰め土坑
(S F 55)





1 第 1 面水田
(調査区北側)

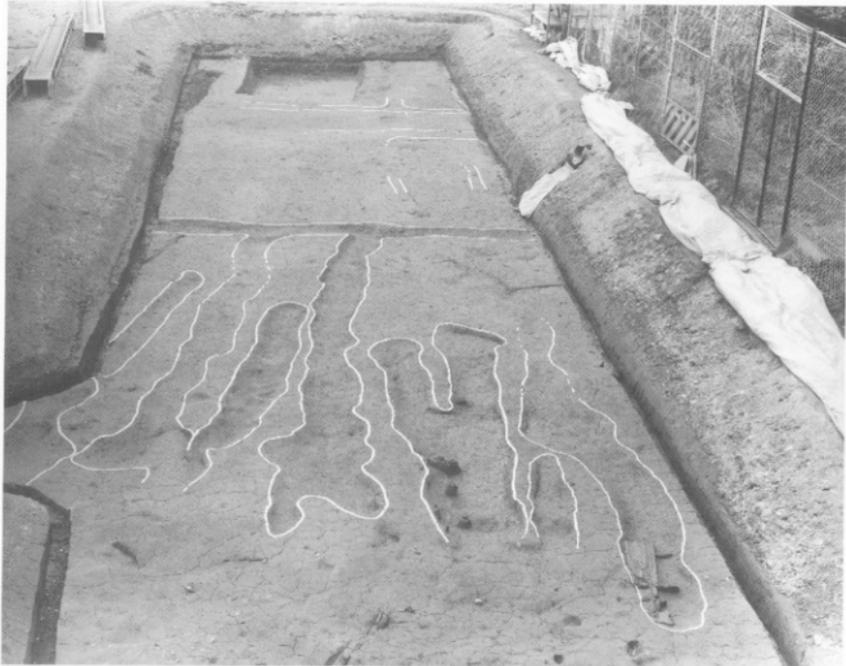


2 礎詰め土坑群
(調査区南側)

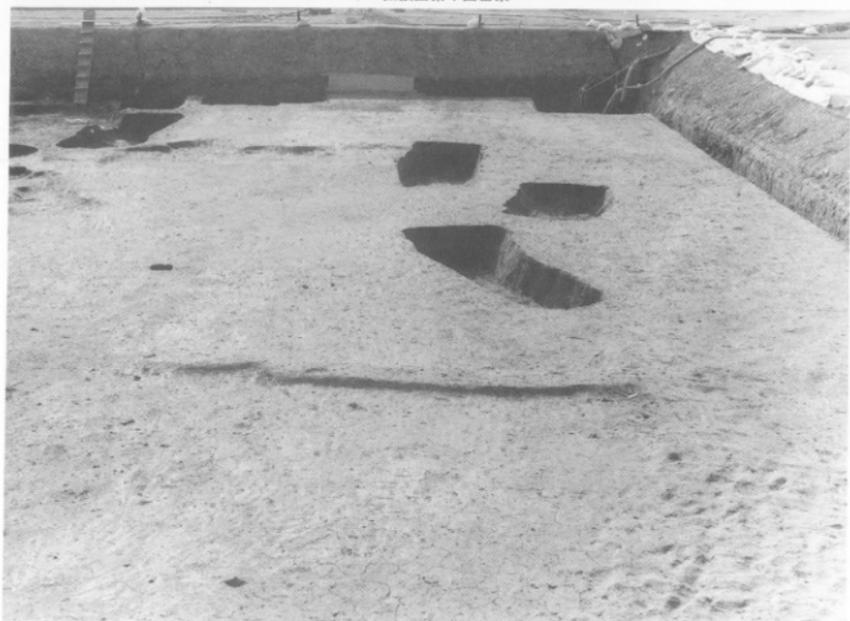


3 木組み遺構
(拡張区)

図版6 調査第1面(拡張区)第2面



1 拡張区第1面全景



2 第2面水田



1 調査区第3面全景(空中写真)



2 調査区第3面北側



1 祭祀遺構(SC01)



2 祭祀遺構(SC02)



3 祭祀遺構
(SC02下部状況)

1 祭祀遺構
(SC03)



2 祭祀遺構
(SC03 部分)



3 石組み遺構





1 祭祀遺構
(SC04 西側)



2 祭祀遺構
(SC04 東側)



3 流路
(SRO1)
及び不明遺構
(SX01)



1 拡張区2面(調査第3面)全景



2 井戸(SE02)



1 調査区第4面全景



2 拡張区3面(調査第4面)全景



1 流路 (SR02)



1 祭祀遺構
(SC06 西側)

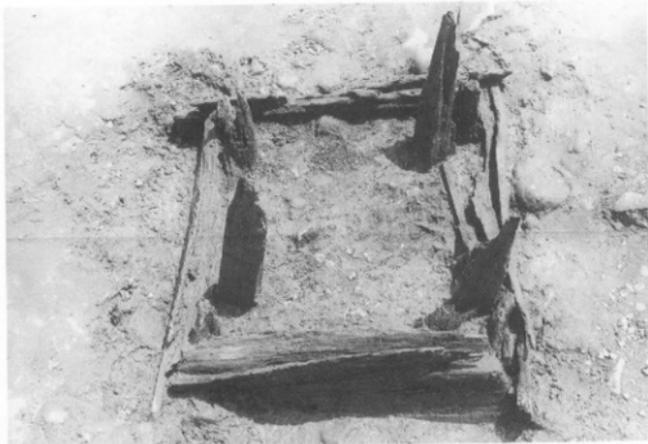


2 祭祀遺構
(SC06 北側)



3 柱穴群
(調査区南側)

1 井戸(SE01)
検出状況



2 井戸(SE01)



3 井戸(SE01)
柱杭傾斜状況

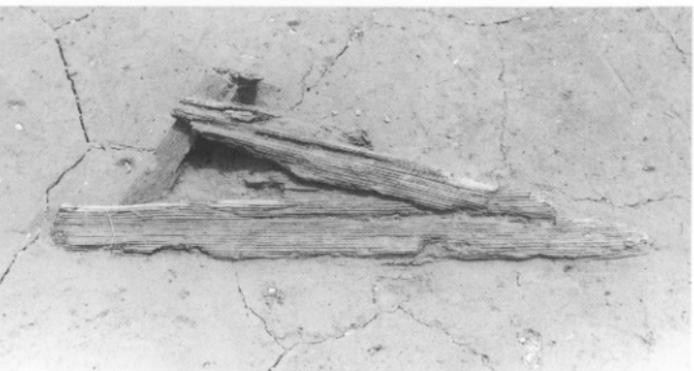




1 掘立柱建物跡
(SHO1)



2 木組み遺構
(南側)



3 木組み遺構
(北側)



1 絵馬
(W463)
出土状況
(SP130)



2 柱根列
(SP30、31)



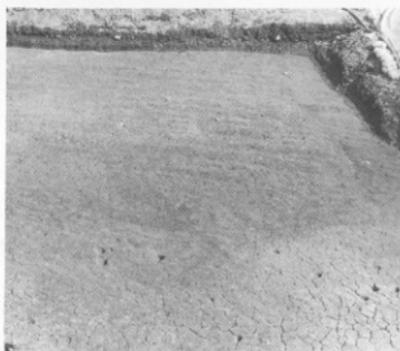
3 作業風景
(4面清掃)



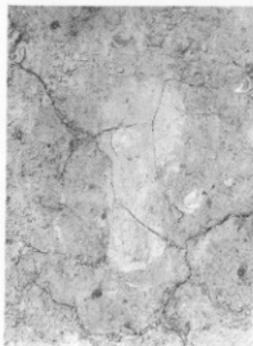
1 調査区
第5面全景



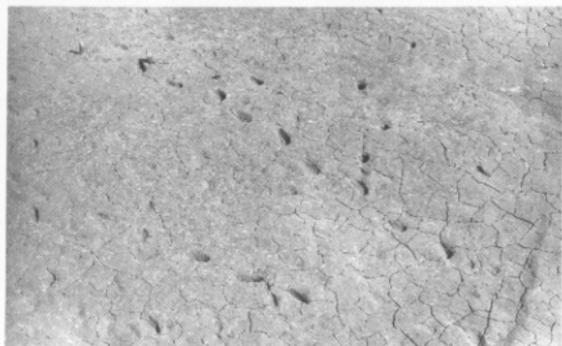
2 拡張部
(西側法面)
第5面



3 第5面
洪水痕跡
(調査区南側)



4 足跡検出
状況
(5c層上面)

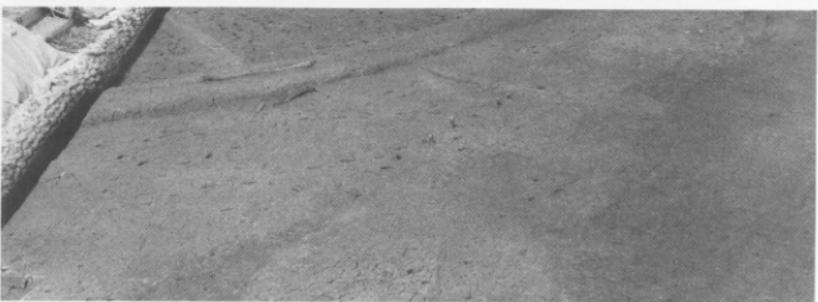


5 第5面
水田足跡列

1
第5面水田



2
第5面水田杭列



3
第5面下水田木製品集積





1 調査区
第6面全景



2 第6面水田



3 ヒョウタン
出土状況
(6面下)



4 木製品
(W452)
出土状況
(6面下)



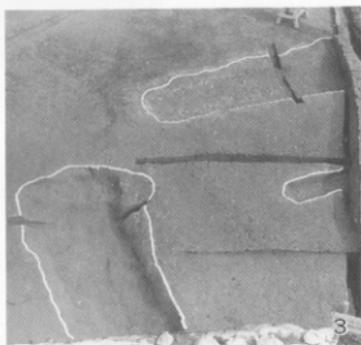
5 包含層
(9層)
遺物出土状況



1 調査区
第7面全景



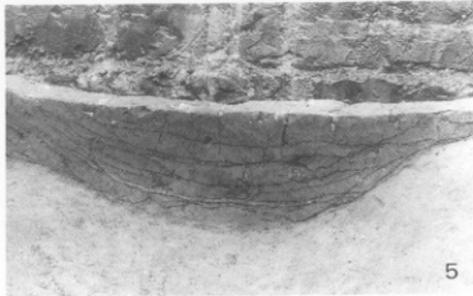
2
方形周溝墓
(検出状況)



3
方形周溝墓
(盛土除去)

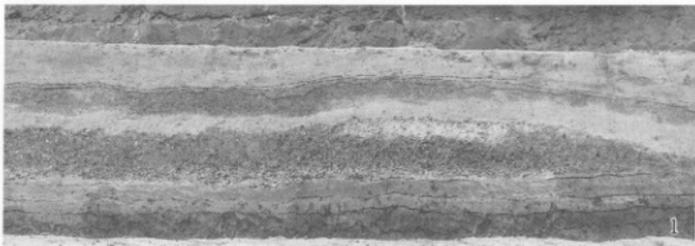


4 東側周溝延長(西側法面拡張部)

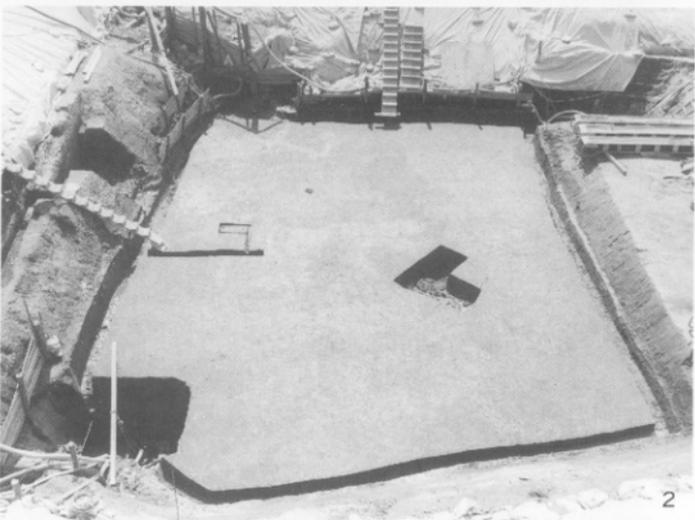


5 周溝覆土(北側周溝)

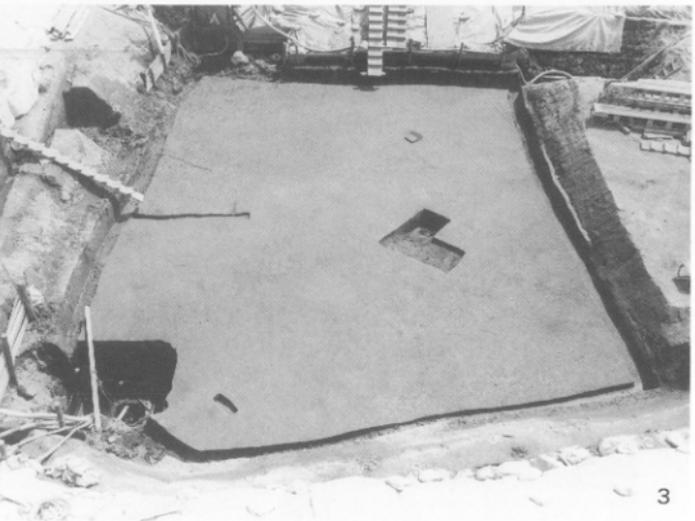
1 下中間層
(調査区北壁)



2 調査区第8面全景



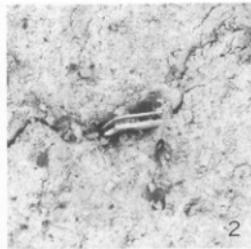
3 調査区最終レベル面全景



1 帯金具(M12)
出土状況(第3面)



2 帯金具(M14)
出土状況(第3面)



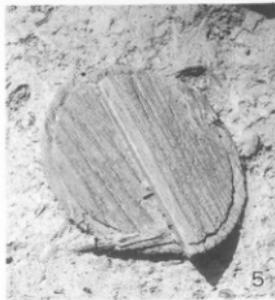
3 鉄斧(M22)
出土状況
(S R02 第4面)



4 曲物(W48)
出土状況(第3面)



5 曲物(W92)
出土状況(第3面)



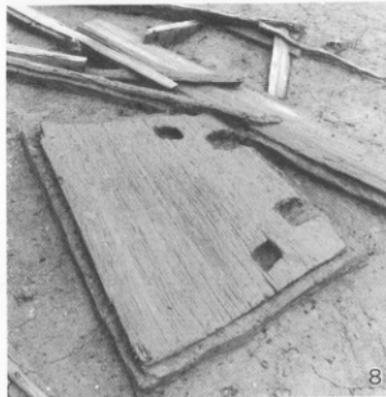
6 櫛(W59)
出土状況
(S R01 第3面)



7 泥除(W559)
出土状況(第3面)



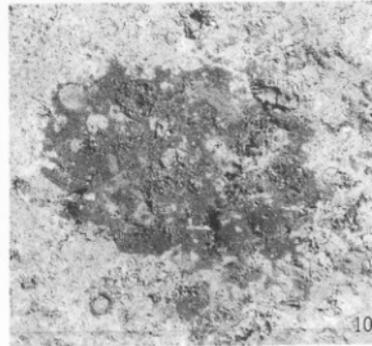
8 木製品(W429)
出土状況(第5面下)



9 火山灰?
堆積状況
(S X01 第3面)

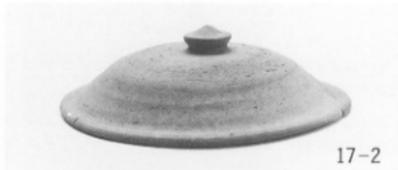


10 火山灰?
堆積状況
(最終レベル面)





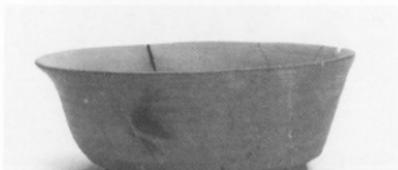
17-1



17-2



17-3



17-5



17-6



17-7



17-8



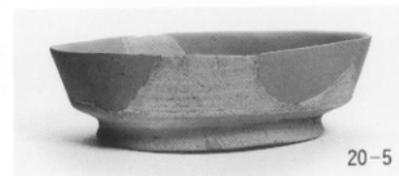
17-9

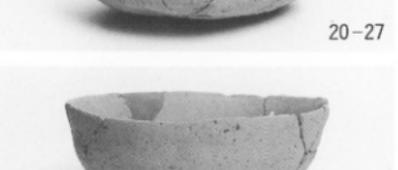
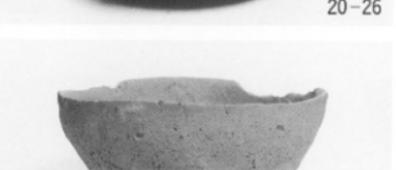
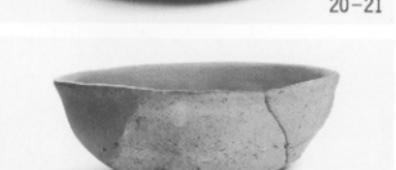


18-13



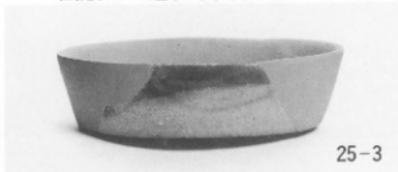
17-10

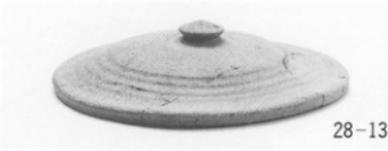














28-23



29-24



29-25



29-27



29-28



29-29



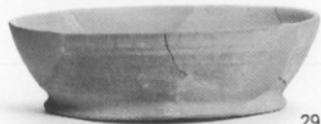
29-31



29-30



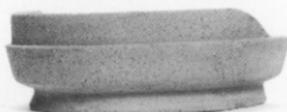
29-32



29-33



29-34



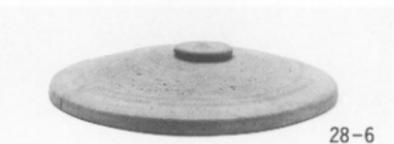
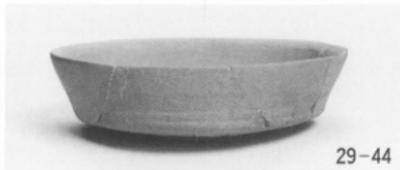
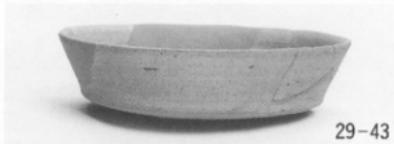
29-35

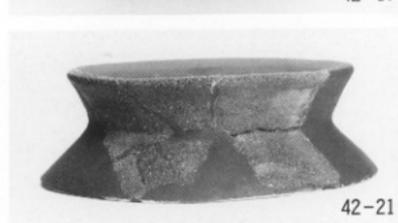


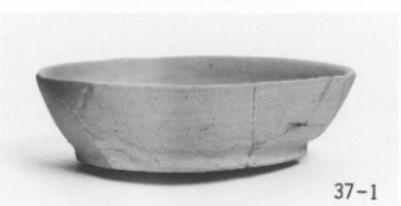
29-36



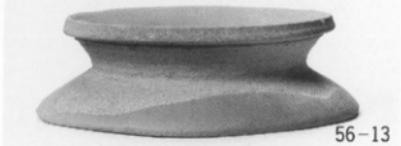
29-41

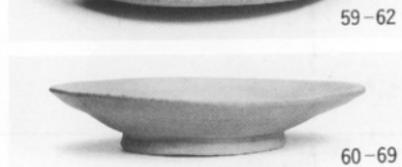
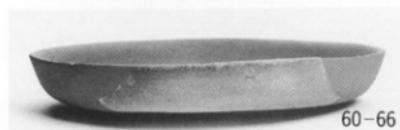
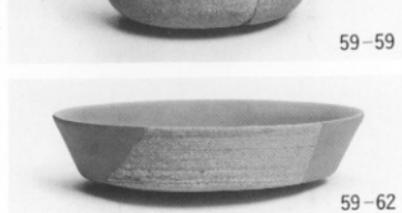
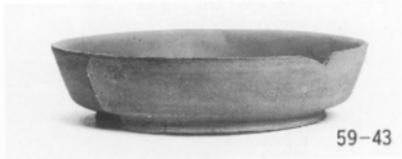


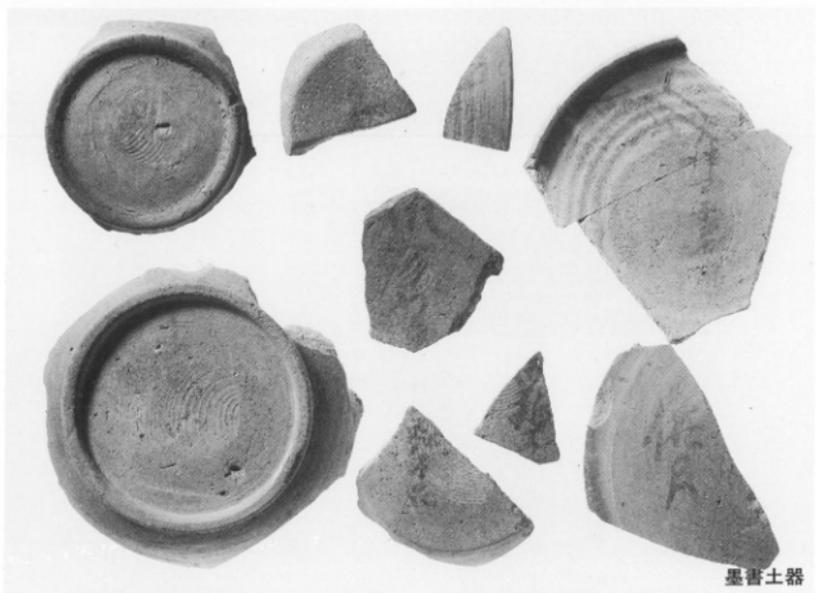


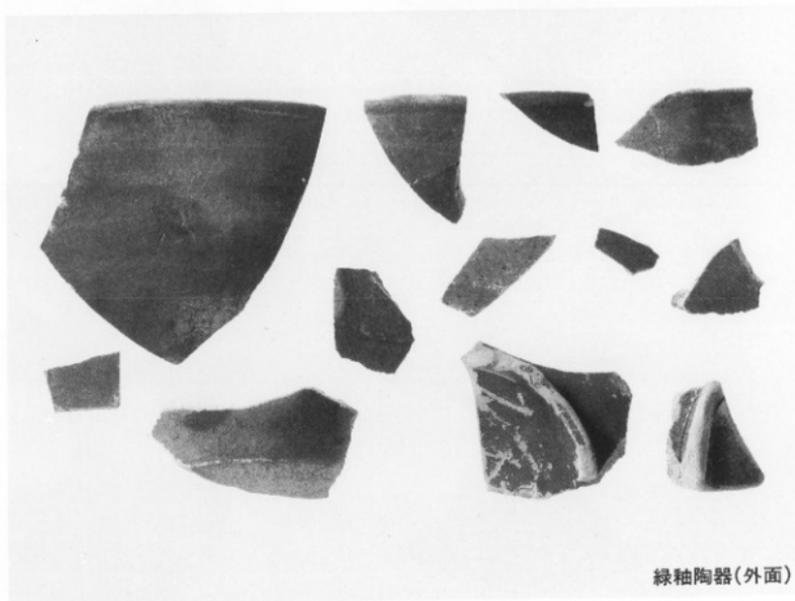
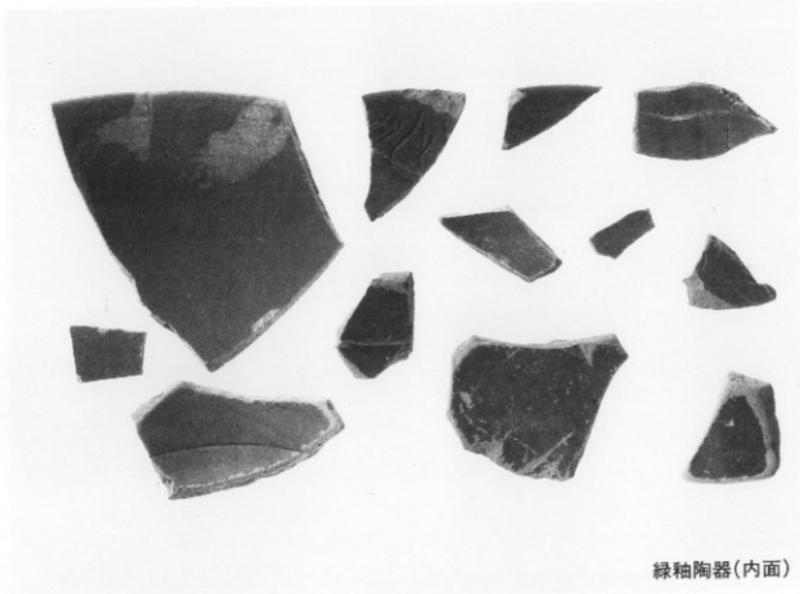


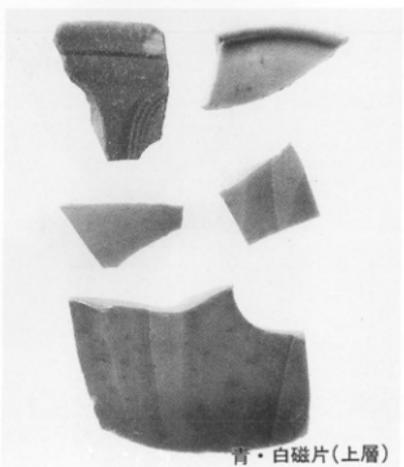
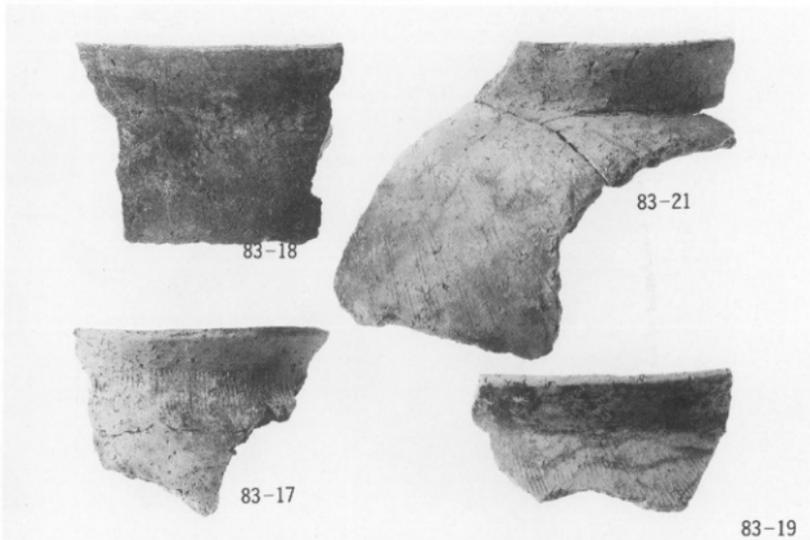
















ミニチュア土器



土 錘

68-1



68-1



68-2



68-2



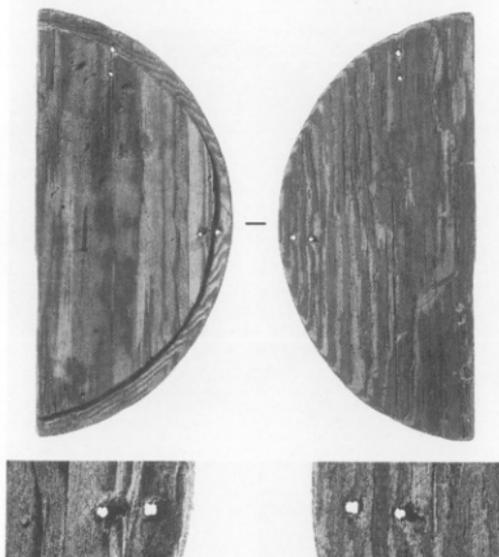
68-3



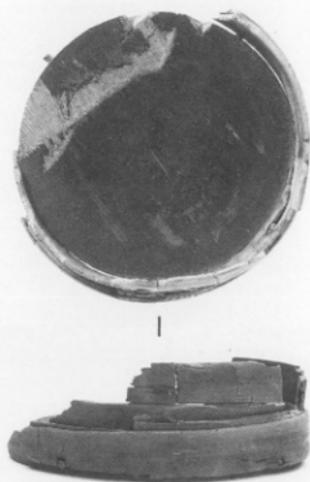
68-5 68-5



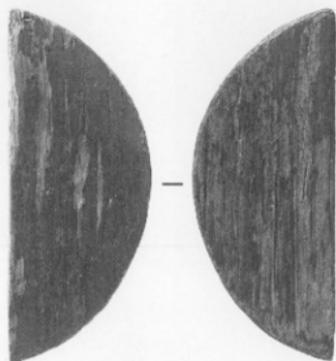
68-4



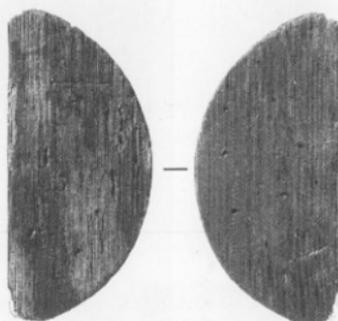
68-6



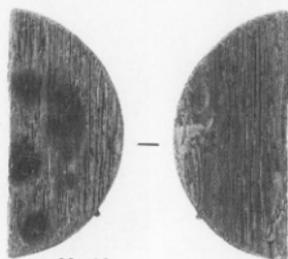
68-7



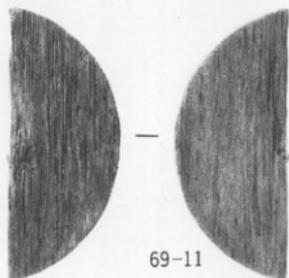
68-8



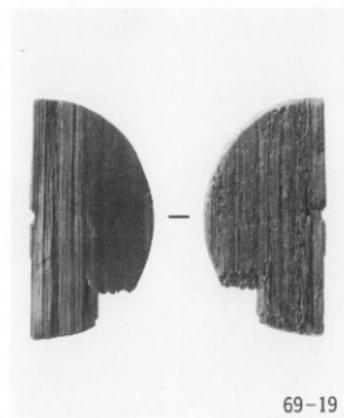
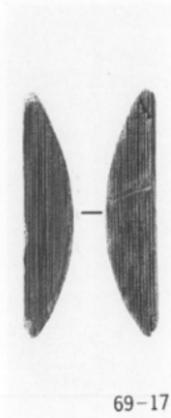
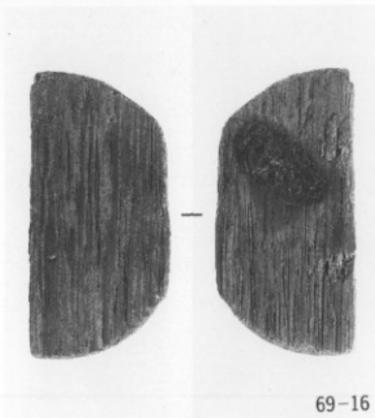
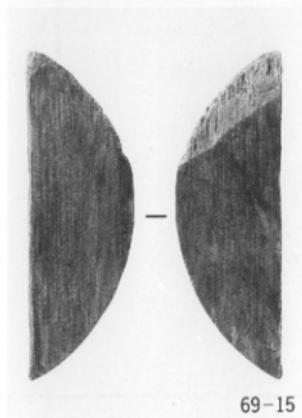
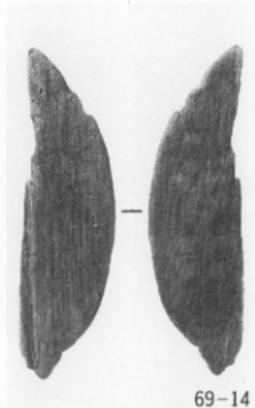
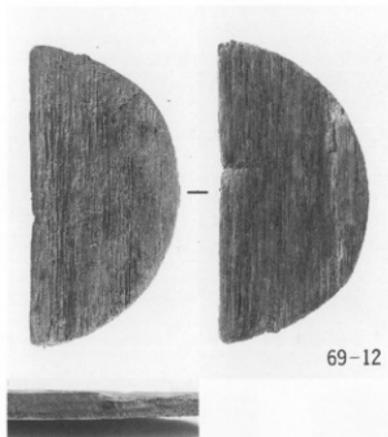
68-9

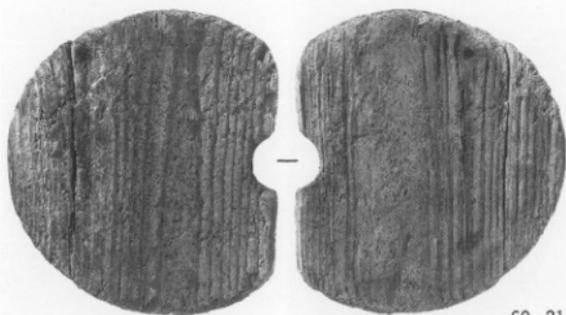


69-10



69-11





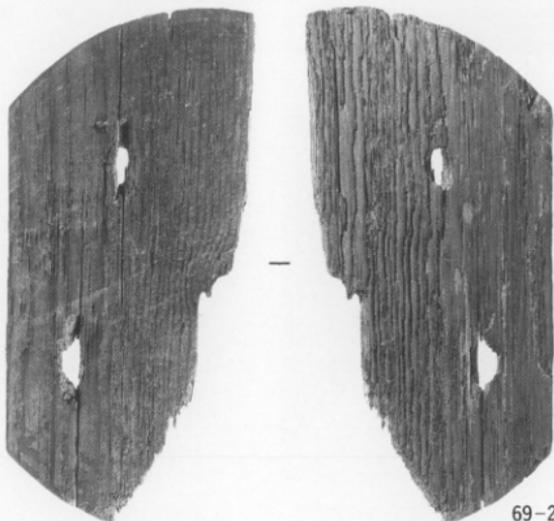
69-21



69-22



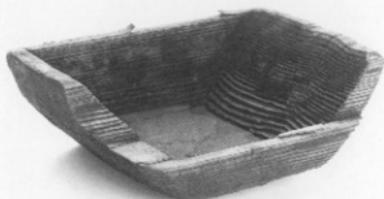
69-23



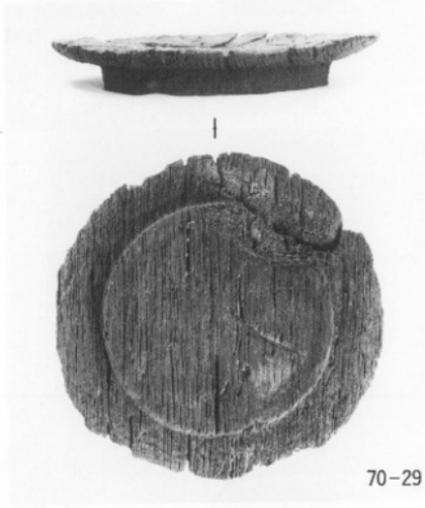
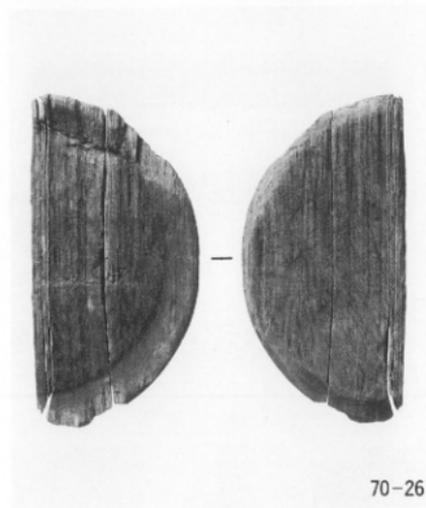
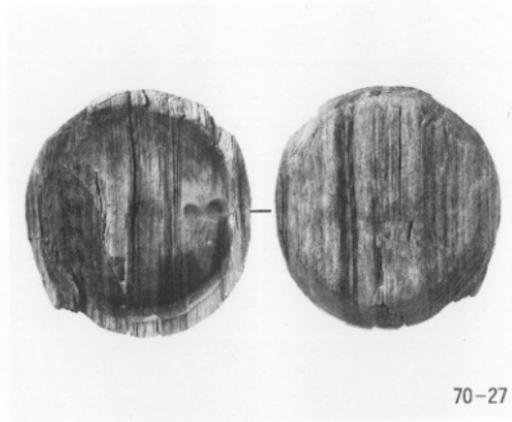
69-24

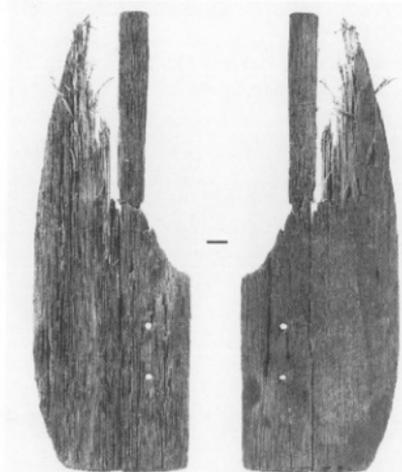


71-31



71-32





72-1



72-2



72-3



72-4



72-5



72-6



72-13



74-4



74-1



74-5



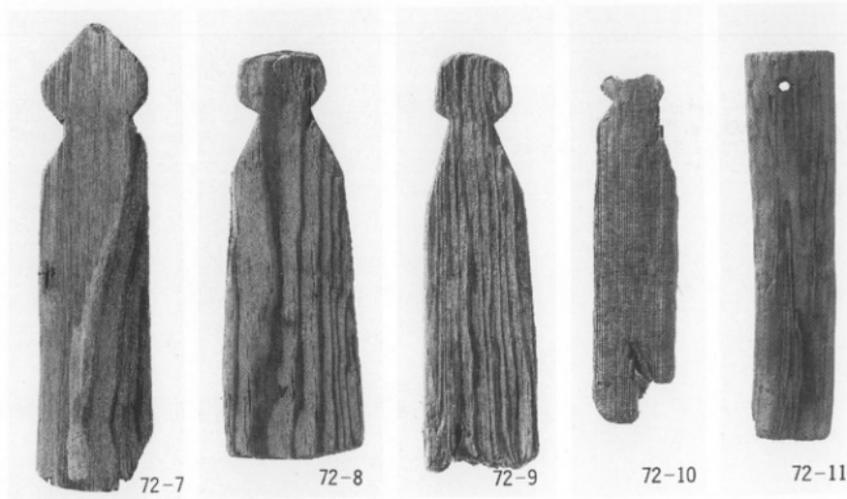
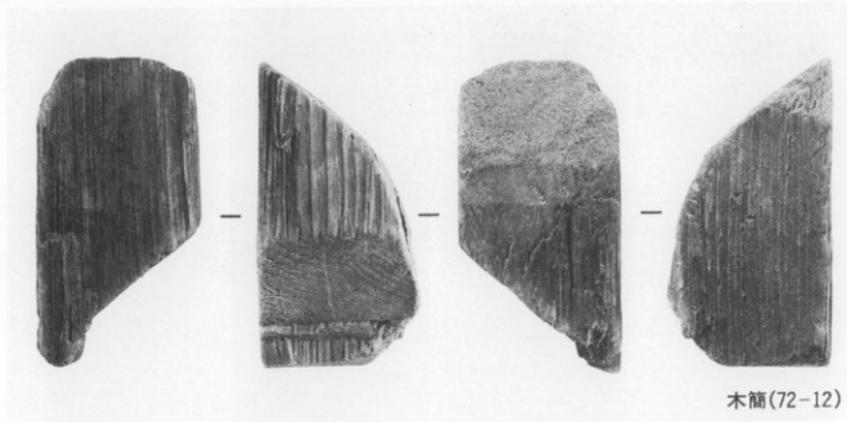
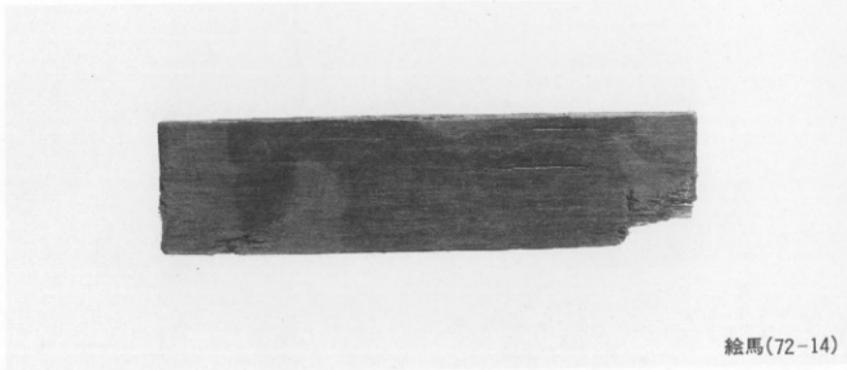
74-2

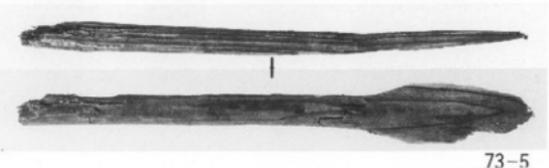
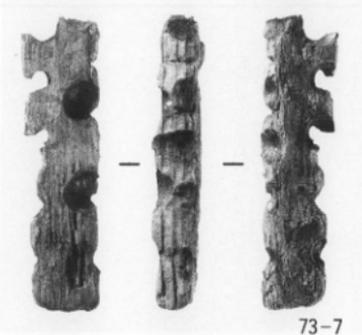


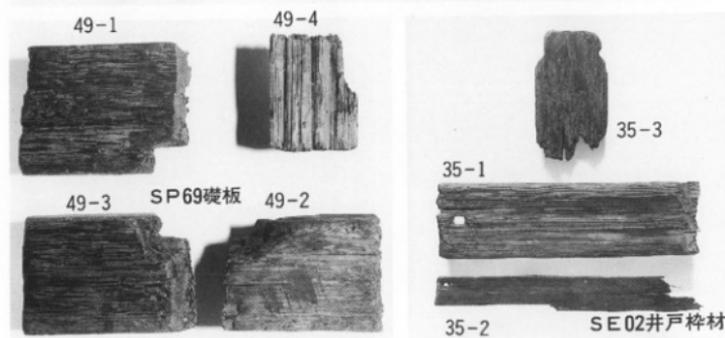
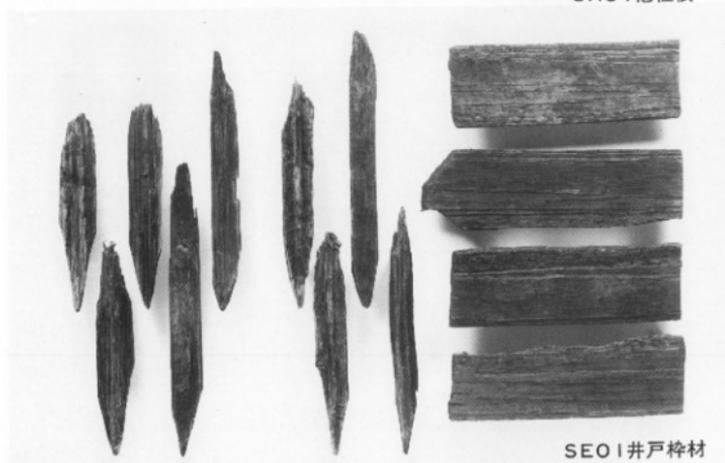
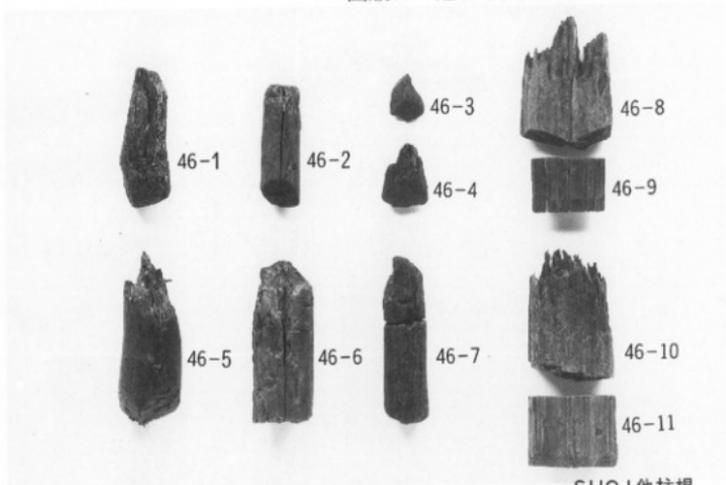
74-3

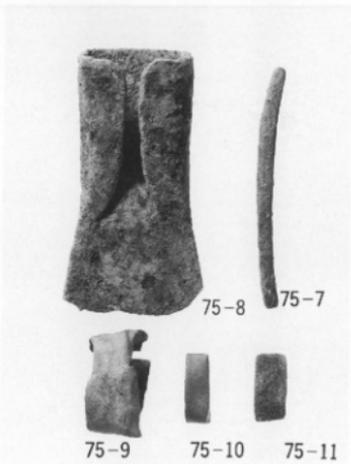
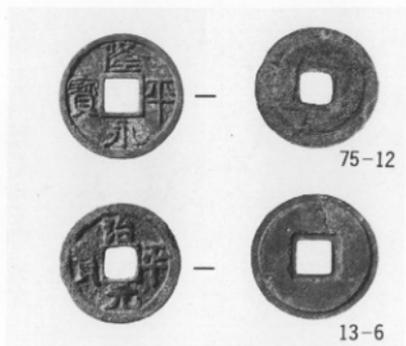
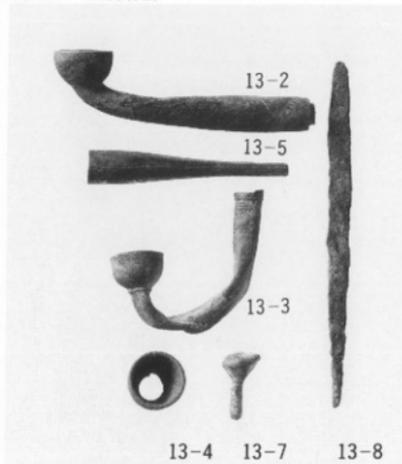
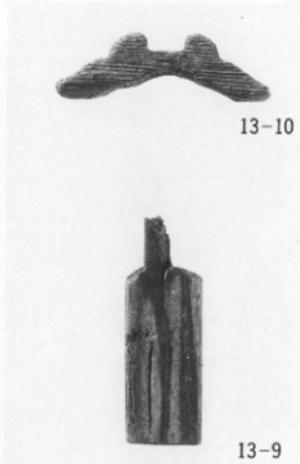


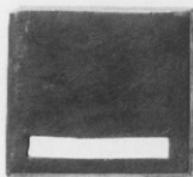
85-8











75-1



75-2



75-3



75-4

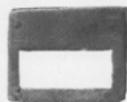
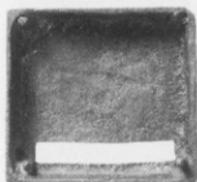


75-5



75-6

带金具(表)



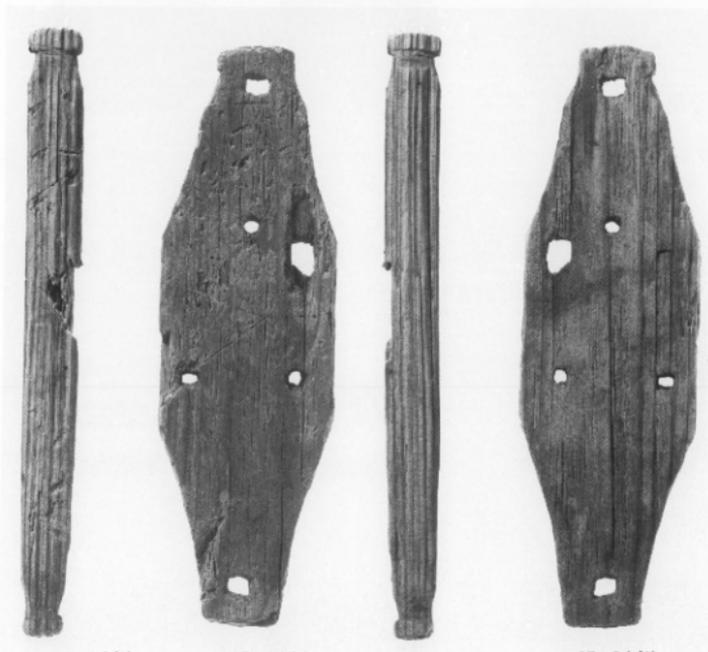
带金具(裏)



85-1



84-4



85-3(表)

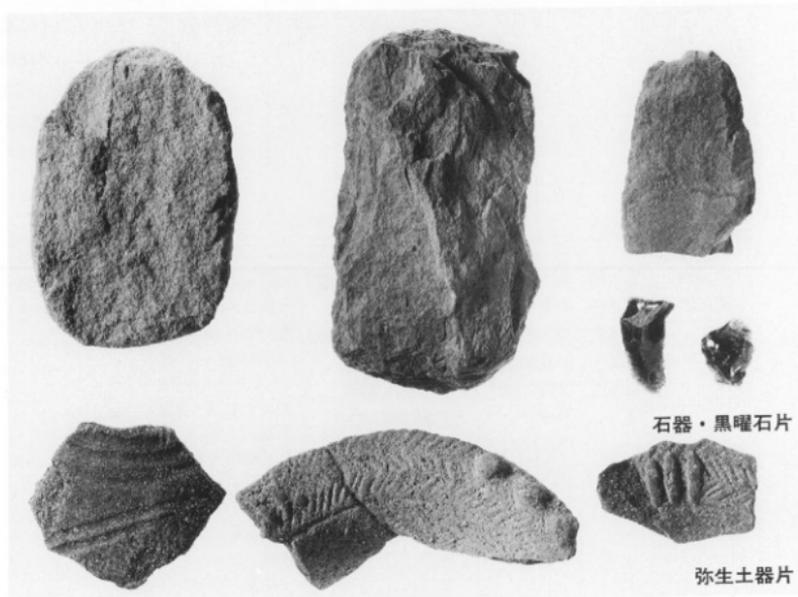
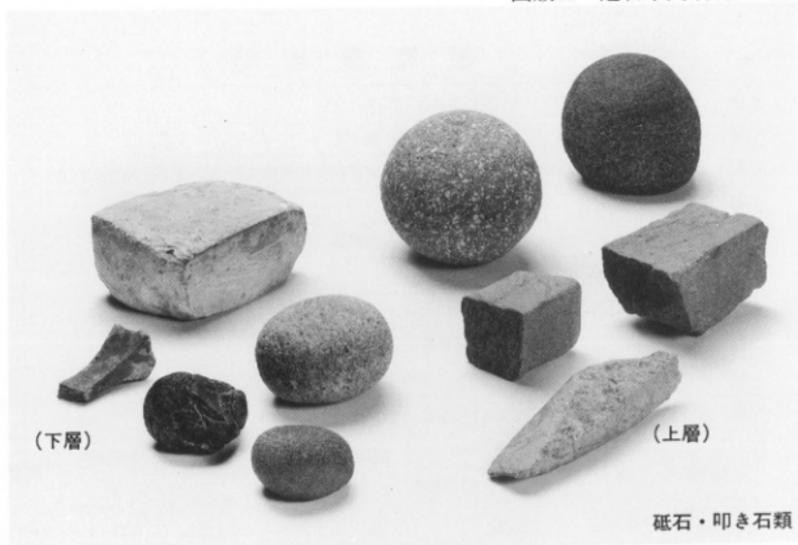
85-2(表)

85-3(裏)

85-2(裏)



85-5



報 告 書 抄 録

| ふりがな | かわいせいせきしほだちく | | | | | | | |
|---------------------------|--|--|--|------------|---|----------|----------------------|----------------------------------|
| 書名 | 川合遺跡志保田地区 | | | | | | | |
| 副書名 | 静岡県立静岡東高等学校体育館改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第102集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 佐野五十三・鈴木良孝・笠井信孝 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261(代) | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成10年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 〇.〇〇 | 東経 〇.〇〇 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かわいせいせきしほだちく 川合遺跡志保田地区 | しずおかけん 静岡県 しずおかし 静岡市川合 | 22201 | | 35° | 138° | 19951204 | 1,700㎡ | 静岡県立静岡東高等学校体育館改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業 |
| | | | | 00' | 24' | ? | 6,910㎡ | |
| | | | | 22" | 55" | 19961004 | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 川合遺跡 志保田地区 | 官衙関連遺跡・生産遺跡・集落遺跡 | 近世前半・後半 律令期(特に奈良時代) 古墳時代 後期 弥生時代 後期 | 水田遺構・礫詰土坑 祭祀遺構・井戸・ 掘立柱建物跡・流路 ・ピット 水田遺構・足跡 方形周溝墓 | | キセル・陶磁器片 土師器・須恵器(墨書含む)・緑釉陶器・ 灰釉陶器・土製品 (人形・馬形・ミニ チュア土器・土鍾) 木製品(容器・付け 札・絵馬・木簡・下 駄・泥除け) 帯金具・隆平永寶・ 勾玉・菅玉・石製防 鍾車 土師器・木製品(輪 カンジキ型田下駄ほ か)・石器土器片 | | 近接する内荒遺跡は 安倍郡衙推定地 | |

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第102集

川合遺跡志保田地区

県立静岡東高等学校体育館改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月30日

編集発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261

印刷所 星光社印刷
静岡市豊田3丁目6-12
TEL (054) 286-3131